ISSN 1348-4001

京都大学構内遺跡調査研究年報

２０１４年度

京都大学文化財総合研究センター

京都大学構内遺跡調査研究年報

２０１４年度

京都大学文化財総合研究センター

序

本年報は，2014年度に文化財総合研究センターがおこなった，京都大学構内に残る遺跡の発掘調査のうち整理の終了したものについて，その成果をまとめたものである。４件の発掘調査報告は，それぞれ学内の施設建設予定地内に残る遺跡を対象としたものであり，京都盆地の一角を占める北白川を中心とする地域の，先史時代から近世・近代にいたる豊富な資料を得て，過去の調査成果を再検討しつつ，まとめたものである。吉田南構内の調査では，いわゆる「乙訓形土師器」と呼ばれる土器の出土をはじめとした古代・中世の土地利用，北部構内の調査では，縄文時代の地形環境，また本部構内の調査では，中・近世の白川道および幕末尾張藩邸に関する重要な知見が得られている。ご高覧いただき，ご高評をお願いしたい。

大学はその地域の文化財の調査・研究に先導的な役割を果たすとともに，それらの調査･研究成果を有効に活用し，広く社会に発信することが求められている。当センターでは，調査時における現地説明会やホームページ，あるいは尊攘堂での資料展示などを通して，一般の人に広く知ってもらえるよう努めており，本年報もその一端を担っている。

加えて昨年度からは，社会へより広く情報を発信する手段として，本学総合博物館と連携して「文化財発掘」と題した特別展の実施に取り組んでいる。本年度も，２月10日～４月17日を会期として「文化財発掘Ⅱ―京大キャンパスの弥生時代―」という特別展を開催している。総合大学という利点を生かして，調査・研究面は言うまでもなく，文化財の活用・情報発信という面においても各研究科・研究所などのご協力をお願いしたい。

終わりにあたり，学内におけるこうした発掘調査を遅滞なく進めるにあたっては，施設部をはじめとした関係部局からの多大なご協力が不可欠である。関係各位に厚くお礼申し上げるとともに，今後ともご支援ご協力をお願い申し上げる次第である。

2016年３月

京都大学文化財総合研究センター長
吉 川 真 司

例　　言

1　本年報は，京都大学構内で2014年４月１日から2015年３月31日までに発掘，整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告，および京都大学文化財総合研究センターにおける研究成果をまとめたものである。

2　国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして，遺跡の位置を表示した。

3　層位と遺構の位置については，国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系，ｘ＝－108,000　ｙ＝－20,000）が（Ｘ＝2,000　Ｙ＝2,000）となる京都大学構内座標により表示した。

4　遺構の略号は，奈良文化財研究所の方式にしたがって，井戸：ＳＥ，土坑：ＳＫのように表示し，各調査ごとに通し番号を１から付した。

5　遺物には，遺跡の調査名を示すローマ数字と，調査ごとの通し番号を１から付した。この遺物番号は，本文，実測図，写真を通じて表示を統一した。

Ⅰ：京都大学吉田南構内ＡM21区の発掘調査

Ⅱ：京都大学北部構内ＢＦ32区の発掘調査

Ⅲ：京都大学本部構内ＡＵ27区の発掘調査

Ⅳ：京都大学本部構内ＡＴ22区の発掘調査

（例　Ⅰ１：京都大学吉田南構内ＡM21区出土遺物１番）

6　原則として，遺物の実測図は縮尺1/4，遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは，それぞれに縮尺を明記した。

7　参考文献は，本文中に〔著者名　発表年〕の形式で表わし，巻末に一括した。

8　古代・中世土師器の型式分類は，とくにことわりがない場合，『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。

9　本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また，遺物の撮影は，それぞれ報告者が担当した。

10　編集は，冨井眞が担当し，千葉豊，伊藤淳史，笹川尚紀，内記理，磯谷敦子，柴垣理恵子，長尾玲，藤森良祐が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度

目　　次

第１章　2014年度京都大学構内遺跡調査の概要 ……1

1　調査の経過 ……1

2　調査の成果 ……1

第２章　京都大学吉田南構内ＡM21区の発掘調査……3

1　調査の概要 ……3

2　層　　位 ……6

3　縄文・弥生時代の遺跡……14

4　古墳時代および古代の遺跡……25

5　中世の遺跡……40

6　所謂「乙訓在地形土師器」と呼称される中世土師器皿類について……84

7　近世・近代の遺跡……87

8　小　　結 ……106

第３章　京都大学北部構内ＢＦ32区の発掘調査 ……111

1　調査の概要 ……111

2　層　　位 ……112

3　縄文時代の遺構と遺物 ……116

4　古代の遺構と遺物 ……138

5　小　　結 ……139

第４章　京都大学本部構内ＡＵ27区の発掘調査 ……141

1　調査の概要 ……141

2　層　　位 ……142

3　Ａ区の遺構と遺物 ……142

4　Ｂ区の遺構と遺物 ……155

5　Ｃ区の遺構と遺物 ……159
6　Ｄ区の遺構と遺物 ……163
7　小　　結 ……167

第５章　京都大学本部構内ＡＴ22区の発掘調査 ……169
1　調査の概要 ……169
2　層　　位 ……169
3　中世の遺跡 ……170
4　近世の遺跡 ……172
5　文献史料などからみた白川道・尾張藩吉田屋敷 ……179
6　小　　結 ……184

参　考　文　献 ……188

京都大学構内遺跡調査要項 ……191

報 告 書 抄 録 ……201

図　　版 ……巻末

図　版　目　次

図版１　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
図版２　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　北区表土除去後全景（北から）
2　北区中・近世遺構掘りあげ後全景（北から）
3　北区黄色砂除去後全景（北から）
図版３　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　南区表土除去後全景（東から）
2　南区近世遺構掘りあげ後全景（東から）
3　南区中世遺構掘りあげ後全景（東から）
4　南区完掘後全景（東から）
図版４　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　北区流路ＳＲ１黄色砂除去後（北から）
2　北区流路ＳＲ１調査区北壁断面（南から）
3　南区流路ＳＲ１黄色砂除去後（南から）
4　南区褐色粘質土内遺物集中出土地点調査状況（東から）
5　南区流路ＳＲ１・ＳＲ５調査区北壁断面（南から）
図版５　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　北区ＳＤ10埋土上部集石（南西から）
2　北区ＳＤ10埋土内遺物出土状況（調査区北壁際・北から）
3　北区ＳＤ10断面（東西方向部畔・東から）
4　北区ＳＤ10断面（調査区北壁・南から）
5　北区ＳＤ13北肩部分断面（調査区東壁・東から）
6　北区不定形土坑断面（調査区西壁・東から）
図版６　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　北区ＳＫ15遺物出土状況（北西から）
2　北区ＳＤ15下部遺物出土状況（南東から）
3　北区ＳＫ５遺物出土状況（南から）
4　北区ＳＫ12遺物出土状況（南から）

5　北区ＳＫ19遺物出土状況（南から）
6　北区ＳＸ10遺物出土状況（南から）
図版７　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　南区西半近世遺構全景（南から）
2　南区西半古代・中世遺構全景（南から）
3　南区不定型土抗群（北から）
4　南区建物ＳＨ１・集石ＳＸ62（南から）
図版８　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　南区井戸ＳＥ12井筒検出状況（東から）
2　南区井戸ＳＥ12井筒底面遺物出土状況（その１・北東から）
3　南区井戸ＳＥ12井筒底面遺物出土状況（その２・北西から）
4　南区中央北半中世遺構全景（南から）
5　南区牛歯一括出土ＳＸ68（北から）
6　南区土器溜ＳＸ48（南から）
図版９　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　南区集石ＳＸ55下部土器溜（西から）
2　南区瓦溜ＳＫ23（南から）
3　南区土器溜ＳＫ25（西から）
4　南区遺物溜ＳＫ26（西から）
5　南区ＳＰ369内遺物出土状況（北から）
6　南区近世段差際集石ＳＸ37（手前）･溝ＳＤ25西肩配石（奥）（とも南西から）
図版10　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
縄文時代の土器(1)
図版11　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
縄文時代の土器(2)
図版12　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
縄文時代の土器(3)，弥生時代の土器(1)
図版13　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
1　弥生時代の土器(2)
2　石器・石製品

図版14　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
古墳時代・古代の遺物
図版15　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
ＳＫ12出土遺物，ＳＸ25出土遺物，ＳＸ48出土遺物
図版16　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
ＳＫ25出土遺物，ＳＸ55出土遺物，ＳＸ58出土遺物，ＳＫ23出土遺物，
ＳＸ50出土遺物，ＳＸ51出土遺物
図版17　京都大学吉田南構内ＡＭ21区
ＳＤ34出土遺物，ＳＸ62出土遺物，ＳＸ63出土遺物
図版18　京都大学北部構内ＢＦ32区
1　黒色土掘削後、北区全景（東から）
2　表土掘削後、南区全景（北東から）
図版19　京都大学北部構内ＢＦ32区
1　北区ＳＸ１（西から）
2　北区ＳＸ２（北から）
3　南区南辺中央、遺物出土状況（北西から）
図版20　京都大学北部構内ＢＦ32区
北区出土縄文土器(1)
図版21　京都大学北部構内ＢＦ32区
北区出土縄文土器(2)
図版22　京都大学北部構内ＢＦ32区
1　南区北西隅出土縄文土器
2　南区北辺中央出土縄文土器(1)
図版23　京都大学北部構内ＢＦ32区
南区北辺中央出土縄文土器(2)
図版24　京都大学北部構内ＢＦ32区
1　南区北辺中央出土縄文土器(3)
2　南区南西隅出土縄文土器
図版25　京都大学北部構内ＢＦ32区
南区南辺中央出土縄文土器(1)

図版26　京都大学北部構内ＢＦ32区
1　南区南辺中央出土縄文土器(2)
2　石器類
図版27　京都大学本部構内ＡＵ27区
1　黒色土掘削後のＡ区全景（南から）
2　褐色土掘削後のＢ区全景（南から）
3　表土掘削後のＣ区全景（北から）
4　黒色土掘削後のＤ区全景（北から）
図版28　京都大学本部構内ＡＵ27区
1　Ａ区第15層上面の地形（南西から）
2　溝ＳＤ２・道路ＳＦ１（南から）
3　溝ＳＤ１断面（東から）
4　溝ＳＤ１（西から）
5　集石ＳＸ５・ＳＸ６（南西から）
6　野壺溝ＳＥ１（西から）
図版29　京都大学本部構内ＡＴ22区
1　井戸ＳＥ１（東から）
2　溝ＳＤ１掘削後，道路ＳＦ１上面（東から）

挿　図　目　次

吉田南構内ＡＭ21区の発掘調査
図１　調査地点の位置……3
図２　調査区の地区割りと近代以降の撹乱範囲概略……5
図３　北区東壁の層位……7
図４　北区北壁の層位……9
図５　北区西壁の層位……9
図６　南区北壁の層位……10
図７　南区南壁の層位（東部）……13
図８　南区南壁の層位（西部）……13
図９　弥生時代以前の主要遺構配置図……15
図10　縄文時代の土器(1)……17
図11　縄文時代の土器(2)……18
図12　縄文時代の土器(3)……19
図13　弥生時代の土器(1)……20

図14　弥生時代の土器(2)……21
図15　縄文～弥生時代の石器・石製品
……23
図16　古墳時代～古代の主要遺構配置図
……25
図17　井戸ＳＥ12……26
図18　古墳時代の遺物……29
図19　ＳＥ12，ＳＫ28，ＳＸ69，ＳＸ28，
黒褐色土出土遺物……31
図20　ＳＤ17，ＳＤ18，ＳＤ39，ＳＤ43，
ＳＤ48，ＳＤ49，ＳＤ50，ＳＤ51，
ＳＤ52出土遺物……33
図21　古代の遺物(1)……35
図22　古代の遺物(2)……36
図23　古代の遺物(3)……37
図24　古代の遺物(4)……39
図25　中世主要遺構配置図……41
図26　溝の断面形状……43
図27　建物ＳＨ１……45
図28　出土土師器の計測結果（その１）
……49
図29　出土土師器の計測結果（その２）
……50
図30　ＳＫ12出土遺物(1)……51
図31　ＳＫ12出土遺物(2)……52
図32　ＳＫ12出土遺物(3)……53
図33　ＳＫ19出土遺物……54
図34　ＳＫ５，ＳＫ６，ＳＫ11，ＳＫ17，
ＳＫ18，ＳＫ20出土遺物……55
図35　ＳＸ25出土遺物(1)……56
図36　ＳＸ25出土遺物(2)……57
図37　ＳＸ27出土遺物……58
図38　ＳＸ48出土遺物……60
図39　ＳＰ369，ＳＰ289，ＳＸ38
出土遺物……61
図40　ＳＫ25，ＳＫ26出土遺物……62
図41　ＳＸ64出土遺物……63
図42　ＳＫ15，ＳＫ16出土遺物……66
図43　ＳＸ60，ＳＫ24，ＳＸ56，ＳＸ57，
ＳＸ58，ＳＸ52出土遺物……67
図44　ＳＫ27，ＳＸ59，ＳＸ65，ＳＸ66，
ＳＸ67出土遺物……68
図45　ＳＸ55出土遺物……69
図46　ＳＫ23出土遺物……70
図47　ＳＸ49，ＳＸ50，ＳＸ51，ＳＸ53
出土遺物……71
図48　ＳＤ10出土遺物(1)……72
図49　ＳＤ13，ＳＤ10出土遺物(2)……73
図50　ＳＤ14，ＳＸ26，茶褐色土
出土遺物……74
図51　ＳＤ34，ＳＤ36，ＳＤ35出土遺物
……75
図52　ＳＸ61出土遺物……76
図53　ＳＸ62，ＳＸ63出土遺物……77
図54　ＳＰ279，ＳＰ277，ＳＰ165
出土遺物……78
図55　ＳＸ14，ＳＸ18，ＳＸ22，ＳＸ23，
ＳＸ24，北区不定形土坑出土遺物
……79
図56　ＳＸ42，ＳＸ47，ＳＥ11，

南区不定形土坑出土遺物……80
図57　茶褐色土出土遺物(1)……81
図58　茶褐色土出土遺物(2)……82
図59　出土銭貨の種類と出土遺構……83
図60　近世主要遺構配置図……89
図61　ＳＸ10，ＳＥ３，ＳＥ４，ＳＥ６
出土遺物……91
図62　ＳＥ７，ＳＰ116出土遺物(1) …92
図63　ＳＰ116出土遺物(2) ……93
図64　ＳＰ116出土遺物(3)，ＳＤ28
出土遺物……94
図65　ＳＸ39，ＳＸ46出土遺物……95
図66　ＳＸ40，不定形土坑群出土遺物(1)
……96
図67　不定形土坑群出土遺物(2)……97
図68　近代の磁器(1)……99
図69　近代の磁器(2) ……100
図70　近代の磁器(3) ……102
図71　近代磁器の意匠・釉印など …102
図72　西洋陶器(1) ……104
図73　西洋陶器(2) ……105

北部構内ＢＦ32区の発掘調査

図74　調査地点の位置 ……111
図75　層位(1) ……113
図76　層位(2) ……114
図77　縄文時代の遺構 ……116
図78　北区出土土器(1) ……118
図79　北区出土土器(2) ……119
図80　北区出土土器(3) ……120
図81　北区出土土器(4) ……121
図82　北区出土土器(5) ……123
図83　南区北西隅出土土器 ……124
図84　南区北辺中央出土土器(1) ……125
図85　南区北辺中央出土土器(2) ……126
図86　南区北辺中央出土土器(3) ……127
図87　南区北辺中央出土土器(4) ……128
図88　南区南西隅出土土器(1) ……129
図89　南区南西隅出土土器(2) ……131
図90　南区南辺中央出土土器(1) ……132
図91　南区南辺中央出土土器(2) ……133
図92　南区南辺中央出土土器(3) ……134
図93　南区南辺中央出土土器(4) ……135
図94　石器 ……137
図95　古代の遺構 ……138
図96　古代の遺物 ……139

本部構内ＡＵ27区の発掘調査

図97　調査地点の位置 ……141
図98　Ａ区西壁・Ａ区東壁の層位 …143
図99　Ｂ区東壁・Ｄ区東壁の層位 …144
図100　Ａ区第15層上面の地形 ……145
図101　Ａ区検出の遺構 ……146
図102　ＳＤ２・ＳＦ１の層位 ……147
図103　ＳＤ１畔東壁の層位 ……148
図104　ＳＤ２，ＳＸ１，黒色土，ＳＤ１
出土遺物(1) ……149
図105　ＳＤ１出土遺物(2) ……151
図106　ＳＤ１出土遺物(3) ……152
図107　小穴，茶褐色土，断割，表土

出土遺物 ……153
図108 Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区褐色土上面
検出遺構 ……154
図109 Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区黒色土上面
検出遺構 ……155
図110 Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区茶褐色土上面
検出遺構 ……156
図111 小穴，褐色土，黒色土
出土遺物 ……157
図112 黒色土，茶褐色土出土遺物 …158
図113 ＳＸ10，ＳＸ９，ＳＸ８，ＳＸ７，
小穴，褐色土，黒色土，茶褐色土
出土遺物 ……162
図114 灰褐色土，表土出土遺物 ……163
図115 褐色土，ＳＫ１，ＳＸ３，ＳＸ４，
ＳＸ２，茶褐色土出土遺物 …165
図116 ＳＥ１，灰褐色土出土遺物 …166

本部構内ＡＴ22区の発掘調査

図117 ＳＤ１・ＳＦ１・ＳＤ２・ＳＦ２
の層位 ……170
図118 中世の遺構 ……171
図119 ＳＥ１掘形・石組内，ＳＦ２
出土遺物 ……172
図120 近世の遺構 ……173
図121 ＳＦ１Ｄ・Ｃ・Ｂ層出土遺物
……175
図122 ＳＦ１Ａ層，ＳＤ２下層出土遺物
……176
図123 ＳＤ２上層出土遺物(1) ……177
図124 ＳＤ２上層出土遺物(2) ……178

表　目　次

表１　層位の記載 ……115
表２　京都大学構内遺跡のおもな調査
……192

京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度

第１章　2014年度京都大学構内遺跡調査の概要
第２章　京都大学吉田南構内ＡＭ21区の発掘調査
第３章　京都大学北部構内ＢＦ32区の発掘調査
第４章　京都大学本部構内ＡＵ27区の発掘調査
第５章　京都大学本部構内ＡＴ22区の発掘調査

第１章　2014年度京都大学構内遺跡調査の概要

吉川真司　　千葉　豊　　冨井　眞

１　調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは，吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し，予定地の埋蔵文化財調査を，既知の遺跡との関係や過去の調査結果により，発掘・試掘・立合にわけて実施している。2014年度には，以下のように発掘調査２件，立合調査６件，資料整理５件を実施した（括弧内は図版１および表２の地点番号）。

発掘調査	医薬総合研究棟新営工事（病院西構内ＡＩ15区）	（整理中，図版１－427）
	国際人材総合教育棟新営（吉田南構内ＡＰ23区）	（整理中，図版１－428）
立合調査	生活習慣病予防研究センター（病院西構内ＡＧ10区）	（第１章，図版１－429）
	医学部構内駐輪場整備工事（医学部構内ＡＱ18区）	（第１章，図版１－430）
	安全対策工事（北部構内ＢＣ29区）	（第１章，図版１－431）
	外灯設備工事（北部構内ＢＡ29区）	（第１章，図版１－432）
	外灯設備工事（吉田南構内ＡＰ25区）	（第１章，図版１－433）
	外灯設備工事（病院西構内ＡＪ13区）	（第１章，図版１－434）
資料整理	学生寄宿舎吉田寮新棟新営（吉田南構内ＡM21区）	（第２章，図版１－399）
	学生集会所新営（吉田南構内ＡM21区）	（第２章，図版１－401）
	自家発電設備新営（北部構内ＢＦ32区）	（第３章，図版１－402）
	自家発電設備新営（本部構内ＡＴ22区）	（第５章，図版１－403）
	国際イノベーション拠点施設新営（本部構内ＡＵ27区）	（第４章，図版１－404）

２　調査の成果

前節で掲げた調査のうち，2014年度に整理を終えたものについて，その成果を略述する。なお，吉田南構内ＡM21区，北部構内ＢＦ32区，本部構内ＡＵ27区，本部構内ＡＴ22区の発掘調査については，それぞれ第２章～第５章で，調査成果を詳述しているので参照されたい。

吉田南構内ＡM21区　　本調査地点は，吉田南構内の西南隅に位置し，吉田二本松町遺跡に含まれる。古代では，奈良時代の井戸や溝，平安時代の溝などが検出された。中近世では，調査区西側には土取穴が展開するが，中央から東側では，布掘り基礎の建物跡の検出と所謂「乙訓在地形土師器」の大量出土が特筆される。また，中世後半までは土地区画

として機能した南北方向および東西方向の２本の大溝では，堆積断面で中世の地震に伴う砂脈なども確認された。

北部構内ＢＦ32区　本調査地点は，北部構内のほぼ中央に位置し，北白川追分町遺跡に含まれる。縄文時代の地形環境に関する層位データが得られ，隣接地点で確認されていた縄文中期末の住居が，北東から南西にかけて張り出していた微高地上で，崖状に落ち込む南東方向の低地部をのぞむ部分に立地していたことが明らかになった。そしてこの崖面は，土壌の放射性炭素年代測定や含有火山灰によって，縄文時代前期以前に形成されていたこともわかった。

本部構内ＡＵ27区　本調査地点は，本部構内の東南辺に位置し，吉田本町遺跡に含まれる。４つの調査区からなるがいずれも攪乱が著しい。歴史時代のおもだった遺構としては，西のＡ区で検出された南北にはしる中世前半期と思われる道と，東のＣ・Ｄ区で検出された中世後半期に白色砂を採取した砂取り穴がある。この白色砂は，下位に，包含されていた木炭の放射性炭素年代から縄文時代草創期頃と思われる，北へ緩やかに下がる微高地の緩斜面および微高地上の平坦部を形成する土壌化層が確認されたので，縄文時代の水成堆積物であることがわかった。

本部構内ＡＴ22区　本調査地点は，本部構内の西南隅に位置し，吉田本町遺跡に含まれる。中世の遺構としては，白川道とその南側の石組みの井戸が検出され，13世紀には同時存在していたことがわかった。白川道は，近世にはその井戸を覆うように南側に移っていったが，幕末には尾張藩吉田屋敷の施設に関わると思われる東西溝に切られる。この吉田屋敷については，文献記録の検討から，尾張藩邸として十分な機能を果たすようになったのは元治元年（1864）以降であろうと推測された。

第２章　京都大学吉田南構内ＡＭ21区の発掘調査

伊藤淳史　　冨井　眞　　内記　理

１　調査の概要

今回の調査地点は，京都大学吉田南構内の西南隅，鴨川の東方約600ｍに位置し，吉田二本松町遺跡に含まれる（図版１，図１－399・401）。ここに，京都大学学生寄宿舎吉田寮新棟および学生集会所の新営工事が計画されたため，それぞれの予定地全面を発掘調査した。両地点は南北に隣接しており，説明の便宜上，以後「北区」「南区」と呼称する（図１）。調査面積と出土遺物総量は，北区が923㎡で整理用コンテナ70箱，南区が945㎡で84箱。調査期間は，北区が2013年７月８日から11月22日まで，南区が同年10月７日から2014年２月14日まで。これらは，届け出上は２件の発掘調査として取り扱われているが，隣接地で調査期間も重複することから，共通の担当者が発掘と出土遺物の整理作業をおこなってきた。よってここでは，双方の調査成果を一括して報告する。

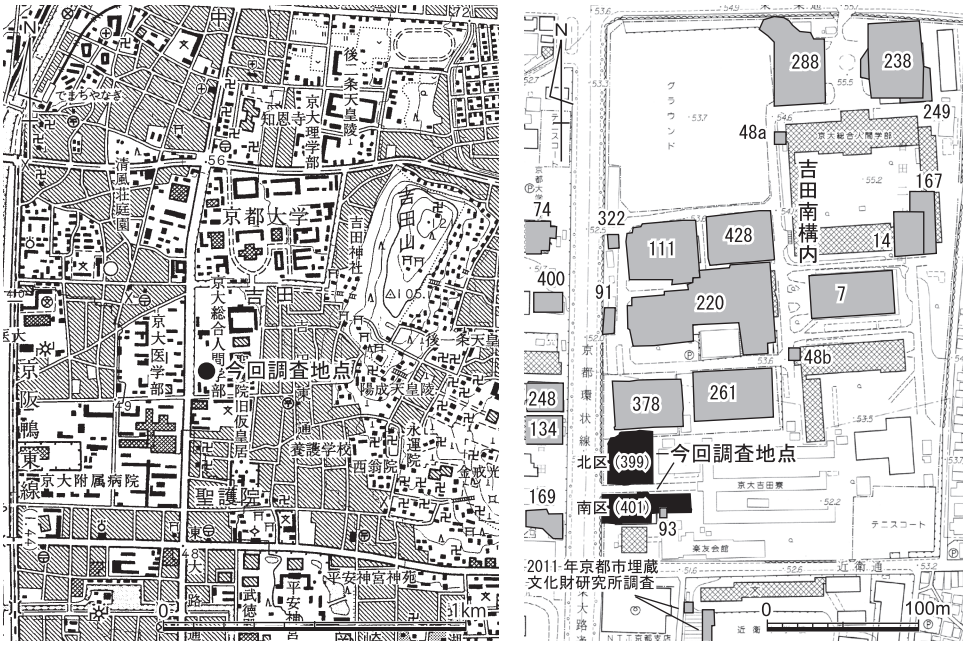


図１　調査地点の位置（左1/25000，右1/5000）

吉田南構内の位置する吉田二本松町遺跡は，縄文時代から近世に至るまでの各時期の濃密な遺跡のひろがりが知られてきた。とくに，構内の南西域一帯は，これまで広い面積での調査機会が多く，それらの調査成果から重要度の高い空間と認識されてきた。111地点南縁と220地点北西辺の双方では，平安時代中期の梵鐘鋳造土坑群が見つかっており，現地に埋め戻し保存されている。また，220地点東半では弥生時代前期の小区画水田がきわめて良好な状態で検出されており，261地点では弥生時代中期の方形周溝墓も発見されている。これら３つの地点では，さらに古墳時代の方形墳や中世各期の建物跡や溝群など，多様な遺構と大量の遺物が見つかっている。そして，2011年には，今回の北側隣接地となる378地点の調査において，古墳時代の方形墳（吉田二本松９号墳）の周溝から，円筒埴輪や各種の形象埴輪がまとまって出土し，注目されたところである〔冨井ほか2015〕。

今回の調査は，これらの南西一帯をひろく調査することとなり，同様な状況のおよぶ範囲について，関心の持たれるところであった。同時に，調査地の東～南方一帯にかけては，古代末～中世前半期にかけて存在したとされる寺院「福勝院」の立地も比定されていることから〔吉江2006〕，寺域との関連にも注意が払われるところであった。なお，南区に接する位置では，昭和55年度の立合調査で（図１－93地点），常滑産大甕と完形の瓦器盤が出土する土坑と東西方向の石列も確認されている〔泉・浜崎1981　pp.38-39〕。

調査の結果，先史時代では弥生時代前期の流路，古代では奈良時代の井戸や平安時代の東西溝，中世では鎌倉・室町時代の南北や東西方向の大溝，建物跡，土器溜，集石遺構など，縄文時代～近世にわたる各時代の多様な遺構・遺物が出土し，濃密な遺跡のひろがりが調査区一帯へも及んでいることが示された。なかでも鎌倉時代の建物跡については，小規模ながら布堀の基礎をもつ特異なもので，構内遺跡では初例となる。さらに，土器溜からは，「乙訓在地産」などと呼称されている異系統の土師器皿がまとまって出土し，注目される。しかし，寺院の存在やそれとの関連を示唆するような調査成果は得られなかった。

また，弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の方形墳については，北区の北壁際において，378地点で見つかっている吉田二本松９号墳の南周溝を，かろうじて確認できたのみにとどまった。このほかにも，古代以前とみられる黒色や淡褐色の埋土をもつ溝はいくつか確認されており，方形周溝墓や方形墳の周溝である可能性は残されているものの，全く遺物が出土していないため，時期や性格を特定できないままに終わっている。

なお，今回の発掘では，北区の広い範囲が，ごく最近に基盤の粘土層に達するまで大きく攪乱されていたことが判明した。この事情については後述する。加えて南・北両調査区

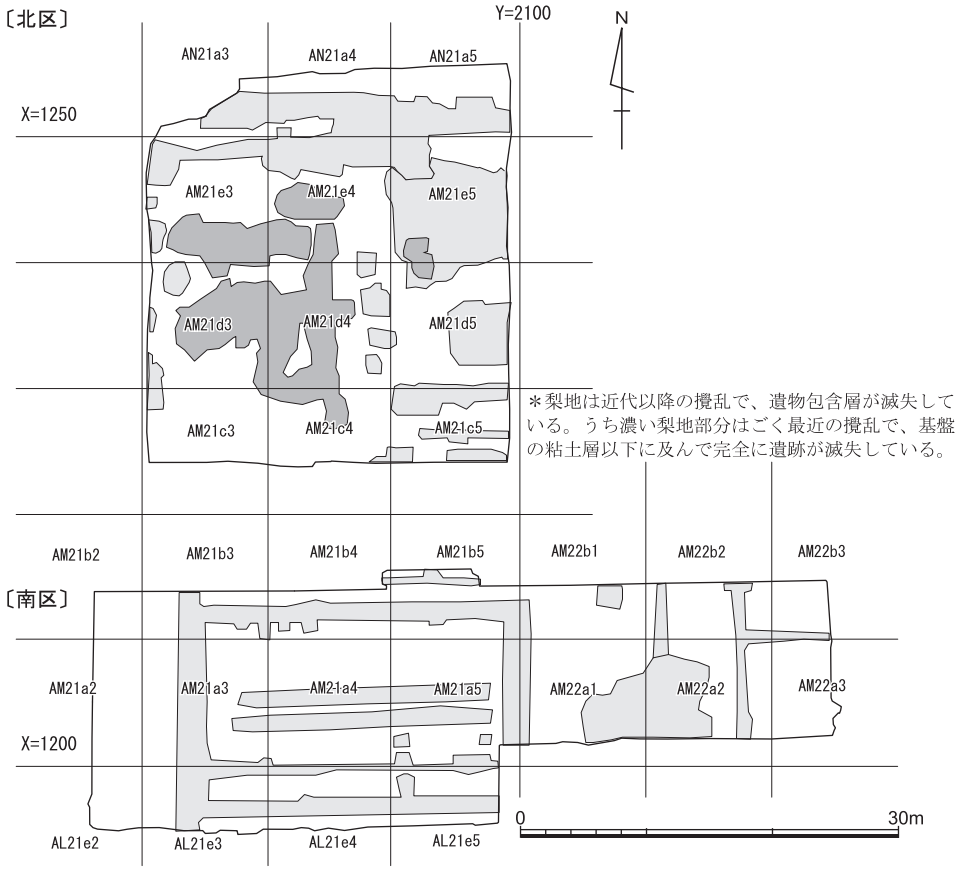


図２　調査区の地区割りと近代以降の攪乱範囲概略　縮尺1/600

とも近代以降の基礎や管路による攪乱もかなりの範囲に及んでおり（図２参照），さらに西半部一帯は，中・近世に基盤の粘土層を採取した跡である不定形土坑（土取穴）も全面にひろがっている。このため，遺跡の遺存は総じて不良であり，とくに弥生・古墳時代の遺構については，本来あったものが滅失している可能性も十分考慮しておく必要がある。

今回の発掘調査と遺物整理作業については，伊藤淳史・冨井眞・内記理が担当した。その際には，伊藤菜穂・太田那優・佐々木夏妃・霜鳥聖響・鈴木はるか・高木康裕・鶴来航介・中西常雄・西田陽子・安岡早穂の助力を得た。

本章は，第２節を冨井，第４節⑵を内記，それ以外を伊藤が執筆した。全体の調節編集は伊藤がおこなった。

2　層　　位

⑴ 北区の層位（図３～５）

発掘前の北区は，標高52m程度でおよそ平坦だった。表土・攪乱層（第１層）は，平均的には１m前後の厚みに達するが，薄いところでは30㎝ほどにとどまる一方で，黄褐色粘質土（第12層）まで達する深い攪乱も広く分布する。第７節で述べるように，大学関連の近代陶磁器がまとまって廃棄されているのを確認している。

表土の薄いところでは，近世の遺物包含層である灰褐色土（第２層）が見られる。北辺では，下面の標高は，東部で約52.0mに達している部分もあり，Ｙ＝2090付近でも51.9mほどだが，Ｙ＝2080辺りから西辺に分布する近世の不定形土坑の埋土の最上部に堆積する耕作土の下面では51.2mまで下がる。また，東辺では，Ｘ＝1240辺りでは51.2m程度なので南に大きく下がるが，Ｘ＝1236辺りでは51.5m程度まで再び上昇し，さらにＸ＝1230付近には南上がりの段差となっていたようでそれ以南では51.7mをはかる。

茶褐色土（第３層）は，中世の遺物包含層だが，多くは遺構埋土として残存し，近世以降の削平を免れて本来の耕作面をとどめているのは，東辺の一部と思われる。東壁ではＸ＝1234辺りで，第３層内部で不明瞭になる砂脈を確認した。また北壁では，南北溝ＳＤ10の直下で，溝の埋土の最下層を押し上げたような状況を呈する砂脈を検出した（図版５－４）。さらに，東西溝ＳＤ13の東壁断面では（図版５－５），北壁の下半が溝内に引き裂かれたような状況が認められるほか，溝の埋土も下半だけは堆積が乱れたような状況が認められる。こうしたことから，これらの大溝が掘削されて以降でまだ溝として機能していた頃に，大きな地震があったと判断する。なお第３層は，西辺では，Ｘ＝1238以南では黄褐色粘質土ブロック群とともに不定形土坑埋土の主たる構成要素となっており（図版５－６），その埋土が，褐色粘質土（第10層）に貫入する花崗岩粒から成る砂層（第13層）起源の砂脈を切っている。この砂脈も同じ地震によるものかはわからないが，層準としては，北接する378地点西辺での地層変形〔冨井ほか2015〕に対応できるだろう。

黒褐色土（第４層）は粗砂質で，同じく粗砂質で淡褐色を基調とする砂質土（第５層）の上部に分布する。安定的に広がる遺物包含層ではなく遺構埋土として残存するのみである。出土遺物から，弥生時代から古代までの年代幅に収まると思われる。

弥生時代前期末中期初頭の砂質土石流堆積物である黄色砂（第６層）は，攪乱や中世以降の土取りを免れた部分から推し量れば，全域に分布していたことがうかがわれる。もっ

層　　位

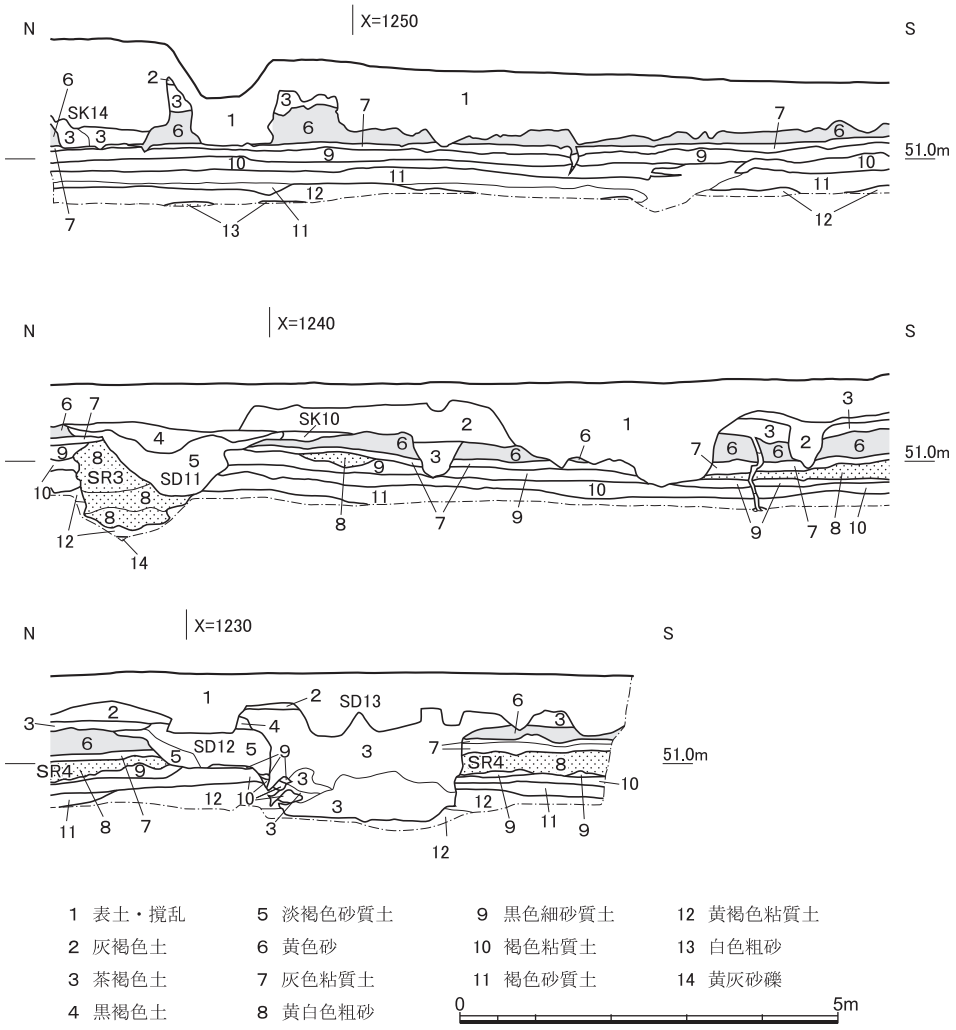


図３　北区東壁の層位　縮尺1/100

ともよく残っているところでは，最下部の粘土～シルト質から上方粗粒化して１㎜程度の粒径になってから再びやや上方細粒化する，という傾向がうかがえる。流路ＳＲ１を最終的に埋積したのもこの黄色砂である。

ＳＲ１は，南壁近くでは底面がやや急勾配で上昇する。また，ＳＲ１の埋積過程では，黄色砂の最下部の細粒分が流路を横断して全面を薄く覆っている部分があるので（図版４－２），黄色砂の堆積直前には水流がほとんどなかった可能性がある。

黄色砂に覆われていた弥生時代の旧地表が上面となるのは，主に灰色を呈する粘質土（第

７層）で，西北辺は明るめの色調で粘質の傾向が強いのに対し，東南辺では褐色がかり下部が粗砂質になる。第７層の上面の標高は，西壁中央付近で50.9m，南壁の西辺で50.7～50.9m，東壁では51.4～51.0mをはかる。

第８層は，流路ＳＲ１の下部や流路ＳＲ３・４を構成する灰白色から黄白色の粗砂。ＳＲ１下部は堆積岩も含む。ＳＲ３・４は，花崗岩粒から成るので白川系の砂層と判断できる。ＳＲ４の分布する東南部では上方粗粒化が認められ，特に南辺では粒径が10㎜まで達する。ＳＲ１の側方に堆積する青灰色シルトも第８層をもたらした水流によると思われるので，便宜的に第８層とした。なお，ＳＲ３は，ＳＲ１下部が流向を変えたときに形成した旧河道と判断できる。

第９層は，黒色～灰色を基調とする細砂質土。西辺には分布せず，また南辺では，分布が途切れがちになるとともに，上部が第８層の浸食を受ける部分もある。第10層は，褐色～暗褐色を呈する粘質土。北壁の東隅付近では，拳ほどの大きさのものも含む炭化物の集積を検出しており，そのうちの大型の炭化物の放射性炭素年代測定により，2713ＢＰ±24の年代値を得ている（株式会社加速器分析研究所に委託：IAAA-133677）。第10層よりも砂質に富むとともに色調が薄く褐色～明褐色を呈するのが，褐色砂質土（第11層）で，Ｘ＝1247付近では，堆積の乱れを認め得るほか，基質の粒径が細かい部分も狭からず分布するが，褐色砂質土としてまとめた。出土遺物から，縄文後晩期の地層と思われる。

第12層は，黄褐色粘質土で，調査区全体に広く厚く分布していたと思われるが，調査区東半では中世に土取りの対象となった。この第12層を掘削上の基盤層として捉えている。ごく希に縄文後期の土器片を含むことから，堆積の開始は4000年前頃より新しいと判断できる。

それより下位の地層は，第13層は花崗岩粒から成る白色系の粗砂で，第14層は，礫径50㎜に達するものを含め多くの堆積岩を多く含む。礫種から，前者は白川系で後者は高野川系と判断する。第13層は，西辺では第11・12層を切り裂く砂脈として検出できたほか，西壁では第11層を上下に分断するような水平方向の砂脈としても確認できる。なお，北壁でＳＤ10に切られる差脈を構成する砂層については，第13層なのか第14層なのか判断できなかった。

⑵ 南区の層位（図６～８）

南区も，発掘前はおよそ平坦で標高52m程度だった。基本的な層序も北区と変わらない。第１層はおよそ50～100㎝の厚みだが，西辺では近代に下層を深く掘り込み，その最下部

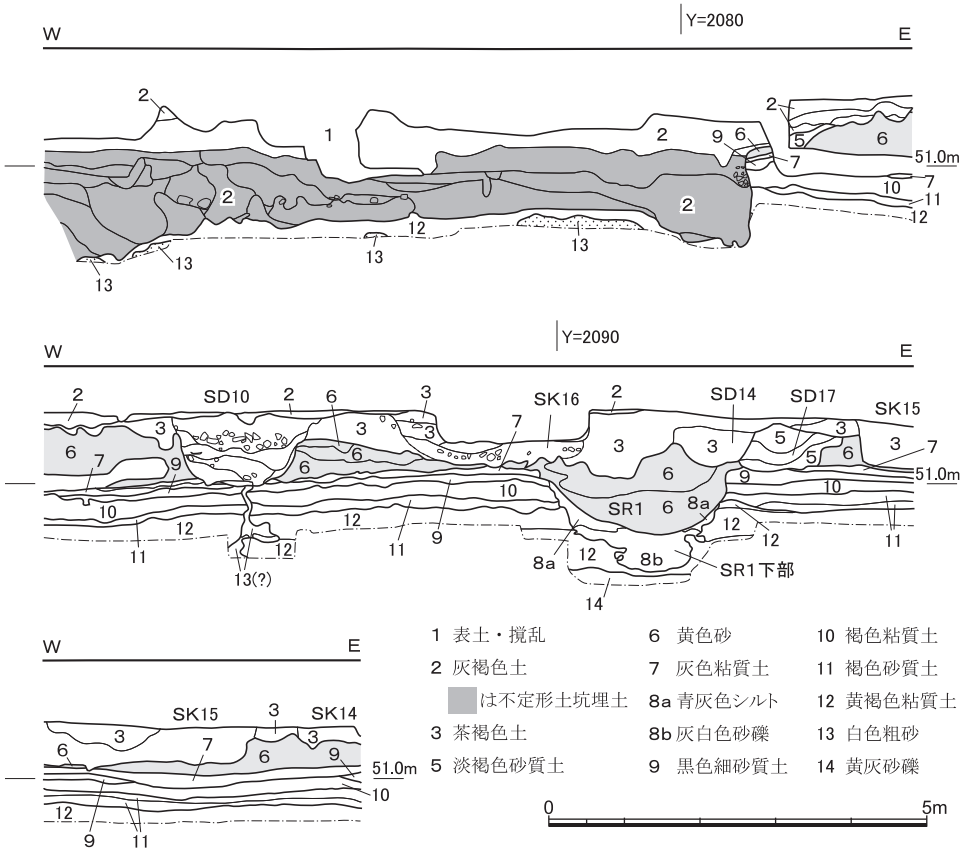


図4　北区北壁の層位　縮尺1/100

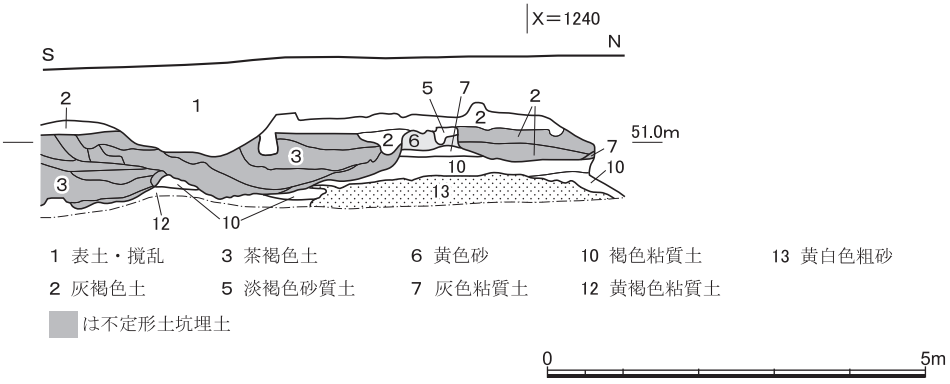


図5　北区西壁の層位　縮尺1/100

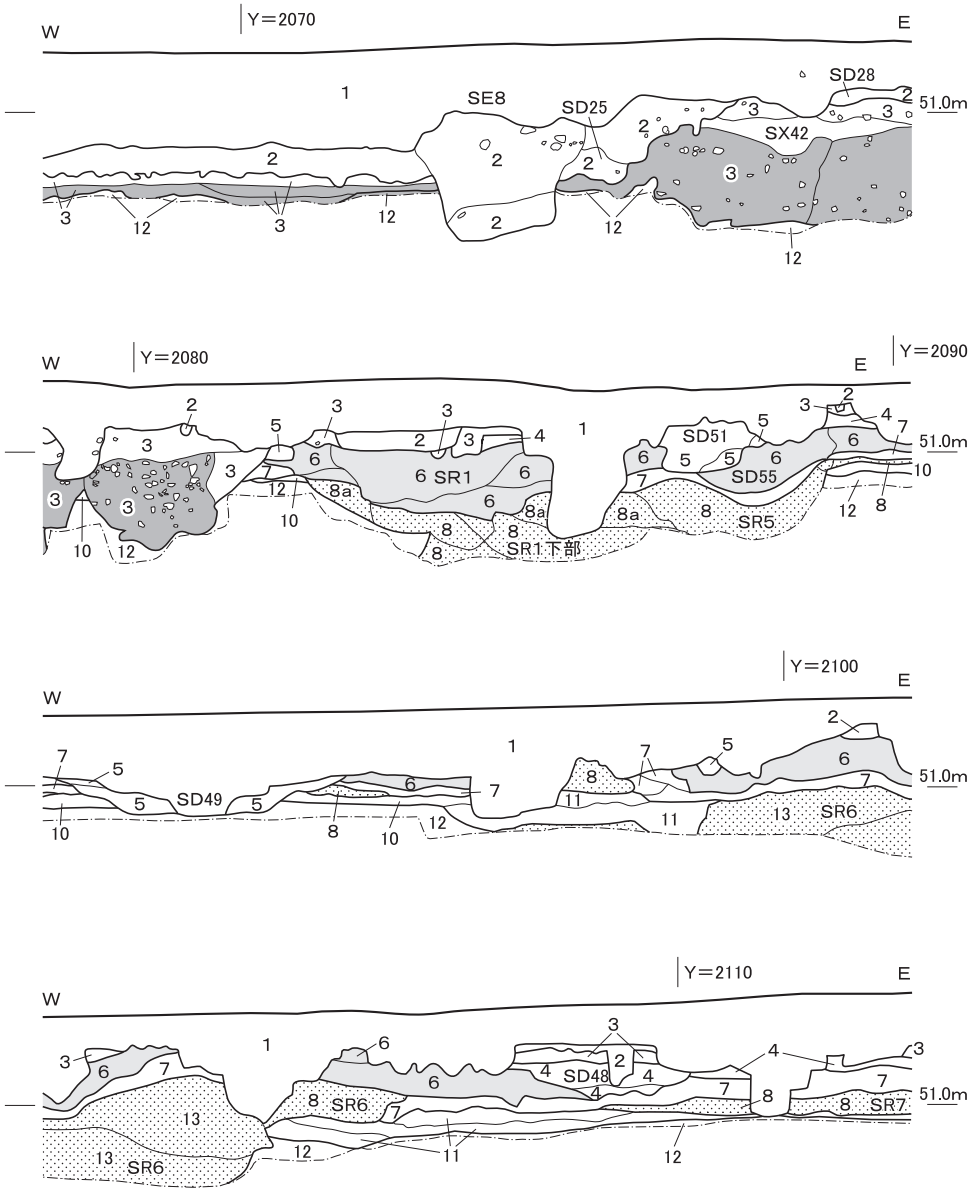


図６　南区北壁の層位　縮尺1/100

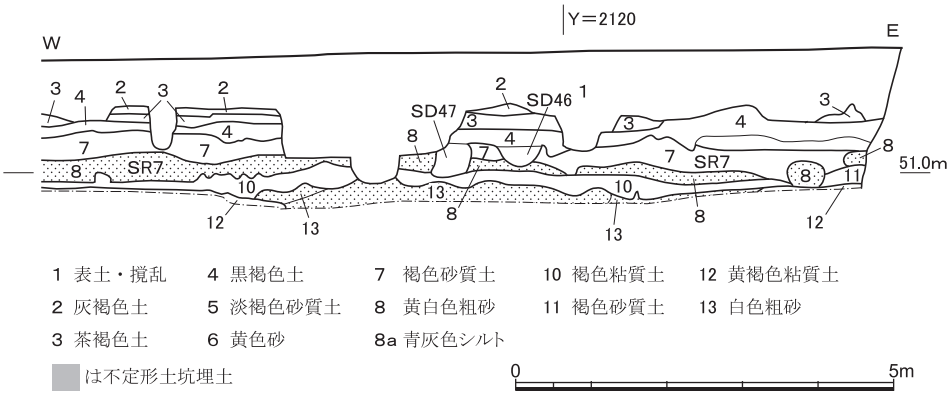


図６　つづき

に陶磁器の集積を見る。近世の遺物包含層である灰褐色土（第２層）の下面は，およそ南下がりおよび西下がりだが，標高を細かく見ると，Ｙ＝2105辺りがおよそ南北方向にわずかに高まっていた可能性がある。北壁際ではＹ＝2120付近から東では51.8ｍより高く，Ｙ＝2120辺りから少なくとも５ｍは51.8ｍのままで，Ｙ＝2110辺りでは51.7㎝と一段下がるが，Ｙ＝2106～2102では51.8ｍでも第６層が残存する。そこから西へは大きく攪乱を受けているが，Ｙ＝2089でも51.6ｍで，Ｙ＝2080付近でも51.4ｍで，それぞれ茶褐色土が残存し，Ｙ＝2079では立ち上がりの削平された溝ＳＤ28の底面が51.2ｍをはかる。ＳＤ28の西から大きく西へ落ちるが，Ｙ＝2072以西は50.2ｍで平坦となる。

南辺は，Ｙ＝2118以東は51.6ｍで，そこから西へは大きく攪乱を受けているが，Ｙ＝2097でも51.6ｍをはかる。Ｙ＝2083付近には，51.3ｍから51.1ｍへと約20㎝の西落ちの段差があり，Ｙ＝2076までは平坦であることを確認できる。Ｙ＝2075辺りをはしるＳＤ28以西は大きく西へ落ち，Ｙ＝2074以西は50.1ｍで平坦となる。

中世の遺物包含層である茶褐色土（第３層）は，比較的安定して存在し，北壁でいえば，Ｙ＝2076～2085とＹ＝2108以東に西落ちの地形を確認できる。ただし，近世と同様に，Ｙ＝2105辺りがおよそ南北方向にわずかに高まっていた可能性がある。すなわち，下面の標高でみると，Ｙ＝2121で，西へ10㎝以上落ちてそれ以西がおそらくＹ＝2108までは51.6ｍで平坦となる段差があるが，Ｙ＝2106～2102では51.8ｍでも第６層が残存し，Ｙ＝2090辺りでは51.5ｍとなっていて，Ｙ＝2085では51.2ｍをはかる。

弥生～古代の遺物包含層である黒褐色土（第４層）は，東辺では安定した堆積がみられる。さらに，北壁ではＹ＝2109以東，南壁ではＹ＝2090以東で，黄色砂（第６層）の分布

が見られない一方で，第３節で述べるように，遺存状態の良好な弥生前期末～中期初頭の土器がピットから出土している。こうしたことから，東辺は遅くとも弥生時代までには黄色砂がほとんど堆積しないような高まった地形になっていたと考えられる。

北区の東南部では黄色砂直下の弥生時代の遺物包含層（第７層）は褐色がかり砂質になっていたが，南区ではその傾向がさらに強まる。ただし，黄色砂直下でも，先史時代の流路ＳＲ１の埋没過程の流路変化で形成された溝状の凹みＳＤ55の直下はシルト質である。

白色砂（第８層）で埋積される流路ＳＲ５も，北区のＳＲ３と同様に，ＳＲ１の流路変化で生じたと判断できる。ＳＲ１下部では，北区と同じく側方に青灰色シルトが堆積しているが，それを切る白色砂との関係から，流れは徐々に東に移行してＳＲ５となった後で放棄流路ＳＤ55となり，その後再び水流が来てＳＲ１の上部を形成したと判断できる（図版４－５）。ＳＲ１上部を埋積したのは黄色砂だが，以上の見解を踏まえ，ＳＲ１下部は第８層としてまとめている。なお，ＳＤ55は，北区のＳＲ１の底面の上昇に対応すると思われ，第６層をもたらした土石流の直前にはＳＲ１は少し西側に膨れていたと考えられる。

第９層の黒みがかった細砂質土は，南区では断面図作成部分には分布しないが，第10層の褐色粘質土から縄文晩期の突帯文土器など300点前後の破片が集中して出土したエリアでは（図９），下位の第10層に漸次的に移行するかたちで，数点の土器や炭化物を包含して薄く分布している。採取した炭化物の放射性炭素年代測定値は，2492ＢＰ±26である（株式会社加速器分析研究所に委託：IAAA-133676）。

第10～12層の様相は北区と同様である。黄褐色粘質土（第12層）の直下では，白川系流路の堆積物である白色系の花崗岩粒から成る砂層を確認できていないが，ＳＲ６の下部の堆積断面を北壁で見ると，Ｙ＝2098辺りで，第11層と第12層の間に貫入しているように見えることと，Ｙ＝2101～2104で，第７層に相当すると思われるやや土壌化したシルト質土とその上位の土石流堆積物と思われる黄白色粗砂層（第６層）の下面が波打っていることから，ＳＲ６は，北区西辺の状況と同様，第12層の下位に堆積した白川系流路堆積物が地震による変形を被ったと判断する。そして，北壁のＹ＝2105辺りを通過しながらおよそ北北東から南南西の方向にはしる中近世の尾根状の微高地は，この変形を踏襲した可能性もある。北接する378地点の東南部では中世に生じたと思われる北北東－南南西方向の断層状の地層変形を確認しており〔冨井ほか2015〕，それと対応するならば，花折断層との対比が検討課題として浮かび上がってくる。なお，高野川系の堆積物と思われる第14層の堆積は確認できていない。

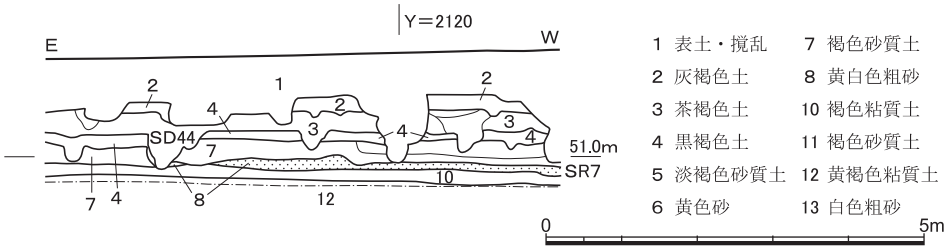


図７　南区南壁の層位（東部）　縮尺1/100

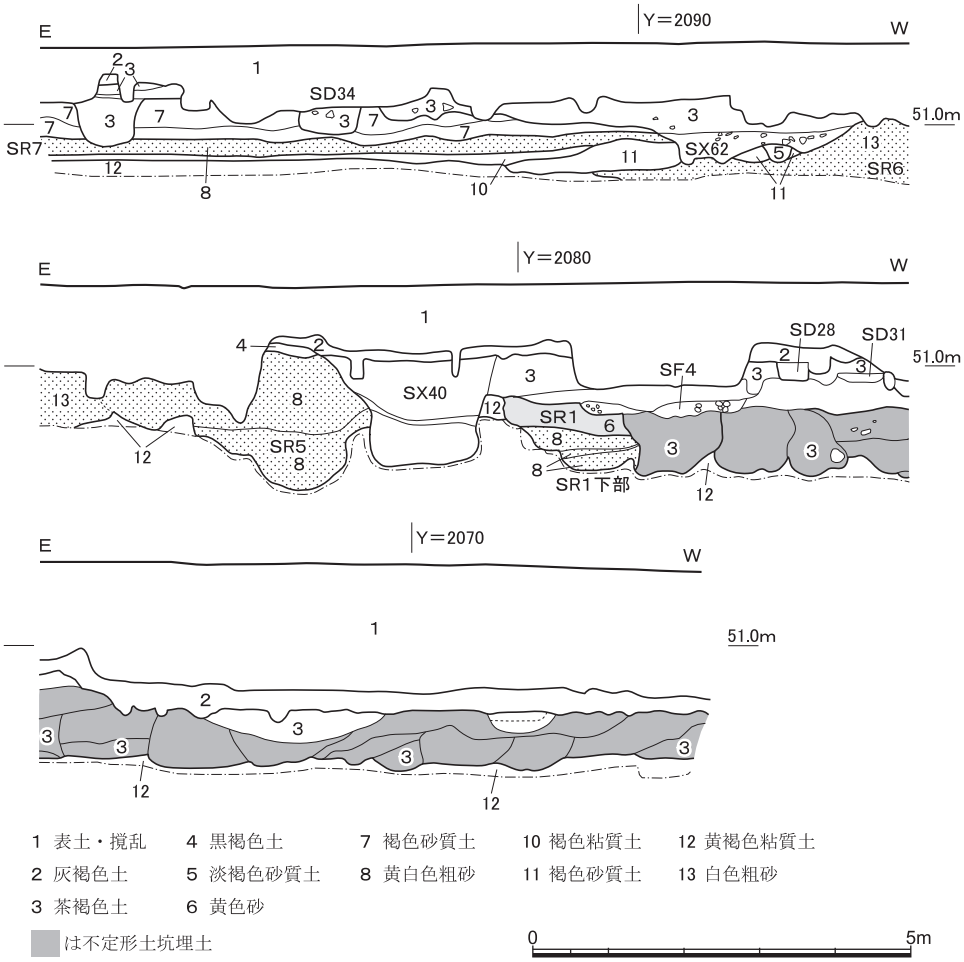


図８　南区南壁の層位（西部）　縮尺1/100

3　縄文・弥生時代の遺跡

⑴ 遺　　構（図版２～４，図９）

前節でも触れたように，広域で確認される大規模な土石流堆積で，弥生前期末～中期初頭の鍵層となっている黄色砂や，その下部の弥生前期以前の遺物包含層については，攪乱や中世以降の土取りによる削平があり，安定した確認は一部の範囲にとどまった。とくにＹ＝2080ライン付近以西は，全域で滅失している（図９）。そうした状態の中で，北区・南区とも，人為的な掘削によるものと確実に認定できる遺構は確認されず，砂層で埋積する流路が複数見つかったにとどまった。なお，南区の東半では黄色砂に相当する砂層は確認されず，古代以降の遺物と混在して，褐色砂質土や黒褐色土から遺存の良い縄文～弥生土器が出土した。この一帯が北東側から張り出す尾根状の微高地にあたり，先史遺物包含層と古代以降のそれとが黄色砂を介在させずに接して堆積していたことに起因するのであろう。（図９）においては，黄色砂が堆積している範囲を中心に，その直下の灰色粘土層上面の地形の概略を等高線で示した。北区の北東域と南区の東半域がほぼ同じ高さで尾根状の微高地として張り出しており，両者に挟まれた北区南東域一帯が窪地状の地形となっている様子がうかがえる。

以下，流路などの概略を述べておく。流路には，最終的に黄色砂が埋積しているＳＲ１と，白色の粗砂が埋積しているそれ以外のＳＲ３～ＳＲ７がある。

ＳＲ１は，幅２ｍ深さ１ｍを越える規模の断面Ｕ字形の流路で，北区から南区にかけて南北方向にはしる。下半部には粗砂や砂礫が互層に埋積しており，弥生前期以前の土器が出土する。これら砂礫のレベルは北区北端で50.1ｍ，南区南端で49.7ｍ程度であり，南へと流水のあった状況が推察される。砂礫で埋積が進んでいたところに，黄色砂により一気に埋没し平坦化している。このＳＲ１の上流に相当する流路は，北側の378地点，さらには220地点や111地点の調査でも確認されており，吉田地区一帯の基幹的な水利を担う存在であったと評価できる。

ＳＲ３は，北区の北東側から流入し，蛇行しながら南流していったとみられる。大半をＳＲ１に切られてしまい，輪郭や規模がはっきりしない範囲がほとんどだが，幅・深さとも１ｍ以上とみられる。ＳＲ４も，北区の北東側より流入している流路で，調査区東南一帯に浅く幅広く白色粗砂の堆積が広がっていることから，輪郭や規模は不鮮明ながら，流路の存在を認識した。ＳＲ５は，南区を南北にはしる細い流路。ＳＲ１にほぼ並行しては

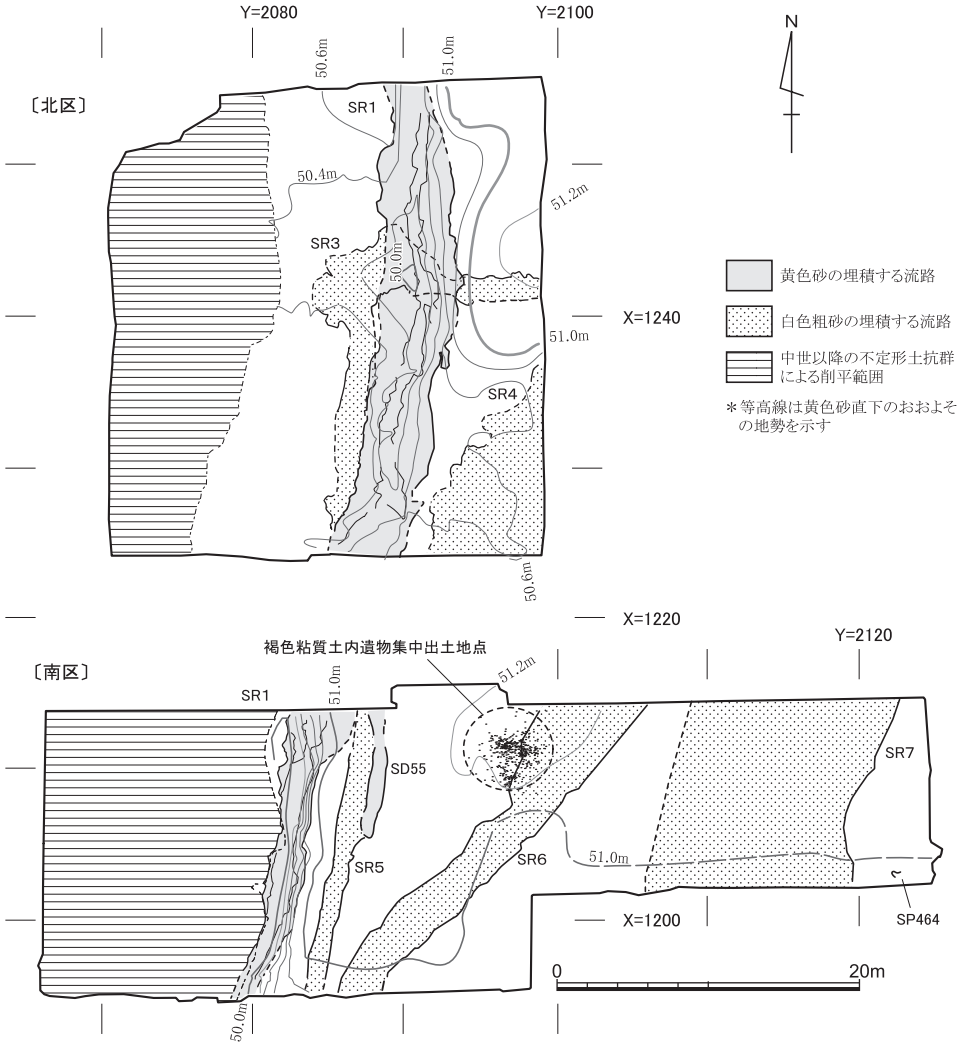


図９　弥生時代以前の主要遺構配置図　縮尺1/500

しる。北区のＳＲ３やＳＲ４が合流した南への流れに相当する可能性がある。ＳＲ６は，南区中央付近を北東－南西方向にはしるもので，幅２～３ｍ程度，深さは１ｍ以上をはかる。ＳＲ７は，南区の東域に南北方向に幅広く10m以上にわたって堆積する白色粗砂のひろがりを流路と認識した。最深部は確かめられていない。これらＳＲ３～ＳＲ７の存続時期については，ＳＲ３やＳＲ５についてはＳＲ１に先行するものであること，またＳＲ６埋積後の西肩付近において，褐色粘質土中より縄文晩期後葉の突帯文土器（Ｉ43・Ｉ44）と同一個体とみられる破片が集中して出土していることから（図９で遺物集中地点と表

示），いずれも縄文晩期後葉までには埋積して機能を終えていた流路とみられる。ＳＲ４やＳＲ７についても，晩期以前の流路とみて良かろう。

以上のほか，遺構であるかどうか定かではないが，南区において，黄色砂が埋積している南北方向の溝状のごく浅い凹みをＳＤ55とした。遺物は出土していない。また，南区東南隅の小ピットからは弥生前期末～中期初頭の甕（Ｉ87）が一括出土しており，ＳＰ464とした。さきにも述べたように，この南区東半一帯は黄色砂が堆積せず，褐色砂質土や黒褐色土中から，古代の土器と混在して弥生土器が出土する。これらの層は，黄色砂より下位にあたる弥生前期以前の遺物包含層が東へ連続して堆積しているもので，層準としては西域の褐色粘質土と同一であるものが，古代以降に攪拌や削平を被ったものと評価される。先史時代層と古代遺構の層との弁別を為し得なかったので，ＳＰ464の一括出土についても，後世の２次堆積である可能性もあるが，遺存良好のため原位置を保っているとみて，遺構としてとりあつかった。

⑵ 遺　　物（図版10～13，図10～15）

第６層黄色砂より下位の層や流路内からは弥生前期以前の土器のほか，微量の石器類が出土している。南北両地区あわせて，位置を記録できた破片は接合前の状態で682点のとりあげを数える。それらの半数近くは，（図９）に示した褐色粘質土中の遺物集中地点から出土しており，多くは同一個体の破片とみられるので，位置を記録できず流路内の砂礫中などから出土している少量の土器を加えても，出土個体数としてはかなり少なくなるとみて良い。また，南区東域の褐色砂質土や黒褐色土中や，黄色砂より上位の包含層や遺構埋土中からは，後世の土器に混入して縄文～弥生時代中期までの資料が認められる。以下，ここであわせて報告する。なお，図中で断面が灰色のものは，角閃石を多量に含む胎土の個体である。

縄文後期～晩期の土器（Ｉ１～Ｉ64）　　このうちＩ１～Ｉ44・Ｉ46・Ｉ48は黄色砂より下位に相当する層からの出土であり，それ以外が古代以降の遺構や包含層からの混入出土である。Ｉ１～Ｉ27・Ｉ44～Ｉ55は後期以前の有文土器。Ｉ１はＳＲ５に埋積する白色粗砂を断ち割り中にその下部から出土した。黒灰色を呈する波状口縁の破片で，端面を細かく刻む。波状の山形部に相当する位置に，胴部に斜行気味に湾曲する突帯が貼り付けられている。色調や質感が類似する口縁部片にＩ10があり，低平なつぶれたような突帯が，口縁端部から斜行して貼り付けられており，突帯上には連続して押捺がされるが，輪郭が不鮮明である。これら２点は中期以前の可能性があるが，ほかは，直線・曲線の沈線文や

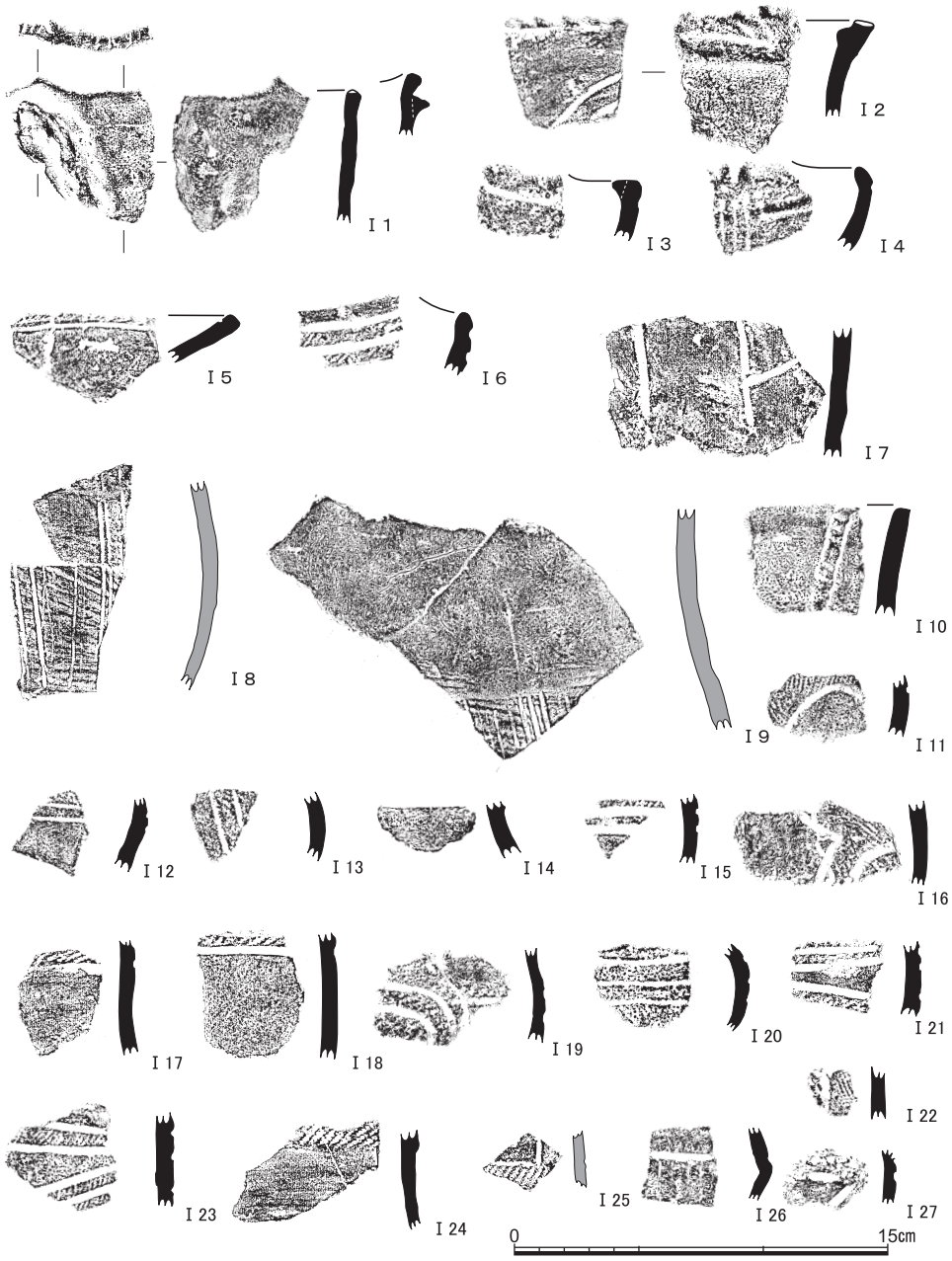


図10　縄文時代の土器(1)（Ⅰ１：ＳＲ５，Ⅰ２・Ⅰ４・Ⅰ８～Ⅰ14・Ⅰ16・Ⅰ20・Ⅰ22・Ⅰ23・Ⅰ26：ＳＲ１，Ⅰ３・Ⅰ５・Ⅰ６・Ⅰ15・Ⅰ17～Ⅰ19・Ⅰ21：褐色粘質土，Ⅰ７・Ⅰ27：ＳＲ３，Ⅰ24：淡褐色シルト，Ⅰ25：褐色砂質土出土）　縮尺1/3

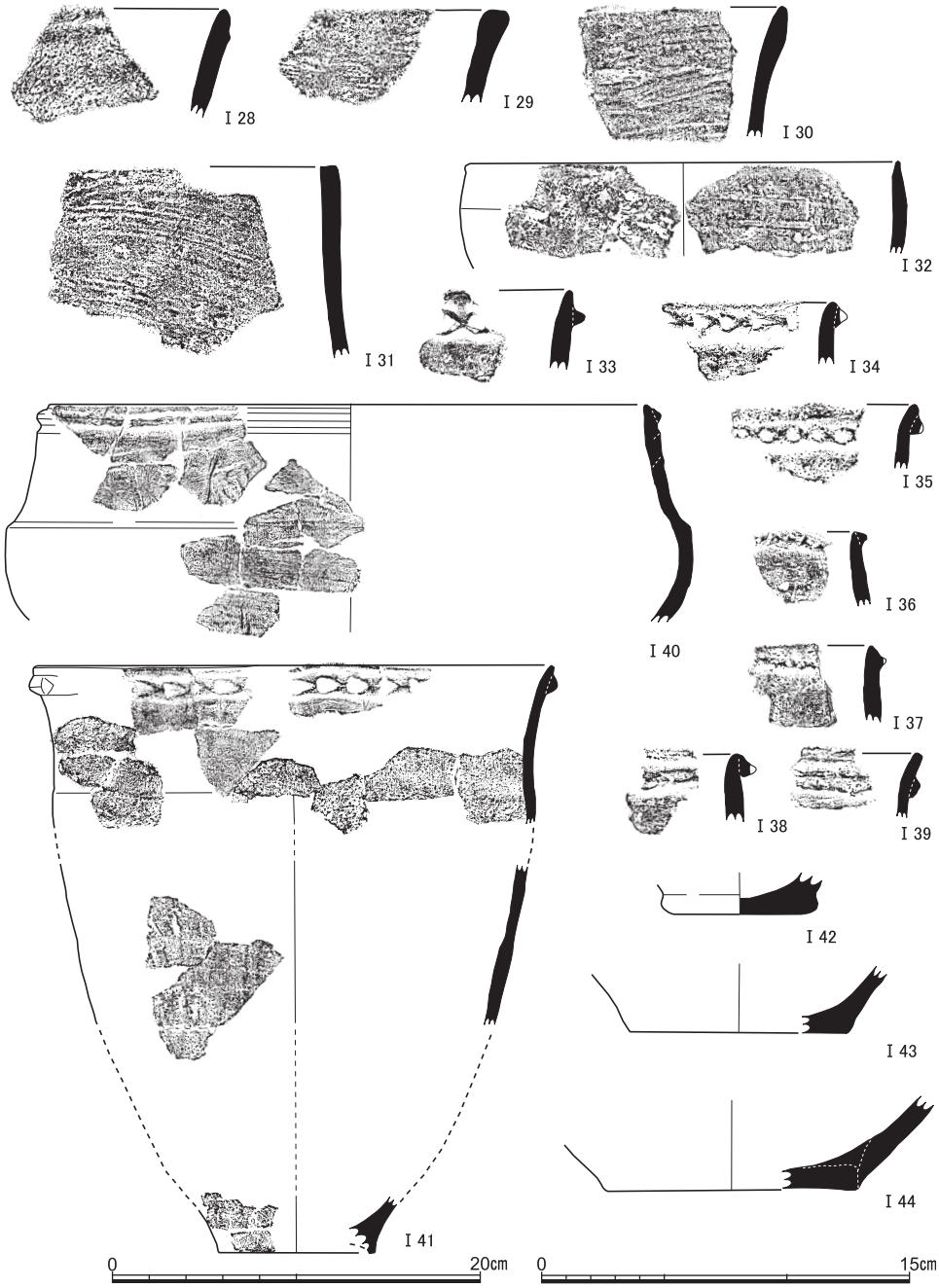


図11　縄文時代の土器(2)（Ⅰ28・Ⅰ29・Ⅰ32・Ⅰ34・Ⅰ35・Ⅰ37・Ⅰ42～Ⅰ44：ＳＲ１，Ⅰ30：黄褐色粘質土，Ⅰ31：ＳＲ３，Ⅰ33：褐色砂質土，Ⅰ36：灰色粘質土，Ⅰ38～Ⅰ41：褐色粘質土出土）　Ⅰ40・Ⅰ41縮尺1/4，ほか縮尺1/3

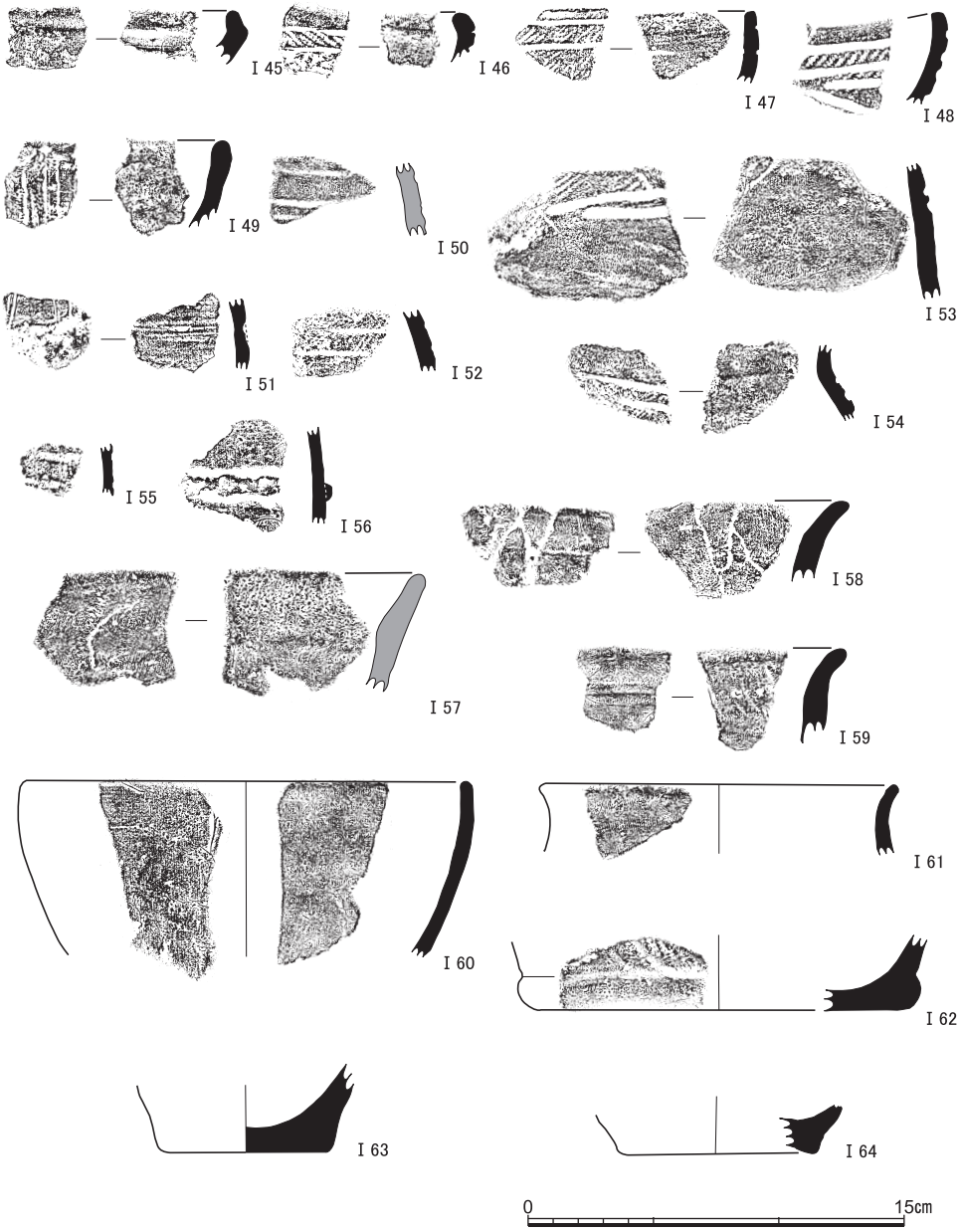


図12　縄文時代の土器(3)（Ⅰ46：黒褐色土，Ⅰ48：褐色粘質土，ほかは古代以降の遺構・包含層からの混入出土）　縮尺1/3

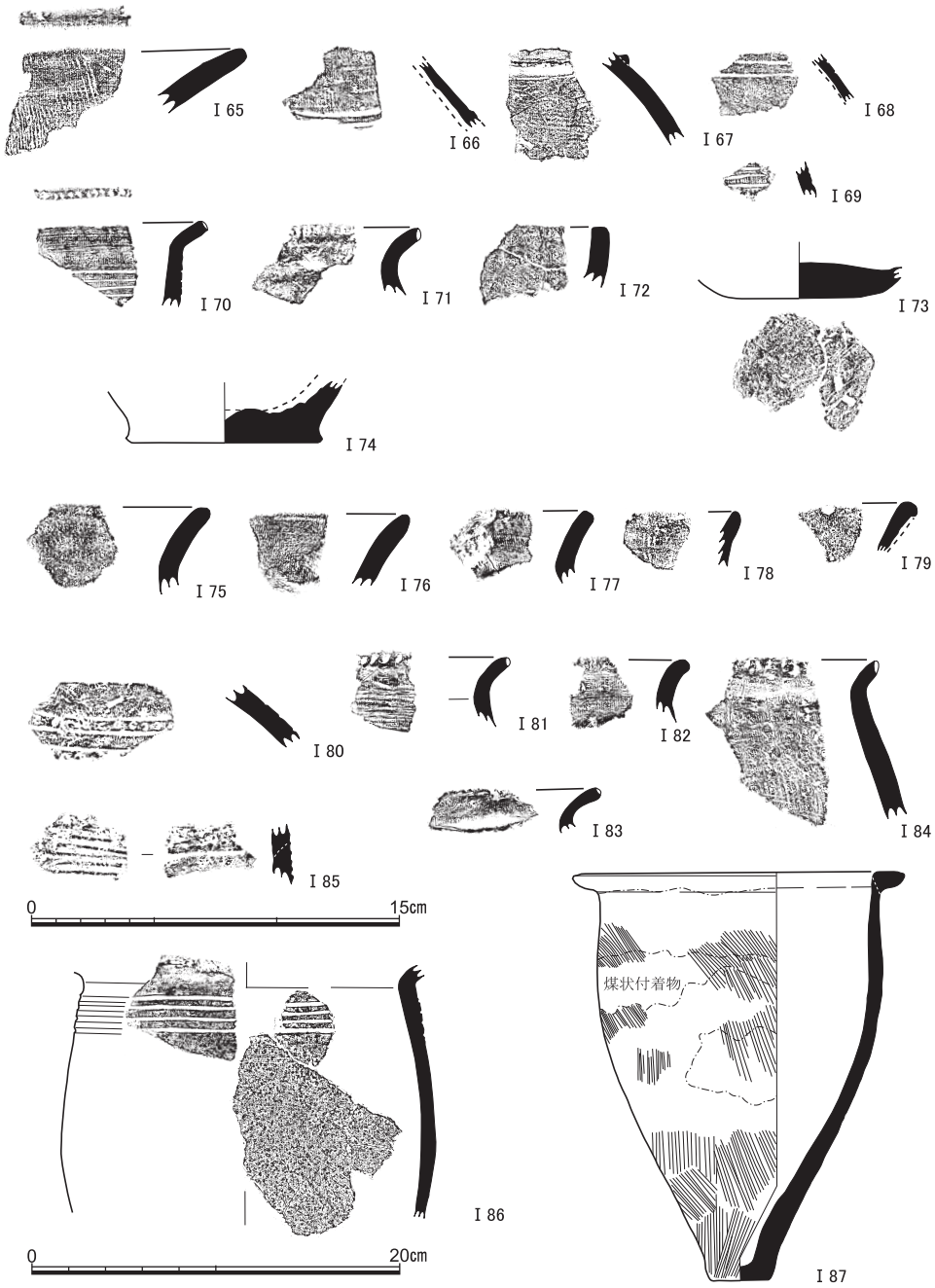


図13　弥生時代の土器(1)（Ⅰ65～Ⅰ68・Ⅰ70・Ⅰ71・Ⅰ78：ＳＲ１，Ⅰ69・Ⅰ74：褐色砂質土，Ⅰ73：褐色粘質土，Ⅰ87：ＳＰ464，ほかは古代以降の遺構・包含層からの混入出土）　Ⅰ86・Ⅰ87縮尺1/4，ほか縮尺1/3

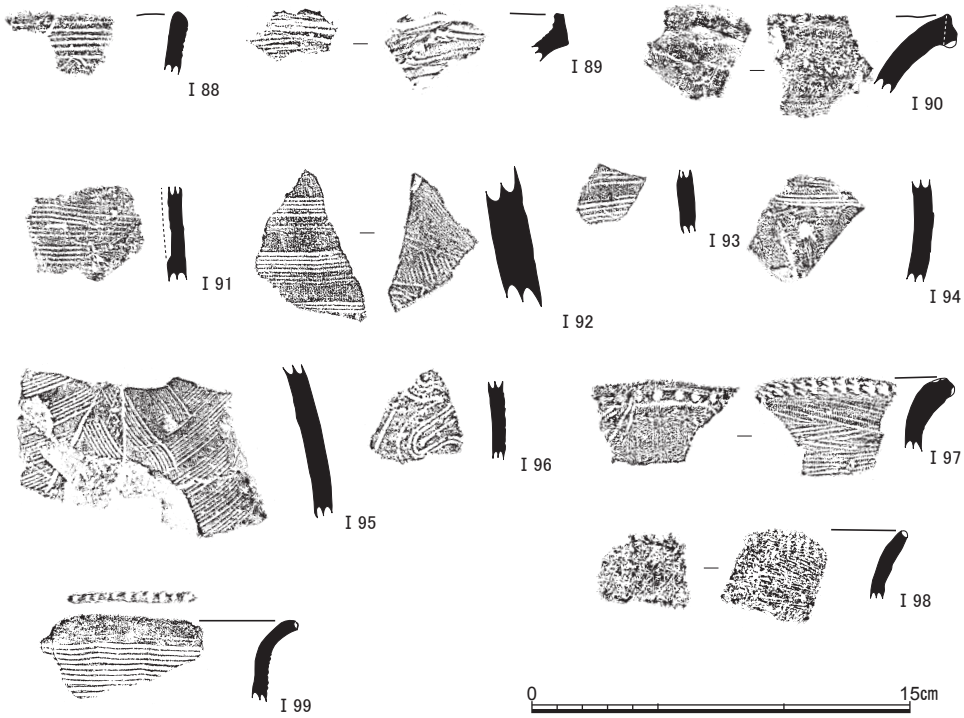


図14　弥生時代の土器(2)（Ⅰ88褐色砂質土，Ⅰ93黒褐色土，ほかは古代以降の遺構・包含層からの混入出土）　縮尺1/3

磨消縄文による文様を基本とするもので，縄文後期前葉～中葉のものであろう。特定の型式・時期にまとまるものではなく，北白川上層式１～２期ごろを中心としながら，その前後のものも若干含んでいる内容とみてよかろう。

Ⅰ28～32は粗製土器。Ⅰ28～Ⅰ31は後期で，Ⅰ32は外面を横位に篦削りしており，晩期とみられる。

Ⅰ33～Ⅰ41・Ⅰ56は縄文晩期後葉の突帯文土器，Ⅰ42～Ⅰ44は後晩期の底部。うち後世混入のⅠ56のみ深鉢胴部の突帯文で，ほかはいずれも口縁部の破片である。Ⅰ33～Ⅰ35は器壁が厚く，しっかりとしたO字やD字の刻みを施す丈高な突帯が貼り付けられる。Ⅰ36～Ⅰ39は，やや薄手で，Ⅰ36・Ⅰ37は口縁端部に接して貼り付けられる小ぶりな突帯に，細かな刻みが施される。Ⅰ38の突帯も，口縁端部に貼り付けられるが，横長のO字状に押捺される特異なものである。Ⅰ39は口縁端部からかなり下がった位置に扁平な突帯が貼り付けられる。Ⅰ40・Ⅰ41は，ともに褐色粘質土中から，同一個体とみられる破片が多数集中して出土しているものの，接合率は低く，完形には復元できない。Ⅰ40は浅鉢風の器形

になるもので，無刻の突帯が口縁端部からやや下がって貼り付けられ，頸胴部界には明瞭な段差を設ける。外面は全面横位に研磨され，暗赤褐色を呈する。内面は黒色を呈するが，撫でのみで放置される。Ｉ41は１条の刻目突帯文深鉢で，口縁端部からやや下がってしっかりとしたＤ字状刻みを施す突帯がめぐる。頸部がややくびれる器形となるようで，胴部は縦位の削りとみられる。器壁は薄い。以上の突帯文土器は，突帯の形状や特徴から，Ｉ36～Ｉ39がやや型式的に後出の特徴を示すとみられるものの，それ以外は，おおむね晩期後葉の滋賀里Ⅳ式～船橋式に位置づけられるものといえる。

弥生前期の土器（Ｉ65～Ｉ86）　縄文後・晩期の土器よりも少量である。削り出し突帯（Ｉ66）や貼付突帯（Ｉ67）の壺胴部片や，４条以上の箆描沈線文をめぐらす甕口縁部（Ｉ70）や頸胴部（Ｉ86）などが認められ，中～新段階に位置づけられる遠賀川式土器が中心となる。Ｉ73の底部は籾圧痕状のものがある。Ｉ85は外面に横位の条痕調整のみられる小片で，明瞭な粘土紐積み上げ痕を内面にとどめる特徴など勘案すると，伊勢湾地方にみられる内傾口縁土器とみてよい。周辺では，288地点で多く出土している。

弥生中期の土器（Ｉ87～Ｉ99）　Ｉ87は，ＳＰ464で一括出土した甕。ほぼ完形に復元される。口縁部が逆Ｌ字状に外折しており，「瀬戸内系甕」と呼称されている特徴を呈する。胴部は張らず，底径が小さくすぼまり不安定な器形である。口唇に刻みはなく無装飾で，頸部から胴部にかけても，縦位の浅い刷毛調整のみで文様はもたない。器表面に，帯状やパッチ状に煤状の黒褐色付着物を認め，内面にも焦げ状付着物を一部に認める。使用にともなう痕跡であろう。瀬戸内系甕については，前期後葉の近畿地方を中心にしばしば出土が知られるものであるが，遠賀川式土器の甕と同様な口唇部の刻みや多条の沈線文を頸部に施すことが通有である。しかし本例は全くの無装飾であり，後出する中期初頭段階の可能性が高いと判断する。

Ｉ88は直口壺の口縁部片で，半截竹管状の工具を用いた櫛描直線文と波状文の組み合わせが認められる。Ｉ89は端部が短く上方に立ち上がる受け口状の口縁部で，内外面に粗い刷毛調整が認められる。Ｉ90は広口壺の口縁部片で，下端を刻む。Ｉ91～Ｉ96は櫛描文を施す壺の胴部片。Ｉ91は複帯構成で，数帯の櫛描文が互いに重なり合っている。Ｉ95は縦位の箆描線を軸とした羽状の櫛描施文を施す特異なモチーフである。中期前半の近江の湖南地域から中部地方の条痕文系土器の調整や装飾手法に類例が知られるパターンと言える〔例えば，山本ほか2000　図８－24など〕。Ｉ96はやや崩れた縦形流水文モチーフであろう。Ｉ97～Ｉ99は甕の口縁部片。Ｉ97は厚手の器壁で口唇部下端を刻むとともに，口縁端部に

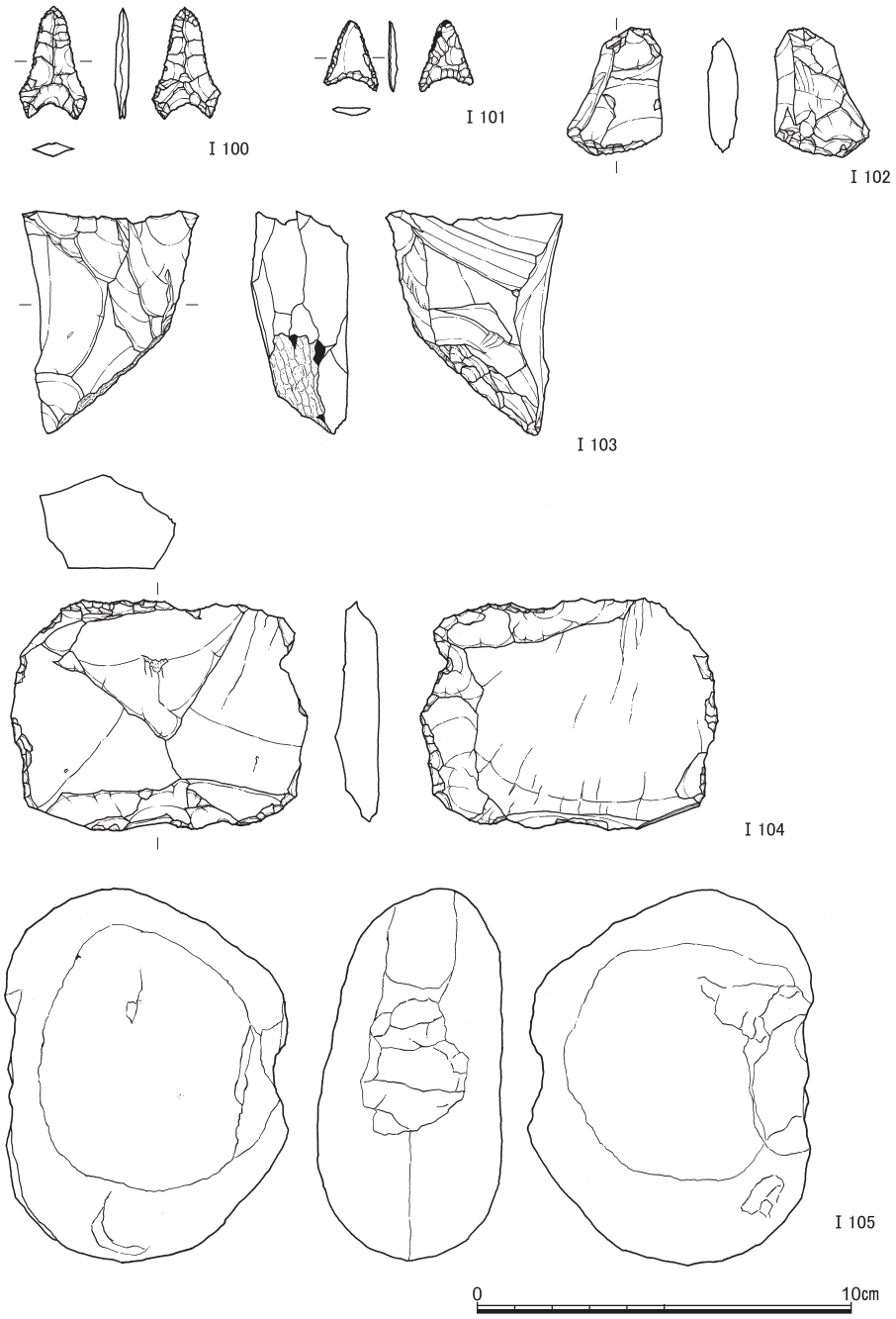


図15　縄文～弥生時代の石器・石製品（Ⅰ100・Ⅰ101：褐色粘質土，Ⅰ103：褐色砂質土，Ⅰ105：ＳＲ１，Ⅰ102・Ⅰ104：ＳＸ64への混入）　縮尺1/2

接した内面側に刷毛調整と，刷毛工具による押し引き状の刺突列がめぐっている。Ｉ98は薄手でもろい器壁で，口唇部端面を刻み，やはり内面側に細かな刷毛調整と刷毛工具の刺突列がめぐる。質感は互いに異なるが，特徴から近江～大和地域の中期前半の甕の特徴を備えたものと評価する。Ｉ99は口唇部に篦刻み，頸部に複帯構成の櫛描文を施す。中期初頭のものであろう。

以上の弥生中期の土器は，おおむね前半のうちに収まる時期に位置づけられる点，Ｉ87の甕とあわせて，少量であるが時期的なまとまりをうかがうこともできる。近辺では北側の261・378地点などで中期後半の方形周溝墓が見つかっているけれども，それとは異なる時期の活動域が吉田南構内南辺に存在することを示していよう。

石器・石製品（Ｉ100～Ｉ105）　石鏃２点，楔形石器１点，石核１点，削器１点，敲石１点がある。ほか図示していないが，ごく微量の剥片も出土している。石鏃Ｉ100・Ｉ101は南区の遺物集中地点で褐色粘質土中から，石核Ｉ103は南区東辺の褐色砂質土中から，敲石Ｉ105は北区のＳＲ１砂礫内からの出土であり，Ｉ102･Ｉ104はＳＸ64への混入である。Ｉ100は最大長3.0cm，幅1.8cm，厚さ0.4cm，重さ1.4ｇをはかる凹基式石鏃。金山産のサヌカイト製とみられる（以下，石材，石器技法の観察所見については高木康裕の教示による）。Ｉ101は最大長1.9cm，幅1.4cm，厚さ0.2，重さ0.5ｇの凹基式石鏃。片面にフラットな素材面を残す。二上山北麓産サヌカイト製とみられる。Ｉ102は楔形石器。最大長3.7cm，幅2.3cm，厚さ0.8cm，重さ7.7ｇ。両側面に剪断痕があるほか，ごく一部に海綿状の自然面が残る。両面の上下に密集する潰れ痕があり，両極打法の残核としての楔形石器と認定される。二条山北麓産サヌカイト製とみられる。Ｉ103は石器素材の剥片を直接打法により剥離した石核。最大長5.9cm，幅4.7cm，厚さ2.6cm，重さ61.1ｇ。海綿状の原礫面が残存しており，二条山北麓産サヌカイト製とみられる。Ｉ104は削器。最大長7.9cm，幅7.1cm，厚さ1.3cm，重さ72.8ｇ。図上の右側に示した面は大きなポジ面であり，直接打法で剥離された剥片を素材としている。二上山北麓産サヌカイト製とみられ，二次加工された刃部は，白っぽい黒灰色である素材に対して，明らかに風化度が異なっている。Ｉ105は敲石。最大長10.0cm，幅7.9cm，厚さ4.9cm，重さ541.1ｇ，花崗斑岩の円礫を用いている。両側面の２カ所に主使用部位とみられる大きな凹みがある。

以上の石器は，石鏃については，形状からみて縄文後期～晩期のものとみられ，出土土器の時期幅と大きく矛盾しない。その他の資料については，縄文後期～弥生前期までの幅の中でとらえられよう。

4　古墳時代および古代の遺跡

⑴ 遺　　構（図版２・３・７・８，図16・17）

北区・南区とも，おおむねＹ＝2080ライン以西については，中世以降の土取りにより基盤の黄褐色粘質土上部まで削平されてしまっており，深い掘り込みをともなった井戸ＳＥ12を除いて，遺構・遺物包含層とも全く確認できなかった。そのほかの遺構も，近現代の攪乱や中世以降の遺構に寸断されて，とくに北区では遺存が芳しくなかったが，南区では

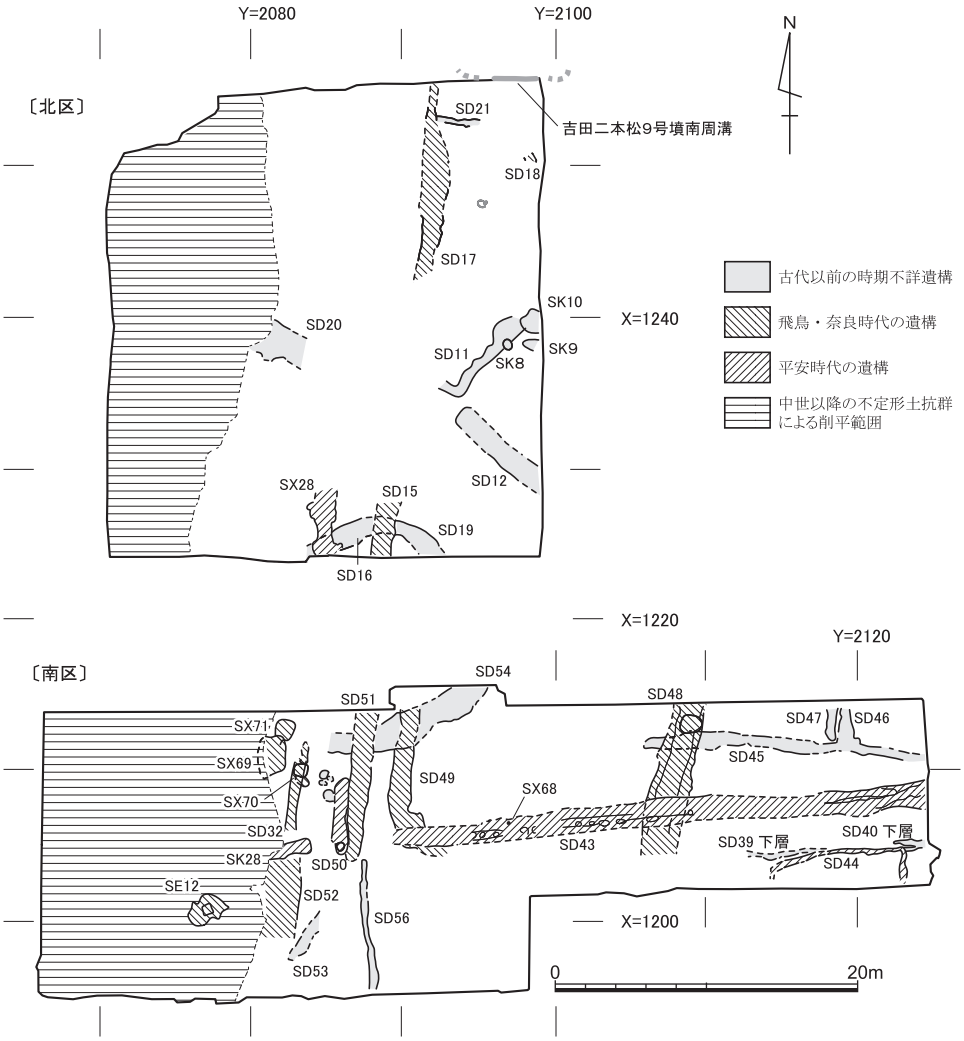


図16　古墳時代～古代の主要遺構配置図　縮尺1/500

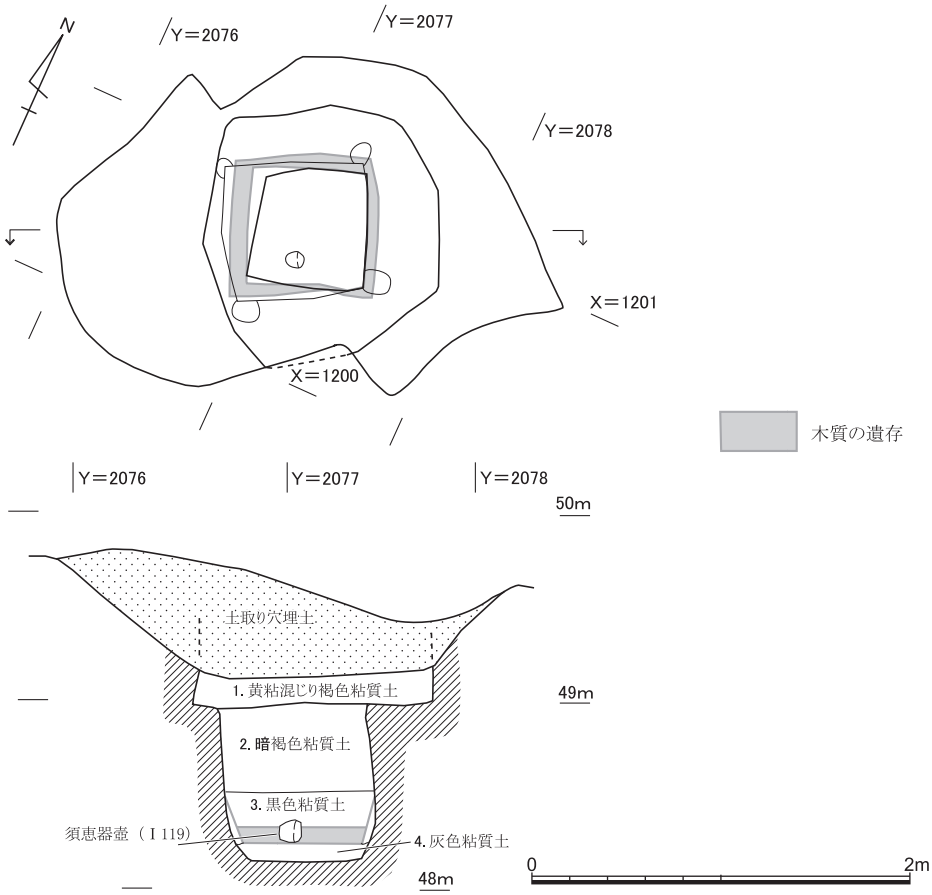


図17　井戸ＳＥ12　縮尺1/40

奈良・平安時代の溝を中心に複数が確認できている。当該地点付近が，古代において土地区画上の意味ある位置であったことを示していよう。以下，時期不詳のものも含め，おおむね時代順に報告する。

古代以前の時期不詳遺構　埋土からの出土遺物が無いために時期が特定できない遺構が複数ある。これらは，輪郭不鮮明なものも多いが，淡褐色土や黒褐色土を埋土とする溝状の遺構の可能性が高いのは，北区のＳＤ11・12・16・19・20，南区のＳＤ45～47・53・54などである。切り合い関係などから，遺構とすれば奈良時代以前と考えられ，北側に隣接する361地点で弥生時代中期の方形周溝墓や５世紀代の方形墳が検出されていることや，溝の方向性を考慮すると，それらの周溝の残存であったのかもしれない。直接はともなわないが，弥生時代中期や古墳時代の須恵器が少量出土していることも，その可能性を裏付

けると言えるが，決め手は欠いている。

なお，調査区北壁付近で，361地点で見つかっている９号墳の南周溝に相当する溝を確認している。位置関係から周溝であるのは確実だが，溝内からの出土遺物はない。

飛鳥・奈良時代の遺構　黒褐色土を埋土とする溝状遺構がほとんどで，出土土器から，南区のＳＤ52が７世紀前半の飛鳥時代の可能性があり，それ以外はおおむね８世紀半ばの奈良時代とみられる。奈良時代はおもに南北方向にはしるもので，北区のＳＤ15・17と南区のＳＤ51は，一連のものかも知れない。ＳＤ48・49は幅1.5～２ｍ深さ0.5ｍ前後の浅く広い溝で，ＳＤ49は東へと屈曲するように検出されている。ＳＸ69・71は方形の深い土坑で，土壌混じりの粗砂で埋積していた。奈良時代の遺物しか含まれておらず，便宜的にその時期に位置づけておくが，下る時期の土取りの遺構であった可能性もある。

奈良時代の井戸ＳＥ12　中世の土取り穴である不定形土坑の底面に，基盤の黄褐色粘質土を掘り込んだ方形井戸の残存として確認できた（図版８，図17）。検出時には，1.2ｍ程度の不正方形の輪郭が，黄粘混じり茶褐色土を埋土として検出されたが，掘り下げはじめるとすぐに暗褐色粘質土が密に詰まった80㎝四方程度の方形の輪郭が現れた。遺物をほとんど含まないこの暗褐色粘質土を60㎝程掘り下げると，黒色の粘質土へと埋土が変わり，壁面に枠板の木質が残存するようになった。そして，黒色粘質土に包まれるように，須恵器壺胴部（図19－Ⅰ119，頸部は分離して出土）が横倒しで出土し，この時点で壁面からの湧水がみられるようになった。須恵器壺よりも下は，灰色粘質土が膜状に薄く堆積するのみであった。最低面のレベルは48.16ｍ。こうした埋積状況から，最下層の灰色粘質土は井戸使用時の堆積で，須恵器壺は釣瓶として使用されていた可能性があろう。それが放棄された後も，黒色粘質土が埋積するに至る期間は井戸として使われていた可能性があるが，その後使用不能となり一気に埋められたものと思われる。枠板の木質の遺存は良好ではなかったが，４点について樹種同定を依頼したところ，ヒノキ科のアスナロ（*Thujopsis dolabrata*）との結果を得た（生存圏研究所・杉山淳司氏による）。そして，四隅に小さな円形の痕跡を検出していることから，横板組隅柱留めの構造であった可能性が高いと判断される。

平安時代の遺構　南区を東西方向に横断する溝状遺構ＳＤ43が，この時期の最も目立つ遺構である。Ｙ＝2090付近から調査区東壁まで35ｍ程度を確認している。検出幅は２ｍ程度の規模だが，内部で２条に別れて検出され，断面で検討する限り北側から南側へと幅１ｍあまりの溝がずらして掘り直しされている。南側の溝の底は，一部で布掘りの基礎状

を呈しており，数十cmの短い間隔で並ぶピットに根石を据えたものが並んでいた。このことからＳＤ43は，溝ではなく塀などの基礎であった可能性があろう。Ｙ＝2090付近で一旦立ち上がって途切れ，５ｍあまり隔てて，同一方向の振れの東西に長い土坑ＳＫ28がある。ＳＫ28は西側を土取り穴で破壊されているので，ＳＤ43と同様な溝がさらに西へと続いていた可能性も考えられよう。このＳＫ28からは10世紀前葉の土師器皿がまとまって出土している。ＳＤ43からは，10世紀後葉までのやや時期幅のある資料が出土している。おおむね10世紀代に，区画として重要な位置にあった遺構と評価されよう。

ＳＸ68は，南区中央付近で，ＳＤ43の埋土上面で検出された牛歯の一括出土（図版８－５）。上顎の左側かとみられるが，性別や年齢は遺存が悪く定かにできなかった（菊地大樹氏の鑑定による）。

ＳＤ39・40・44は南区東南辺付近に互いに切り合いながらはしる溝群。上面が削平されており，溝底付近が細く検出され，また攪乱に寸断されているため，正確な切り合いを復元しがたい。東西方向を基本とするが，ＳＤ44はコ字状に南へと屈曲してはしる。ＳＤ39・40は，上層からは中世に下る遺物も出土しているが，埋積の状態や出土遺物からみて本来的には平安中期～後期ごろの溝群であり，埋まりきっていない時点の中世に攪拌を受けた可能性が高いと思われる。

ＳＤ50は，南区中央付近の南北溝で，奈良時代の溝ＳＤ49を切ってはしる。ただし，南・北とも調査区内で立ち上がるため，長さ５ｍあまりの細長い土坑状の遺構とも言いうる。９～10世紀代の遺物が出土している。東西溝ＳＤ43が途切れて土坑ＳＫ28との間の空閑地にあることから，区画としてそれらと関連する遺構の可能性も考えられよう。

ＳＸ28は，北区南辺を南北にはしる不定型な土坑。粗砂と土壌が互層になる埋土で，土取りの遺構かもしれない。微量の平安期以前の遺物が出土している。

⑵ 遺　　物（図版14，図18～24）

古墳時代の遺物（Ｉ106～Ｉ112）　古墳時代の遺物は，中世・近世の遺構や包含層への混入として少量出土した。

Ｉ106～Ｉ111は須恵器。Ｉ106は杯蓋で，天井部にロクロ削りが施される。内面は紫灰色，外面は青灰色である。Ｉ107は杯身で，立ち上がりは長く，外反する。灰色を呈し，体部外面に自然釉が付着する。これら杯蓋と杯身は陶邑編年のＴＫ43型式，６世紀後葉ころのものかと思われる。Ｉ108は器種不明の筒状製品で，器台の一部であったかも知れない。回転を利用した成形痕が顕著で，仮に細くすぼまる方を下と考えて図示した。内外面はと

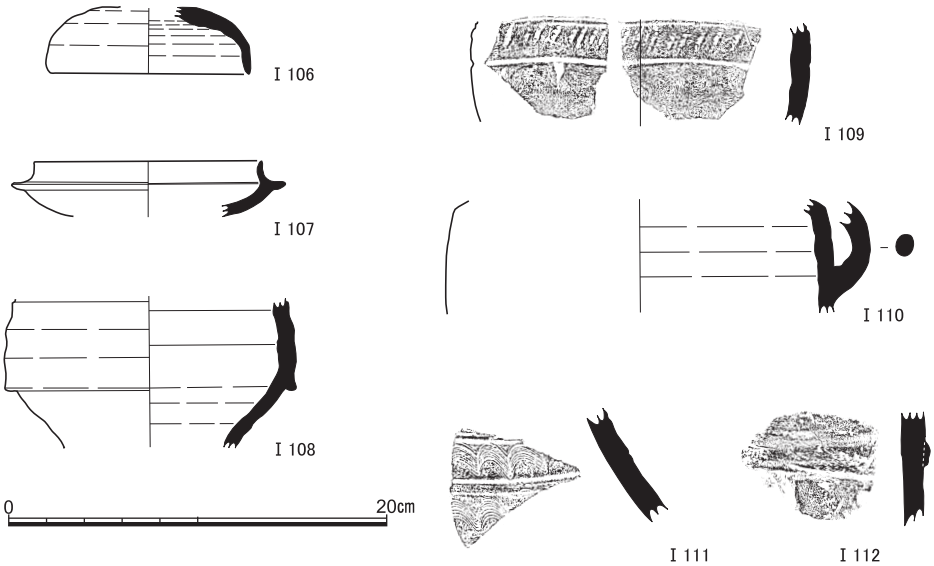


図18　古墳時代の遺物（Ⅰ106～Ⅰ111須恵器，Ⅰ112埴輪）

もに黒色を呈する。Ⅰ109は甕の体部である。上下２条の凹線に挟まれて，列点文が１帯めぐる。灰色を呈する。Ⅰ110は把手付の体部で，稜をもって屈曲する肩部がわずかに残るが，器種は不明である。把手は断面円形で，灰色を呈する。Ⅰ111は器台の破片であろう。二条の沈線と櫛描波状文が交互にみられる。灰褐色を呈する。

Ⅰ112は円筒埴輪の破片である。幅1.3cmの突帯が貼り付けられる。器壁の厚さは1.2cmで，突帯の高さは４mmほどある。外面では斜め方向の刷毛目が確認できる。黄橙色を呈する。

古代の遺物（Ⅰ113～Ⅰ214）　古代の遺物は，飛鳥時代～平安時代のものがあり，黒褐色土や茶褐色土を埋土とする遺構や，包含層である黒褐色土から出土したほか，後世の遺構や包含層からも多数出土している。

ＳＥ12出土遺物（Ⅰ113～Ⅰ123）　Ⅰ113～Ⅰ119は須恵器。Ⅰ113・Ⅰ114は杯蓋である。扁平で，いずれも，口縁端部を下方に屈曲させる。Ⅰ113は青灰色で，天井部に緑色の自然釉が付着する。Ⅰ114は灰色を呈する。Ⅰ115は鉄鉢形の鉢の口縁部である。内外面全体が横撫でによって調整される。灰色を呈する。Ⅰ116はⅠ115と同種の鉢の尖底部である。粘土を積み上げた痕跡が明瞭に残る。灰色を呈し，外面には緑色の自然釉が付着する。Ⅰ117は大型の甕の頸部であろうか。外面に２重に篦描波状文が施される。Ⅰ118は壺の口縁部である。全体が撫で調整される。灰色を呈する。Ⅰ119は長頸壺で，口縁端部を欠く

以外完存する。井戸底部付近で横倒しの状態で出土したものである。断面四辺形の高台がつき，外面全体と内面頸部には撫で調整が施される。青灰色を呈する。

Ｉ120～Ｉ123は土師器。Ｉ120・Ｉ121は甕の口縁部。Ｉ120は厚手の器壁で，口縁部の内外面に撫で調整が施される。体部外面には煤が付く。黄橙色を呈する。Ｉ121の外面は摩滅が激しいが，頸部に刷毛目調整の痕跡がみられる。また頸部内面には煤が付着する。橙色を呈する。Ｉ122は皿の口縁部と考えられる。内面に撫で調整が施される。明褐色を呈する。Ｉ123は退化した把手がつく甕の胴部。外面に縦方向，横方向，斜め方向の刷毛目が残る。浅黄橙色を呈する。

ＳＥ12から出土した遺物には，ＭＴ21型式の須恵器が含まれる。このような様相から見て遺構の年代は８世紀半ばごろの奈良時代に比定できる。

ＳＫ28出土遺物（Ｉ124～Ｉ126）　Ｉ124･Ｉ125は土師器の皿。両者ともに口縁が「て」字状に屈曲するＢ$_2$類の皿である。口縁部は撫で調整される。Ｉ124は明赤褐色を，Ｉ125は橙色を呈する。Ｉ126は須恵器の杯Ｂである。断面方形の高台がつく。全体に撫で調整が施された。灰色を呈する。Ｂ$_2$類の土師器皿が出土していることから，ＳＫ28は10世紀前葉ごろの遺構と考えられる。

ＳＸ69出土遺物（Ｉ127）　Ｉ127は須恵器の杯Ａである。底部外面には篦切りの痕が残る。ＭＴ21型式のもので，８世紀の奈良時代の遺物である。

ＳＸ28出土遺物（Ｉ128・Ｉ129）　Ｉ128は須恵器椀の口縁部。青灰色を呈する。Ｉ129は緑釉陶器椀の底部。高台の断面形は台形である。内外面全体に施釉されている。

黒褐色土出土遺物（Ｉ130）　Ｉ130は須恵器の甕の口縁部。端部が上方に立ち上がる形態である。内面の頸部には自然釉がかかり，口縁部には煤が付着する。青灰色を呈する。

ＳＤ17出土遺物（Ｉ131・Ｉ132）　Ｉ131・Ｉ132は須恵器。Ｉ131は壺の口縁部と考えられる。口縁端部が上方にわずかに立ち上がる。全面に撫で調整が施される。Ｉ132は杯の口縁部の小片である。ＭＴ21型式で，８世紀の奈良時代のものと考えられる。

ＳＤ18出土遺物（Ｉ133）　Ｉ133は須恵器の杯Ｂ。断面台形の高台の底部はわずかにくぼむ。底部外面には爪の痕が並ぶ。奈良時代～平安時代はじめころの杯であろう。

ＳＤ39出土遺物（Ｉ134）　Ｉ134は平安時代末～中世の土師器受け皿。このＳＤ39からはほかに古代の遺物が多数出土しているが，この土師器からみて，最終的な埋没は古代末期～中世にかけてであったと考えられる。

ＳＤ43出土遺物（Ｉ135～Ｉ143）　Ｉ135～Ｉ138は須恵器。Ｉ135とＩ138は平底の壺

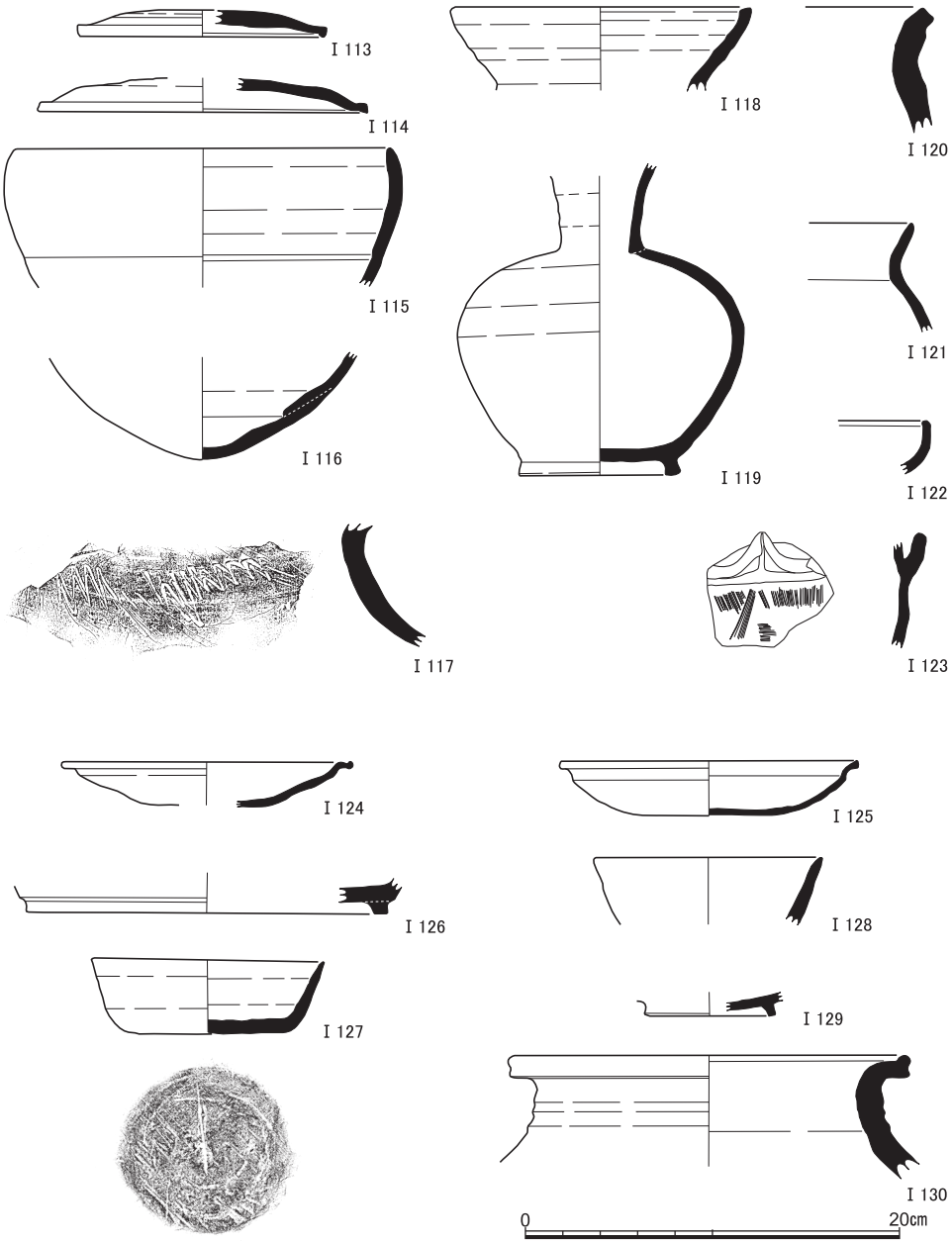


図19　ＳＥ12出土遺物（Ⅰ113～Ⅰ119須恵器，Ⅰ120～Ⅰ123土師器），ＳＫ28出土遺物（Ⅰ124・Ⅰ125土師器，Ⅰ126須恵器），ＳＸ69出土遺物（Ⅰ127須恵器），ＳＸ28出土遺物（Ⅰ128須恵器，Ⅰ129緑釉陶器），黒褐色土出土遺物（Ⅰ130須恵器）

の底部と考えられる。いずれも灰色を呈する。Ⅰ136は平瓶である。Ⅰ137は杯Ｂの底部。丸みを帯びた断面形の高台がつく。灰色を呈し，外面の一部に自然釉が付着する。ＴＫ７型式である。Ⅰ139は灰釉陶器。高台の断面形は丸みを帯びる。灰白色を呈する。Ⅰ140は砥石である。Ⅰ141～Ⅰ143は土師器。Ⅰ141は口縁が「て」字状に屈曲する皿。B_3類である。Ⅰ142は製塩土器口縁部。粘土の積み上げ痕が残る。内面を指で押さえている。Ⅰ143は把手。断面形は円形である。９世紀～10世紀ころの遺物が混在している。

ＳＤ48出土遺物（Ⅰ144）　Ⅰ144は土師器で，内彎する甕の口縁部。端部は面取りされる。奈良時代の製品であろう。

ＳＤ49出土遺物（Ⅰ145～Ⅰ148）　Ⅰ145とⅠ146は須恵器。Ⅰ145は甕の口縁部と考えられる。外面の口縁下には段がある。灰色を呈する。Ⅰ146は壺の口縁部であろうか。青灰色を呈する。Ⅰ147とⅠ148は土師器。Ⅰ147は大型の甕の口縁部である。橙色を呈する。Ⅰ148は小型の壺の口縁部であろうか。全面が撫でで調整される。明赤褐色を呈する。いずれも奈良時代の遺物と考えられる。

ＳＤ50出土遺物（Ⅰ149・Ⅰ150）　Ⅰ149とⅠ150は土師器である。Ⅰ149は土釜。口縁部に続く分厚い鍔がめぐっており，鍔の下面には煤が付着する。黄橙色を呈する。摂津C_2型〔菅原83〕の初現のものに比定でき，10世紀のものである。Ⅰ150は甕。口縁端部がやや内側に肥厚する。口縁部の内外面が撫で調整される。橙色を呈する。

ＳＤ51出土遺物（Ⅰ151～Ⅰ153）　Ⅰ151～Ⅰ153は須恵器。Ⅰ151はＴＫ217型式の杯蓋である。Ⅰ152は椀の口縁部である。全面に横撫でが施される。Ⅰ153は平高台をもつ底部。内面に撫で調整の痕跡が残る。図示した遺物のほかに，奈良時代の土師器が多数出土している。

ＳＤ52出土遺物（Ⅰ154）　Ⅰ154は須恵器の杯蓋。内面にかえりがある。灰色を呈する。ＴＫ217型式の蓋であり，飛鳥時代の遺物である。

中世以降の遺構や包含層への混入遺物（Ⅰ155～Ⅰ214）　中世以降の遺構や包含層から出土した古代の遺物を，おおむね種類ごとにまとめて報告しておく。

Ⅰ155～Ⅰ167は土師器。Ⅰ155とⅠ159は高坏で，Ⅰ155は杯部から脚部にかけての部分。脚部の外面は十面に細かく面取りされる。また，脚部製作時に使用された軸は六角形であったようだ。杯部の内外面と脚部の外面は，篦削りされる。胎土の色調は橙色。Ⅰ159は杯部で，口縁端部がわずかに上方に突出する。内面には横撫で調整の後に２段の放射状の暗文が施され，外面は磨かれる。赤褐色を呈する。８世紀の遺物である。Ⅰ156～Ⅰ158は

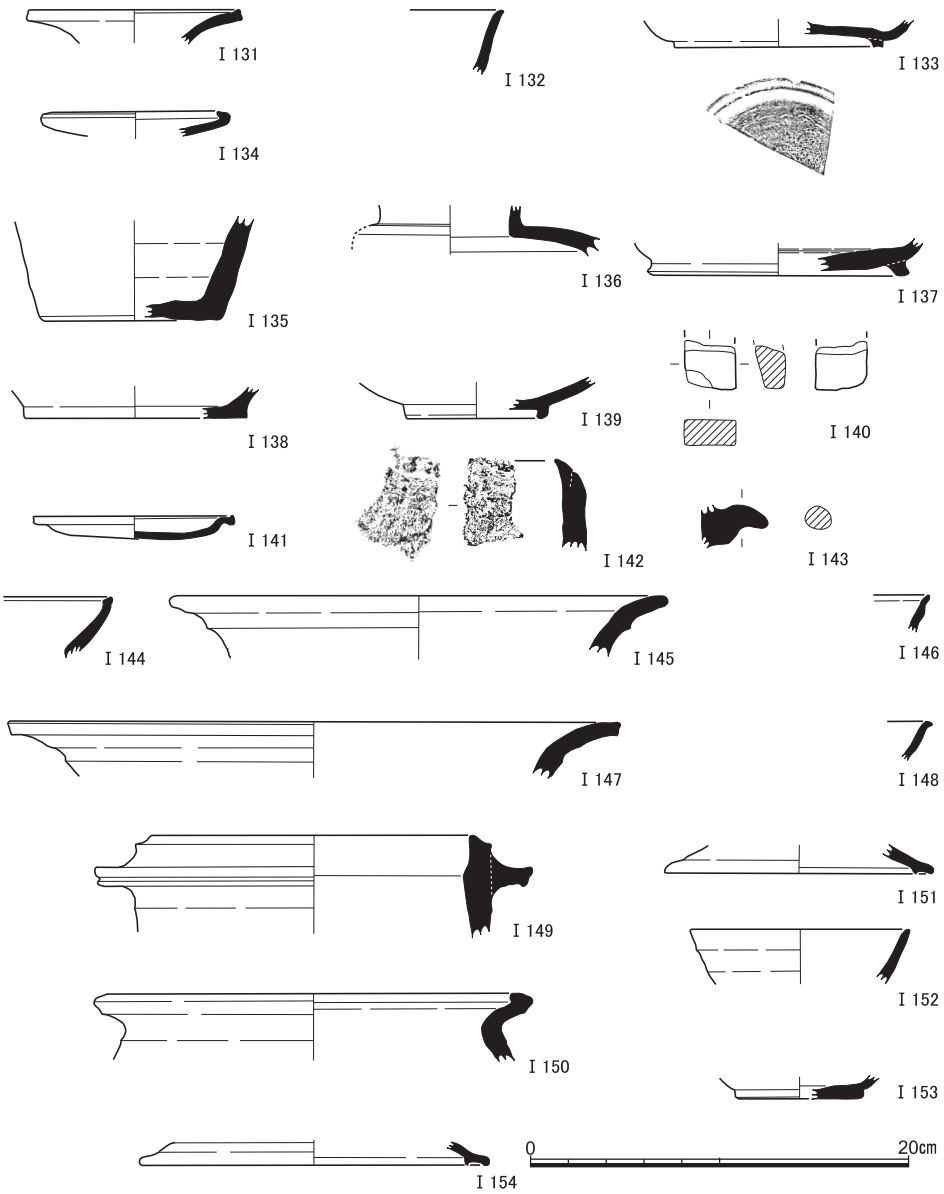


図20　ＳＤ17出土遺物（Ⅰ131･Ⅰ132須恵器），ＳＤ18出土遺物（Ⅰ133須恵器），ＳＤ39出土遺物（Ⅰ134土師器），ＳＤ43出土遺物（Ⅰ135～Ⅰ138須恵器，Ⅰ139灰釉陶器，Ⅰ140砥石，Ⅰ141～143土師器），ＳＤ48出土遺物（Ⅰ144土師器），ＳＤ49出土遺物（Ⅰ145・Ⅰ146須恵器，Ⅰ147・Ⅰ148土師器），ＳＤ50出土遺物（Ⅰ149・150土師器），ＳＤ51出土遺物（Ⅰ151～Ⅰ153須恵器），ＳＤ52出土遺物（Ⅰ154須恵器）

皿。Ⅰ156・Ⅰ157の内面には放射状に暗文が施される。Ⅰ156の口縁の内面には面取りが施されるが，端部が内傾し凹面となっている。８世紀代のものであろう。Ⅰ157・Ⅰ158の口縁部は「て」字状で，Ⅰ157はＢ$_3$類，Ⅰ158はＢ$_1$類である。10世紀ごろのものである。Ⅰ158の外面には指頭で押圧した痕が残る。Ⅰ160～Ⅰ167は甕。Ⅰ160とⅠ161は褐色を呈し，外面に煤が付着する。Ⅰ162の口縁端部は上方に肥厚する。内面には横方向の刷毛目が，外面には縦方向の刷毛目が残る。黄橙色を呈する。口縁部外面に煤が付着する。Ⅰ163の口縁端部もわずかに上方に肥厚する。口縁部内面には横方向の刷毛目が，体部外面には斜め方向の刷毛目が残る。体部の内面は篦削りが施される。浅黄橙色を呈する。Ⅰ164は口縁端部が面取りされる。体部外面には縦方向の刷毛目が，口縁部内面には斜め方向の刷毛目が残る。口縁部に近い箇所では部分的に刷毛目が撫でにより消されている。褐色を呈する。Ⅰ165の口縁端部は内側に大きく屈曲する。頸部外面は指で押圧され，体部外面には篦で平面がつくられる。褐色を呈する。口縁部と肩部の外面には煤が付着する。Ⅰ166はほかに比べて小型の甕である。口縁端部は丸みを帯びる。体部の外面には斜め方向の刷毛目が，内面には横方向の刷毛目が残る。褐色を呈する。Ⅰ167の口縁端部はわずかにくぼむ。口縁部の内外面は撫で調整され，体部の内外面は刷毛で調整される。内外面には斜め方向の刷毛目が残るが，内面には縦方向のものもある。褐色を呈する。

Ⅰ168～Ⅰ198は須恵器。Ⅰ168～Ⅰ170は壺の口縁部である。Ⅰ168の肩部外面には２条の沈線が走る。また，緑色の自然釉が付着する。ＴＫ209型式に比定でき７世紀初めのものである。Ⅰ169の肩部内面には当て具痕が残る。灰色を呈し，口縁部の内外面には自然釉が付着する。ＭＴ217型式で７世紀前葉のものである。Ⅰ170の体部外面には１条の凹線が走る。青灰色を呈し，口縁部から頸部の内面には，自然釉が付着する。７世紀初めころのものであろう。Ⅰ171は長胴壺の胴部である。外面の肩部には平行叩き痕が残る。肩部内面に爪痕がめぐる。また，胴部の内面には青海波文の当て具痕が残る。胎土は灰色である。Ⅰ172・Ⅰ173は小型壺である。いずれも青灰色を呈する。口縁部であるⅠ172は，外反する口縁の下端を鋭く突出させる。Ⅰ173の体部外面は篦で削られ，肩部外面には緑色の自然釉が付着する。９～10世紀代のものだろう。Ⅰ174は長頸壺の口縁部である。青灰色を呈し，内外面が撫で調整される。Ⅰ175～Ⅰ178は壺の底部と考えられる。Ⅰ175のみ平底で，ほかは高台を有する。Ⅰ175は灰色を呈するが，内面と外面底部は黒色である。Ⅰ176は青灰色を呈する。Ⅰ177も同様に青灰色を呈するが，体部外面は黒色である。Ⅰ178の外面は篦で削られる。灰色を呈し，底部内面と体部の一部に自然釉がかかる。ＭＴ

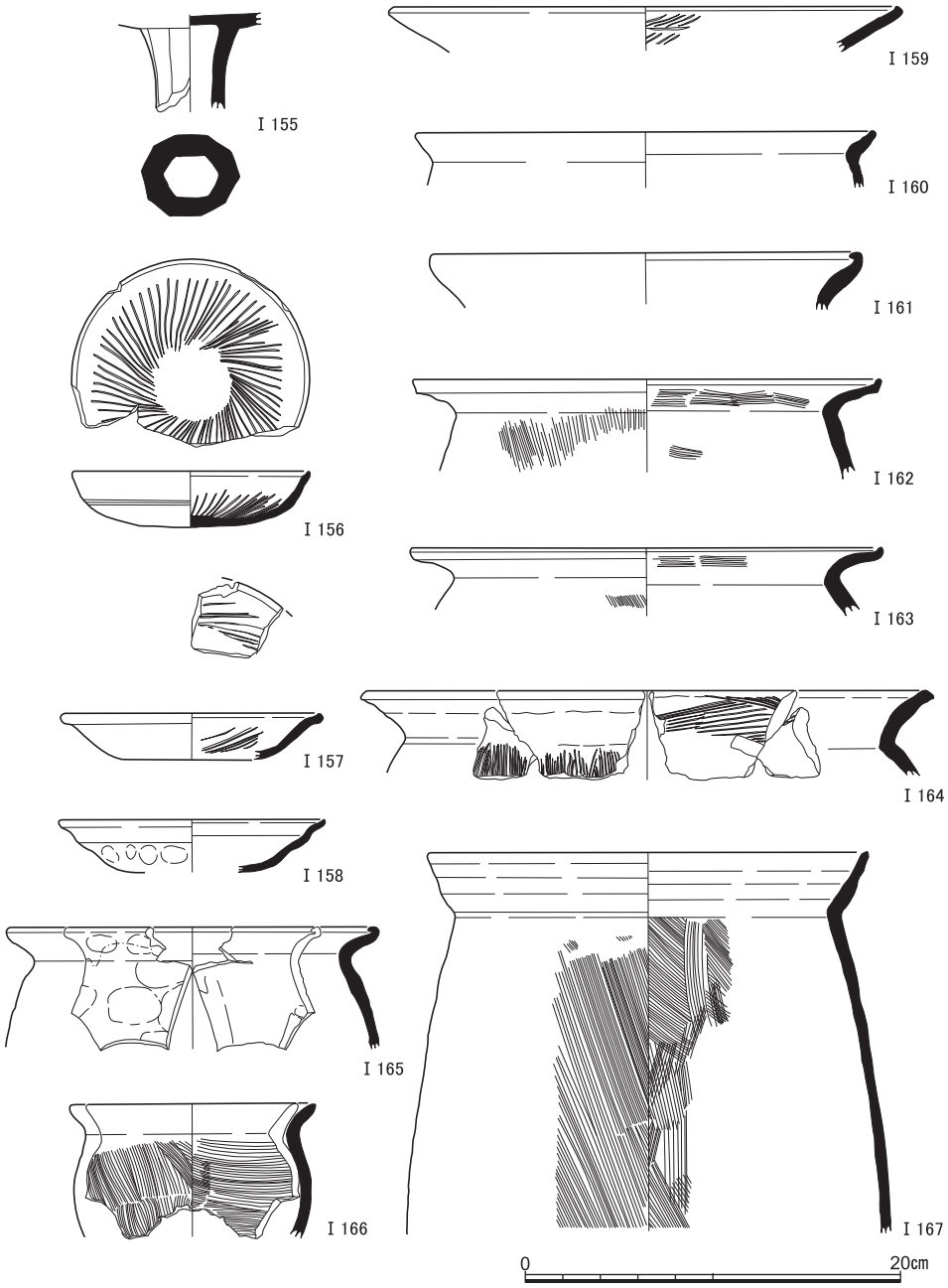


図21　古代の遺物(1)（Ⅰ155～Ⅰ167土師器）

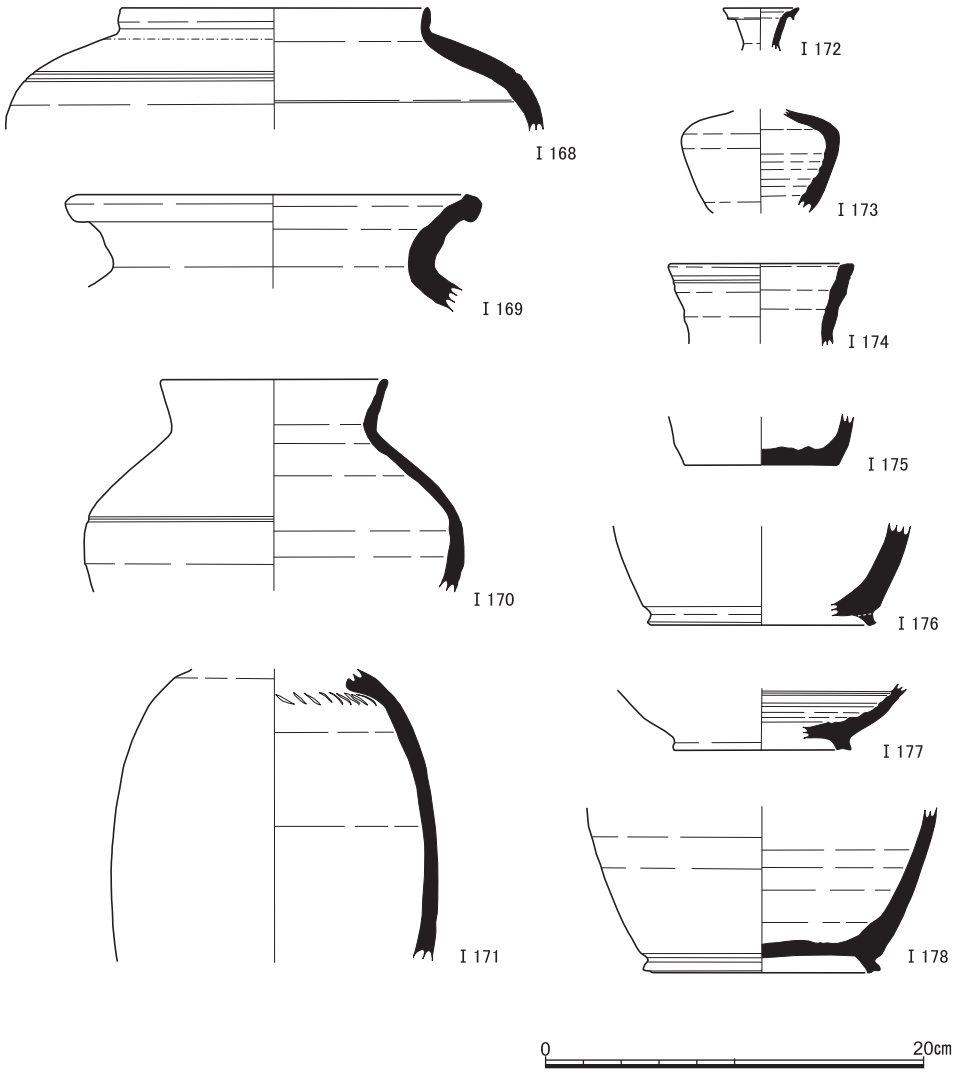


図22　古代の遺物(2)（Ⅰ168～Ⅰ178須恵器）

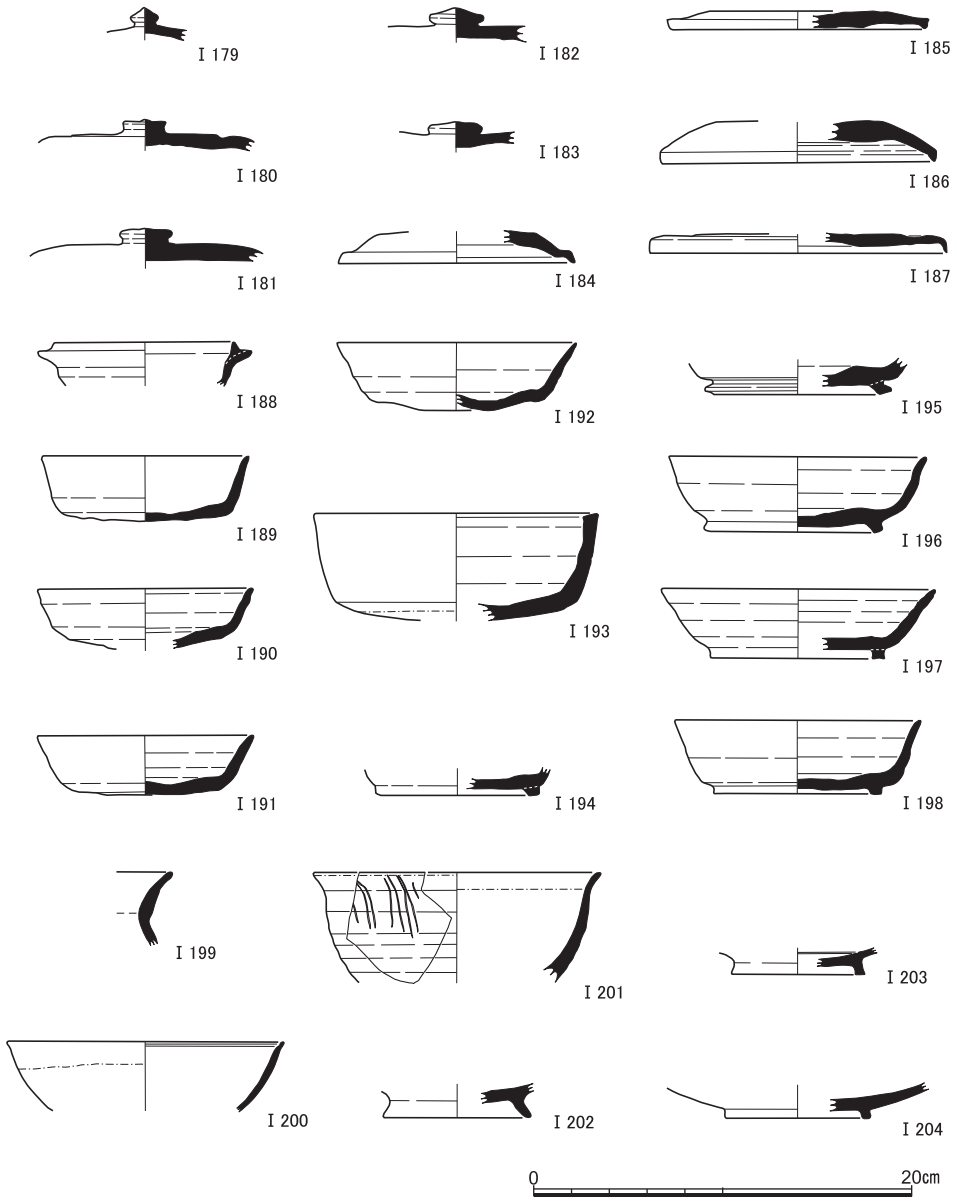


図23　古代の遺物(3)（Ⅰ179～Ⅰ198須恵器，I199・I200黒色土器，I201・I202灰釉陶器，I203・I204緑釉陶器）

７型式で８世紀初めのものと考えられる。Ⅰ179～Ⅰ187は杯蓋である。Ⅰ181のみ白色で焼成がわるい。Ⅰ184は青灰色を呈するが，ほかは灰色である。Ⅰ179～Ⅰ183にはつまみが残る。Ⅰ179のみ乳頭形で，ほかは断面形が扁平なものである。Ⅰ184・Ⅰ186・Ⅰ187には口縁部が残る。いずれも口縁端部は下方に短く折り曲がる。Ⅰ185・Ⅰ186の天井部外面全体およびⅠ187の一部に自然釉が付着する。Ⅰ179はＴＫ217型式で７世紀，ほかは８世紀代のものであろう。Ⅰ188～Ⅰ193は杯Ａである。Ⅰ188のみ立ち上がりをもつ。Ⅰ194～Ⅰ198は杯Ｂである。高台はおおむね断面四辺形を呈する。Ⅰ197の高台の端面はわずかにくぼむ。杯身については，Ⅰ188が７世紀，ほかは８世紀代のものであろう。

Ⅰ199とⅠ200は黒色土器。Ⅰ199は甕の口縁部で，胴部内面に刷毛目とみられる痕跡が残る。Ⅰ200は椀で，口縁端部内面に一条の沈線が走る。外面口縁部に指撫で，内面に数条の削痕がみられる。

Ⅰ201とⅠ202は灰釉陶器の椀。Ⅰ201は外面に縦位の細線が複数走る。Ⅰ202は外側に踏ん張る高台が付く。Ⅰ203とⅠ204は緑釉陶器。いずれも椀の底部である。Ⅰ203は見込みに一条の圏線をもち，高台は端部が角張っている。Ⅰ204の高台は丸みを帯びる。

Ⅰ205～Ⅰ209は製塩土器。Ⅰ205は体部。内面に指撫でと押圧の痕が残る。橙色を呈する。Ⅰ206～Ⅰ209は口縁部で，Ⅰ206の外面には指で押圧した痕が残る。内面には指撫でが施される。明褐色を呈する。Ⅰ207の内面には指撫でによる調整の痕が残る。橙色を呈する。Ⅰ208の内面には斜め方向の篦削りの痕が残る。粘土紐を積み上げた痕跡がみられる。ほかとくらべて焼成があまく，にぶい黄色を呈する。Ⅰ209は小片で，橙色を呈する。

Ⅰ210は墨書土師器片。内面とみられる側には縦に約３㎜を単位とする細かい篦磨きがみられる。その上に「庭」の字が墨書される。外面にはとくに調整はみとめられない。厚さは４㎜で，明赤褐色を呈する。器種は不明だが奈良時代の製品であろうか。南区中央付近の茶褐色土から出土している。Ⅰ211は土馬の脚部か。長辺方向に数条の稜が走り，らせん状に数条の浅いくぼみがある。にぶい黄橙色を呈する。Ⅰ212･Ⅰ213は鋳型であろう。Ⅰ212は唐草文様の型で，胎土に８㎜大の石を含む。鋳造をおこなった面は橙色を呈するが，ほかは灰黄色である。また，凹部に煤が付着する。Ⅰ213の内面側は灰色で，多条の細線が走る。外面は橙色，断面は浅黄色である。Ⅰ214はふいご羽口片。胎土に５㎜大の砂礫やすさが混じる。外面に籾痕らしきものもみられる。これら鋳造関連遺物は，上層への混入出土であることから古代に限定できるものではないが，北方の220地点等で平安時代の鋳造土坑が見つかっていることも考慮して，ここに呈示しておく。

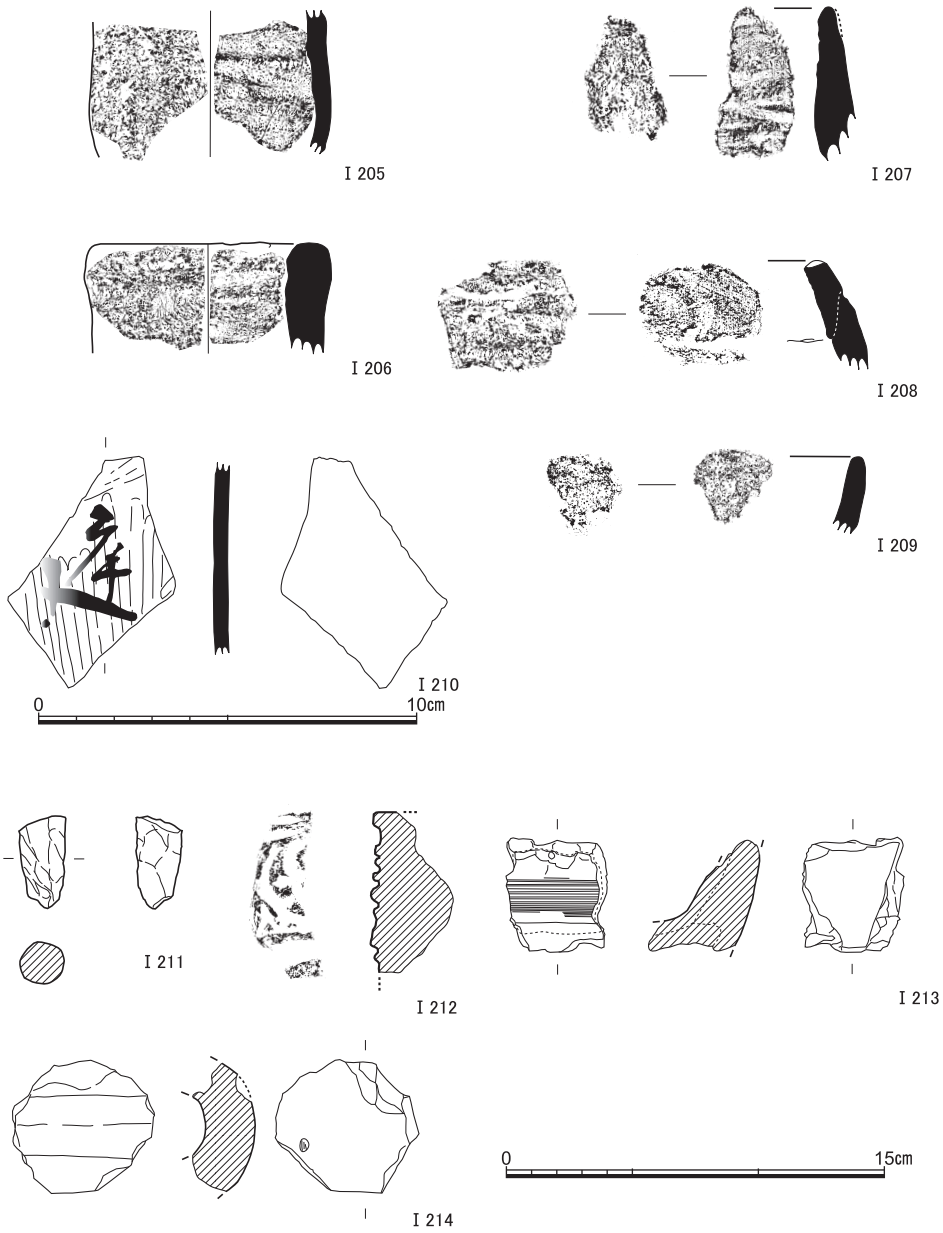


図24　古代の遺物(4)（Ⅰ205～Ⅰ209製塩土器，Ⅰ210墨書土器，Ⅰ211土馬，Ⅰ212・Ⅰ213鋳型，Ⅰ214ふいご）　Ⅰ210縮尺1/2，ほか縮尺1/3

5　中世の遺跡

⑴ 遺　　構（図版２・３・５～９，図25～27）

出土土器からみて，おおむね13～15世紀代，鎌倉・室町期を通じた時期幅の各種の遺構が密度濃く検出されている。遺物の項で詳述するように，土師器皿の様相から，中世１期（13世紀前半），中世２期（同後半），中世３期（14世紀），中世４期（15世紀）の４つの段階に区分できるが，細別時期を特定できない遺構も多いため，ここでは中世１期・２期を中世前半，中世３・４期を中世後半，と大別して図示する。以下，この大別に従いつつ，おおむね遺構の種類・性格毎にまとめながら，説明する。

中世不定形土坑（図版７）　　調査地の基盤層である黄褐色粘質土を採取したとみられる不定型なクレーター状の掘り込みが，Ｙ＝2080付近以西に連続してひろがっている。北区の北西部Ｘ＝1240付近より北は，近世の同種遺構が存在していることから，中世の段階の土取り範囲の北限がおおむねその付近であったことがわかる。大半の範囲が，おおよそ１人が掘削作業するスペースとなるような２ｍたらず程度の広さの不定型な凹みの連続となっているが，南区南西域付近は，１人が列状に進んだかのような１ｍ幅程度の溝状の連続掘削痕がある。黄褐色粘質土の堆積最上部からの深さは，おおむね１ｍ前後であり，粘土の採掘はその程度の厚みであったことがうかがえるが，本来はその上部に黄砂などが50㎝以上は堆積していたとみられるので，中世段階における地表面からの掘削深は，1.5ｍ～２ｍ程度に達するものであったと推察される。人力での少人数での掘削や搬出の作業効率を考えると，妥当な規模と言えるかも知れない。ただし，南区の北西域は掘削が浅く残されており，その付近の黄褐色粘質土が，砂礫混じりの質の劣る粘土であることに帰因する可能性が高い。また，下層の流路ＳＲ１によって粘土の堆積がみられないラインを掘削域の東限としている。このように，掘削の深度や範囲は，作業効率のみならず，対象となる土の質にも影響されていたとみることができよう。

これら不定形土坑の埋土は，中世の遺物包含層である茶褐色土と黄褐色粘質土が互層に縞状を呈しており（図版５－６参照），出土遺物は茶褐色土中に含まれる中世前半期の土師器皿類が大半を占める。これらは粘土採掘時にすでに堆積していた包含層や遺構中の遺物であるとみて，土の採掘そのものは，中世後半期の行為であったと想定するのが自然であろう。しかしながら，含まれる中世前半期の遺物量は多く遺存度も良好であることから，土の採取以前にも活発な利用がされていた事をうかがわせる。

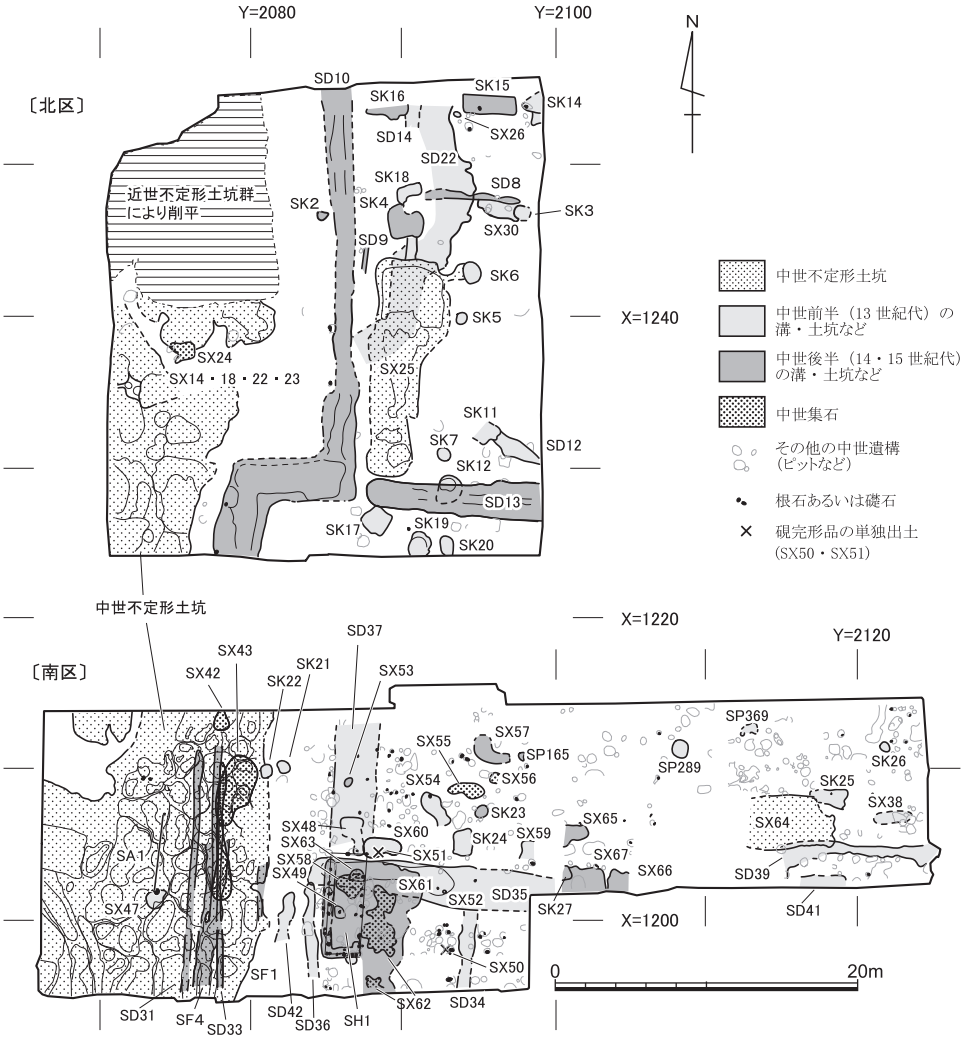


図25　中世主要遺構配置図　縮尺1/500

不定形土坑ＳＸ25・27・64　　上記のほかにも，類似の性格を持つとみられる遺構に，北区中央付近を南北に連なるＳＸ25・27，南区東辺に大土坑ＳＸ64がある。ＳＸ25・27は，おもに流路ＳＲ３に由来する白色粗砂の堆積する空間にあり，南端のＳＸ27が井戸状に方形に深くなっているほか，北辺部は隅丸方形に浅く広がるなど，輪郭，深さとも一定しない。状況から，白色粗砂を採取した跡が複数連なったものと理解しておきたい。中世前半期を中心とする各種の土器類，とくに大型の瓦器盤片などが目立って出土しており，最終的には廃棄土坑となったものとみられる。ＳＸ64は，平面形が５×３ｍ程度の隅丸長方形

状になるとみられる大型土坑。深さ１ｍ足らずで，底面は黄褐色粘土層で細かな凹凸が卓越している。この一帯も粗砂層の堆積する空間であり，粘土の採取というよりは上位の粗砂を採取した跡である可能性が高い。整理箱２箱分の遺物が出土し，下位から中世後半期，上位から中世前半期が主体となるように，時期が逆転して土器群が出土しており，中世後半期に人為的に埋め戻された可能性がある。

東西溝ＳＤ13　北区南辺を，真北からわずかに東に振る傾きで，東西にはしる，幅３ｍ深さ1.2ｍ程度の断面矩形に近い大溝。（図26，図版５－５）に示すように，南北の壁面は垂直に近い角度でたちあがり，埋土も上半が均質な茶褐色砂質土，下半が黄色粘土混じりの茶褐色土の２層のみで埋積する。人為的に一気に埋められた可能性を示唆していよう。北壁際は，褐色粘土や粗砂のブロック土が不自然な堆積を見せ，ただの崩落ではなく，地震などの影響による地盤変動の可能性も考えられる。中世前半の土坑ＳＫ12を切るが，南北溝ＳＤ10とは切り合わず，そのすぐ東側Ｙ＝2090付近でたちあがる。『山城國吉田村古図』にみる江戸時代の小字名比定を参照すると（吉江2006　図182），南側の小字「堀之内」と北側の「西の辻」を隔てる東西のラインが，おおよそＳＤ13のはしる位置にあたっている。この場が中世以来重要な地境であり，それを示す溝であったと考え得るが，断面形や埋土の状態などから，本来は土取りの遺構であった可能性もあろう。

南北溝ＳＤ10　北区の中央付近を南北にはしる，幅２ｍ深さ１ｍあまりの断面Ｕ字形の溝。およそ10ｍ程度ずつで方位のずれが微妙にあり，わずかなジグザグを呈しながら南北にはしっている。掘削に際しての単位かも知れないが，攪乱に寸断されているため詳細な復元は難しい。埋土の中位付近には大量の拳大～小児頭大の礫が埋積している。15世紀代に下るとみなせる遺物も出土しており，最終的な埋没は中世後半期でも比較的遅い時期ではなかったかと推察される。北に隣接する378地点，さらに北方の220地点や111地点でも，この溝の延長は確認されており，広範囲で東西を画する重要な遺構であったと判断できる。上述した小字名では，西側が小字「堀之内」「公方」，東側が「西の辻」となる。しかしながら，今回の調査区内ではそのままま っすぐに南走せず，北区南辺のＸ＝1230付近で西折し，５ｍほどはしって南折するクランク状を呈して確認された。この西折，南折部分については，幅が広く断面形も逆台形を呈するなど，それ以北とは埋土や形態の様相を違えている（図26）。南北溝がＸ＝1230付近で一旦終端となり，性格が異なる区画遺構などが付加された可能性もあるが，屈折部分を攪乱に破壊されているため，相互の切り合い関係は定かにできなかった。北調査区南壁で確認すると，西側に掘削し直していることや，先行

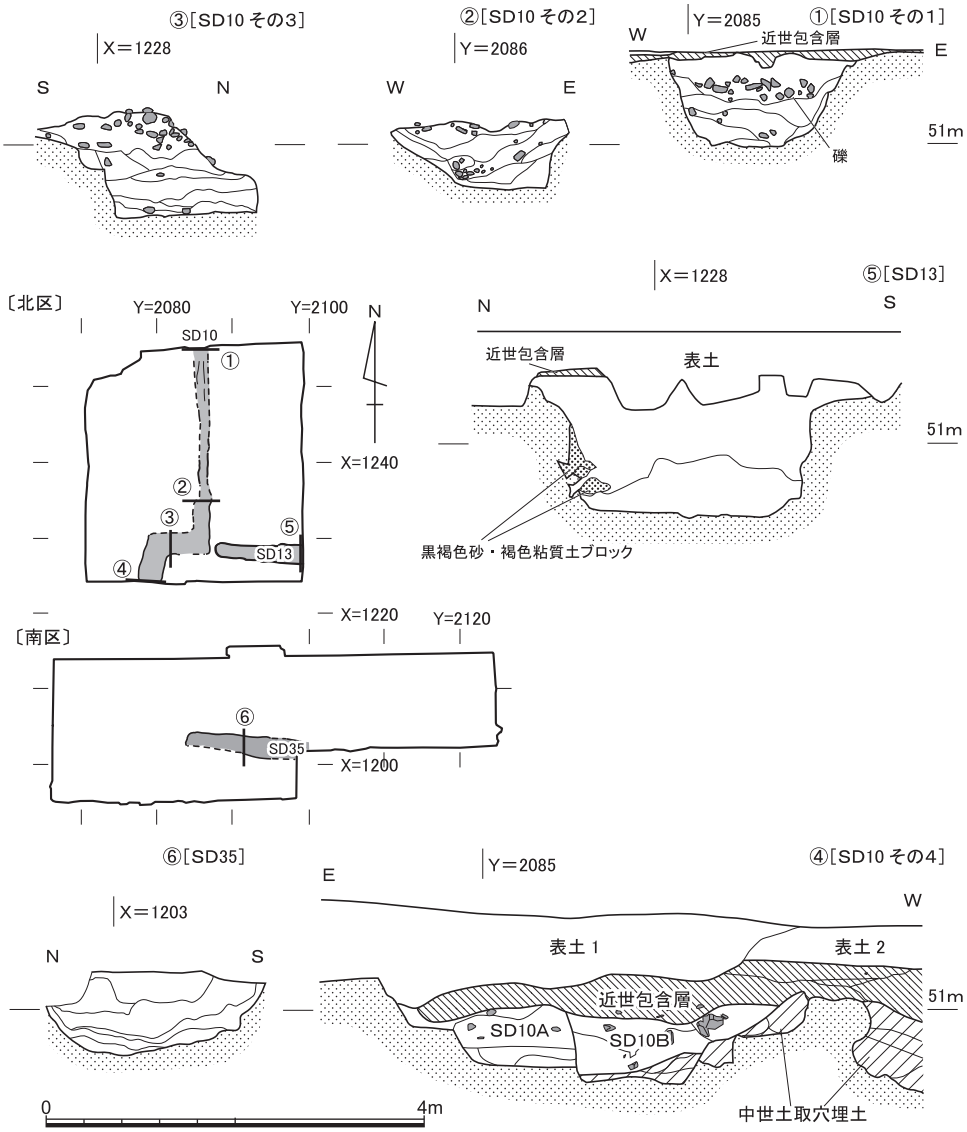


図26　溝の断面形状（ＳＤ10・13・35，丸囲み数字の位置での断面を表示）　縮尺1/80

して土取り穴とみられる不定形な土坑があることがわかっている（図26－４）。南区ではこの溝の延長と見なせる遺構は確認されなかったけれども，その延長にあたる位置に，土取り穴埋積後の中世後半期～末期とみられる路面状の硬化面ＳＦ４や集石・小溝群が集中して南北にはしっている。この位置が東西を隔てる区画として意識が継承されていたのであろう。そして，クランク状の屈曲部は，ＳＤ13の存在とも合わせて考えると，東西方向

の区画の要地に相当していることも推察されよう。

東西溝ＳＤ35　南区中央付近を，真北からやや東に振れる方位で東西にはしり，幅2.5m，深さ１m弱，断面Ｕ字形を呈する。西へ向かうほど浅くなり，Ｙ＝2085付近で立ち上がる。埋積後の溝を堀込んで後述する集石ＳＸ62や建物ＳＨ１が築かれており，埋土から13世紀前半代の土師器が出土することから，中世前半期でも比較的初期の段階に位置づけられる遺構と判断する。溝が立ち上がり途切れる付近は，中世の柱穴やピットが南北方向に密に分布しており，古代の溝と重複する位置で浅い南北溝ＳＤ37も検出される。すでにこの段階で，東西を隔てる区画ラインが意識されていた事を示していよう。

建物ＳＨ１（図版７，図27）　南区中央南半に検出された，南北に長い布堀り基礎の長方形建物跡。浅く掘りくぼめた溝（ＳＤ38）内に50㎝前後の間隔で扁平な根石（１～35）を配している。また，関連する可能性のある独立した根石（礎石）にＳ51～Ｓ60がある。布堀りの溝は，本来北側を除いた３面をコ字状にめぐっていたと思われるが，東側桁行は削平されてはっきりせず，根石周囲の窪みのみがピットとして検出される。西側桁行から南側梁行にかけてはしっかりとした掘り込みが残っているが，底面に据えられている根石は，23・24・33・35を除くと５～10㎝程度浮いた位置に置かれている。東側も同様で，28・29・32以外の根石はやや浮いた位置にある。これらは，28と18，29と19，32と20，といったように上下に重なる位置に石を配している。ただし，石どうしが互いに接して組み合っていないため，２個がひと組となる根石ではないとみられる。柱の建て替えにともなう更新の可能性があろう。北側の梁行に石の並びはないため，こちらに開口部（入口）が設けられていたのであろう。中央に置かれた扁平な石Ｓ57，隣接するＳＰ263とＳ59は，入口の構造物に関連するものかもしれない。このように想定すると，桁行6.6m×梁行2.1mの長方形建物が復元される。布堀り基礎という特異な構造であることから，蔵に類するような建物ではなかったかと推測される。なお，壁材とみられるような土塊は全く出土していないため，土壁ではなかった可能性があろう。中世前半の溝ＳＤ35を切っており，中世後半の建物と位置づけられる。

集石ＳＸ61・62　上記のＳＨ１東側に隣接してひろがる大規模な集石。中世遺構の基盤となっている黄色砂をやや掘りくぼめた内部に不整円形に礫が密集している。位置関係からみてＳＨ１と関連する可能性が高いとみられ，ＳＨ１の屋根置きなどに使用した礫が，建物廃絶にともない集積したものではないかと推測している。

土器溜ＳＸ48（図版８－６）　南区中央付近，ＳＤ35の北肩付近の土器溜。茶褐色土

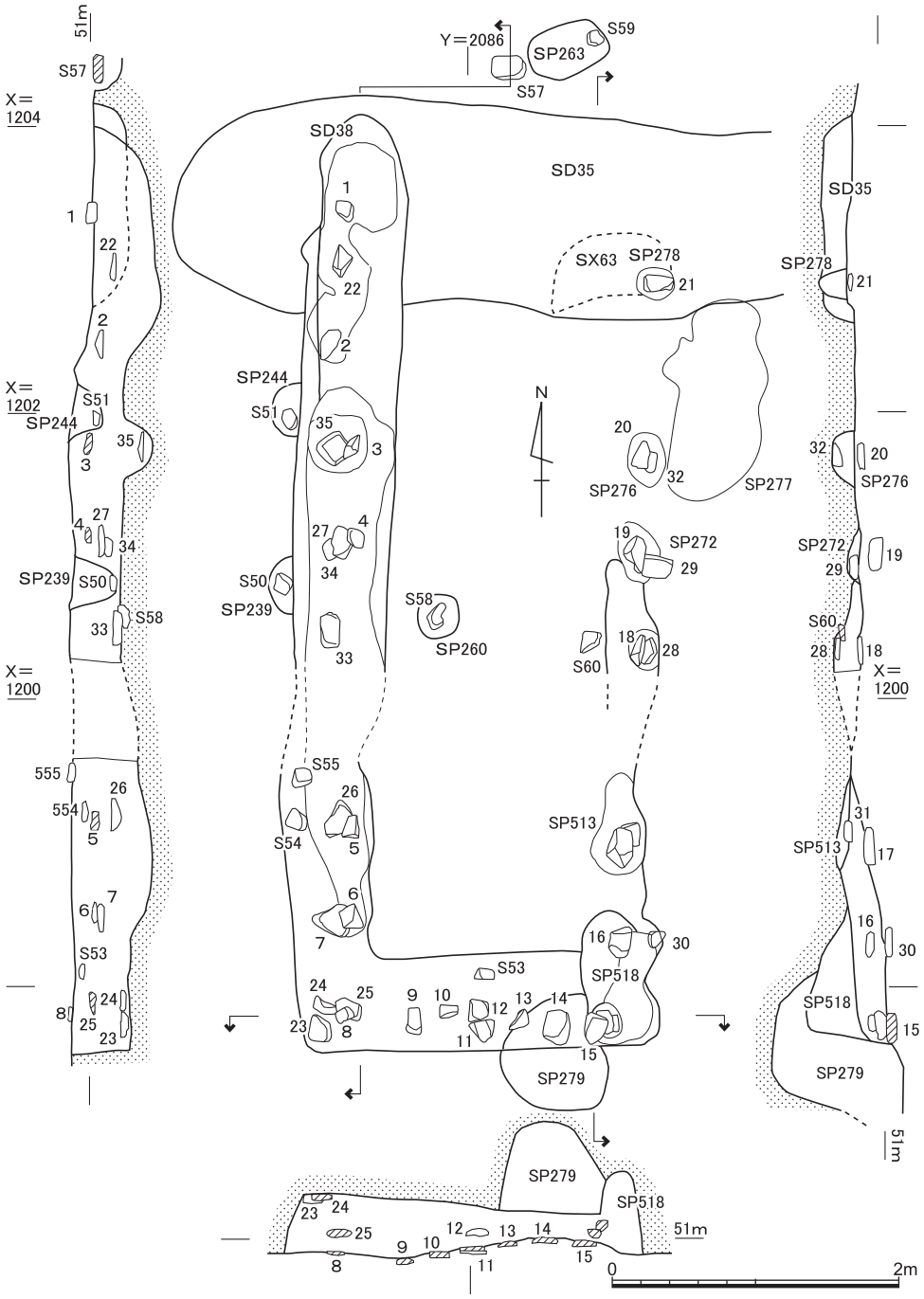


図27　建物ＳＨ１　縮尺1/50

中で検出され，掘り込みははっきりしない。南側を攪乱に破壊されるが，本来は１×２ｍ程度のひろがりをもつ遺構であったとみられる。ほとんどが中世前半期の土師器皿類で，整理箱６箱分，口縁部計測法で110.8個体を数える。それらが平安京域の中世京都や構内での既出品に一般的な型式ではなく，異系統のもので占められている点を特徴とする。

土坑ＳＫ12・19（図版６－４・５）　北区南辺付近にある一辺1.5m前後の不整円形の土坑。ともに検出面からの深さも２ｍ近くに達するもので，中世前半期の土師器皿が完形で大量に出土している。ＳＫ12は北側から流れ込むような状態で出土しており，口縁部計測法で452.9個体を数える。下半には方形の輪郭が検出されたことから，本来は箱状の器物が据えられていた可能性も考えられるが，有機物の遺存は確認できなかった。ＳＫ19は埋土の中位に遺物がまとまって出土しており，107.7個体を数える。本来は土取りや水溜のために掘削されたものが，廃棄土坑とされたとみられるが，組成が土師器に偏っている点は注意される。なお近接して，経常的には類似した特徴をもつ土坑ＳＫ17やＳＫ20がある。ただしこれらからは，土師器皿類が１～数個体分のみしか出土していない。

土坑ＳＫ５（図版６－３）　北区中央東辺付近にある一辺１ｍ足らずの方形土坑。深さは１ｍ以上あり，埋土中位に土師器皿類のほかに礫や大きめの陶片なども含めて多くが出土し，最下部に瓦器鍋の完形品が遺棄されていた。方形を呈する類似した形状の土坑としては，ほかに北区でＳＫ７，南区ではＳＫ24がある。こちらは，中世前半期の遺物が少量出土するにとどまった。

以上のほか，中世前半期の遺物が出土し，一定程度以上の大きさをもつ土坑としては，ＳＫ３・ＳＫ６，ＳＸ59などがある。いずれも廃棄土坑であろうが，浅いもので，遺物の出土も少ない。

土器溜ＳＰ289・ＳＰ369（図版９－５）　南区東辺で，互いに近い位置で見つかっている中世前半期の土師器皿集積遺構。ピット状の小さな掘り込み内に完形の皿が密に埋置されている。上述した廃棄土坑と較べて規模がかなり小さいが，遺物の密集度は高い。祭祀遺構の可能性があろう。

遺物溜ＳＫ26（図版９－４）　南区東辺で，中世前半期の東播系須恵器摺鉢２個体分が重なるようにして一括出土した。小さな掘り込みに重ねて埋置したかのようである。

土器溜ＳＫ25・ＳＸ47　いずれも中世前半期の土師器皿類の集積遺構だが，掘り込みの輪郭がはっきりせず，破片の比率が非常に高い。ＳＫ25は茶褐色土の中位に，ＳＸ47は土取り穴の埋土上部に形成されており，ともに２次堆積として形成された可能性が高い。

土坑ＳＫ15（図版６－１・２）　北区北東辺にある，長辺３ｍ短辺１ｍ程度の，東西に長い長方形土坑。土坑中央部付近に，中世後半期の土師器椀皿類が密集して埋積している。平面形状から墓壙の可能性もあるが,それを示すような出土遺物や痕跡はみられない。今回の調査区内で中世後半期の土師器が密集した土器溜は，この遺構が唯一である。

集石ＳＸ55・ＳＸ56・瓦溜ＳＫ23（図版９－１・２）　南区中央付近では，中世後半期の集石・遺物溜ＳＸ55や小規模な集石ＳＸ56，瓦溜ＳＫ23が近接して見つかっている。ＳＸ55は上面が集石遺構だが，下部は掘り込みをともなう遺物溜となっており，３つのまとまりに分かれている。うちひとつは「オオヤツカサ」と呼称される大型上げ底の土師器皿類のまとまりであった。ＳＫ23は軒丸瓦が主体となる小規模な瓦溜。瓦そのものは中世前半期のものである。今回の調査区内でみつかった唯一の瓦溜である。

上記のほか，南区では，中央一帯南半で完形の硯（Ｉ729・Ｉ730）が単独出土したＳＸ50・ＳＸ51，ＳＤ35埋積後の上面で瓦器鍋の完形品が一括出土したＳＸ52や集石ＳＸ58，大型の瓦器火鉢片が集積したＳＸ53，などがみつかっている。総量としては多くないけれども，遺存の良い遺物がまとまっており，この一帯が中世を通じて活発な活動空間であったことを示唆していよう。また，西域の不定形土坑埋積後の上面には，南北方向にはしる小溝群ＳＤ31・33や集石ＳＸ42・43，路面状の硬化面ＳＦ１・４などが集中している。近世に棚田状の耕作地となるまでの15・16世紀代において，境界や通路としての施設は営まれ続けていたことがわかる。

⑵ 遺　物（図版15～17，図28～59）

さきに略述したように，今回調査地の中世土師器の様相は，中世１期（13世紀前半），中世２期（同後半），中世３期（14世紀），中世４期（15世紀）の４つの段階に区分できる。具体的に説明すると，

中世１期　一段撫で手法Ｄ類が主体となる。二段撫で手法Ｃ類も微量ともなう。白色系の椀類はごく少量しか認められない。〔小森・上村1996〕における編年ではⅤ期新～Ⅵ期古で，おおむね13世紀前半に比定される。

中世２期　一段撫で手法Ｅ類が一定量占め，白色系椀類も一定量組成するようになる。Ⅵ期新～Ⅶ期古で，13世紀後半。

中世３期　一段撫で手法Ｅ類が主体となり，白色系椀類も，凹み底の小椀など各種が多量に認められる。平安京編年Ⅶ期中～新で，14世紀。

中世４期　一段撫で手法Ｆ類が主体となる。Ⅷ期新以降で，15世紀。

である。今回の出土遺物でまとまった量のものは，中世１・２期に偏っている。口縁計測法による計測が果たせた遺構についてみると（図28・29），大量出土したＳＫ12・19が１期，ＳＫ５・ＳＰ369を２期と位置づけることができる。また，「乙訓在地形」などと呼称されている異系統の土師皿でまとまっていたＳＸ48についても，少量ともなう在来の土師皿はＣ類・Ｄ類が主体であり，１期の遺構と評価する。中世３期はＳＫ15のみからまとまった量が出土している。中世４期については，計測可能な遺構は無かったが，南北溝ＳＤ10や，不定形土坑の多くは，この段階の可能性が高いとみている。以下，遺構出土のまとまりにしたがいつつ呈示し，特筆すべき事柄を記す。

ＳＫ12出土遺物（Ｉ215～Ｉ350）　中世１期の遺構。土師器皿類が，ほぼ完形でまとまって出土している。一段撫で手法Ｄ類がほとんどで，法量は８～９㎝と13㎝の大小２つの規格が認められ，大皿には口縁端部を面取りするものが目立つ。全体の色調は，ごく少量の燈色や赤褐色のもののほかは，褐色～灰褐色系の白っぽい色調のものが目立つ。使用の痕跡はほとんど観察できないが，Ｉ279は外面が黒変し，内面にも線状にタール状の付着物がある。Ｉ268は，内外両面に判読不能な不規則な墨書を認めるもので，他の製品と異なり器壁が脆く，破損が著しい。Ｉ327の小皿は，内外両面とも被熱して黒変している。直線的に口縁部が立ち上がる異質な器形で径が大きく，後述するＳＸ48でまとまって出土しているような，京域外で主体となる異系統の土師皿である。Ｉ331～Ｉ335は受皿で，Ｉ333～Ｉ335は白色を呈する。Ｉ336～Ｉ341は白色を呈する椀類。いずれも厚手の器壁をもつ。Ｉ339は小椀だが，土坑の上層から出土しており，混入の可能性がある。Ｉ342は三足をもつ瓦質の小形椀。器壁が厚くしっかりとした造りである。Ｉ350はスタンプ状のタタキをもつ陶器甕胴部片で，常滑産であろう。

ＳＫ19出土遺物（Ｉ351～Ｉ386）　中世１期の遺構。上記のＳＫ12ほどの密集度はないが，土師器皿類が多く出土しており，ほとんどが１段撫で手法Ｄ類である。Ｉ376～Ｉ378は白色を呈する椀や受皿。Ｉ379・Ｉ380は瓦器の皿と受皿。Ｉ384は同安窯系の青磁皿。Ｉ386は東播系の須恵器甕の胴部片を円盤としたもの。

ＳＫ５・６・17・18・20出土遺物（Ｉ387～Ｉ414）　北区の土坑からの出土遺物である。遺物量の多いのはＳＫ５のみで，２期に位置づけられる。それ以外も，土師器の様相から１期～２期の中世前半期に収まる時期の遺物であろう。Ｉ390・Ｉ391は白色を呈する椀と受皿で，薄手で径も小さなものとなっている。Ｉ392は白色を呈する厚手の皿で特異なものと言えるが，高杯の杯部の可能性がある。Ｉ393は高台を付した白色の椀。回転を

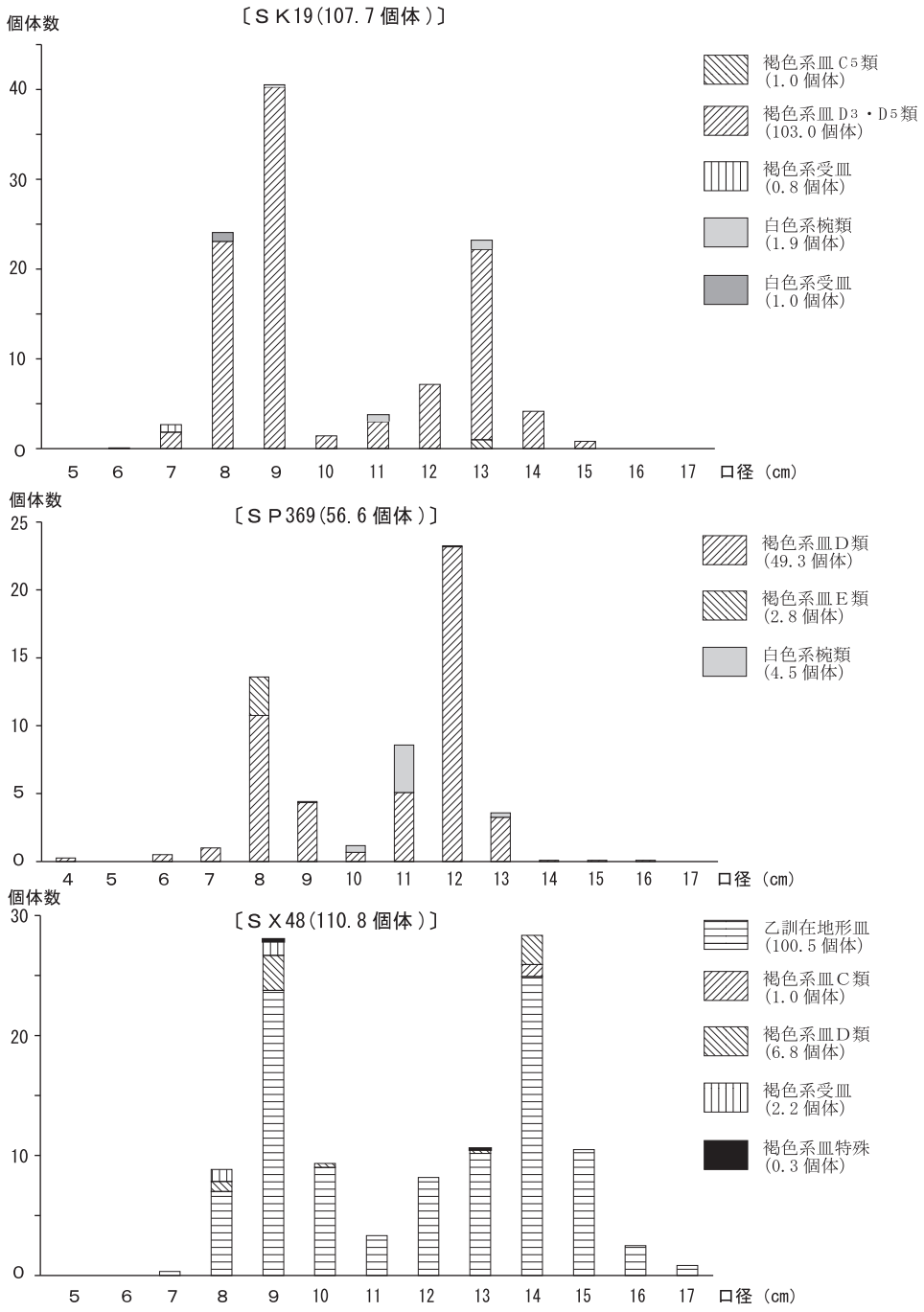


図28　出土土師器の計測結果（その１）

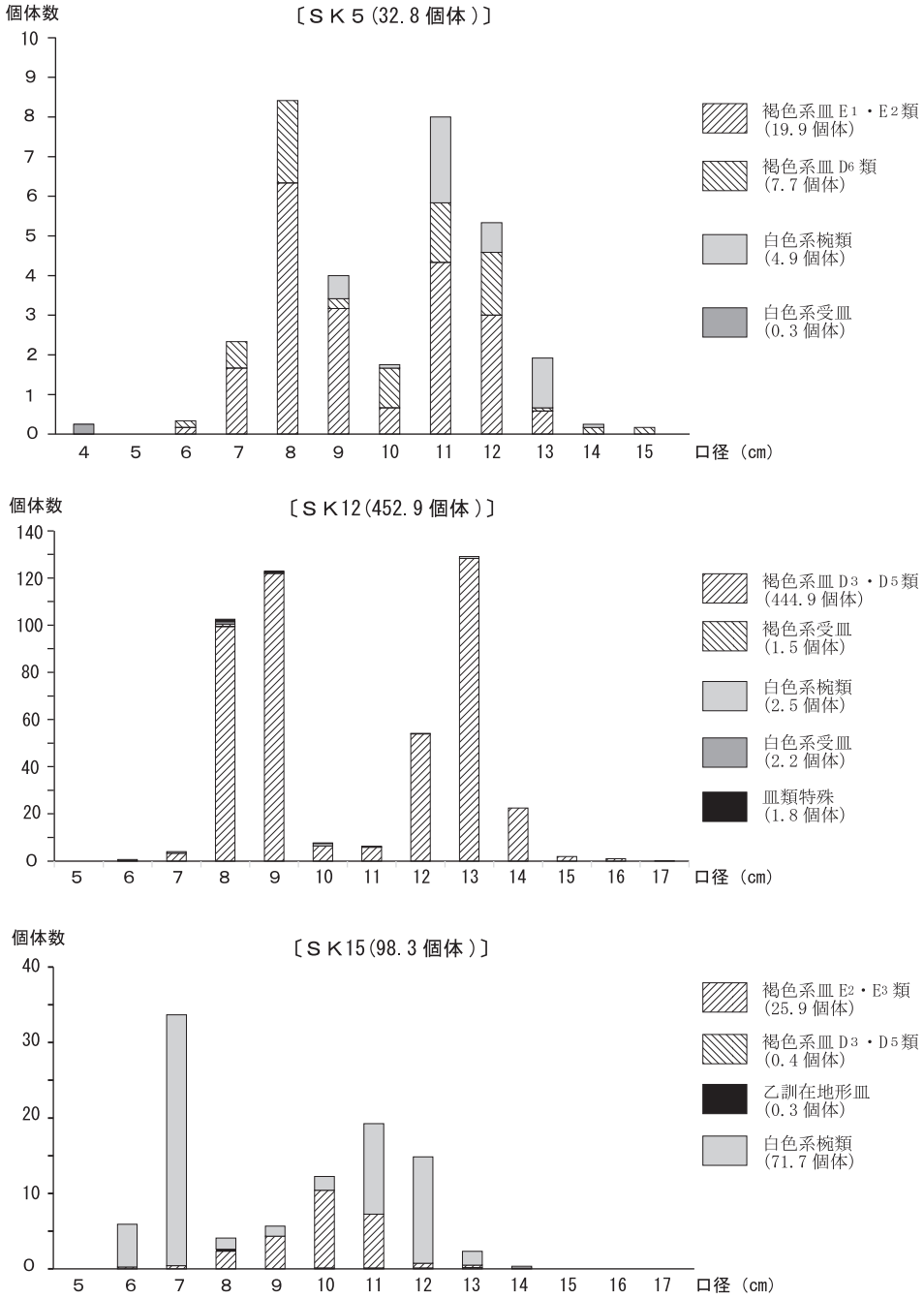


図29　出土土師器の計測結果（その２）

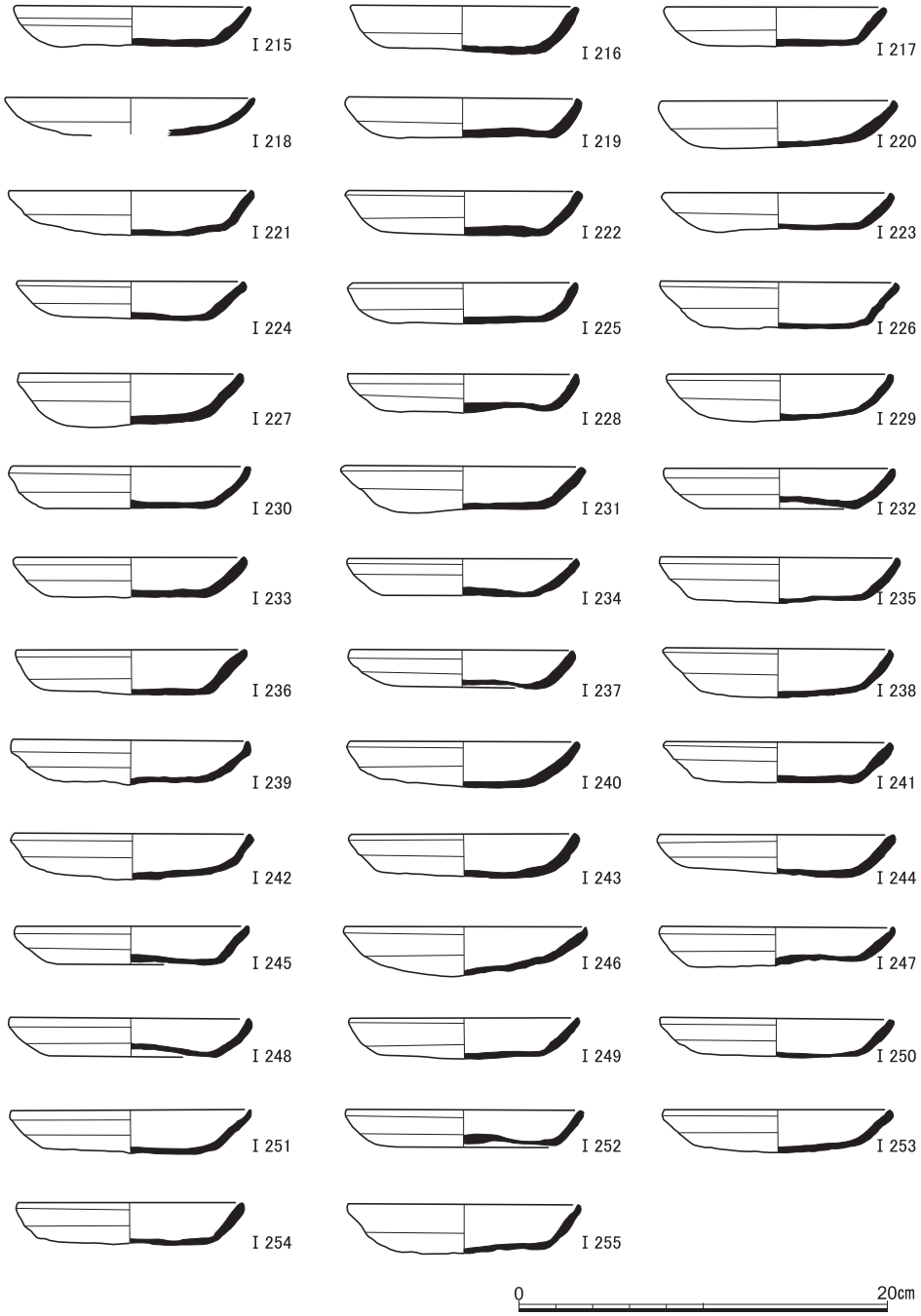


図30　ＳＫ12出土遺物(1)（Ⅰ215～Ⅰ255土師器）

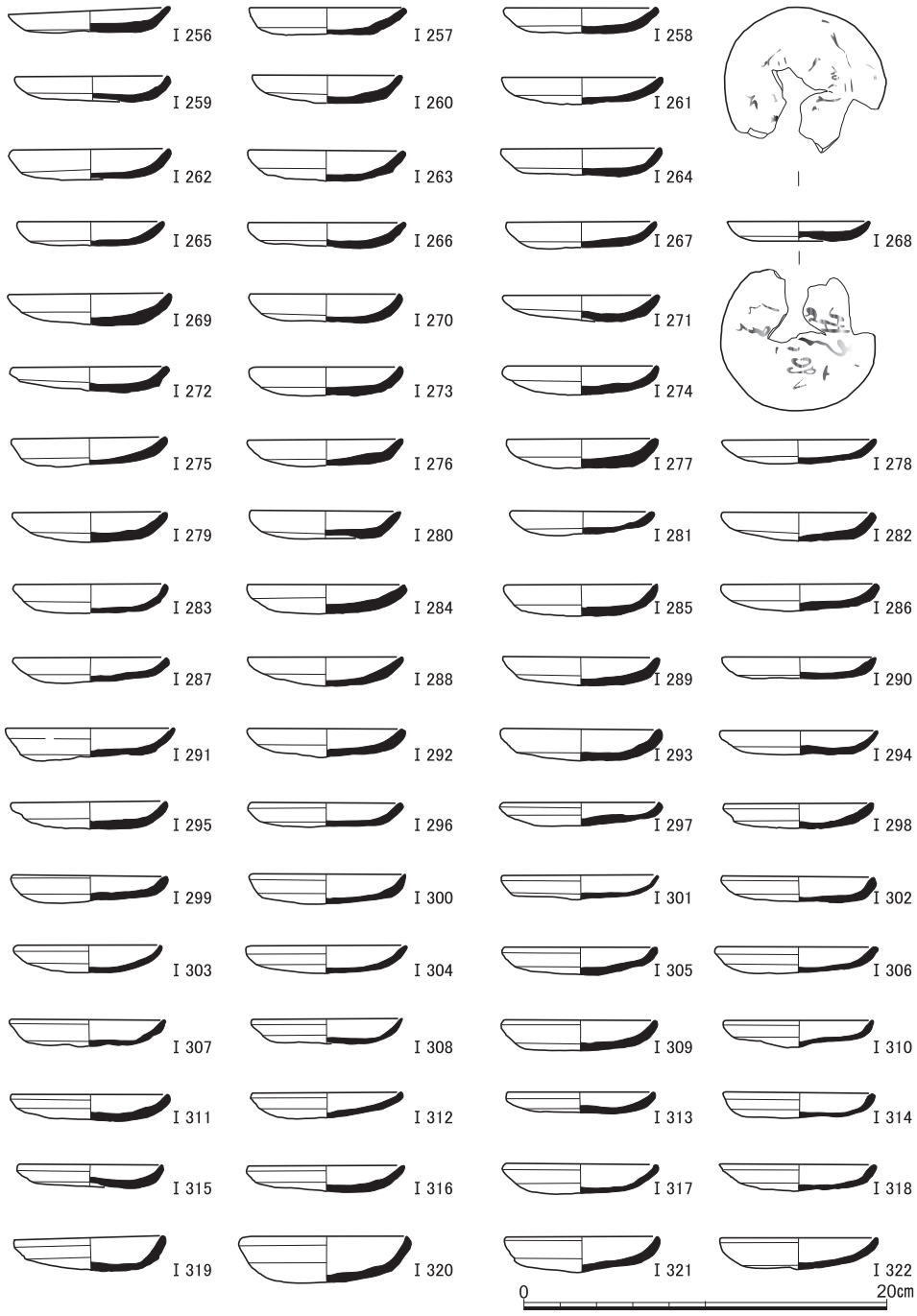


図31　ＳＫ12出土遺物(2)（Ⅰ256～Ⅰ322土師器）

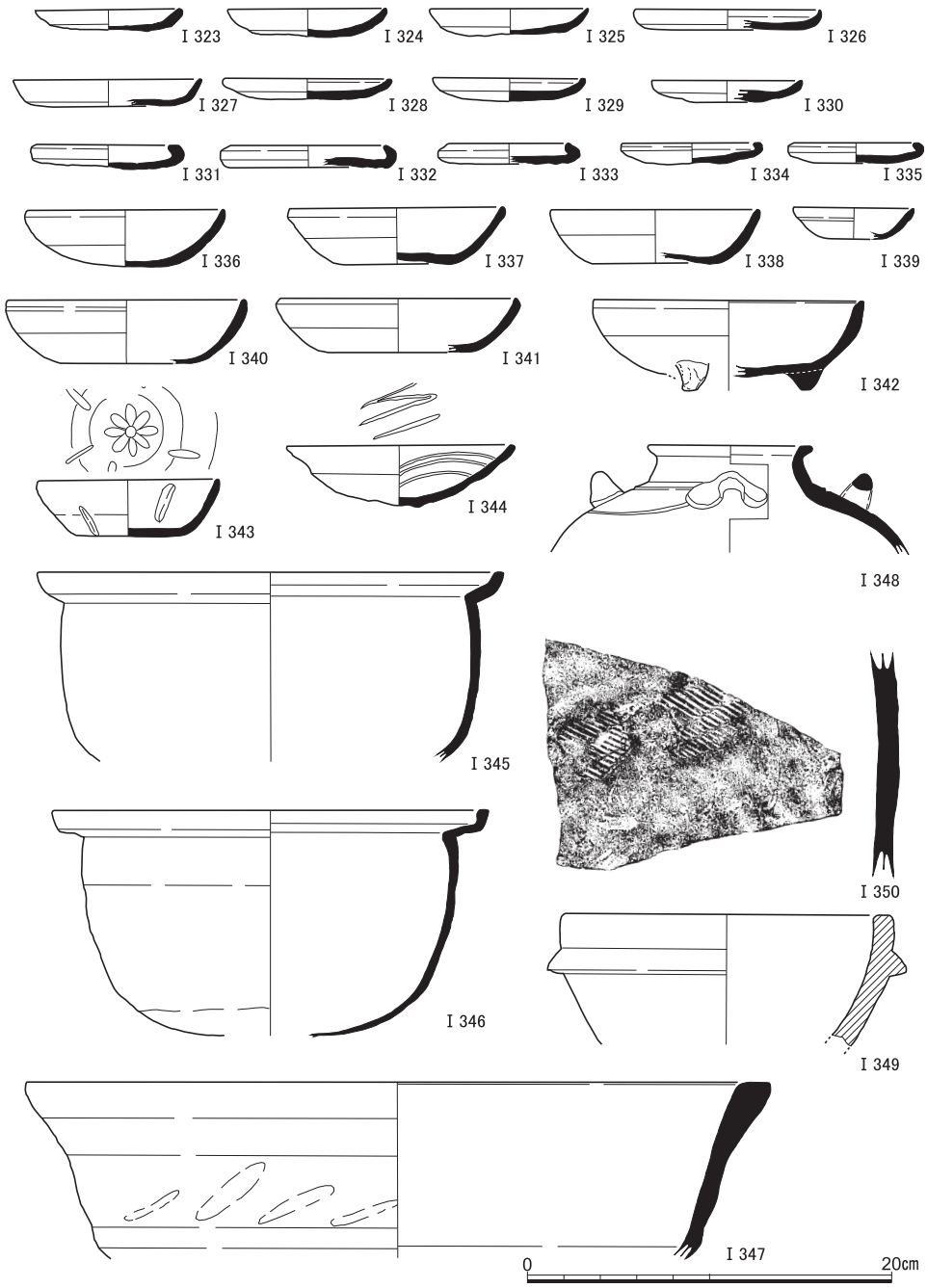


図32　ＳＫ12出土遺物(3)（Ⅰ323～Ⅰ341土師器，Ⅰ342～Ⅰ347瓦器，Ⅰ348褐釉陶器，Ⅰ349石鍋，Ⅰ350陶器）

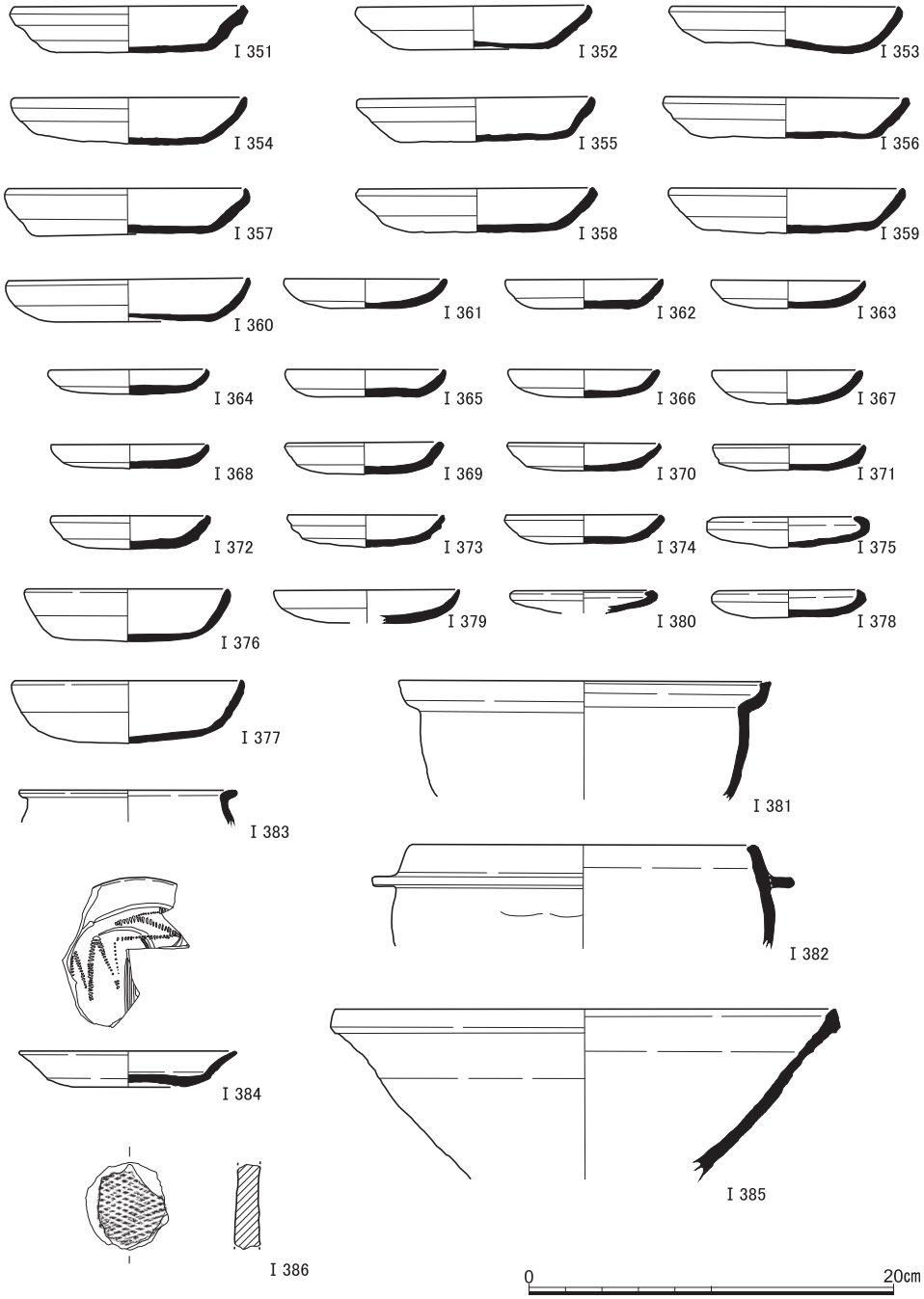


図33　ＳＫ19出土遺物（Ⅰ351～Ⅰ378土師器，Ⅰ379～Ⅰ382瓦器，Ⅰ383褐釉陶器，Ⅰ384青磁，Ⅰ385・Ⅰ386須恵器）

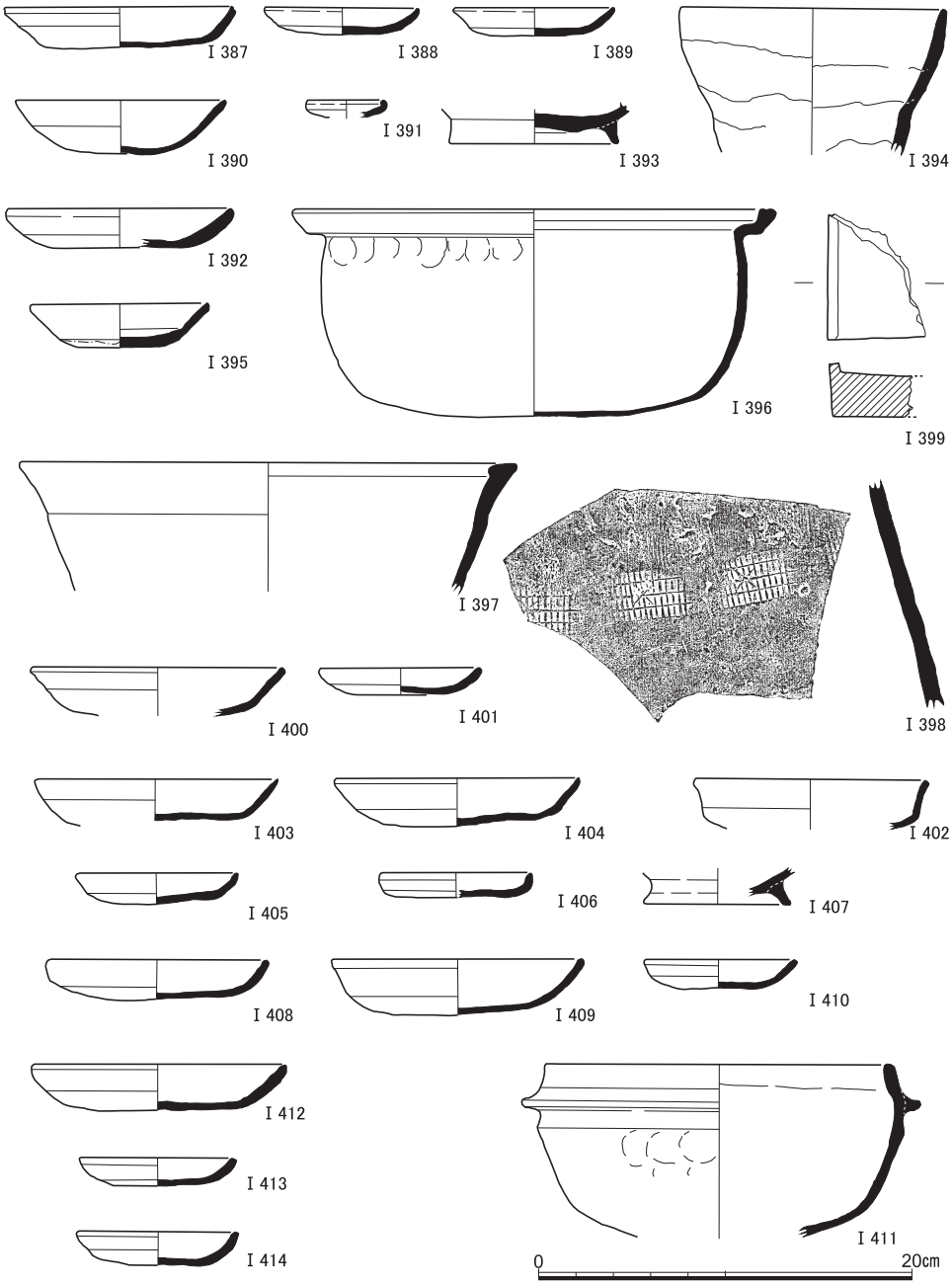


図34　ＳＫ５出土遺物（Ⅰ387～Ⅰ394土師器，Ⅰ395白磁，Ⅰ396･Ⅰ397瓦器，Ⅰ398陶器，Ⅰ399硯），ＳＫ６出土遺物（Ⅰ400･Ⅰ401土師器），ＳＫ11出土遺物（Ⅰ402土師器），ＳＫ17出土遺物（Ⅰ403～Ⅰ407土師器），ＳＫ18出土遺物（Ⅰ408～Ⅰ410土師器，Ⅰ411瓦器），ＳＫ20出土遺物（Ⅰ412～Ⅰ414土師器）

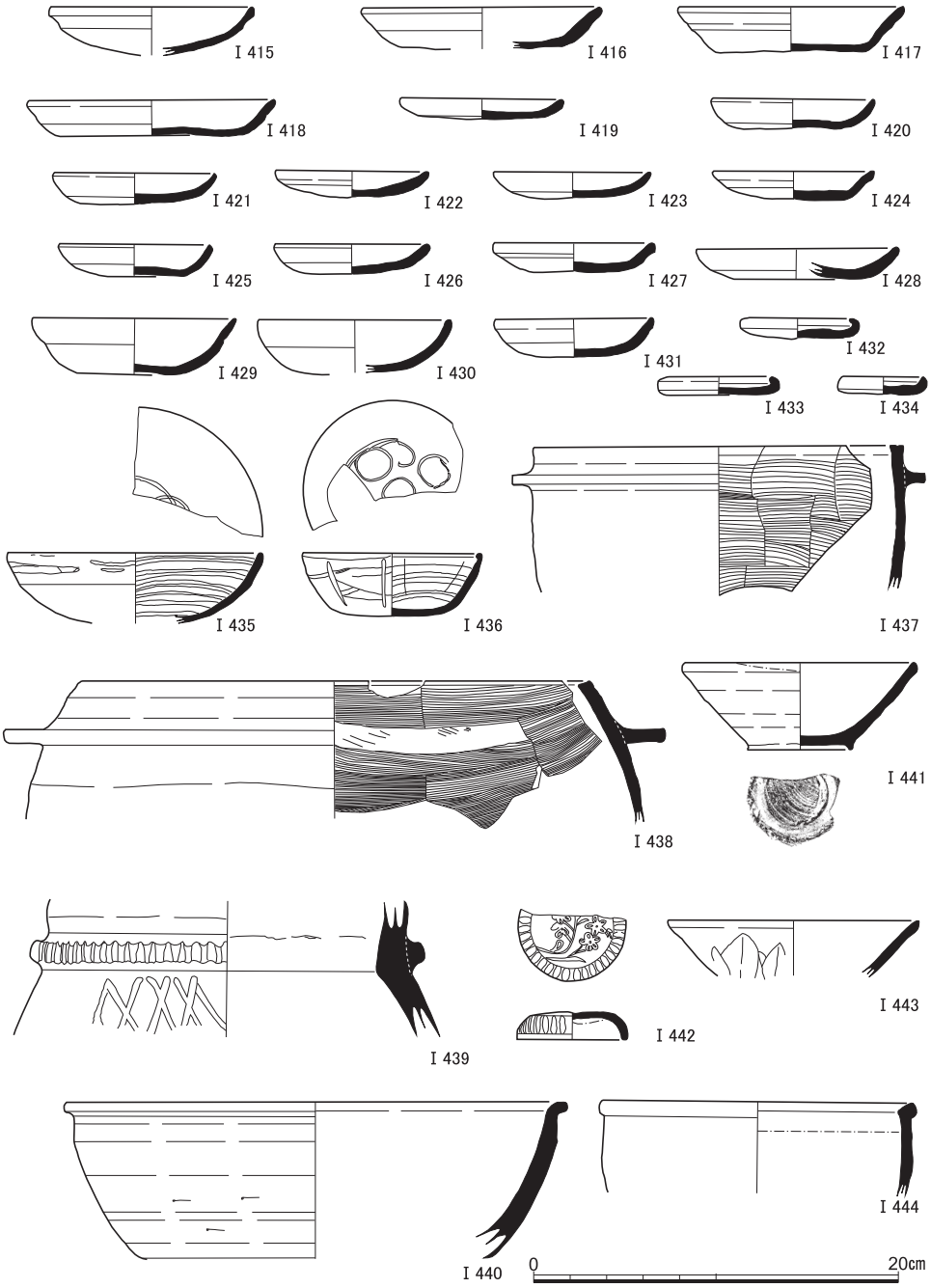


図35　ＳＸ25出土遺物(1)（Ⅰ415～Ⅰ434土師器，Ⅰ435～438瓦器，Ⅰ439瓦質製品，Ⅰ440・Ⅰ441灰釉系陶器，Ⅰ442白磁，Ⅰ443青磁，Ⅰ444黄釉陶器）

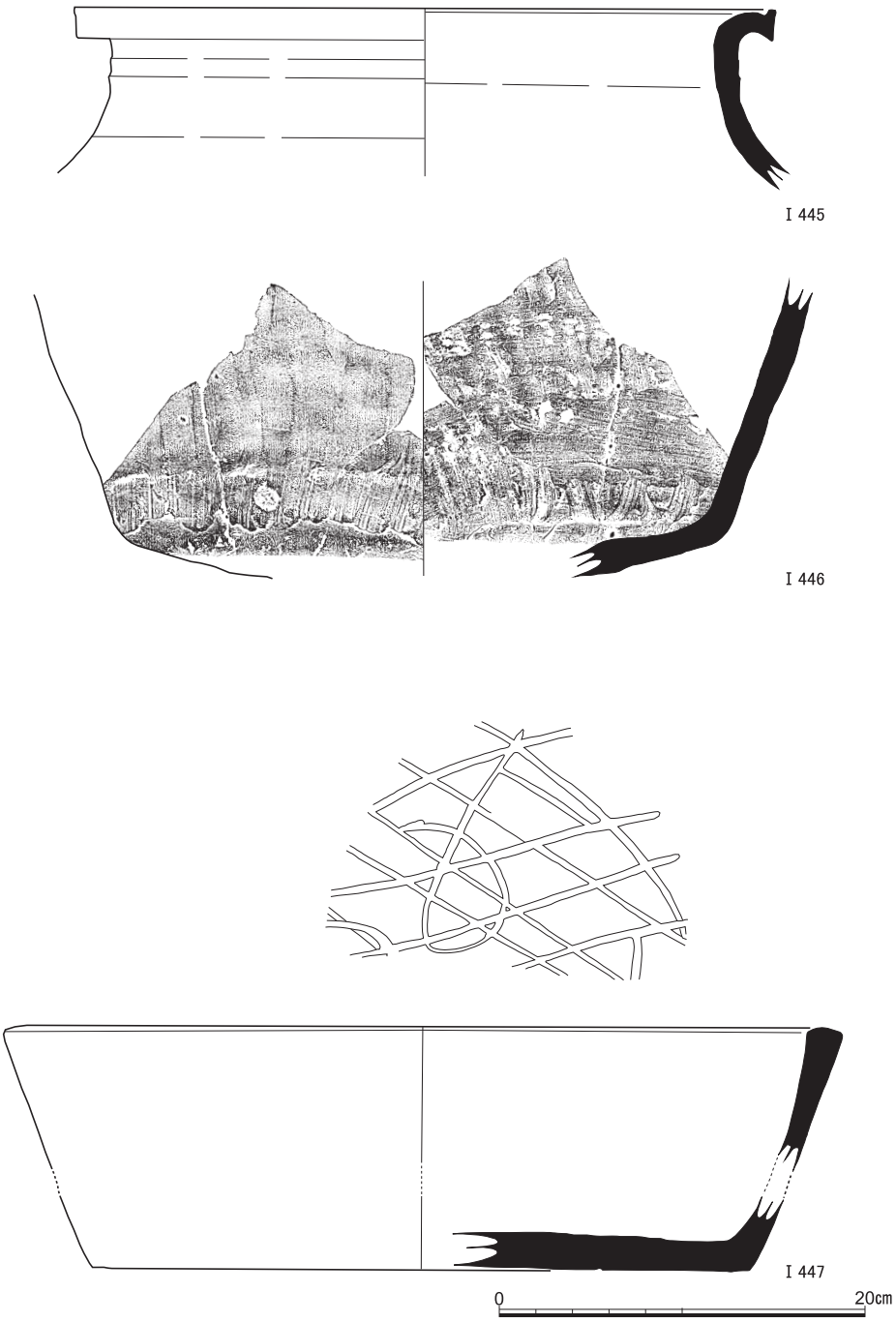


図36　ＳＸ25出土遺物(2)（Ⅰ445・Ⅰ446陶器，Ⅰ447瓦器）

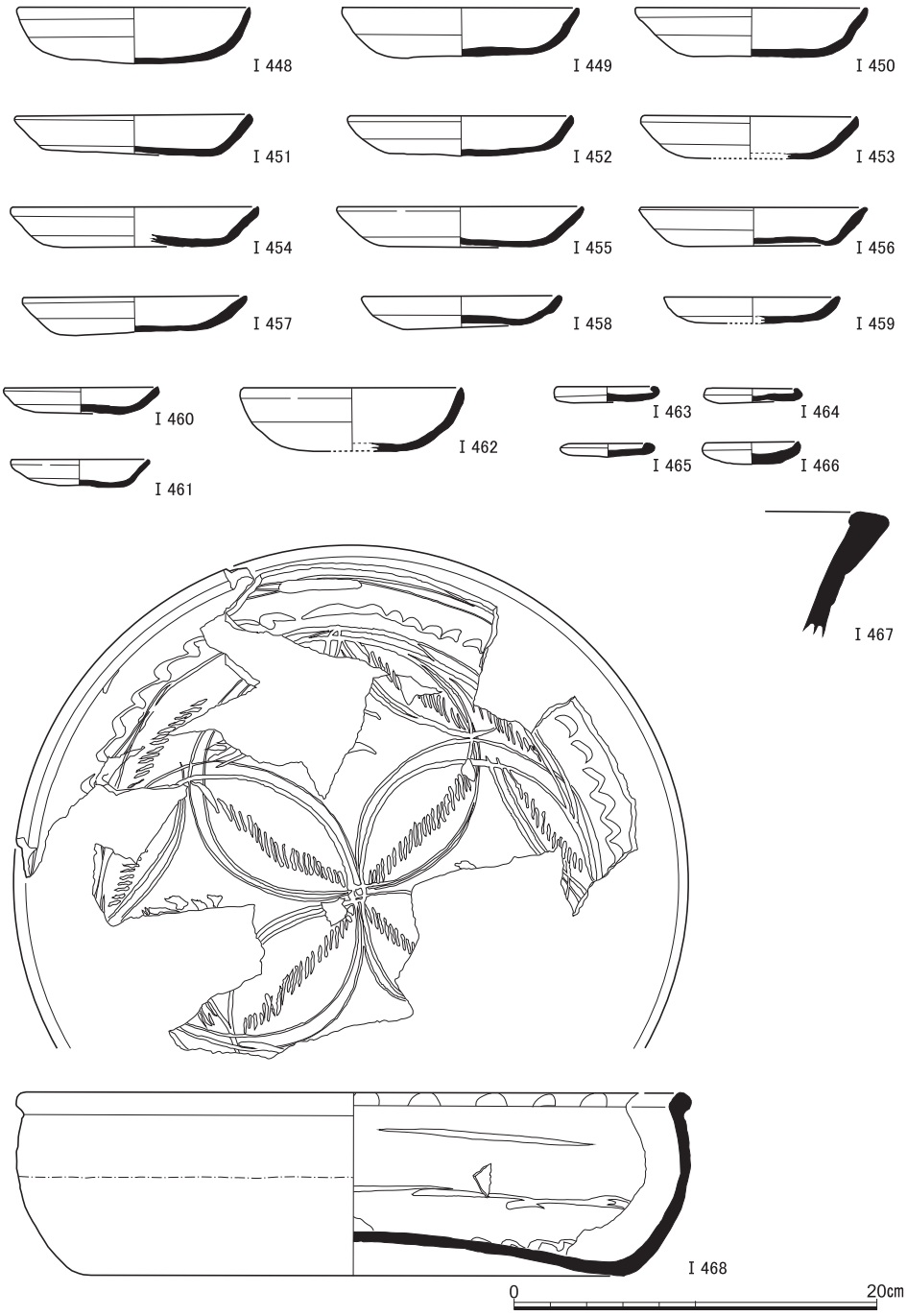


図37　ＳＸ27出土遺物（Ⅰ448～Ⅰ466土師器，Ⅰ467瓦器，Ⅰ468黄釉陶器）

用いて成形している。Ⅰ396は土坑下層でほぼ完形で単独出土した瓦器鍋。底部の器壁は非常に薄い。Ⅰ397は瓦器盤の口縁。内側に肥厚する。Ⅰ398は陶器常滑の甕片。Ⅰ400以下は，おおむね１段撫で手法の土師器皿類。Ⅰ407は高台を付した椀の底部。黄褐色を呈する。Ⅰ411は瓦器羽釜。羽釜としては小形品で，器壁が厚手である。

ＳＸ25出土遺物（Ⅰ415～Ⅰ447）　土師器皿や椀以外の，瓦器や陶器類の大破片が多く出土している。１～２期の幅をもっている。Ⅰ439は，きわめて厚手の器壁の瓦質の製品で，通有の器形と異なり全形が想定できない。刻みを施した貼付突帯がめぐる部分がくびれており，格子状の暗文のみられる部分を下部側と考えると，壺状の器形の頸部付近と復元できるけれども，類例を知らない。Ⅰ446は，須恵器質の器壁の厚い陶器片。内外とも粗い調整で，板状の工具で縦に撫でつけた痕跡が残る。「く」字状の屈曲部と器壁の厚さから底部付近と仮定したが，肩部付近の可能性もあるだろうⅠ447は瓦器盤だが，炭素の吸着がほとんどみられず，黄白色を呈する。見込みに暗文を施す。全く肥厚しない口縁部の形状などからみて，中世前半期の，盤としては初期の型式に属するものであろう。

ＳＸ27出土遺物（Ⅰ448～Ⅰ468）　上記のＳＸ25と一連で連なる不定型な土坑からの出土遺物であり，１～２期の土師器類のほか，黄釉陶器の盤Ⅰ468の破片などがまとまって出土している。

ＳＸ48出土遺物（Ⅰ469～Ⅰ519）　南区中央付近の土器溜で，ほとんどが土師器皿類で構成される。このうち９割以上が，構内遺跡や平安京域の中世京都で主体を占めるものとは異なる特徴を持つもので，近年「乙訓在地形土師器」〔加納2004〕などと報告されている一群と同種とみなされるものであった。系譜については小結であらためて検討するとして，ここでは便宜的に以上の異系統の一群を「乙訓在地形」，従来通有の系統の一群を「京域主流形」と仮称して説明しておく。土師器皿類のうち，Ⅰ469～Ⅰ485・Ⅰ490～Ⅰ506が仮称乙訓在地形に該当する。少量含まれる京域主流形Ⅰ486～Ⅰ489・Ⅰ507～Ⅰ511は，二段撫で手法Ｃ類や一段撫で手法Ｄ類であり，白色系の椀類は全くともなわないことから，中世１期の資料と評価できる。乙訓在地形も14cmと９cmの２つに法量のピークがあるが，15cm代や10cm代の製品も一定量あることから，同時期の京域主流形よりも大きめのものが目立つ印象を受ける。また，口縁端部の形状は，直線的に立ち上がる口縁端部をそのままっすぐ仕上げるⅠ469～Ⅰ482・Ⅰ490～Ⅰ504と，短く外折れして仕上げるⅠ483～Ⅰ485・Ⅰ505・Ⅰ506の２種に大別される。京域主流形にみるような，端部を面取りして断面が三角形になるような仕上げ方はしていない。ほか，Ⅰ469やⅠ490に典型的な，器高の

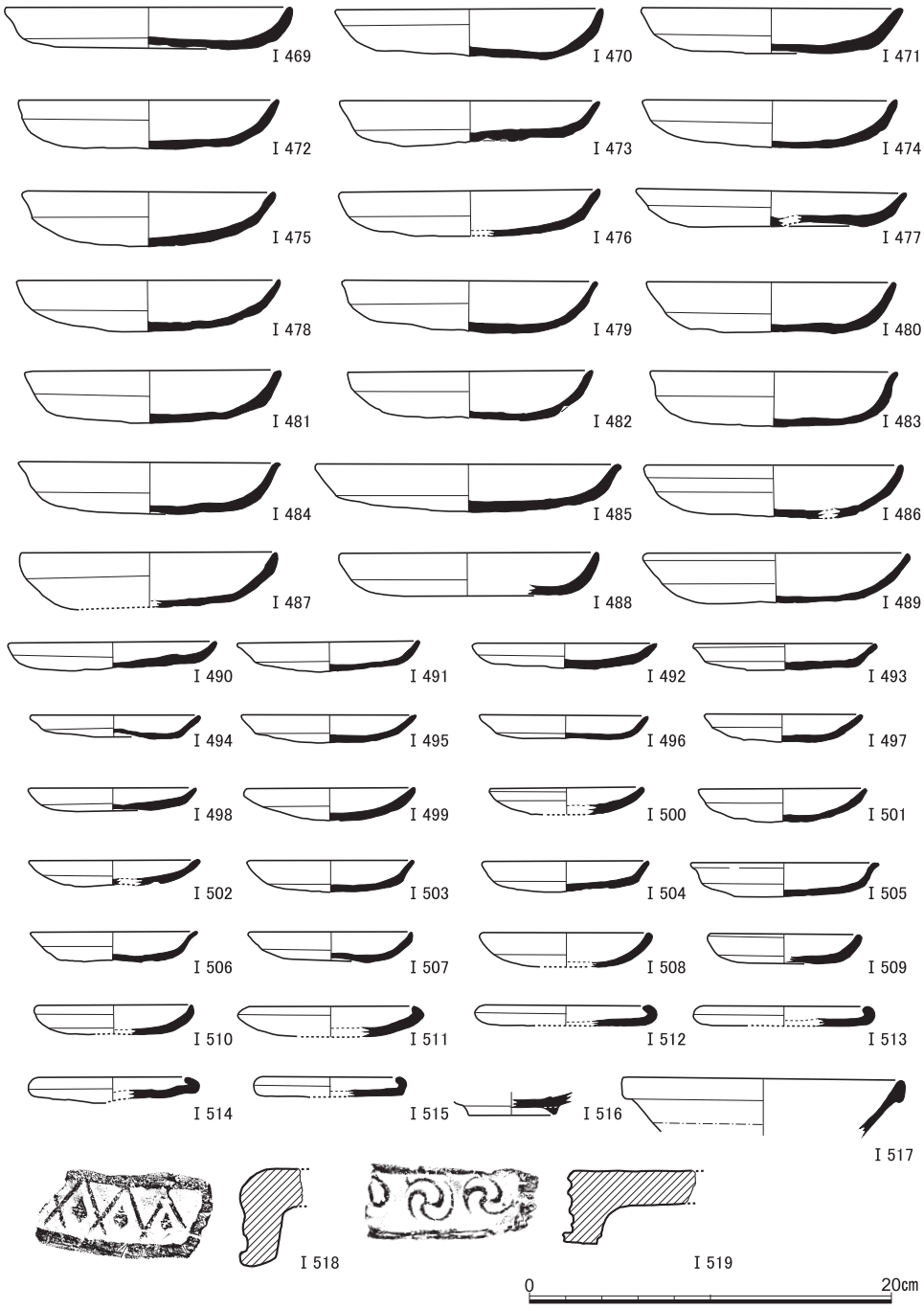


図38　ＳＸ48出土遺物（Ⅰ469～Ⅰ515土師器，Ⅰ516瓦器，Ⅰ517白磁，Ⅰ518・Ⅰ519軒平瓦）

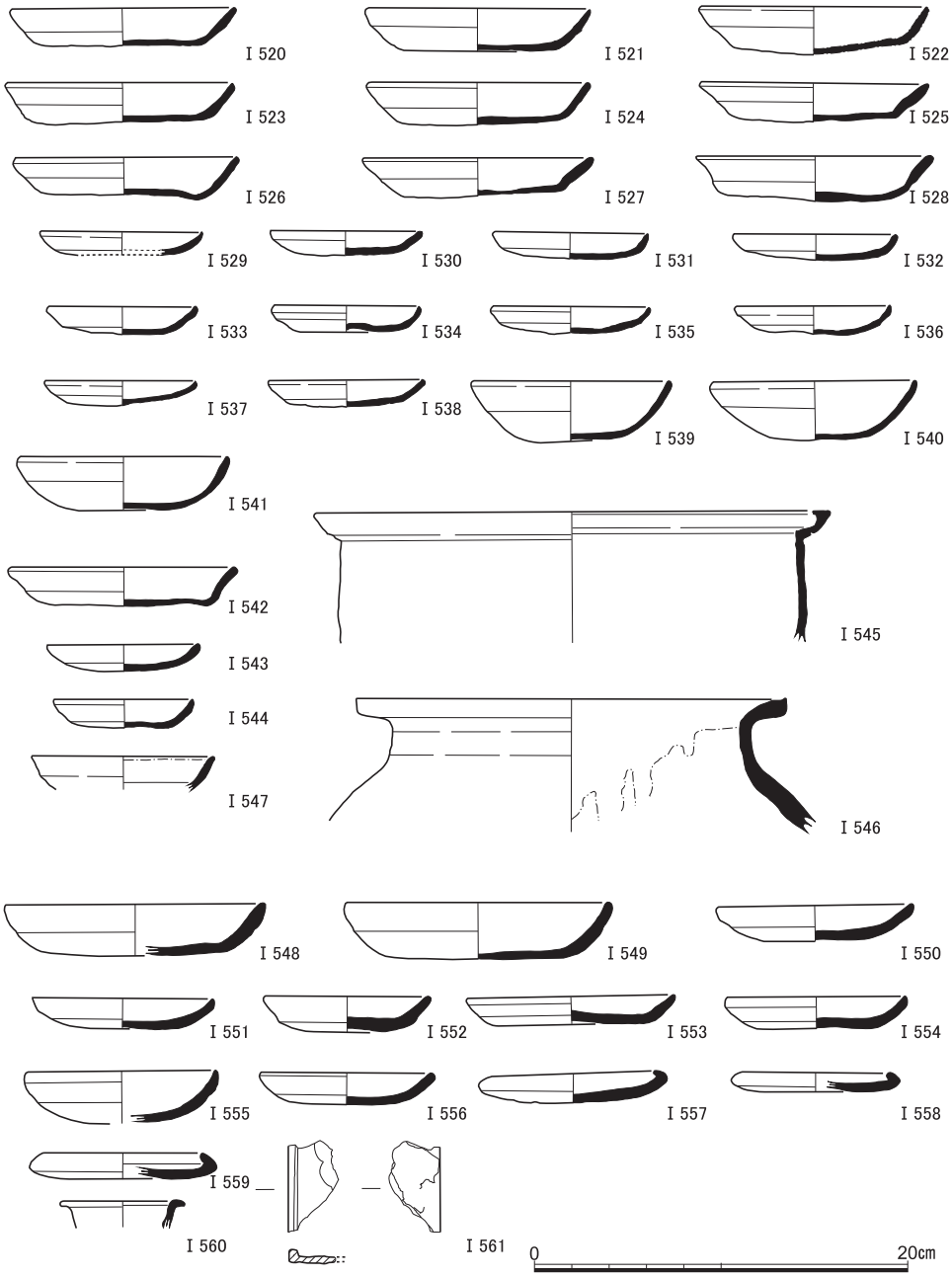


図39　ＳＰ369出土遺物（Ⅰ520～Ⅰ541土師器），ＳＰ289出土遺物（Ⅰ542～Ⅰ544土師器，Ⅰ545瓦器，Ⅰ546陶器，Ⅰ547白磁），ＳＸ38出土遺物（Ⅰ548～Ⅰ560土師器，Ⅰ561石硯）

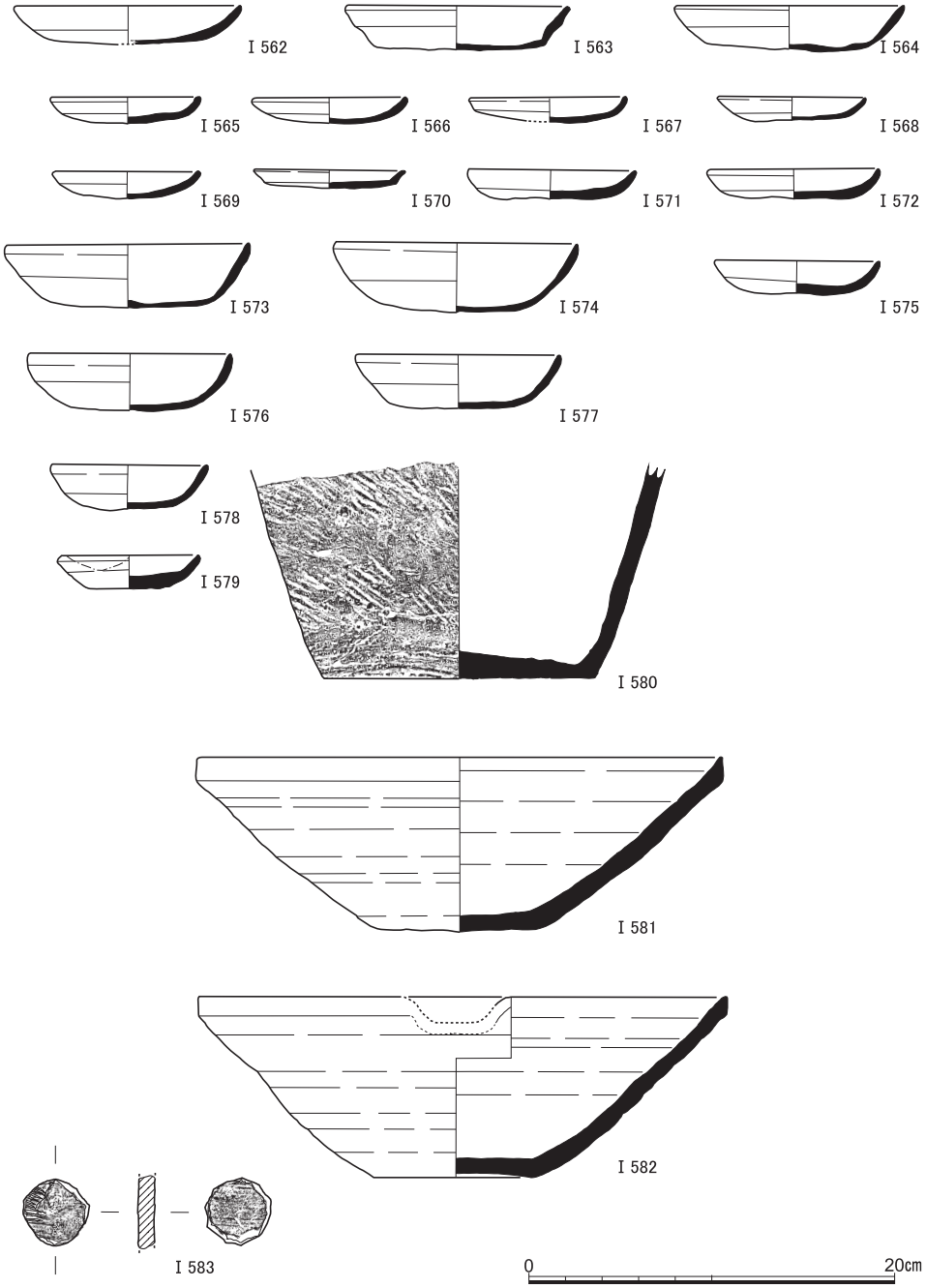


図40　ＳＫ25出土遺物（Ⅰ562～Ⅰ578土師器，Ⅰ579灰釉系陶器，Ⅰ580陶器），ＳＫ26出土遺物（Ⅰ581・Ⅰ582須恵器，Ⅰ583陶製品）

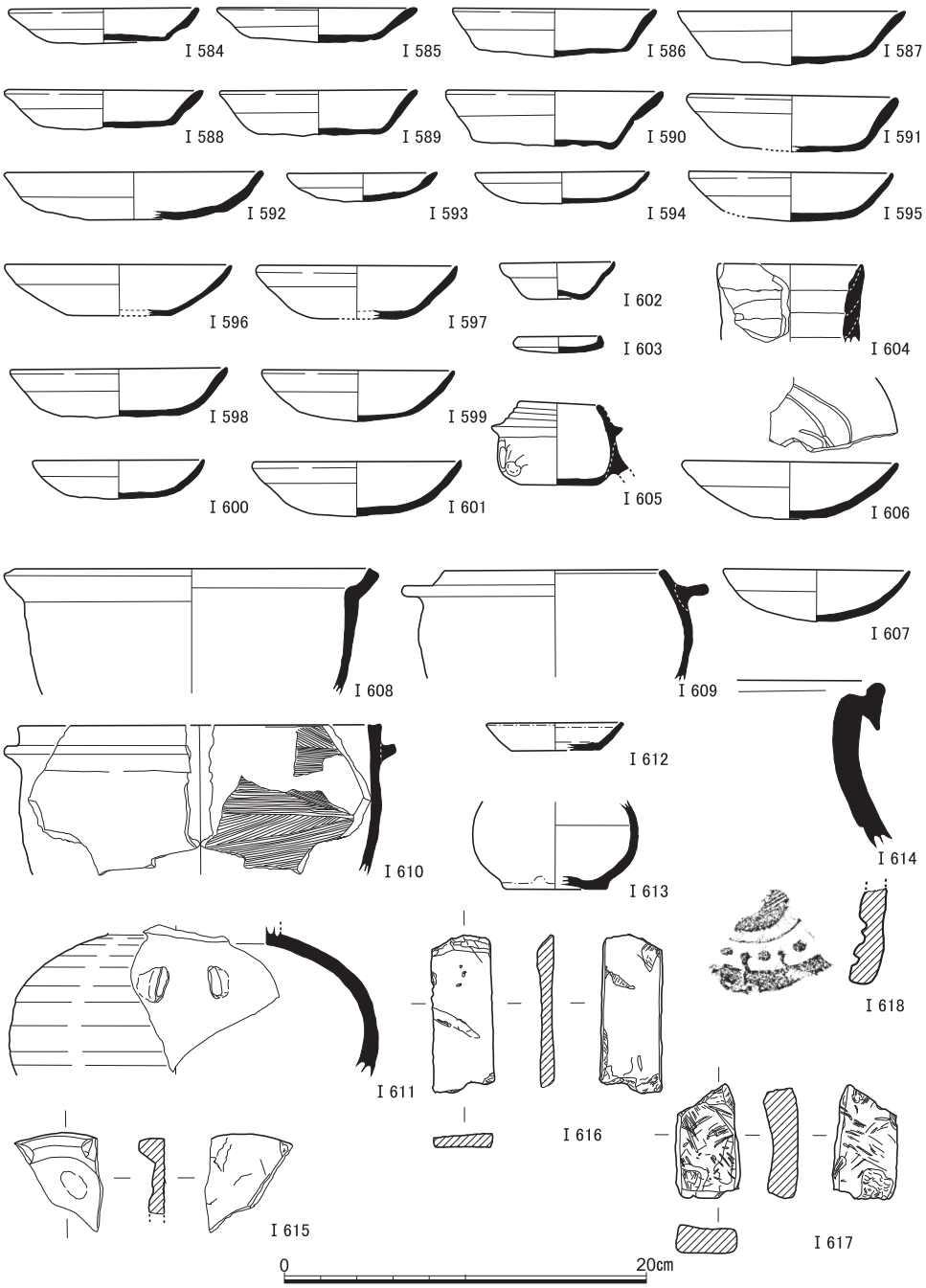


図41　ＳＸ64出土遺物（Ⅰ584～Ⅰ604土師器，Ⅰ605～Ⅰ610瓦器，Ⅰ611・Ⅰ612白磁，Ⅰ613青白磁，Ⅰ614陶器，Ⅰ615石硯，Ⅰ616・Ⅰ617砥石，Ⅰ618軒丸瓦）

ごく低い皿形の器形も，京域主流形にはみられない特徴である。また，今回の資料では，乙訓在地形とされる一群は，明るい燈色系の色調を呈しているものが主で，褐色系の暗い色調を基調とする京域主流形と異なっている。

上記のほかには，褐色を呈する土師器受皿Ⅰ511～Ⅰ515，瓦器椀の底部Ⅰ516，白磁椀Ⅰ517，軒平瓦Ⅰ518・Ⅰ519が出土している。菱形の幾何学文モチーフの軒平瓦は，北東側に位置する261地点で同文品が多数出土している。

ＳＰ369出土遺物（Ⅰ520～Ⅰ541）　南区東域の小土坑から土師器のみがまとまって出土した。皿類は一段撫で手法Ｄ類を中心としているが，口径のまとまりが12cmと８cmと小型化の傾向が顕著であり，器壁も薄く，小皿を中心に口縁端部を面取り仕上げしないものが目立っている。また，白色を呈する椀類Ⅰ539～Ⅰ541が一定量ともなっており，中世２期の資料と位置づけたい。

ＳＰ289出土遺物（Ⅰ542～Ⅰ547）　中世１期の土師器皿類が少量と，瓦器鍋Ⅰ545，常滑産とみられる陶器の甕Ⅰ546，白磁口禿の皿Ⅰ547が出土している。

ＳＸ38出土遺物（Ⅰ548～Ⅰ561）　中世１期の土師器皿類を中心に出土している。Ⅰ560は口縁部を短く外折させた，コップ状の器形のミニチュア土師器とおもわれる。類例のない特異な製品である。

ＳＫ25出土遺物（Ⅰ562～Ⅰ580）　Ⅰ562～Ⅰ573は土師器皿類で，いずれも口縁部１段撫で手法だが，褐色を呈する皿類Ⅰ562～Ⅰ570のうち，小皿のⅠ567～Ⅰ569はＥ類，Ⅰ570は乙訓在地形と呼ばれるもの。Ⅰ571～Ⅰ573は灰白色を呈する製品である。法量でみると12cmと８cm程度にまとまり，また，灰白色の椀類Ⅰ574～Ⅰ578も組成することから，中世２期に位置づけられる。Ⅰ580は産地不明の須恵器質の陶器で，直線的な胴部をもつバケツ状の器形を呈している。底部は薄く，外面は叩目がめぐる。

ＳＫ26出土遺物（Ⅰ581～Ⅰ583）　南区東辺で一括出土した東播系須恵器の摺鉢２点と，その埋積土中から出土した陶器片の打ち欠きによる円盤である。摺鉢は，口縁端部の形状から中世前半期の製品といえる。Ⅰ581は，口縁が一部しか残っていないため，本来は片口に成形されていた可能性もある。Ⅰ583の円盤は，片面にスタンプ状の叩きが確認でき，常滑産の陶器甕の胴部破片を打ち欠いて成形したものとみられる。

ＳＸ64出土遺物（Ⅰ584～Ⅰ618）　南区東辺の不定形土坑の出土遺物。Ⅰ584～Ⅰ593が褐色を呈する皿類，Ⅰ594～Ⅰ603が灰白色を呈する椀や受皿である。中世１期～３期の各時期各種類のものが混在しているが，薄手の灰白色の椀類を多数含み，凹み底の小椀Ⅰ

602なども含まれていることなどから，中世３期が下限となるものといえる。Ⅰ592は中世１期の乙訓在地形と呼ばれる皿である。Ⅰ611は白磁双耳壺ないし四耳壺の肩部片。Ⅰ613は薄手の器壁の青白磁で，底部は露胎している。壺ないし花瓶などであろうか。Ⅰ614は陶器常滑の甕口縁部。上下に大きく肥厚する。Ⅰ617は滑石製品で，石鍋を棒状に再加工したとみられる。温石や砥石として用いたものであろうか。

ＳＫ15・16出土遺物（Ⅰ619～Ⅰ665）　北区北辺の土坑よりまとまって出土した遺物である。Ⅰ619～Ⅰ621・Ⅰ656～Ⅰ659は褐色を呈する皿類で，Ⅰ619・Ⅰ620・Ⅰ656～Ⅰ659は１段撫で手法Ｅ類，Ⅰ621は直線的に口縁が立ち上がるごく浅い皿形で，乙訓在地形と呼ばれるものの系譜かもしれない。Ⅰ622～Ⅰ650・Ⅰ660・Ⅰ661は灰白色の椀で，ＳＫ15では凹み底の小椀が多数を占める。中世３期のまとまった資料と言えよう。Ⅰ664・Ⅰ665は砥石で，Ⅰ664は黄褐色の，Ⅰ665は赤褐色の粘板岩。Ⅰ665には擦り切りによる切断を中途まで試みた痕跡が残る。

ＳＸ60・ＳＫ24出土遺物（Ⅰ666～Ⅰ675）　南区中央付近の土坑からの出土遺物。中世１～２期の土師器皿類を中心とする。Ⅰ675は丸瓦の先端部で，外面に縄叩き，内面に細かな布目痕がある。端部まで厚みのある特異な形状と言える。

ＳＸ56・57・58出土遺物（Ⅰ676～Ⅰ686）　南区中央の集石や小規模な遺物溜出土遺物。Ⅰ680・Ⅰ681は瓦器の小皿。Ⅰ682は陶器甕の口縁で，信楽産と思われる。Ⅰ683は，土師器の小皿に丈の高い脚部を付した特異な製品で，貼り付け方が粗いために皿部と台部で中軸がずれる。

ＳＸ52出土遺物（Ⅰ687・Ⅰ688）　Ⅰ688は瓦器鍋。完形品が一括出土した。瓦器鍋としては小ぶりで器壁が厚いといえる。短く外折して立ち上がる口縁部をもつ。中世後半期の製品だろう。Ⅰ687は近接出土した褐釉陶器の壺口縁部である。

ＳＫ27・ＳＸ65・66・67出土遺物（Ⅰ689～Ⅰ698）　南区中央でも東寄りの地点にまとまって検出された小規模な土坑群からの出土遺物である。いずれも少量の遺物しか出土していないが，土師器皿は一段撫で手法Ｅ類で，凹み底の小椀などをともなうこと，また瓦器鍋の口縁形態も，斜め上方へとにぶい立ち上がりのものであることから，中世後半期に位置づけられるものであろう。

ＳＸ55出土遺物（Ⅰ699～Ⅰ715）　南区中央の遺物溜で，上面は集石であった。中世３期の土師器皿・椀類のほか，瓦器鍋や須恵器摺鉢などの大破片が集積していた。特筆されるのは，Ⅰ707・Ⅰ708といった，オオヤツカサ土器と呼称される中央が大きく凹む特大

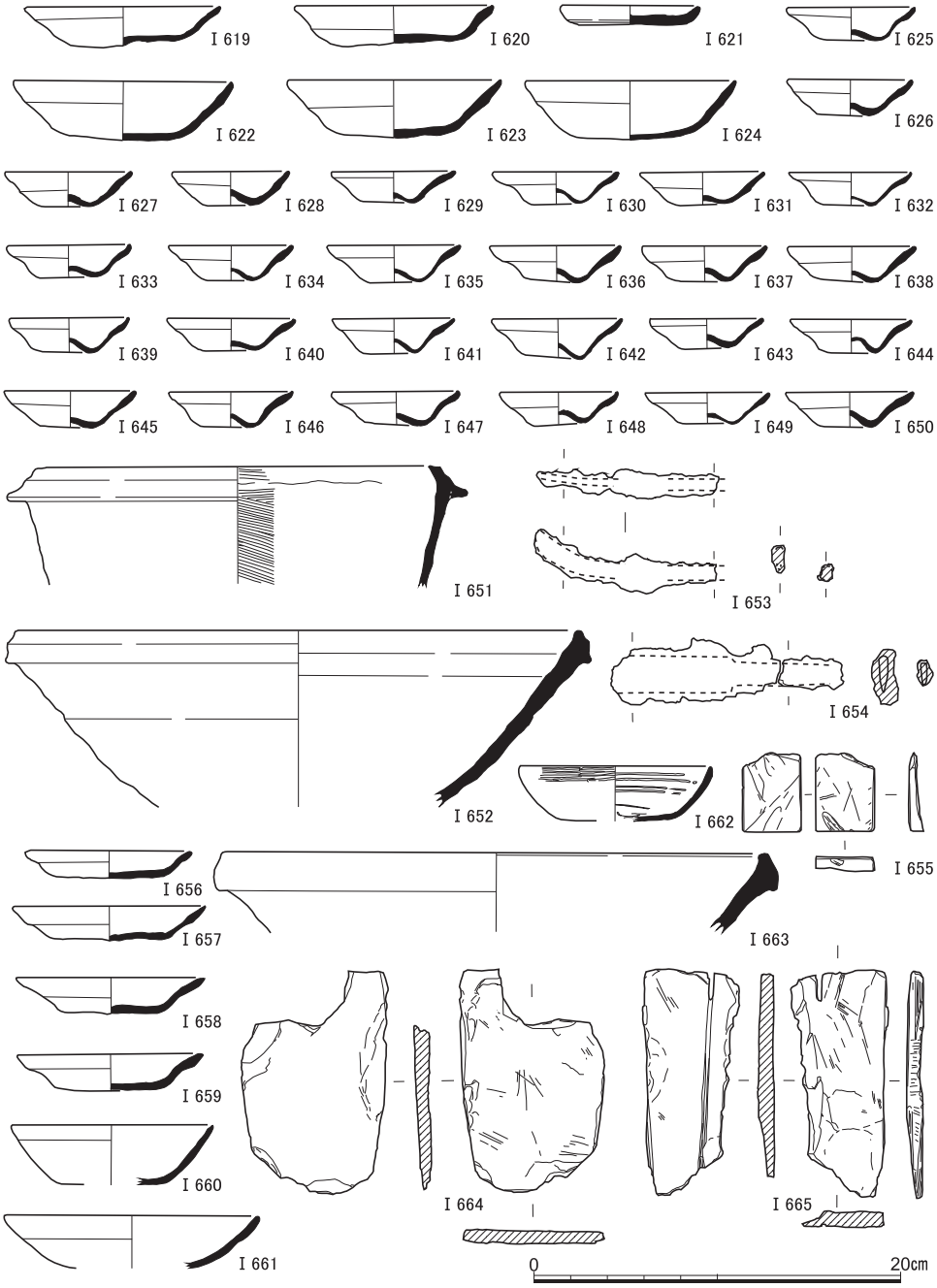


図42　ＳＫ15出土遺物（Ⅰ619～Ⅰ650土師器，Ⅰ651瓦器，Ⅰ652須恵器，Ⅰ653・Ⅰ654鉄製品，Ⅰ655砥石），ＳＫ16出土遺物（Ⅰ656～Ⅰ661土師器，Ⅰ662瓦器，Ⅰ663須恵器，Ⅰ664・Ⅰ665砥石）

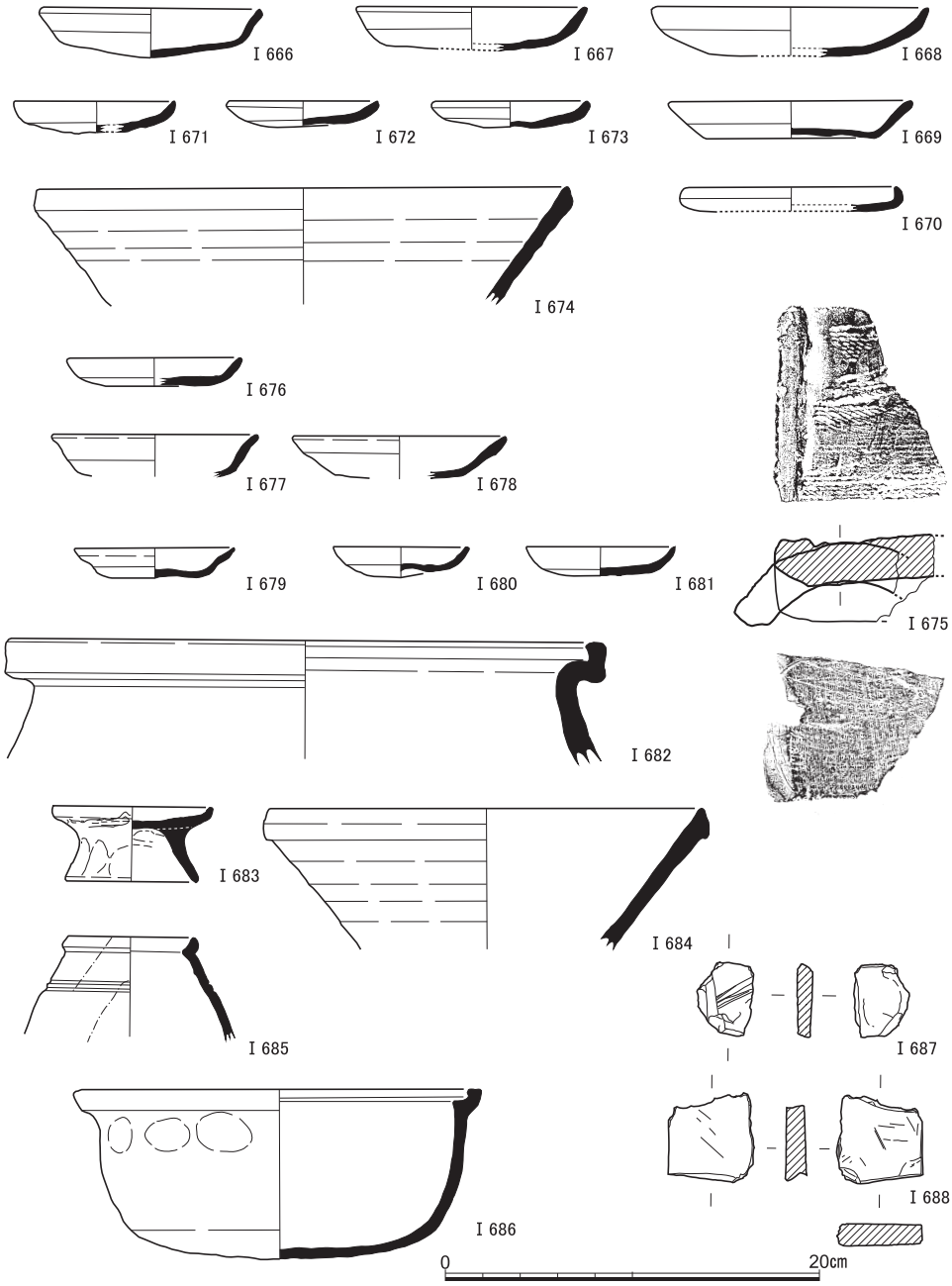


図43　ＳＸ60出土遺物（Ⅰ666～Ⅰ670土師器，Ⅰ674須恵器），ＳＫ24出土遺物（Ⅰ671～Ⅰ673土師器，Ⅰ675丸瓦），ＳＸ56出土遺物（Ⅰ676土師器），ＳＸ57出土遺物（Ⅰ677～Ⅰ679土師器，Ⅰ680・Ⅰ681瓦器，Ⅰ682陶器，Ⅰ687砥石），ＳＸ58出土遺物（Ⅰ683土師器，Ⅰ684須恵器，Ⅰ688砥石），ＳＸ52出土遺物（Ⅰ685褐釉陶器，Ⅰ686瓦器）

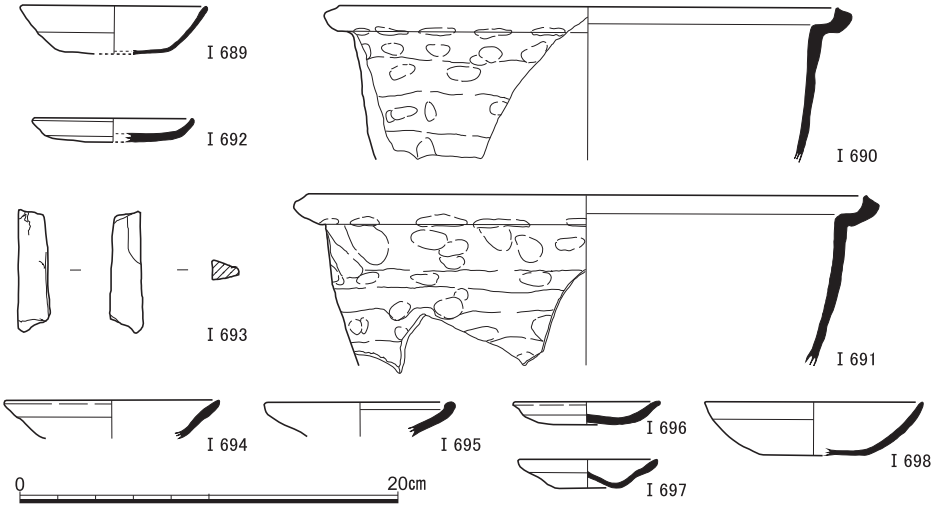


図44　ＳＫ27出土遺物（Ｉ689土師器，Ｉ690・Ｉ691瓦器），ＳＸ59出土遺物（Ｉ692土師器），ＳＸ65出土遺物（Ｉ693砥石），ＳＸ66出土遺物（Ｉ694・Ｉ695土師器），ＳＸ67出土遺物（Ｉ696～Ｉ698土師器）

の皿の複数点の出土である。同種の土器は，吉田南構内では220地点，医学部構内では134地点などでもまとまって出土している。Ｉ712は，大型のバケツ形を呈する瓦質の土器。内外面とも撫でて平滑に仕上げられている。

ＳＫ23出土遺物（Ｉ716～Ｉ722）　南区中央の小規模な瓦溜出土遺物。軒丸瓦主体で，Ｉ716・Ｉ717は外区を花弁状の装飾で飾る巴文。笵の彫り込みはきわめて浅い。，Ｉ718・Ｉ719は珠文体で飾る巴文。笵の木目が鮮明に残る。Ｉ720は隆線で表現する単弁八葉蓮華文で，中房に１＋４個の蓮子をもつ。Ｉ721は同種の表現だが，六葉蓮華文とみられる。Ｉ722は広端面に斜線の篦記号をもつ平瓦。凸面は縄叩き痕がそのまま残る。Ｉ716・Ｉ721の巴文軒丸瓦は構内遺跡では初出であり，近隣でも類例を知らないが，他の軒丸瓦と同様，製作年代としては平安時代後期11～12世紀代の製品とみられる。状況から見て，それらが，中世に至って廃棄されたとみるのが自然だろう。

ＳＸ49・50・51・53出土遺物（Ｉ726～Ｉ731）　同じく南区中央付近で，ＳＸ50・51・53は，それぞれ茶褐色土掘り下げ中に，硯の完存品Ｉ729・Ｉ730や瓦器火鉢の大破片Ｉ731が単独で出土した遺構である。ＳＸ49は小規模な集石遺構に混じって出土した遺物。Ｉ723は褐色を呈する土師器皿Ｅ類，Ｉ724・Ｉ725は灰白色の土師器椀。Ｉ727・Ｉ728の瓦器鍋や羽釜の特徴とあわせ，中世後半期のまとまりといえる。Ｉ726は須恵器質の焼成の壺で，器壁がかなり厚い。特異な器形で，類例や産地を知らない。

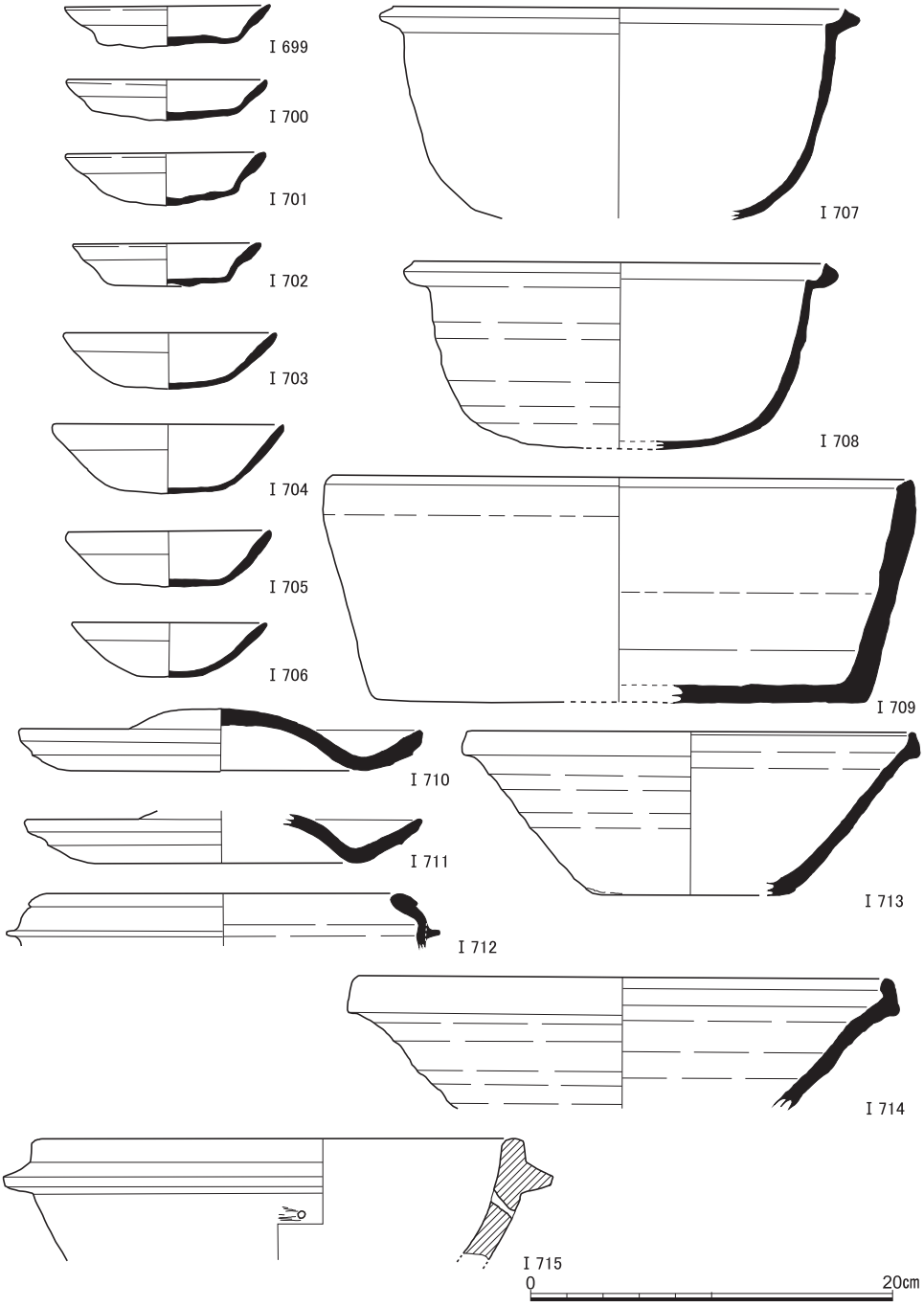


図45　ＳＸ55出土遺物（Ⅰ699～Ⅰ706土師器，Ⅰ707～Ⅰ712瓦器，Ⅰ713・Ⅰ714須恵器，Ⅰ715石鍋）

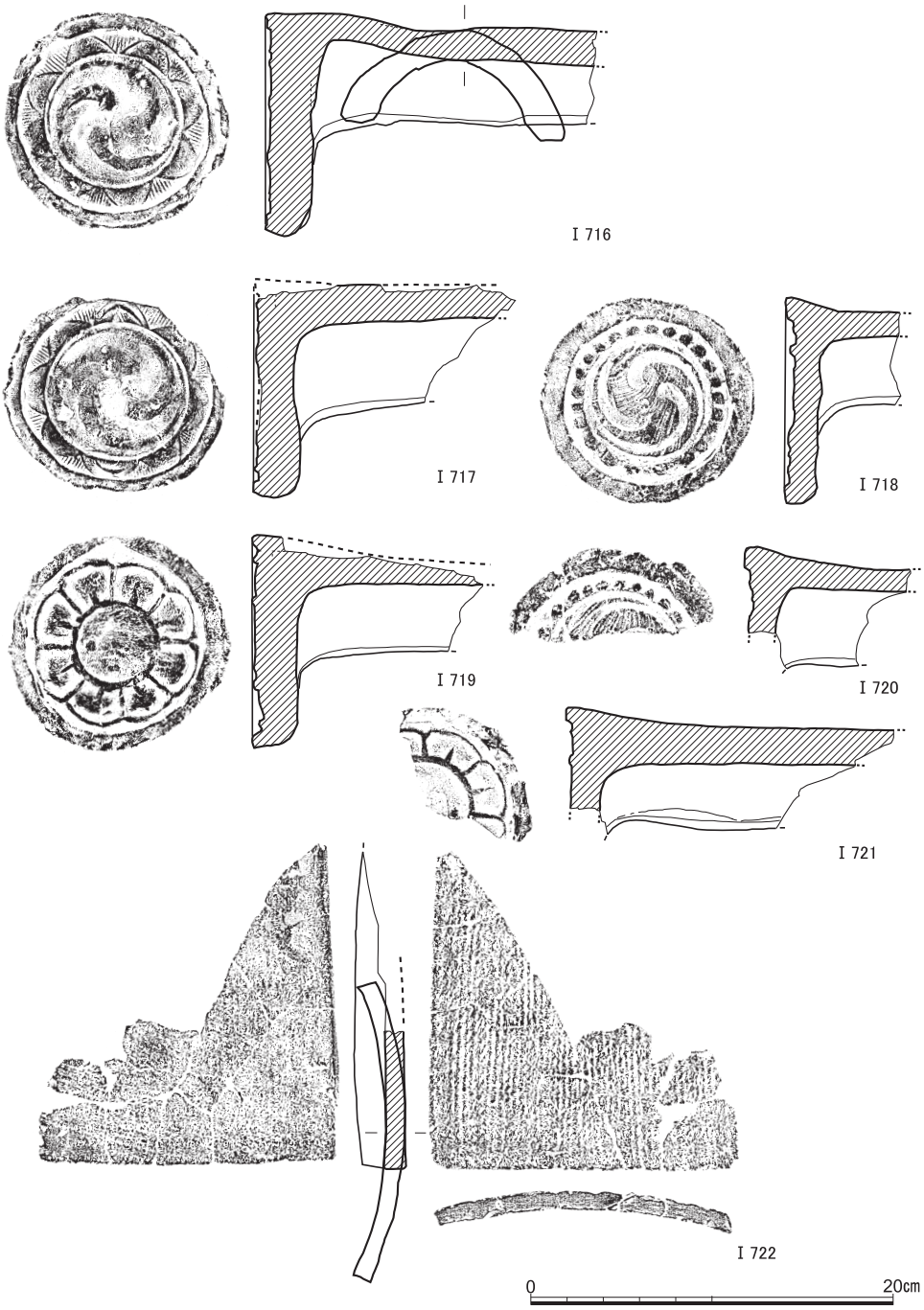


図46　ＳＫ23出土遺物（Ⅰ716～Ⅰ721軒丸瓦，Ⅰ722平瓦）

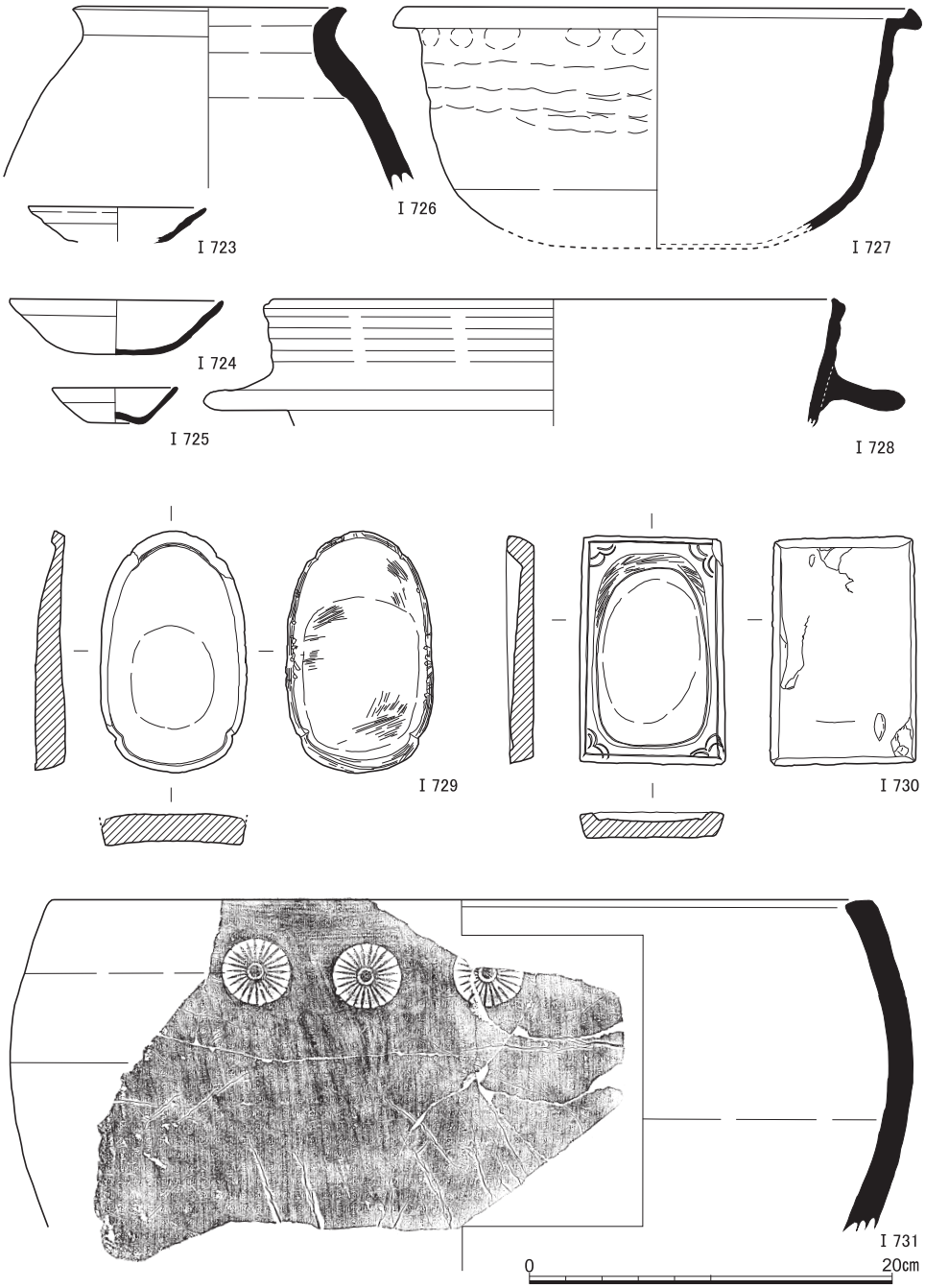


図47　ＳＸ49出土遺物（Ⅰ723～Ⅰ725土師器，Ⅰ726須恵器，Ⅰ727・Ⅰ728瓦器），ＳＸ50出土遺物（Ⅰ729石硯），ＳＸ51出土遺物（Ⅰ730石硯），ＳＸ53出土遺物（Ⅰ731瓦器）

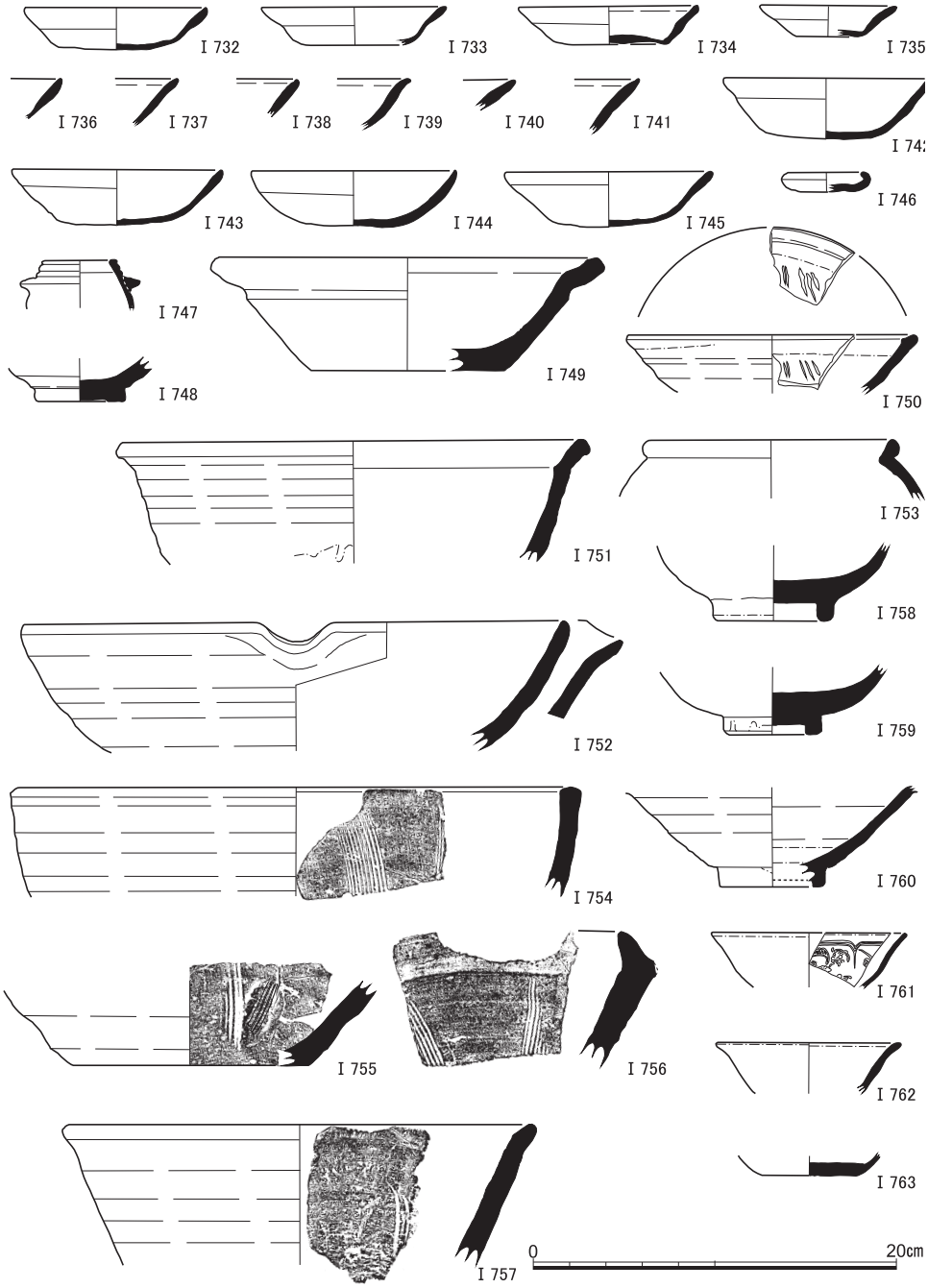


図48　ＳＤ10出土遺物(1)（Ⅰ732～Ⅰ746土師器，Ⅰ747瓦器，Ⅰ748～Ⅰ752灰釉系陶器，Ⅰ753褐釉陶器，Ⅰ754～Ⅰ756陶器備前，Ⅰ757陶器信楽，Ⅰ758青磁，Ⅰ759～Ⅰ763白磁）

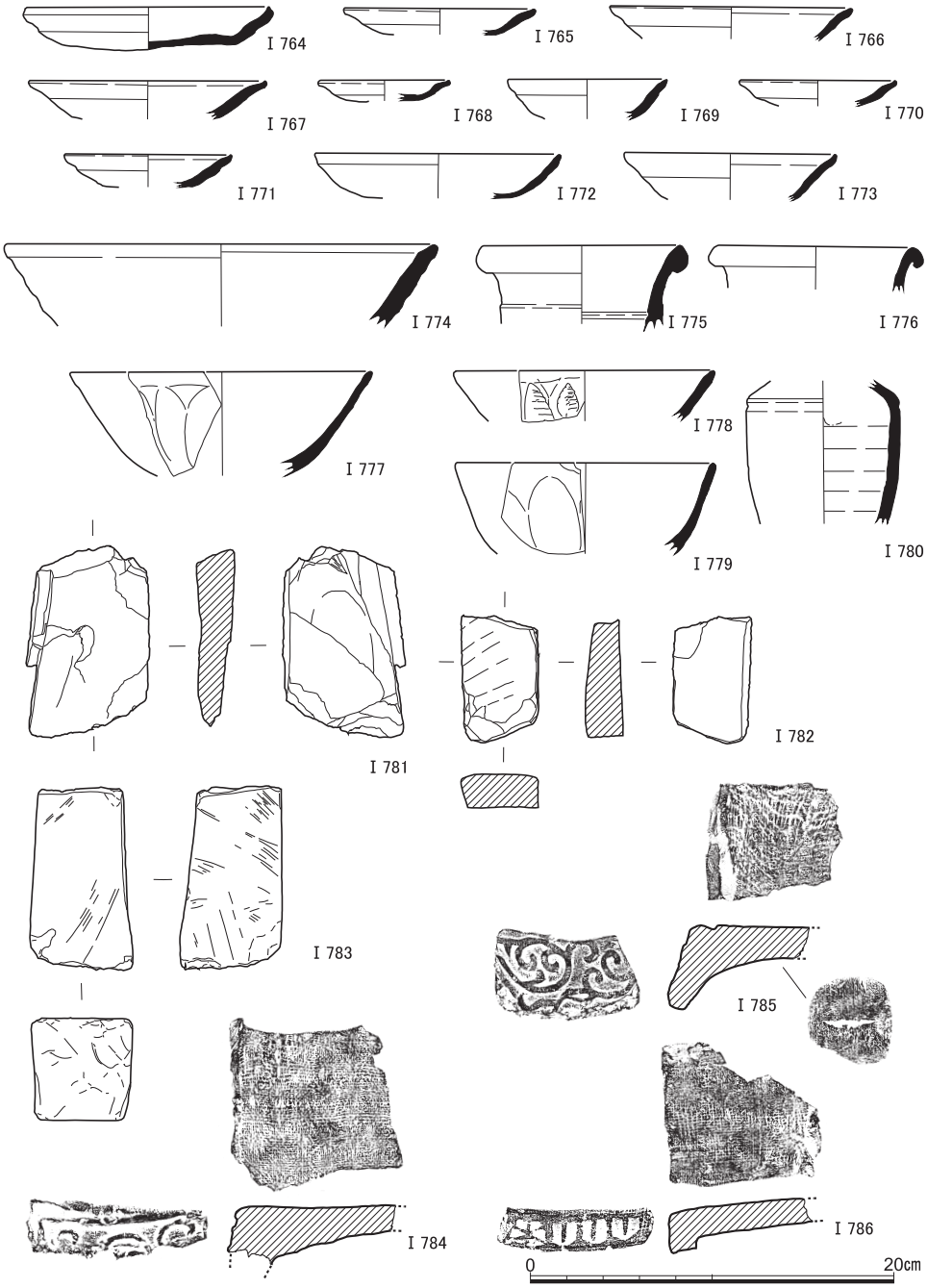


図49　ＳＤ13出土遺物（Ⅰ764～Ⅰ773土師器，Ⅰ774陶器，Ⅰ775・Ⅰ776白磁，Ⅰ777～Ⅰ780青磁，Ⅰ783砥石，Ⅰ786軒平瓦），ＳＤ10出土遺物(2)（Ⅰ781・Ⅰ782砥石，Ⅰ784・Ⅰ785軒平瓦）

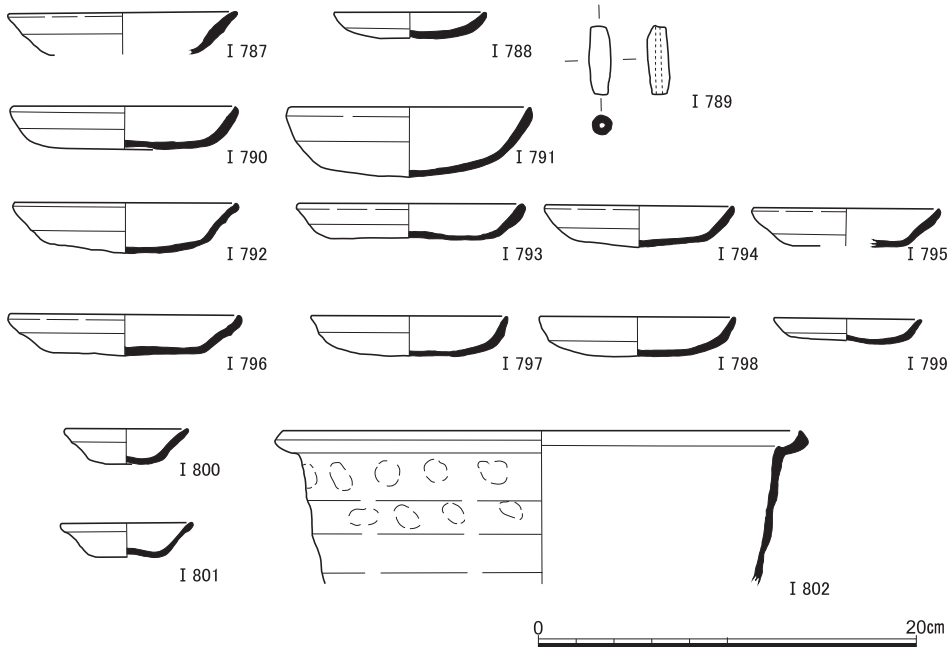


図50　ＳＤ14出土遺物（Ⅰ787土師器，Ⅰ789土製品），ＳＤ22出土遺物（Ⅰ788土師器），ＳＸ26出土遺物（Ⅰ790・Ⅰ791土師器），茶褐色土出土遺物（Ⅰ792～Ⅰ801土師器，Ⅰ802瓦器）

ＳＤ10・13出土遺物（Ⅰ732～Ⅰ786）　北区の大溝からの出土遺物。中世各時期の多様な種類の遺物を含んでいるが，土師器の椀皿類は少量である。そのなかで，Ⅰ737～Ⅰ741，Ⅰ766～Ⅰ771といった，Ｆ類の土師器が一定量含まれており，最終的な埋没は中世４期，15世紀代といえよう。陶器の摺鉢でおろし目をもつものが目立っていることも，様相として符合する。Ⅰ754～Ⅰ756は備前，Ⅰ757・Ⅰ774は信楽である。

ＳＤ14・22・ＳＸ26出土遺物（Ⅰ787～Ⅰ791）　いずれも北区北辺付近の遺構で，ＳＸ26は土師器２点の一括出土。Ⅰ787は一段撫で手法Ｅ類，Ⅰ788・Ⅰ789・Ⅰ790はＤ類の土師器皿，Ⅰ791は白色の土師器椀である。Ⅰ789は土錘。

北区茶褐色土出土遺物（Ⅰ792～Ⅰ802）　北区は，攪乱や土取り穴を含めた遺構の掘り込み部分が多数を占め，包含層としての遺存は少なく，とりあげ得た遺物も少量である。Ⅰ792～Ⅰ799は褐色を呈する土師器皿。一段撫で手法Ｄ類とＥ類が中心だが，Ⅰ797～Ⅰ799は，口縁部が直線的に立ち上がる器形で，乙訓在地形と呼ばれる系統の皿である。Ⅰ800・Ⅰ801は灰白色の凹み底小椀。Ⅰ803は瓦器鍋。中世後半期の製品だろう。

ＳＤ34・35・36出土遺物（Ⅰ803～Ⅰ820）　南区の南北溝ＳＤ34・36と，東西大溝の

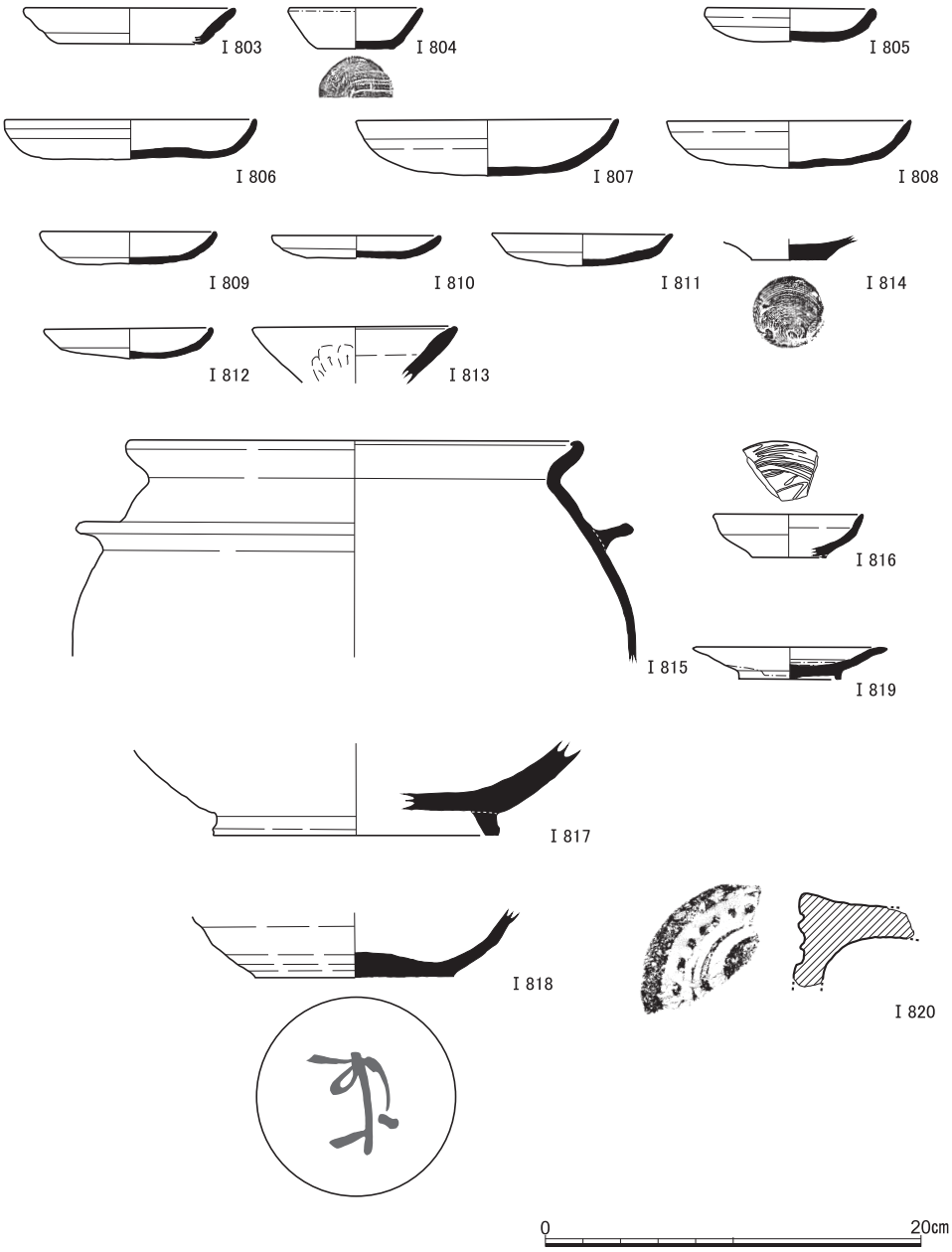


図51　ＳＤ34出土遺物（Ⅰ803土師器，Ⅰ804灰釉系陶器），ＳＤ36出土遺物（Ⅰ805土師器），ＳＤ35出土遺物（Ⅰ806～Ⅰ814土師器，Ⅰ815・Ⅰ816瓦器，Ⅰ817・Ⅰ818灰釉系陶器，Ⅰ819白磁，Ⅰ820軒丸瓦）

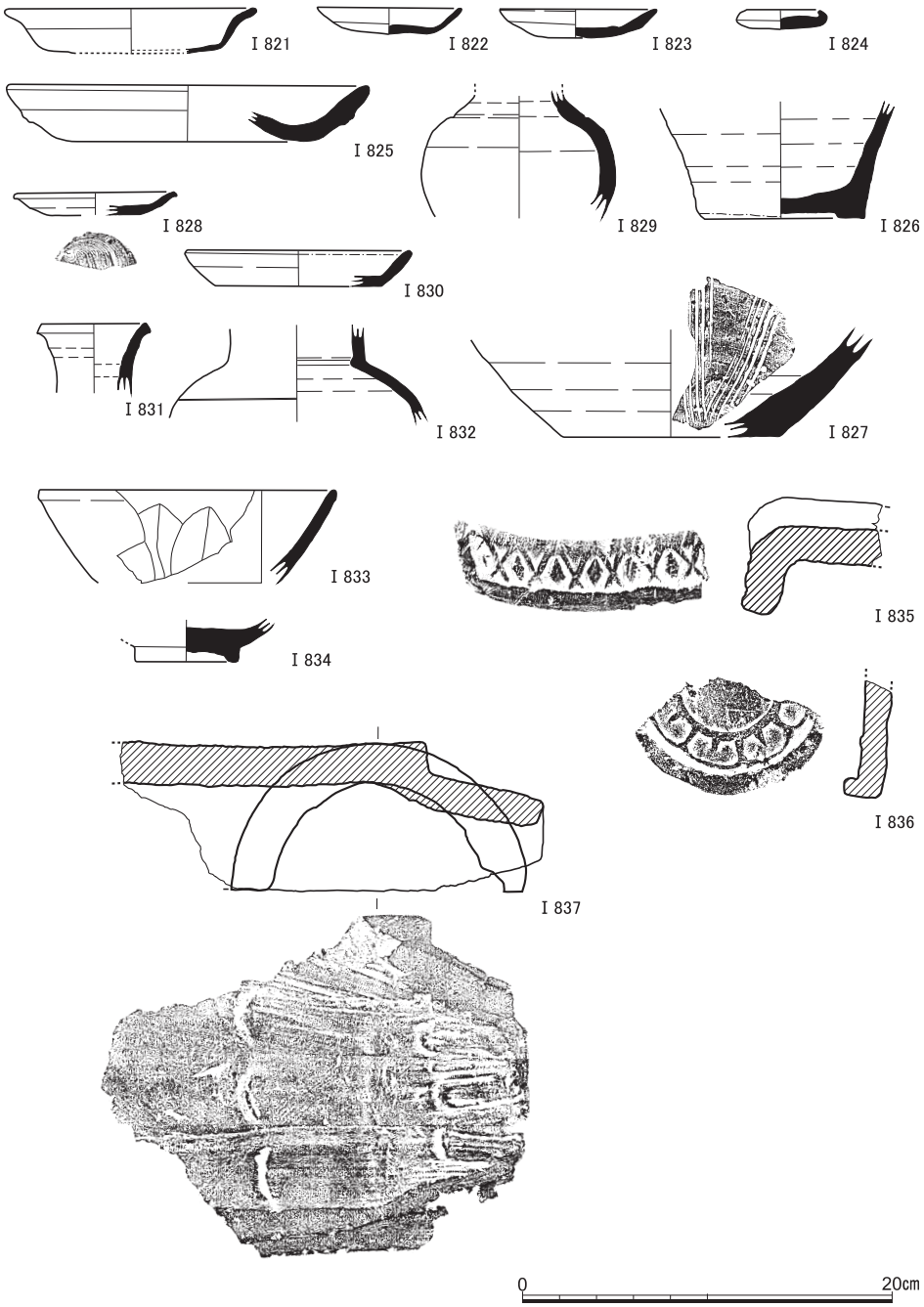


図52　ＳＸ61出土遺物（Ⅰ821～Ⅰ825土師器，Ⅰ826･Ⅰ827陶器，Ⅰ828灰釉系陶器，Ⅰ829褐釉陶器，Ⅰ830～Ⅰ832白磁，Ⅰ833・Ⅰ834青磁，Ⅰ835軒平瓦，Ⅰ836軒丸瓦，Ⅰ837丸瓦）

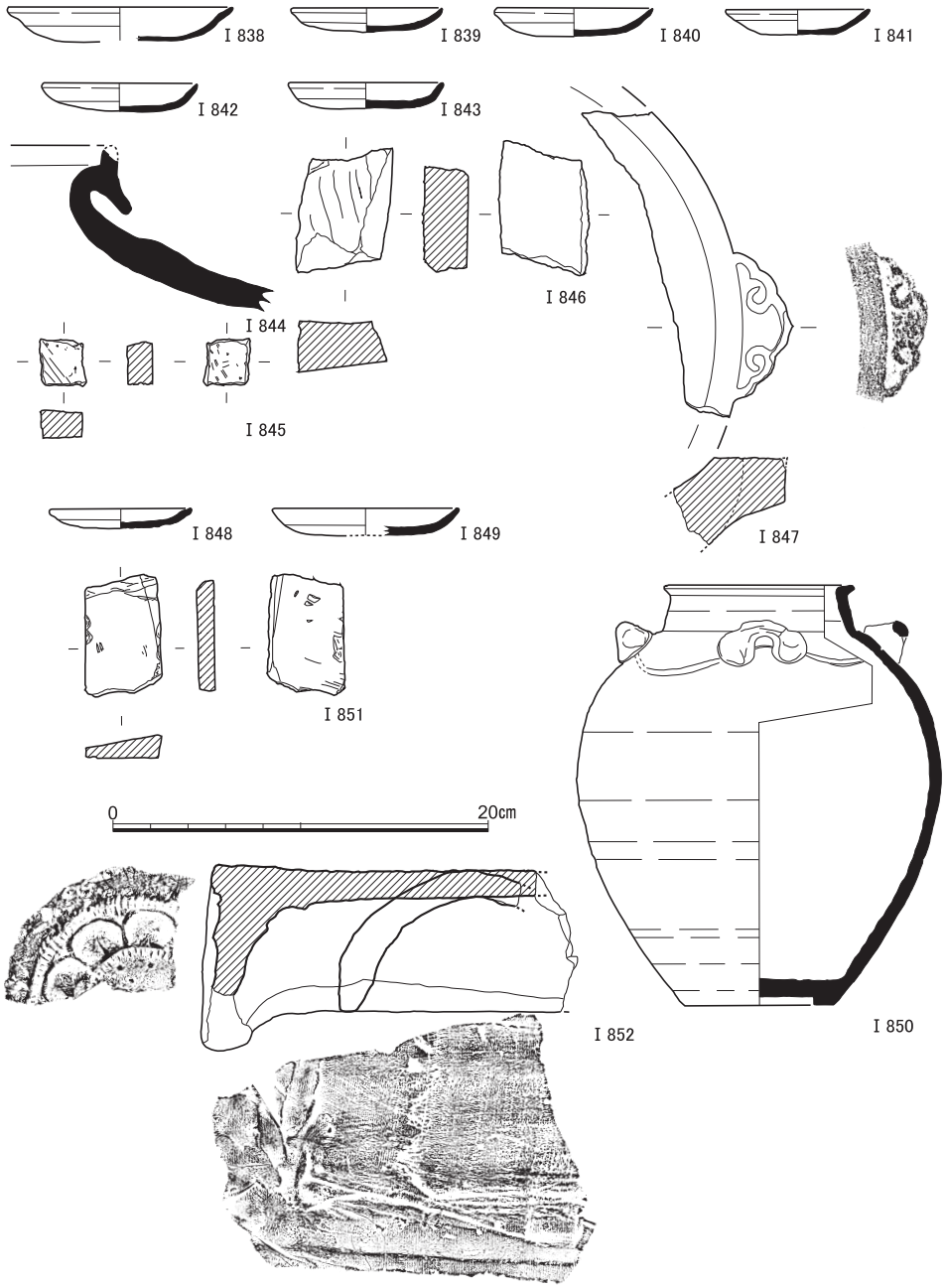


図53　ＳＸ62出土遺物（Ⅰ838～Ⅰ843土師器，Ⅰ844陶器，Ⅰ845・Ⅰ846砥石，Ⅰ847石製品），ＳＸ63出土遺物（Ⅰ848・Ⅰ849土師器，Ⅰ850褐釉陶器，Ⅰ851砥石，Ⅰ852軒丸瓦）

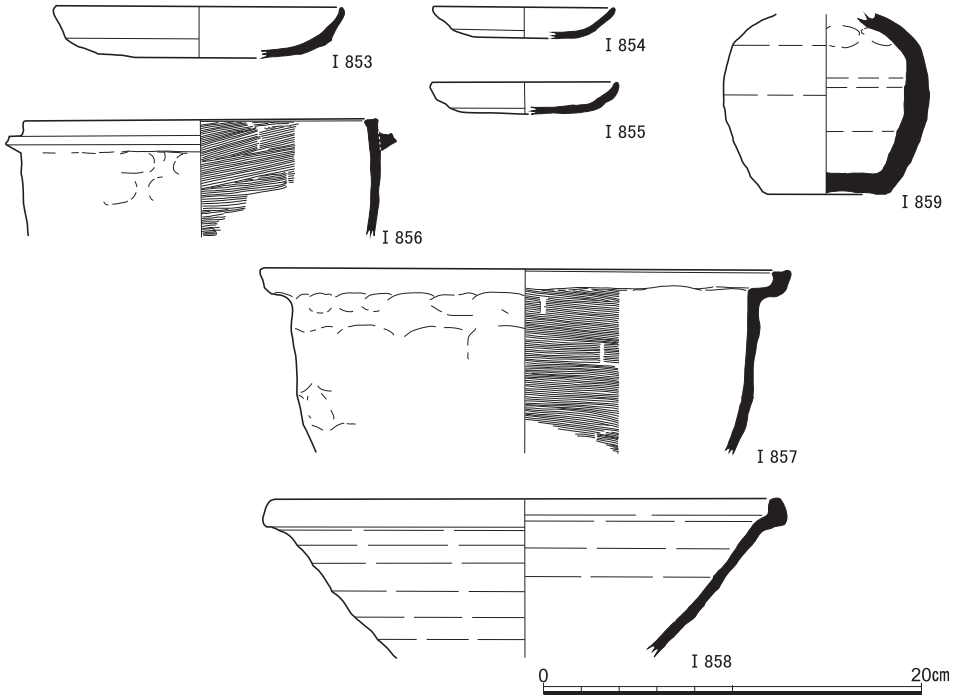


図54　ＳＰ279出土遺物（Ⅰ853～Ⅰ855土師器），ＳＰ277出土遺物（Ⅰ856瓦器），ＳＰ165出土遺物（Ⅰ857瓦器，Ⅰ858須恵器，Ⅰ859陶器）

ＳＤ35からの出土遺物。ＳＤ35は中世１期の土師器皿類ほか各種の遺物が出土している。Ⅰ806はＤ類，Ⅰ807～Ⅰ812は乙訓在地形と呼ばれるもの。Ⅰ813は厚手の器壁をもち，外面を下から上へ削りあげて調整している特異なもの。時期が異なる製品かも知れない。Ⅰ814は回転糸切り痕を残す底部で，白色を呈する。Ⅰ815は大和形とされる土釜で，外面に煤が濃く付着している。Ⅰ817・Ⅰ818は灰釉系陶器の摺鉢と椀の底部で，後者には墨書が認められるが，判読不明である（図版17）。

ＳＸ61・62・63出土遺物（Ⅰ821～Ⅰ852）　南区の建物ＳＨ１周囲で検出された集石遺構に関連する遺物である。各時期の遺物が混在しているが，中世３期が主体である。土師器皿類は少なく，陶磁器や瓦の大破片が目立つ。Ⅰ821～Ⅰ823はＥ類の皿，Ⅰ825はオオヤツカサ土器である。Ⅰ827は陶器備前の摺鉢，Ⅰ828は同じ備前とみられる小壺。Ⅰ837は丸瓦の玉縁部分で，内面に布目と吊り紐圧痕，外面は刷り消しされた細かな縄叩き痕。Ⅰ847は花崗岩製の装飾品の一部で，唐草風の浮き彫り装飾を施した把手が付された，径40cm弱の浅い皿状のものとみられる。

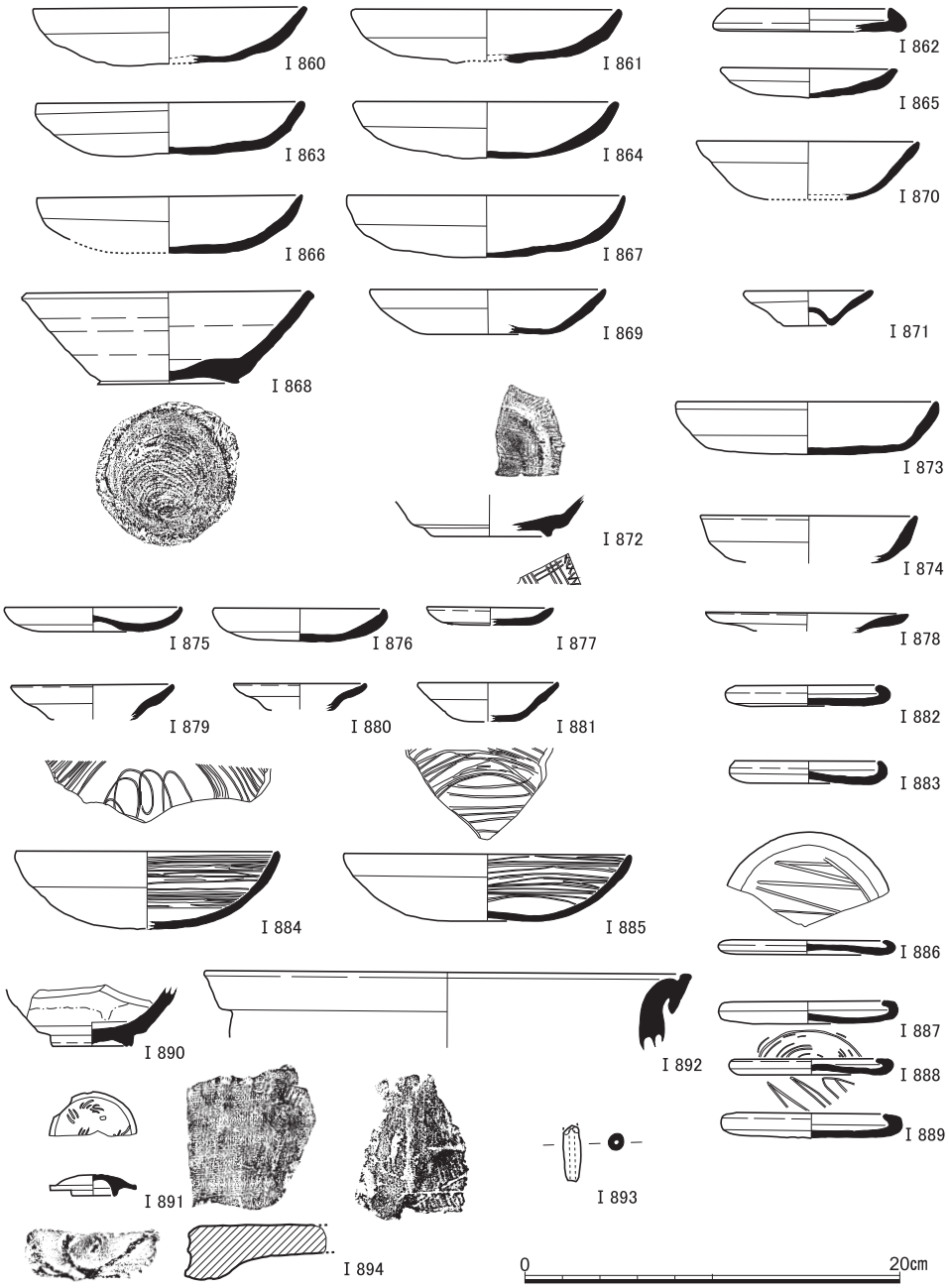


図55　ＳＸ14出土遺物（Ⅰ860～Ⅰ862土師器），ＳＸ18出土遺物（Ⅰ863～Ⅰ865土師器），ＳＸ22出土遺物（Ⅰ866・Ⅰ867土師器），ＳＸ23出土遺物（Ⅰ868灰釉系陶器），ＳＸ24出土遺物（Ⅰ869～Ⅰ871土師器，Ⅰ872灰釉系陶器），北区不形土坑出土遺物（Ⅰ873～Ⅰ883土師器，Ⅰ884～Ⅰ889瓦器，Ⅰ890灰釉系陶器，Ⅰ891白磁，Ⅰ892陶器，Ⅰ893土製品，Ⅰ894軒平瓦）

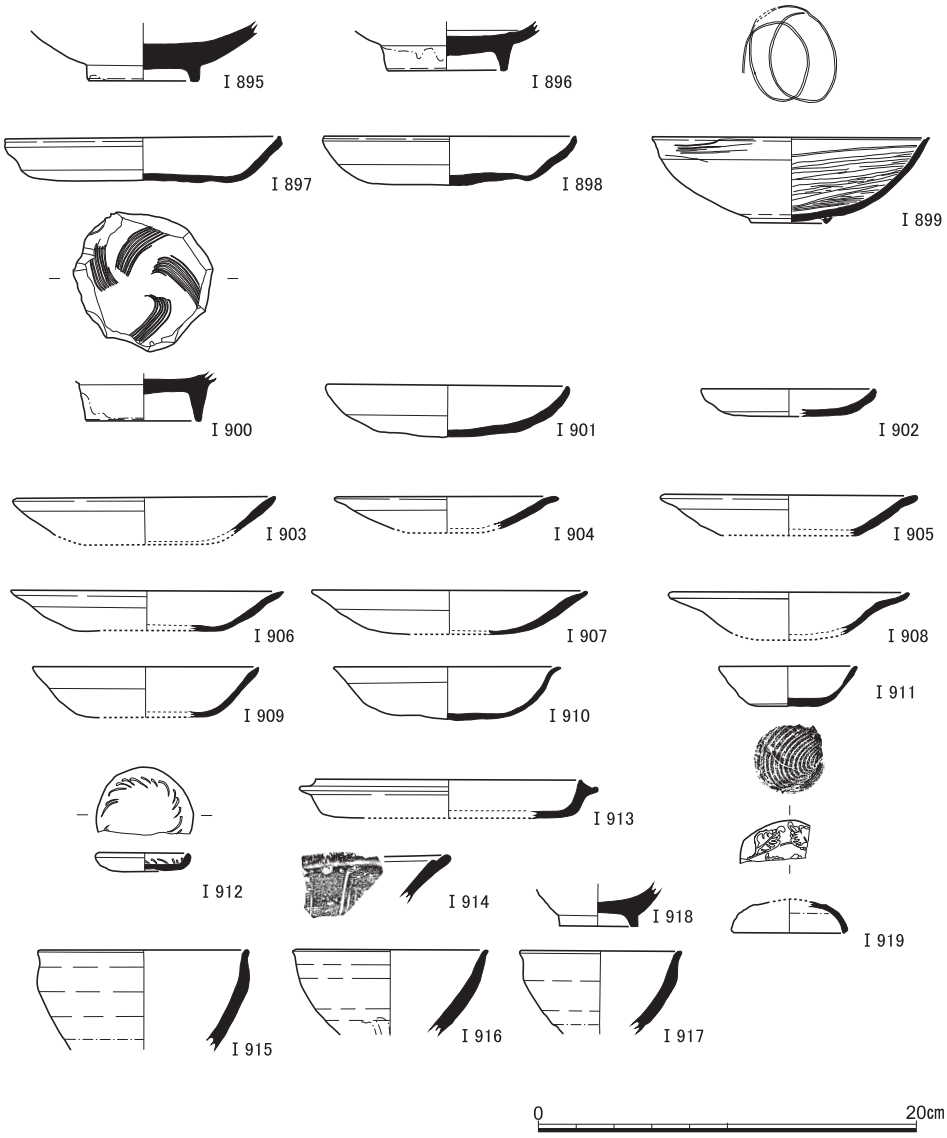


図56　ＳＸ42出土遺物（Ⅰ895青磁，Ⅰ896白磁），ＳＸ47出土遺物（Ⅰ897･Ⅰ898土師器，Ⅰ899瓦器，Ⅰ900白磁），ＳＥ11出土遺物（Ⅰ901・Ⅰ902土師器），南区不定形土坑出土遺物（Ⅰ903～Ⅰ912土師器，Ⅰ913瓦器，Ⅰ914～Ⅰ917灰釉系陶器，Ⅰ918須恵器，Ⅰ919白磁）

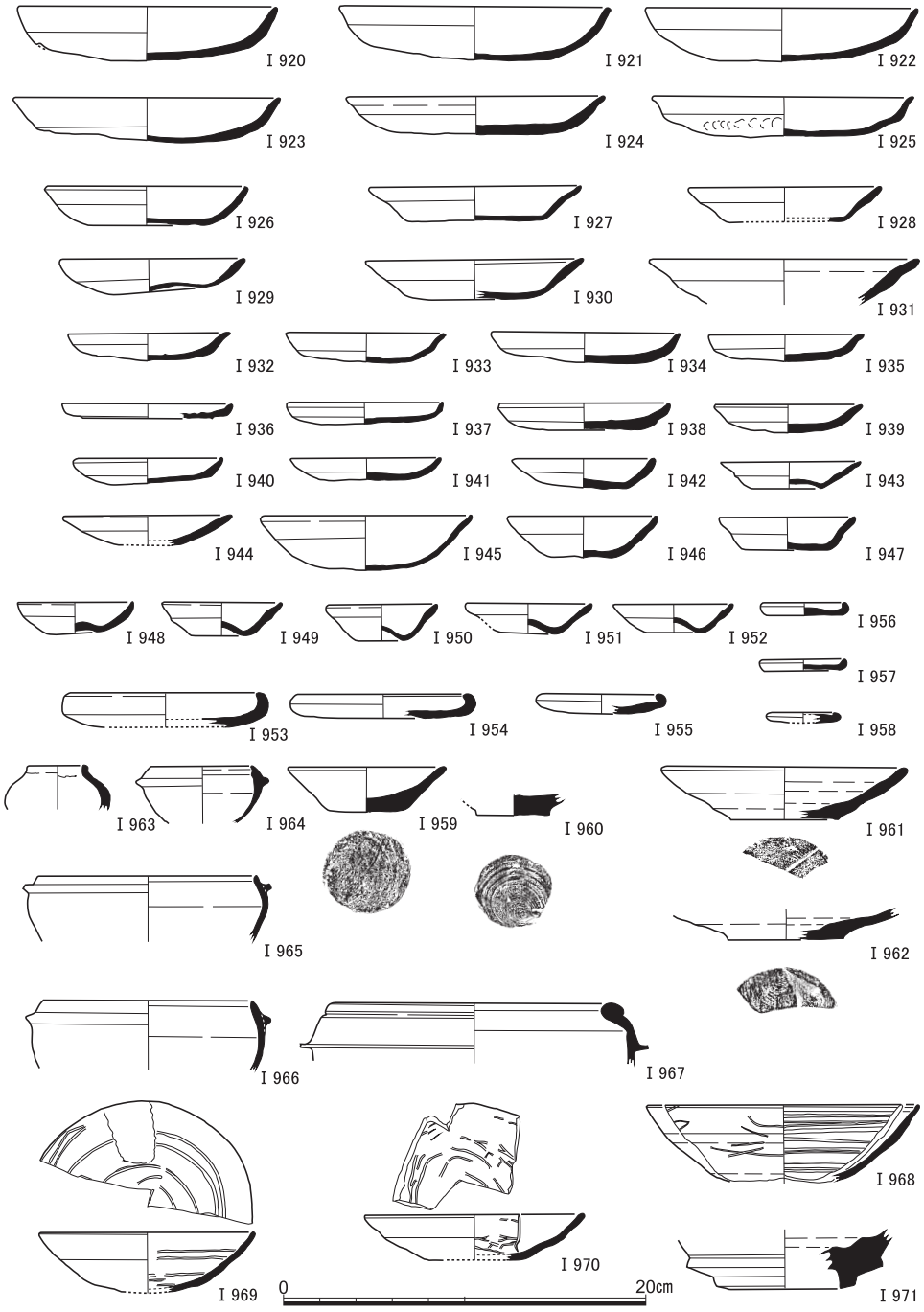


図57　茶褐色土出土遺物(1)（Ⅰ920～Ⅰ967土師器，Ⅰ968～Ⅰ971瓦器）

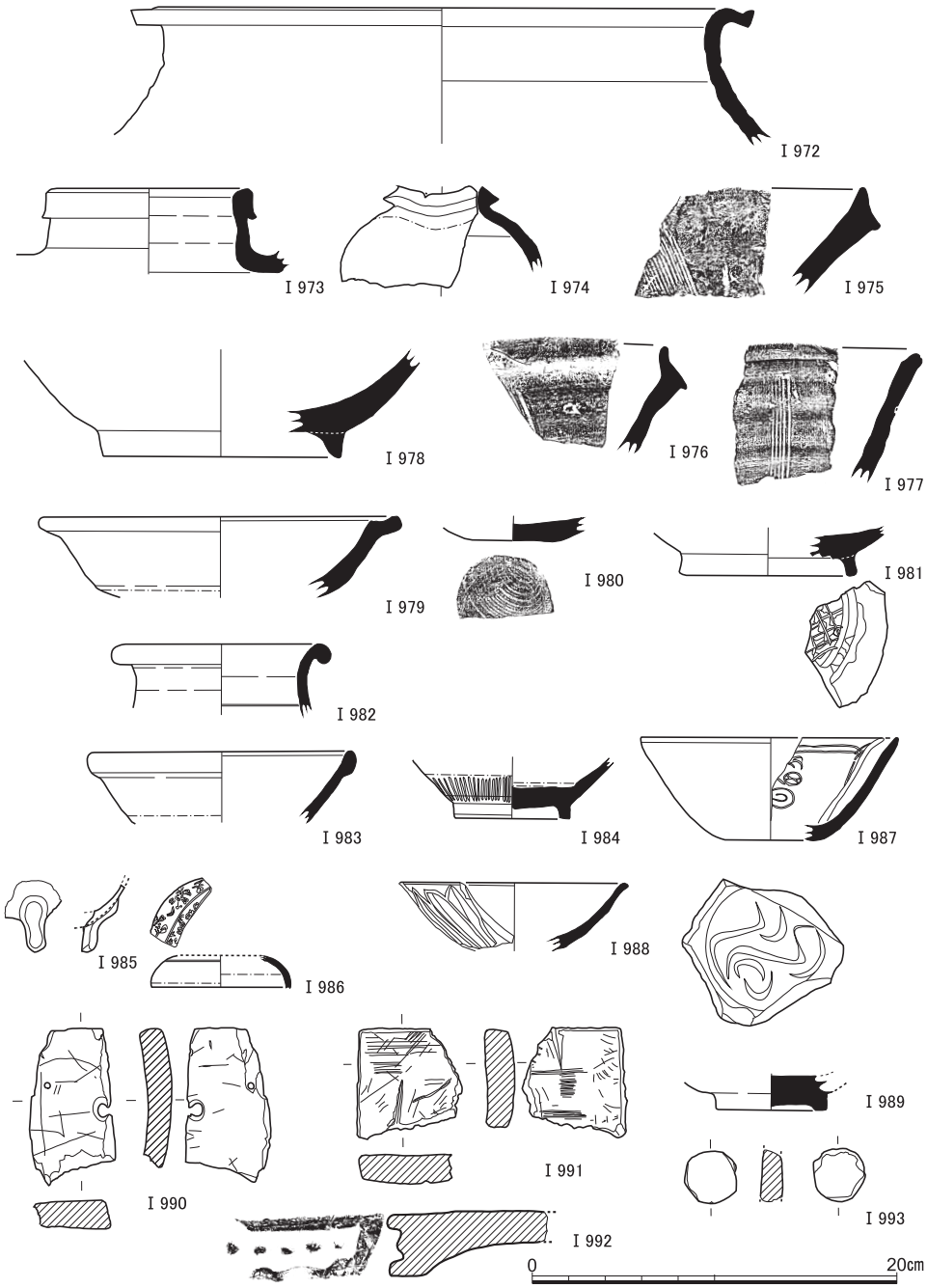


図58　茶褐色土出土遺物(2)（Ⅰ972～Ⅰ977陶器，Ⅰ978～Ⅰ981灰釉系陶器，Ⅰ982～Ⅰ986白磁，Ⅰ987～Ⅰ989青磁，Ⅰ990・Ⅰ991滑石製品，Ⅰ992軒平瓦，Ⅰ993土製品）

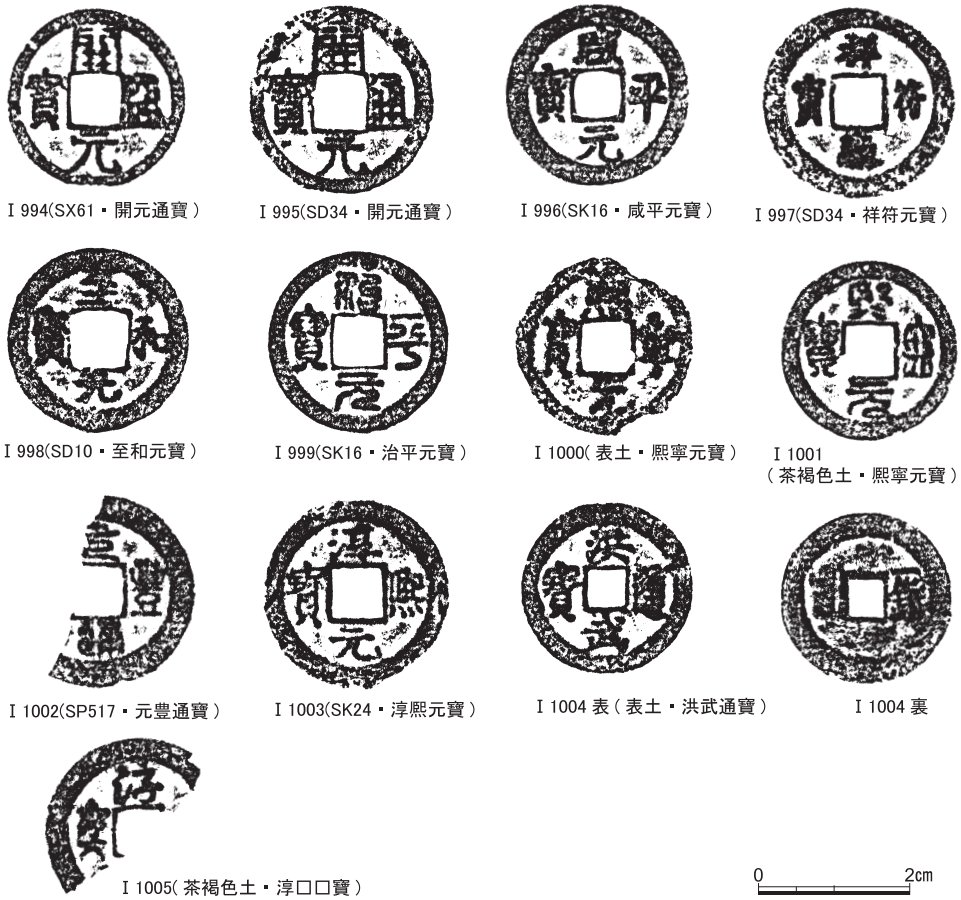


図59　出土銭貨の種類と出土遺構（Ｉ994～Ｉ1005）　縮尺1/1

ＳＰ277・279出土遺物（Ｉ853～Ｉ856）　ＳＨ１の下面にあるピットからの出土遺物である。ＳＤ35とともにＳＨ１に先行する遺構として，建物の存続期間を考える際の上限の手がかりとなろう。Ｉ853～Ｉ855の土師器皿類はいずれも厚手のＤ類であり，中世１期，13世紀代に比定できる。したがって，ＳＨ１はそれより後の時期に建てられ，上記ＳＸ61～63が示すような，中世後半期のうちに廃絶したと考えることができよう。

ＳＰ165出土遺物（Ｉ857～Ｉ859）　南区中央の小規模な土坑の出土遺物。Ｉ858は東播系の須恵器摺鉢で，口縁が上方にしっかりと立ち上がる形態をとることから，中世後半期の製品だろう。Ｉ859は，Ｉ828に特徴を同じくする備前とみられるの陶器小壺。

ＳＸ14・18・22～24・北区不定形土坑出土遺物（Ｉ840～Ｉ894）　ＳＸ14・18・22～

24は，北区の不定形土坑の埋土内から一括で出土した遺物や集石遺構に遺構名を付したものであり，不定形土坑にともなう出土遺物と同列に考えて良い。土師器皿類の様相でみると，Ｉ863はＤ類，Ｉ860･Ｉ861･Ｉ864～Ｉ867は乙訓在地形と呼ばれる特徴をもつもので，中世１期の資料と言えるが，Ｉ871のように，灰白色を呈する凹み底の小椀でも後出の形態をとるものや，Ｉ878～Ｉ880といった，Ｅ類でもＥ$_3$・Ｅ$_4$類とされるものが含まれる。よって，土の採取そのものは中世後半期にもっぱら為され，そのさいに先行する中世前半期の遺構を破壊したことが，こうした遺物の様相に反映しているものと思われる。Ｉ892の陶器常滑の甕も，上下に大きく肥厚する形状で，中世後半期の特徴を示している。ただし，中世前半期の遺物も遺存状態は良好であり，Ｉ884～Ｉ889の瓦器椀や受皿などがある。

ＳＸ42・47・南区不定形土坑出土遺物（Ｉ895～Ｉ917）　上記の北区不定形土坑と一連の土取りの遺構といえるもので，ＳＸ42は埋土上面の集石遺構，ＳＸ47は埋土内で検出された土器溜であり，２次堆積の可能性が高い。中世前半期の遺物とともに，Ｉ903～Ｉ908といったＦ類の土師皿が出土している。北区と同様に，中世後半期が不定形土坑の形成時期であることを示すとともに，北区ではこうしたＦ類の土師器皿類は目立たないことから，南区不定形土坑の方がより後出の遺構である可能性があろう。Ｉ914の陶器摺鉢片や，Ｉ915～Ｉ917の灰釉系陶器の天目なども，中世後半期以降の特徴を示すものであり，遺構の形成時期が下ることを傍証する状況と言える。

南区茶褐色土出土遺物（Ｉ920～Ｉ993）　南区の包含層からは，中世各段階の各種の遺物が出土している。土器溜などの内容を反映して，Ｉ920～Ｉ925・Ｉ932～Ｉ937といった，中世前半期の乙訓在地形土師器と呼ばれる土師器皿類が目立っている。

銭貨（Ｉ994～Ｉ1005）　中世以前に鋳造年をもつ銭貨のうち，銭種が判読できるものをすべて掲げた。

北側に隣接する378地点では，調査面積1700㎡で160点の渡来銭出土が報告されている。今回は，南北両調査区合わせた調査面積はそれを上回るにも関わらず，銭貨の出土は１割にも満たない。遺跡の残りの悪さを差し引いても，明らかに出土量に差があるといえる。

6　所謂「乙訓在地形土師器」と呼称される中世土師器皿類について

今回，南区の土器溜ＳＸ48からは，これまで構内遺跡で出土してきた中世土師器皿と特徴を違えるものがまとまっており，平安京･中世京都において，近年「乙訓在地形土師器」（以下，「乙訓形」と略す。また従来通有の土師器皿は「京域主流形」とする。）と呼称さ

れている一群に相当すると判断された。この呼び名については，管見では京都市埋蔵文化財研究所による御所内の京都迎賓館建設にともなう調査（1998～2001年）で出土した一群の資料について速報紹介されたのが最初のようであり〔加納・丸川2002〕，その後報告書でも踏襲されている〔加納2004〕。

しかし，同種の特徴をもつ土師器皿類の存在については，そのかなり以前から知られていた。京都府教育委員会による市内の内膳町遺跡の報告を主担した伊野近富氏を中心に「D類」として類型区分された一群がそれである〔京都府教育委員会1980　p.181〕。また平安京域内での古代～近世における土師器編年が体系化された際にも「主体を成す土師器以外の土師器食器類」として紹介されている〔小森・上村1996　p.251〕。そして，その製作地を伊野氏は楠葉ではと想定し〔伊野1987〕，小森氏は乙訓産ではと想定しつつ，近似するものは旧三島郡域にも存在するとも指摘している。

以上のように，「乙訓形」は，その名称の示すように乙訓産の搬入品であるかどうかについては，即断できないのが実情である。こうした流れをふまえながら，今回は便宜的に「乙訓形」としたけれども，ここであらためてその内容を簡潔に検討し確認しておく。

「乙訓形」とされるものの特徴　まず，既往の言説で指摘されている「乙訓形」の特徴について，概観しておこう。器形は，底部からのたちあがりが直線的であり，口縁端部を外反気味に処理して，面取りはしない。器壁も厚手。おおむね大小の２つの法量規格がある。白色を呈するものはない。ほか，胎土中に金雲母を含有する，内面の刷毛調整が目立つという記述もみられるが，これらの点に関しては，乙訓形のみに限定できず，それ以外の「京域主流形」にも認められ，同定の根拠とならないといえる。もっとも特徴的なのは器形と思われ，平らに近い底部から直角に近い角度でまっすぐ立ち上がる輪郭は，丸みを帯びた皿形で斜め上方にカーブを描いて立ち上がる「京域主流形」と明らかな違和感を感じさせる。また，口縁端部の仕上げに面取りを行い，断面形が三角形を呈する形状のものが基本の「京域主流形」に対して，面をもたないことも大きな違いであるが，この点については折衷的な様相を示す資料の存在が報告されているので，認定の決め手にはならないと言えよう。

今回出土品（ＳＸ48）の特徴　今回のＳＸ48からの出土資料については前節で報告したところであるが，あらためてまとめると，口縁部計測法で110.8個体のうち，およそ９割以上が「乙訓在地形」的特徴を示す個体であった。法量では９㎝と14㎝にピークをもちつつ，15㎝を越えるものも一定量あり，総じて大皿が「京域主流形」とくらべてやや法量

が大きい印象を受ける。胎土の違いははっきり指摘できないが，色調は赤みを帯びた明るい橙色を基調とし，褐色～灰褐色系の色調が基本の「京域主流形」と異なっている。口縁端部の仕上げ形態は複数ある。煤など使用の痕跡は特に無い。

「乙訓形」が盛行する時期と分布圏　以上の特徴を持つ土器群は，管見する限り，平安京域では散発的な出土にとどまっており，さきの京都迎賓館建設地点でのまとまった出土は例外的と言える。京都大学構内遺跡でも，注意していくと，13世紀代を中心に抽出することができる。例えば北側に隣接する吉田南構内の378地点〔例えば冨井ほか2015　図34－Ⅰ141・Ⅰ142〕や，医学部構内の358地点〔伊藤2013　図57－Ⅱ264〕などで既出である。ただし，それのみがまとまって出土するあり方は今回が初めてであり，旧平安京域や鴨東地域は，これらが主体となる空間からは外れていると言って良かろう。

一方，桂川を超えた乙訓地域では，良好な一括出土の事例に乏しい状況であるが，大山崎町松田遺跡（長岡京右京1008・1023次ＳＤ01）などの出土品を見る限りでは，少なくとも13世紀代は土師皿の主体がこのタイプとなっている〔京都府埋文研2012　第10図〕。「乙訓在地形」と呼ばれる所以といえるが，しかし，さらに西方の摂津でも，高槻市域の上牧遺跡などでも類似の器形が主流であり〔高槻市教育委員会1980　第12図－22～41など〕，また，対岸の八幡市域の石清水・木津川河床・上津屋遺跡などや，枚方市域などでも同様な様相といえる。小森俊寛氏により地域色の強いＬｏ形式と分類されるのは，この種の土師器に相当しよう〔八幡市教育委員会2003　p.15〕。

西限や北限について明確には確かめていないが，宇治以南の南山城地域では主流とならないようであり，精華町椋の木遺跡ではこの種の土器はほとんど認められない。よって，いわば三川合流地帯周辺の乙訓･北河内･東摂といった空間の13世紀代ごろが，これら「乙訓形」の主体となる範囲とみられる。こうした状況に鑑みると，「乙訓形」との名称を付していても，乙訓産と限定はできない，という評価が妥当であろう。乙訓地域は主体的分布圏だが，産地としては限定できないということであり，胎土での区別も現状では難しいと思われる。

「乙訓形」出土の意味　ここで注目しておきたいのは，楠葉形瓦器椀との類似点である。口縁端部付近を強い撫でにより外反させる点は，「京域主流形」でも同様であるが，端部を面取りしない「乙訓形」は，端部の外反が，より瓦器椀に近い器形のラインを描いているように思われる。また，瓦器には皿形もごく少量あるが，その器形には，所謂「乙訓形」の小皿にきわめて近いものが認められる（例えば，高槻市宮田遺跡出土品〔高槻市

教育委員会1980　第30図－23～26〕，京都大学本部構内ＡＸ25・26区ＳＤ５出土品〔古賀1999　図38－Ⅱ164～Ⅱ170〕など)。こうした理解が正しいとすれば，楠葉形瓦器の技術を持った集団が，「乙訓形」土師器の製作に関与しているのではないか，という推測も可能となろう。

楠葉については，「楠葉御牧」という摂関家の私領としての存在とともに，古代以来の土器製作についての文献史料が多数知られ，黒色土器～瓦器についても，生産遺跡が判明している〔宇治田1991〕。ところが，残念ながらその地における土師器生産の様相については，判然としていない。今後それらに注目して，具体的状況を明らかにしていくことが急務となろう。

さて，こうした「乙訓形」の京内でのスポット的出土の様相については，荘園貢納品としての解釈が示唆されているが〔加納2004〕，史料などによる根拠はない。局所的な出土のありようは，商品としての流通であることの否定材料ではあろうが，貢納品であったかどうかはさておき，当時の製作集団が，土地の領主とは限らない権門に付属するという複雑な隷属関係は考慮しておく必要はあろう〔脇田1995〕。

14世紀代以降，大和を中心とする新興寺社勢力の台頭，土器製作集団の専業化や商品化という流れに呼応して，樟葉の窯業生産も衰退していくとみられる。それまでは摂関家を中心とする公家層の差配する土師器の生産と流通であったとすれば，「京域主流形」の不足を補うものとして，摂関家の密接に関与する「乙訓形」が補填された可能性は十分にあり得よう。逆に言えば，13世紀代に顕著な事態であるとするならば，それこそが，いまだ平安時代的な状況を継承していた当時の土師器生産と流通の性格を示している，と評価できるのかもしれない。そして，福勝院比定地の近傍という，調査地の立地を考慮するならば，今回の出土そのものは不自然な事態ではないと言うことができよう。

7　近世・近代の遺跡

表土を除去すると，攪乱により破壊を被っていない部分については，おおむね全域で近世の遺物包含層である灰褐色土が堆積している。その灰褐色土を除去して検出されるのが近世の遺構である。本節では，そうした近世遺構とそこからの出土遺物に加えて，表土や攪乱坑中から採集された，近代の大学設置以降の磁器類についても，調査地の歴史的変遷を検討するうえでの重要資料と考え，合わせて報告する。

⑴ 遺　　構（図版２・３・６・７・９，図60）

南・北両調査区とも，東半域は，農耕用の柵の柱穴である方形の小ピット以外の顕著な遺構はみられない。一方，西半域は南北方向にはしるや区画や溝などがみられる。

西へと下る段差と関連遺構　北区ではＹ＝2080付近と2090付近に，南区ではそれよりやや西寄りに，西へと下る棚田状の段差が形成されている。東側のラインは，比高差10㎝程度のごく浅いものだが，西側のラインは，南へ向かうほど段の比高差が増していき，南区では１ｍ近くに達している。この西側ラインはおおむね近世段階の字界に対応しており，土地区画として重要なものであったといえる。Ｘ＝1240付近では，東西方向に北側へも下る小さな段差も認められる。段差を下った側の西側は，中世の不定形土坑群の広がるエリアであり，南区の場合は，土の採取によって生じた高低差がそのまま段差の高低差となっていることが，比高差が増している原因となっている。近世においては，不定形土坑が埋積して平坦化され，畑地となっており，包含層である灰褐色土を除去すると，全面に柵の柱穴痕である小ピットが検出されるほか，南区北壁際付近では複数の野壺が切り合って検出されたほか，集石や配石，遺物溜もみつかっている。集中具合から，南北調査区間の未調査部分に，東西方向の土地区画が存在している可能性も推測されよう。段差の上場に沿っては，溝ＳＤ28をはじめ，集石をともなうような南北溝が複数みつかっている。北方の111・220地点では字界に南北方向の路面が検出されており，今回は路面こそ検出できていないものの，同様な空間であったと想定している。

なお，この段差は，19世紀代までに収まるとみられる段階の多量の陶磁器を含む土層によって一気に埋積されている。現地が帝国大学敷地となる明治30年（1897）までは，棚田状の景観が続いていたのであろう。

不定形土坑群　北区の北西域は，現地表面から２ｍ程度の深さまで掘削され，粗砂と土壌が縞状に埋積していた。埋土中からは近世末～近代初頭頃の陶磁器類や多量の礫が出土しており，状況から近世の土取穴であろう。中世段階の不定形土坑と異なり，２ｍ前後の幅の長方形に近い区画を単位として互いが隣り合うように掘削されており，かつ土坑の底面はほぼ平坦になっている。基盤の粘土層をすべからく採掘したものといえる。区画間の境がわずかに高まりとして残ることから，平面的な掘削単位をおおよそ復元することができる。一部により深く掘りくぼめた穴があり，粘土層より下部の砂層に当たって止まっていることから，掘削土の探りを入れた痕跡と考えられる。調査区の西側へのひろがりは不明であるが，北側に隣接する378地点では検出されていないことから，南北はおよそ10ｍ強程度の掘削範囲であったとわかる。東西も同様であるとすれば，100㎡程度の方形の

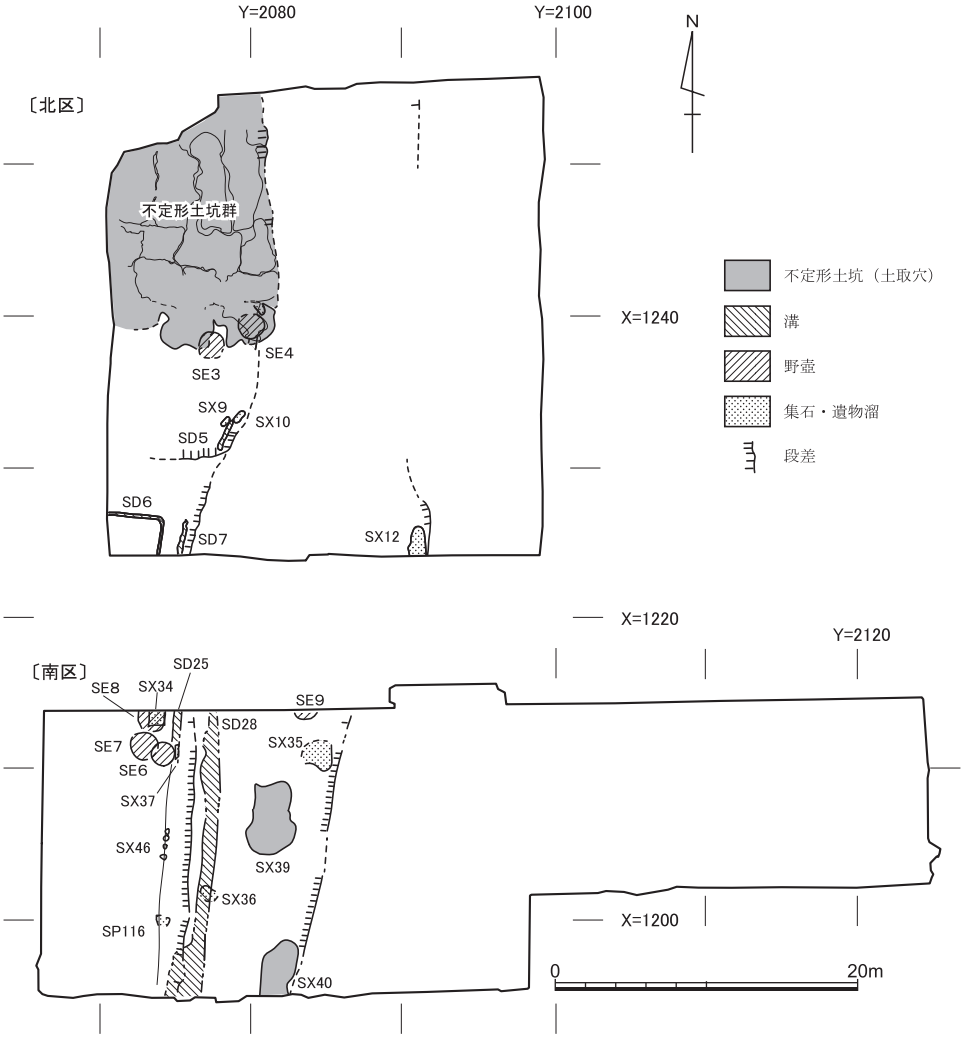


図60　近世主要遺構配置図　縮尺1/500

範囲を，規格的にきっちりと粘土を試掘した遺構であると評価されよう。

ＳＸ39・40　　南区の西側段差と東側段差の中間にある大きな土坑。深さも２m近くあり，壁面はオーバーハングしている。中世の不定形土坑や，弥生時代の流路ＳＲ１を避けるように穿たれており，形状の特徴から粘土採取の土坑と見なされる。埋積土中から近世の陶磁器類が多く出土している。

野壺ＳＥ３・４・６～９　　ＳＥ８以外，いずれも漆喰製の野壺である。

ＳＸ９・10　　北区の段差際にある，礫が充填された土坑。ＳＸ10は土師器を伴う。

ＳＸ12　北区南壁際で検出された桟瓦のまとまり。明治期以降に下る可能性もある。

ＳＸ34・36・46　いずれも陶磁器を交えた礫の集積遺構。

ＳＰ116　南区の段差際の裾部にある遺物溜。近世陶磁器が多量に集積していた。

⑵ 遺　物（図61～73）

ＳＸ10出土遺物（Ⅰ1006～Ⅰ1014）　遺存の良い近世土師器皿類を一定量含んだ遺構出土資料は，今回の調査ではこの遺構のみにとどまる。Ⅰ1006～Ⅰ1011は土師器で，Ⅰ1006～Ⅰ1008は見込みに圏線をもつ口径10cm前後の皿。黄白色を呈する。これらの法量や器形の特徴は，〔小森･上村1996〕のⅩⅢ期，18世紀代に収まる段階の資料と位置づけたい。Ⅰ1009・Ⅰ1010は手づくねの小皿，Ⅰ1011はやや高さのある器形で，底部に回転糸切り痕を残す。Ⅰ1013は京・信楽焼系の椀底部，Ⅰ1014は備前の摺鉢。

ＳＥ３・４・６・７出土遺物（Ⅰ1015～Ⅰ1037）　野壺からの出土遺物。陶磁器類の各種の破片が出土している。Ⅰ1018やⅠ1022のように広東椀と呼ばれる丈高の高台をもつ染付椀が含まれることから，19世紀代に下る時期の資料を含むといえる。

ＳＰ116出土遺物（Ⅰ1038～Ⅰ1078）　Ⅰ1038～Ⅰ1044は土師器で，圏線をもつ皿Ⅰ1038・Ⅰ1039および特殊な厚手の製品Ⅰ1044には，内外面に煤の付着が著しい。Ⅰ1042は五徳，Ⅰ1043は炮烙であろうか。Ⅰ1045・Ⅰ1046は黄褐色に施釉される軟質施釉陶器。Ⅰ1047以下は，陶磁器の各種で，「くらわんか手」の染付椀や，瀬戸系とみられる鉢などが目立つ。おおよそ18世紀後半代が中心となる資料群であろう。

ＳＤ28出土遺物（Ⅰ1079～Ⅰ1085）　少量の土師器や陶磁器類が出土している。上記のＳＰ116出土遺物と内容的には共通している。

ＳＸ39・40・46出土遺物（Ⅰ1086～Ⅰ1120）　18・19世紀代にわたる各時期各種類の遺物が出土している。Ⅰ1086～Ⅰ1096・Ⅰ1114は土師器。見込みに圏線をもつ皿と，手づくねの小皿が中心であるが，残りは良くない。Ⅰ1097は灯火具かとみられる小形の器台状製品。淡緑色の釉がかかる。Ⅰ1098～Ⅰ1102・Ⅰ1115は陶器灯明皿や灯明受皿。Ⅰ1108～Ⅰ1112・Ⅰ1118・Ⅰ1119は磁器染付各種。

不定形土坑群出土遺物（Ⅰ1121～Ⅰ1165）　18・19世紀代にわたる各時期各種類の遺物が出土している。Ⅰ1121～Ⅰ1132は土師器。Ⅰ1131焼塩壺の蓋で，内面に布目をもち，外面には，容器と紐で結束する際のかかりとなるような切れ込みが２カ所に施されている。Ⅰ1132は皿状の器形の内面とみられる側に，「徳」の陰刻が施されている。Ⅰ1135は，小片であるが，特徴からみて乾山焼の角皿口縁部の一部とみられる。同種の資料は病院構内

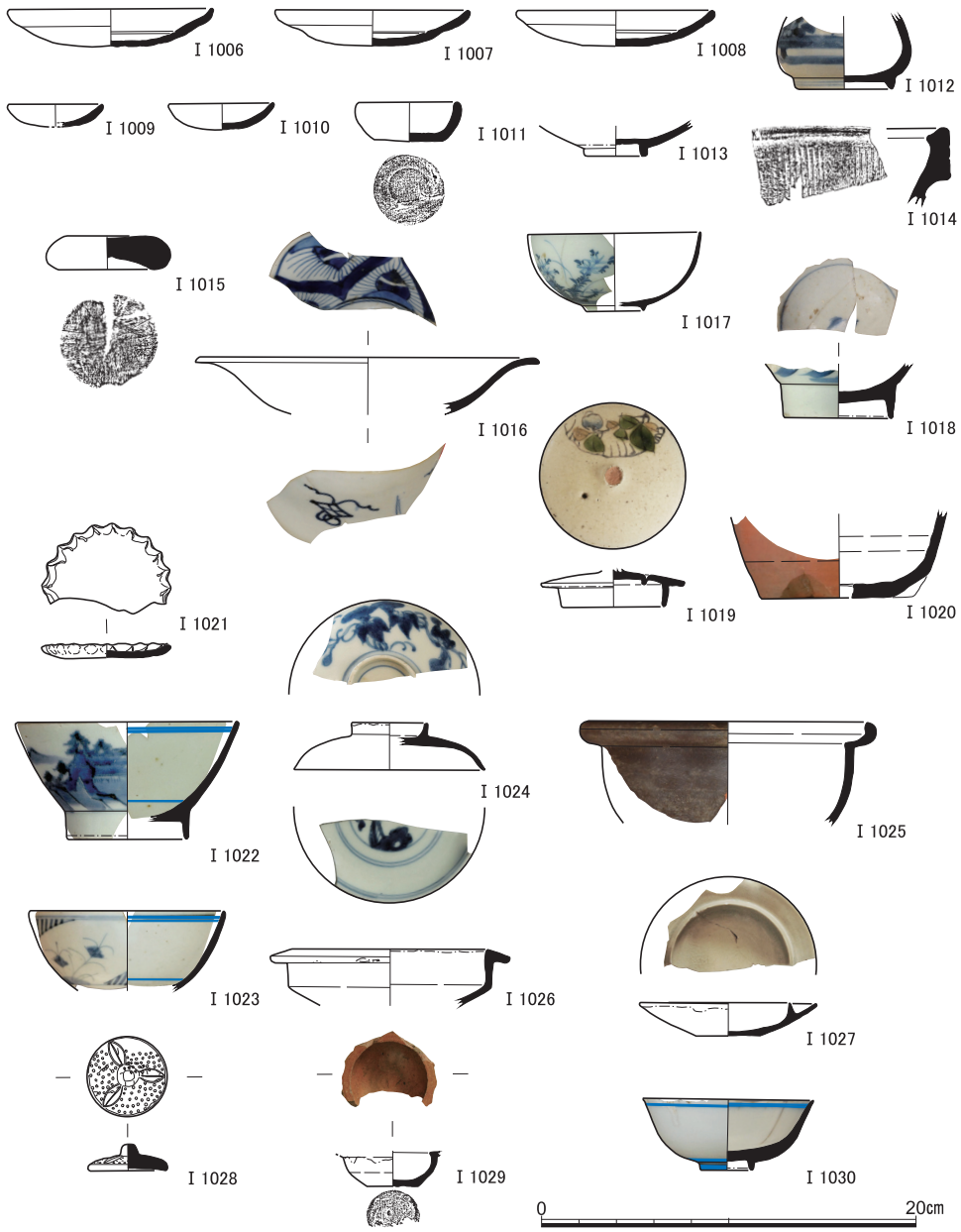


図61　ＳＸ10出土遺物（Ⅰ1006～Ⅰ1011土師器，Ⅰ1012磁器染付，Ⅰ1013・Ⅰ1014陶器），ＳＥ３出土遺物（Ⅰ1015土師器，Ⅰ1016～Ⅰ1018磁器染付，Ⅰ1019・Ⅰ1020陶器），ＳＥ４出土遺物（Ⅰ1021土師器，Ⅰ1022～Ⅰ1024磁器染付，Ⅰ1025～Ⅰ1027陶器），ＳＥ６出土遺物（Ⅰ1028土師器，Ⅰ1029陶器，Ⅰ1030磁器染付）

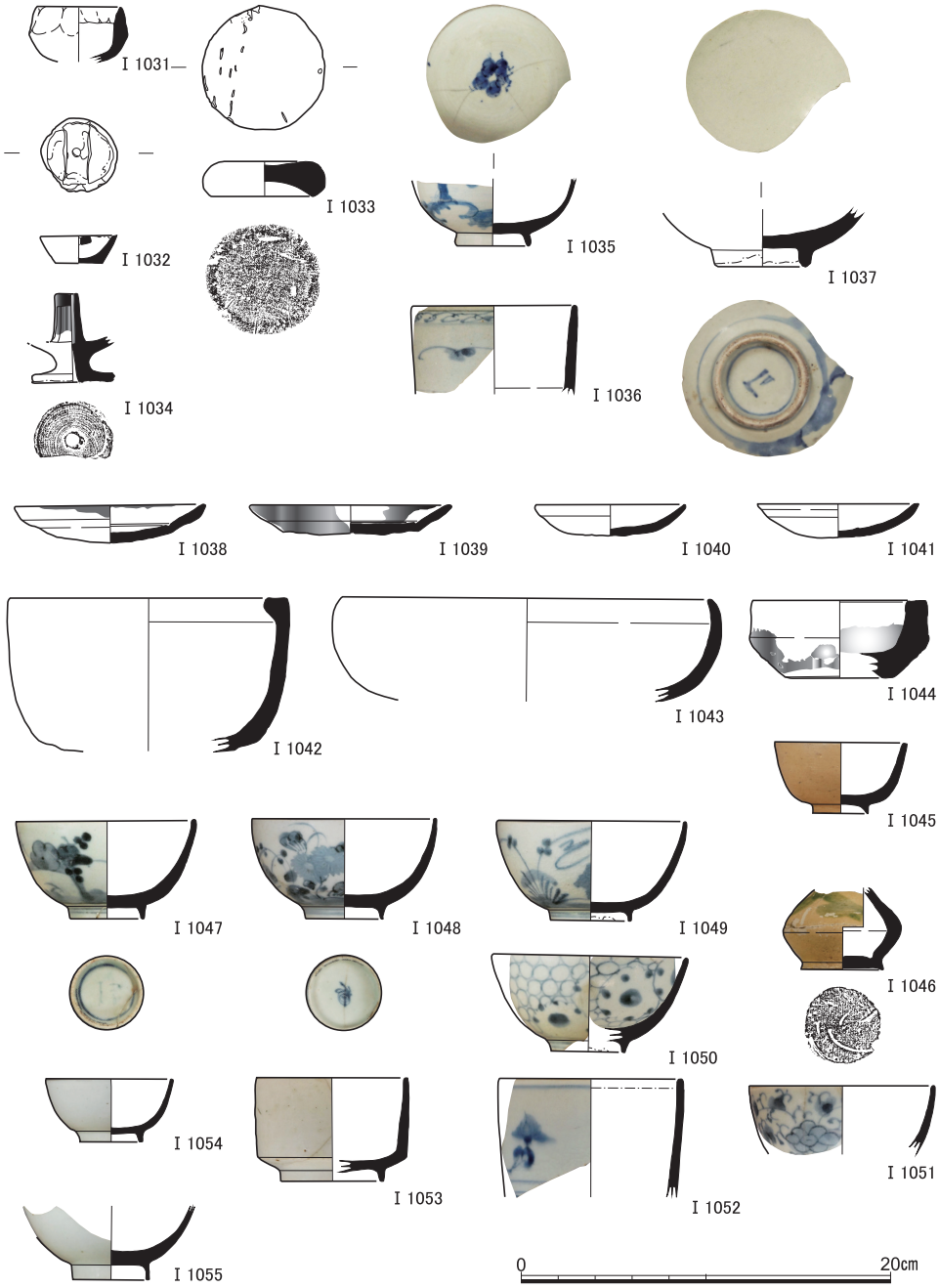


図62　ＳＥ７出土遺物（Ⅰ1031～Ⅰ1033土師器，Ⅰ1034陶器，Ⅰ1035～Ⅰ1037染付），ＳＰ116出土遺物(1)（Ⅰ1038～Ⅰ1044土師器，Ⅰ1045・Ⅰ1046軟質施釉陶器，Ⅰ1047～Ⅰ1052染付，Ⅰ1053～Ⅰ1055白磁）

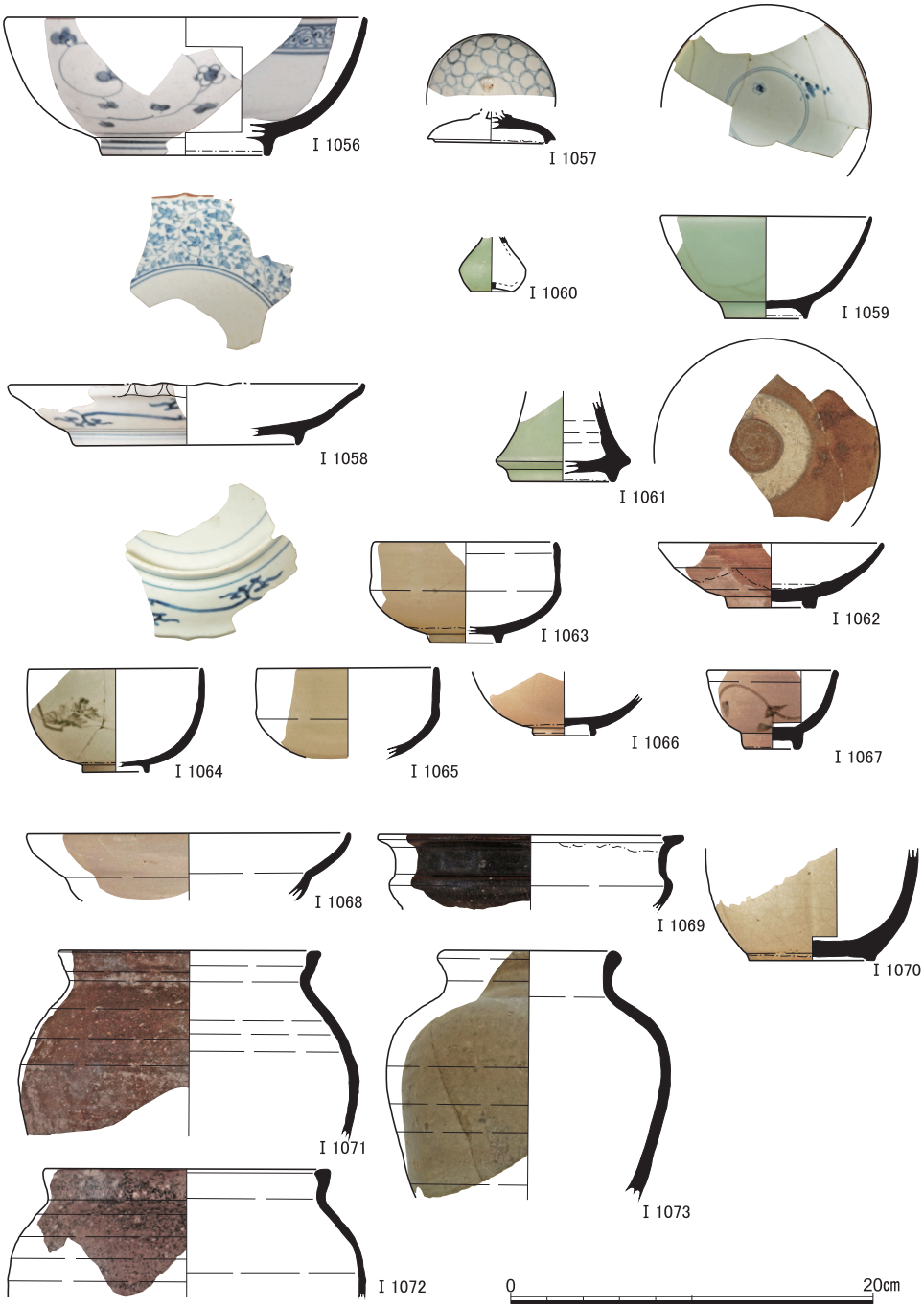


図63　ＳＰ116出土遺物(2)（Ⅰ1056～Ⅰ1058染付，Ⅰ1059～Ⅰ1061青磁，Ⅰ1062～Ⅰ1073陶器）

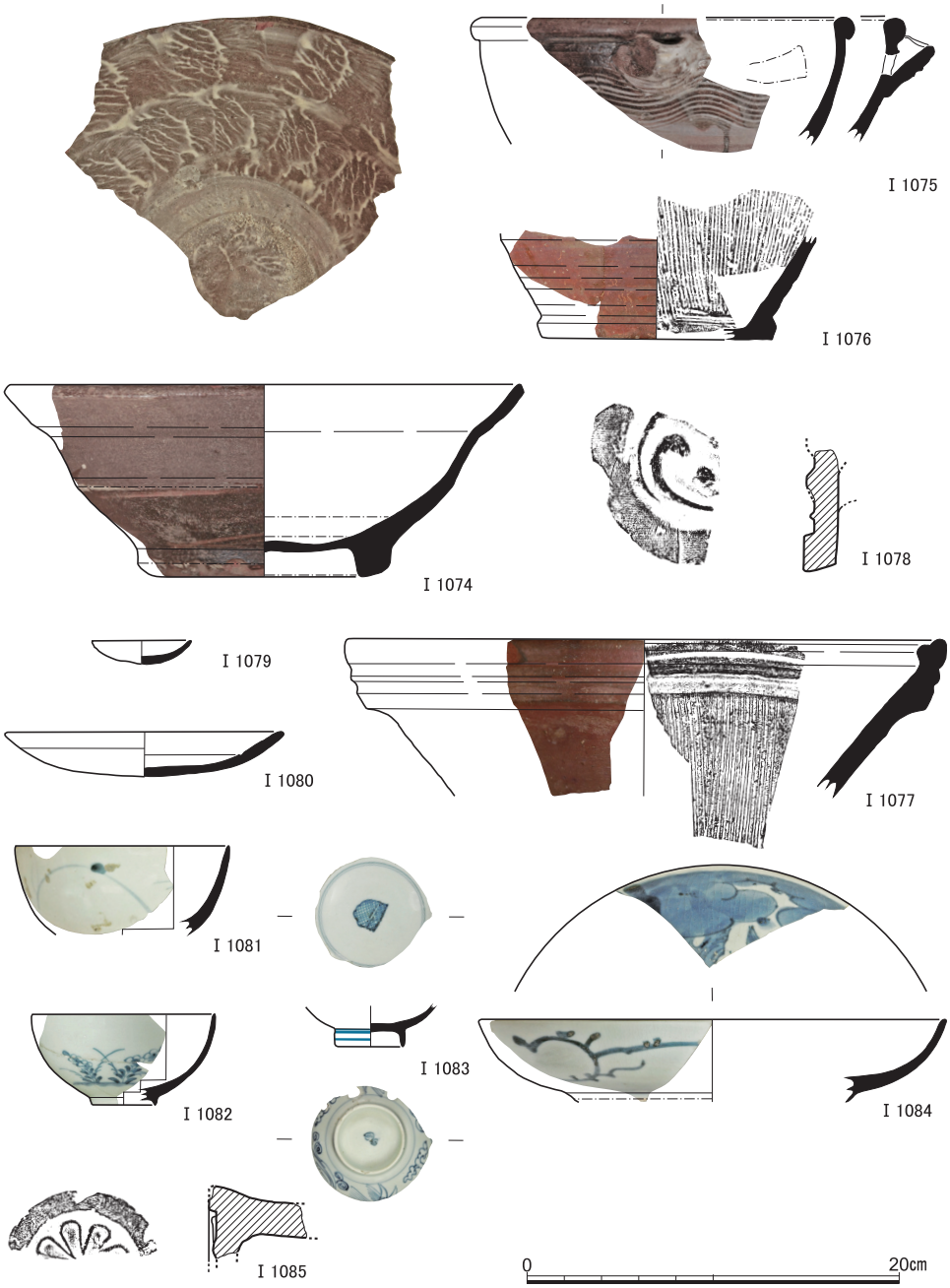


図64　ＳＰ116出土遺物(3)（Ⅰ1074～Ⅰ1077陶器，Ⅰ1078軒丸瓦），ＳＤ28出土遺物（Ⅰ1079・Ⅰ1080土師器，Ⅰ1081～Ⅰ1084染付，Ⅰ1085軒丸瓦）

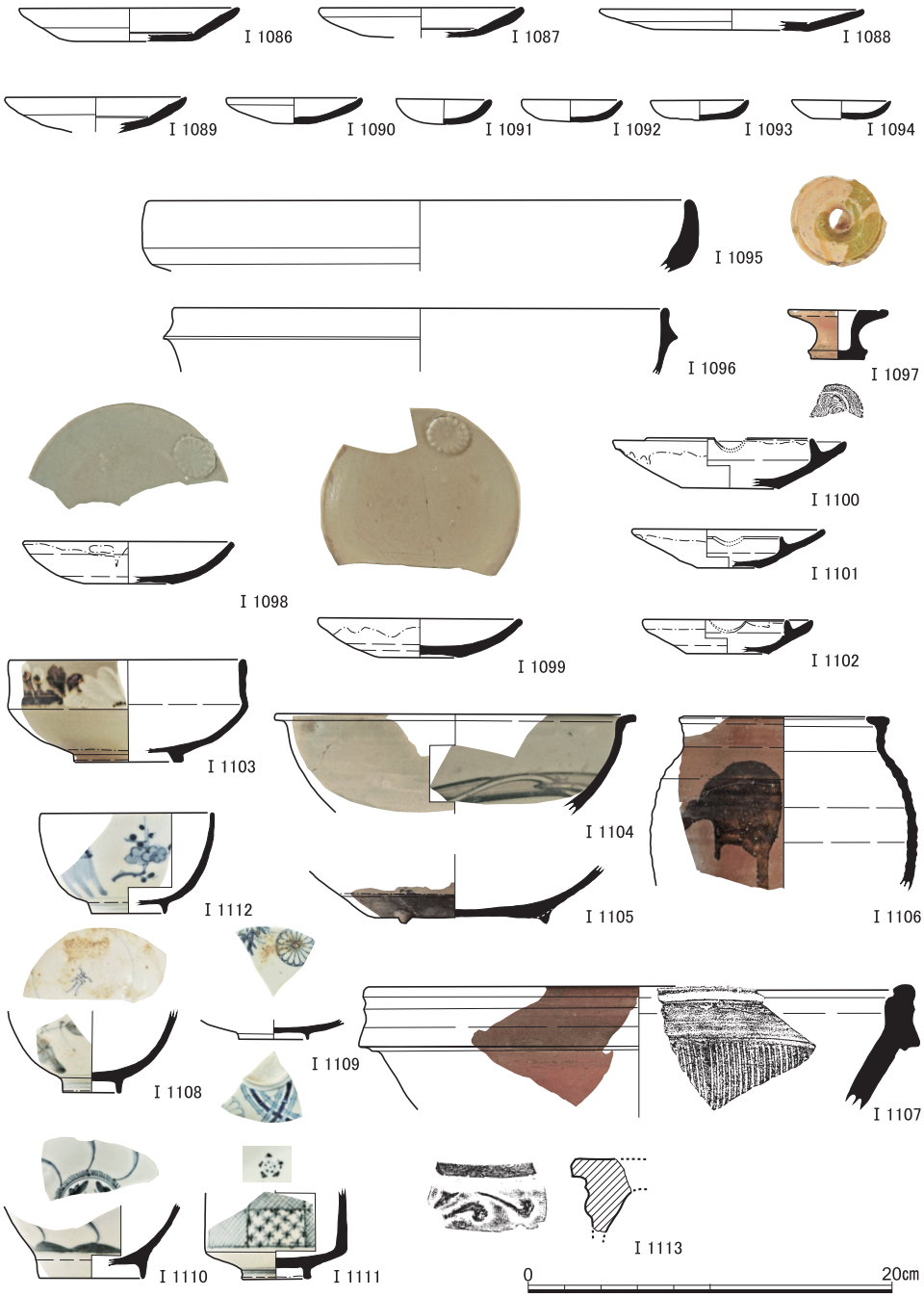


図65　ＳＸ39出土遺物（Ⅰ1086～Ⅰ1096土師器，Ⅰ1097～Ⅰ1107陶器，Ⅰ1108～Ⅰ1111染付，Ⅰ1113軒平瓦），ＳＸ46出土遺物（Ⅰ1112染付）

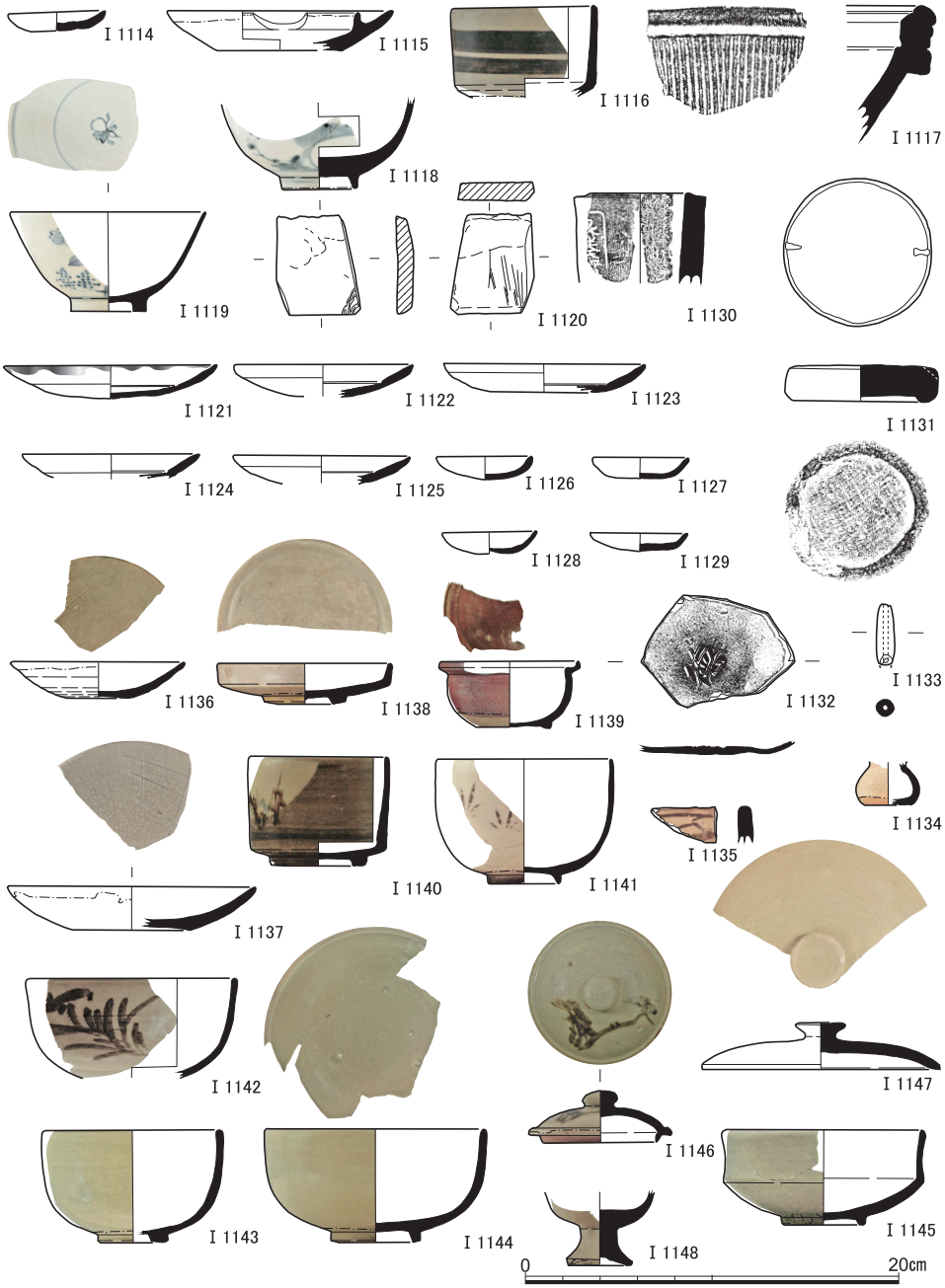


図66　ＳＸ40出土遺物（Ⅰ1114土師器，Ⅰ1115～Ⅰ1117陶器，Ⅰ1118・Ⅰ1119染付，Ⅰ1120砥石），不定形土坑群出土遺物(1)（Ⅰ1121～Ⅰ1132土師器，Ⅰ1133・Ⅰ1134土製品，Ⅰ1135軟質施釉陶器，Ⅰ1136～Ⅰ1148陶器）

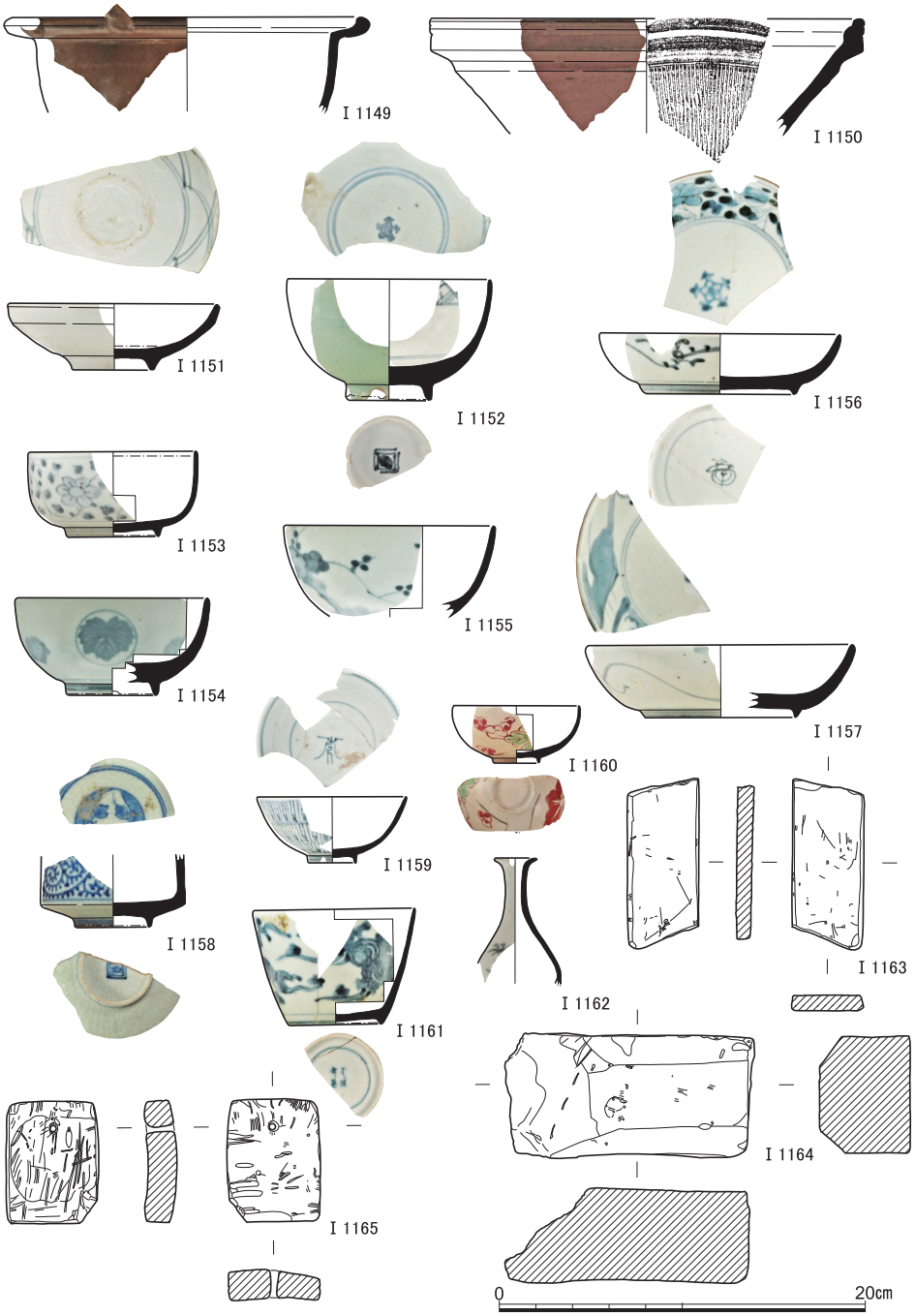


図67　不定形土坑群出土遺物(2)（Ⅰ1149・Ⅰ1150陶器，Ⅰ1151～Ⅰ1162染付，Ⅰ1163・Ⅰ1164砥石，Ⅰ1165滑石製品）

278地点でまとまって見つかっている。Ⅰ1136以下の陶器では，京・信楽焼系の製品が主体を占める。Ⅰ1151～Ⅰ1162は磁器の染付。Ⅰ1160は色絵の小椀である。Ⅰ1164は大形の方柱状の砥石で，研ぎ減りが各面に認められる。Ⅰ1165は温石とみられる滑石製品。中軸線上に紐孔が１ヶ穿たれている。湾曲しており，石鍋破片の転用加工品であろう。

近代の大学関連遺物（Ⅰ1166～Ⅰ1193）　表土・攪乱の機械掘削作業中に，北調査区を中心として，まとまって投棄された大学関連の近代陶磁器類を発見した。現在も調査地東側に建物が残される吉田寮食堂は，学生寄宿舎吉田寮とともに大正２年（1913）に建設されたものであり，今回の陶磁器類はおもにそこで使用されたものであろう。大学史や学生厚生の歴史，あるいは近代の陶磁器流通などを考えるうえでも有意な資料と判断し，極力器種のバラエティに配慮しながら遺存の良いものを回収した。ここに報告する。

主体となるのは，緑色のクロム釉で口縁端部に二重線をめぐらす意匠の磁器製食器群で，皿・湯呑・飯椀・丼椀・蓋などの種類があり，皿や湯呑には大小の法量規格もある。そして，同じ緑色釉の印判で，

Ａ：花と「大」の文字を組み合わせたデザインの円形意匠，

Ｂ：枠囲みされた「京都帝国大学寄宿舎」の文字，

Ｃ：扇の意匠と「美濃窯業製」「MINO YOGYO LTD.」の文字を組み合わせたマーク，

Ｄ：小さな正方形枠の「美濃窯業」印

などが組み合わせて施されている（図71参照）。

Ⅰ1166～Ⅰ1171は皿で，直線的な逆ハ字形に立ち上がる器形。高台付で，口縁端部は短く外反する。大小２つの規格があり，小のⅠ1166～Ⅰ1168は口径10.5cm前後，器高2.0cm，大のⅠ1169～Ⅰ1171は，口径15.2cm器高2.7cmをはかる。見込み中央に意匠Ａを置くのが基本のようだが，無いものもみられる（Ⅰ1171）。また，外面側は意匠の組み合わせに幾つもパターンがあり，高台内側にＡとＤ（Ⅰ1166･Ⅰ1169），高台内側にＣで体部外面にＡ（Ⅰ1167），高台内側にＢのみ（Ⅰ1168），それに体部外面にＡやＣを付加（Ⅰ1171），などが認められる。なお，皿のみは口縁内面側に緑色二重線をめぐらす。

Ⅰ1172は蓋。口径10.2cm，器高3.2cm。体部外面に意匠Ａを置く。椀の蓋であろうが，これと組み合うものを見いだせていない。

Ⅰ1173～Ⅰ1176は湯呑。口径に大小２つの規格があり，小Ⅰ1173・Ⅰ1174は口径7.2cm器高5.1cm，大Ⅰ1175･Ⅰ1176は口径11.0cm器高5.3cm。小については，側面にＡとＢを配し，高台内側にはＣかＤのいずれかが認められる。一方大については，側面にＡとＣ，あるい

図68　近代の磁器(1)（Ⅰ1166～Ⅰ1177表土・攪乱層出土）

図69　近代の磁器(2)（Ⅰ1178～Ⅰ1193表土・攪乱層出土）

はＡとＤを配しており，高台内側はＢである。

Ⅰ1177は，上記の一群と異なり二重線や意匠は施さないコップ形の胴部片。口径は７㎝程に復元され，縦書きで「京大寄宿舎」と緑色釉の上絵で記されるが，剝落している。

Ⅰ1178～Ⅰ1181は飯椀で，体部の屈曲が深い位置にある丸椀タイプのⅠ1178･Ⅰ1179と，体部が直線的な平椀タイプのⅠ1180・Ⅰ181がある。丸椀タイプは口径11.0㎝器高6.2㎝，Ⅰ1178は側面にＡ，高台内側にはＢとＤを配しているが，Ⅰ1179はＤを体部下半に離して配している。平椀タイプのⅠ1180は口径10.8㎝器高5.5㎝，Ⅰ1181は口径11.6㎝器高5.8㎝と，規格が揃っていない。このことは，Ⅰ1180が側面に「學」字をあしらった意匠，高台内側にＣのうち扇の意匠のみといったイレギュラーな特徴をもつことと関係するのかもしれない。Ⅰ1181は，側面にＡ，高台内側にＢのパターンである。

Ⅰ1182～Ⅰ1188は，いわゆる丼椀（Ⅰ1187はそれとセットの蓋）で，他の器種と異なりＡ・Ｃ・Ｄの意匠を付けたものはみられない。また，Ⅰ1187・Ⅰ1188のセットは緑二重線ではなく，呉須を基調とした鮮やかな草文の意匠である。ただし，法量規格としては比較的良く揃っており，Ⅰ1185が口径16.5㎝器高8.0㎝と若干大きめのほかは，口径は15.0㎝±0.5㎝，器高は７㎝～８㎝の間にほぼおさまる。Ⅰ1182は高台内にＡが付されるが，それ以外は統制番号が付される。

統制番号については，昭和15年（1940）８月頃から昭和21年（1946）頃までの統制経済下において各地の生産者に割り当てられたものとされる〔萩谷2013〕。Ⅰ1183にクロム釉印で「瀬716」，Ⅰ1184に凹印で「瀬512」，Ⅰ1185にクロム釉印で「瀬512」，Ⅰ1188は呉須印で「肥12」が付されている。「瀬」は愛知県瀬戸市，「肥」は佐賀県塩田町の窯業者。なおⅠ1186は，胴部側面にＬとＮを組み合わせたマークがコバルト釉により付されており，高台内は無文である。

Ⅰ1189は小杯で，口径8.8㎝器高4.9㎝。口縁が弱く外反する。体部の半分を欠失しているために，本来どの意匠が付けられていたかは不明であるが，残存部分は無文で，高台内に鳩の意匠と「KOSHITU TOKI」の組み合わせ意匠がクロム釉印で施される。Ⅰ1190も小杯で，口縁がまっすぐ立ち上がる器形。口径7.4㎝器高5.1㎝。高台内に「岐438」のクロム釉印をもつ。「岐」は岐阜県東濃地方の窯業者を表している。

Ⅰ1191は薄手の杯で，見込みに金色で「京都帝国大学創立10年記念」と上絵で書かれている。また高台にも赤絵で「萬珠」と書かれる。「萬珠堂」として近世以来の窯業者が京都に存続しており，そこの製品であろうか。Ⅰ1192は徳利で，外面は金色の絵付けで「記

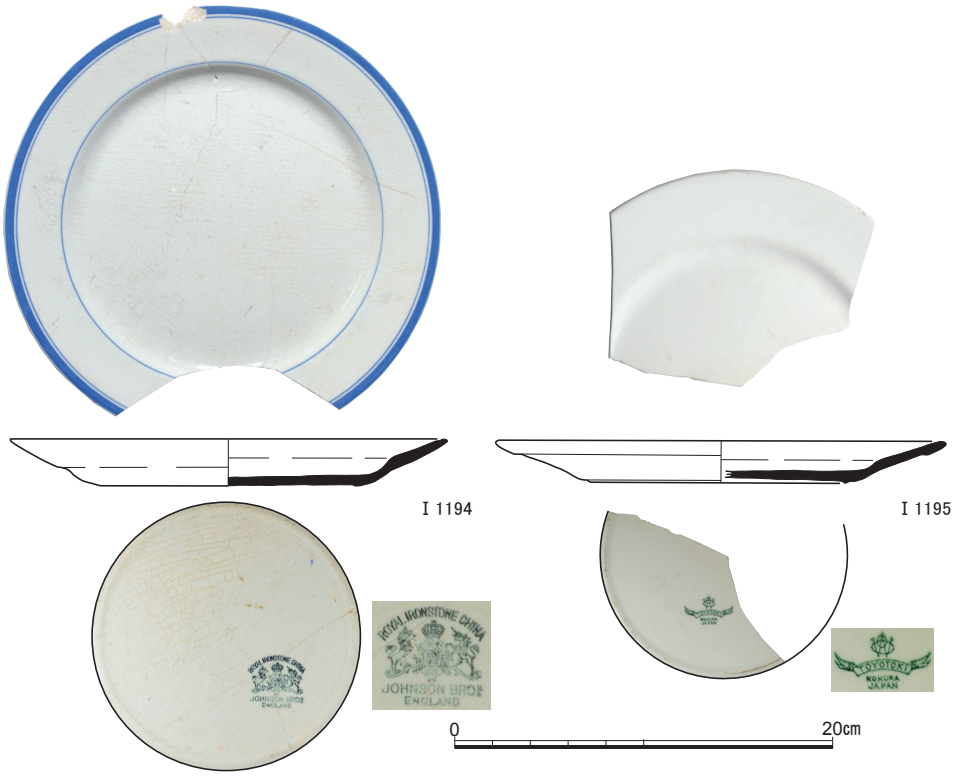


図70　近代の磁器(3)（Ⅰ1194・Ⅰ1195表土・攪乱層出土）　釉印については縮尺1/2

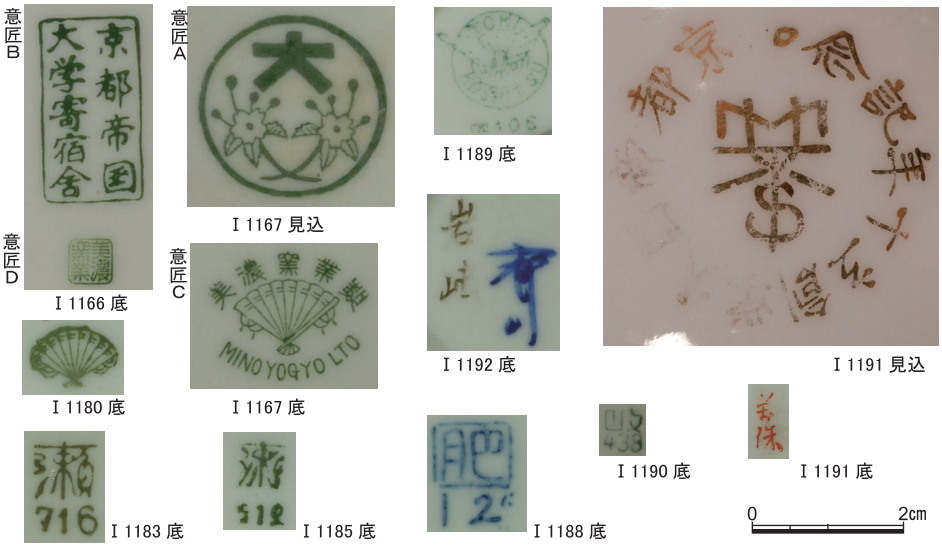


図71　近代磁器の意匠・釉印など　原寸大

念☆砲兵□二十二聯隊」の文字が書かれるが，ほぼ剝落している。また底部には同じ金文字で「岩崎」と記されている。Ⅰ1193は湯呑。口径9.1cm器高5.2cm外面にコバルト釉で右から左に向かって「乐友会館」の文字がめぐる。乐は「楽」の略字であり，現在も大学施設として存続する樂友会館で使用されていたものだろう。

その他の近代遺物（Ⅰ1194・Ⅰ1195）　洋食器といえる浅い皿２点。いずれも，真っ白な粉質の精良緻密な胎土で，硬質陶器などとも呼称されている製品であり，後述する西洋陶器と質感は類似する。

Ⅰ1194は，口径23.0cm器高2.5cm。内面側の口縁と見込み外縁にコバルト釉の圏線をめぐらしている。底面に紋章と組み合わせた「ROYAL IRONSTONE CHINA/JOHNSON BROs ENGLAND」の暗緑色の釉印が付されている。Johnson Brothersは，1883年にイギリスで創業した陶器会社であるが，本例のような印章は1888年～1913年に使用されたものとして紹介されている[(1)]。

Ⅰ1195も同様な器形と胎土をもつが，透明釉のみの白色。口径23.7cm器高2.2cm。底面に「TOYOTOKI KOKURA JAPAN」の文字を組み込んだ緑色釉の印が付される。この印は1917年に小倉で創業した東洋陶器株式会社（現在のTOTO）のもので，中央のOCW（東洋陶器株式会社の英訳であるORIENTAL CERAMIC WORKSの頭文字を組み合わせたもの）の意匠とリボンを配したモチーフは，創業初期の1917年～1921年の輸出用衛生陶器に使用されたとされている[(2)]。本例は食器であるが，その段階の製品であろう。

西洋陶器（Ⅰ1196～Ⅰ1198）　白色粉質の精良な胎土で，銅版転写した絵画風図柄をもつヨーッロッパ製の陶器が３点出土している。以下，遺物写真をもとに，岡泰正氏（神戸市立小磯記念美術館館長）にご教示をいただいた内容をもとにして，報告する。

Ⅰ1196は，北区の東南辺の表土下にみられた黄色粘土混じりの灰褐色土中から，多数の破片が一括出土し，完形に近く復元される。この出土層は，粉砕された近世野壺の漆喰片等を交えるもので，本来の近世層を近代以降に攪拌・整地したものの可能性が高い。したがって本例は，原位置を保った出土ではなく，二次堆積したものとみられるが，遺存が良好であることから，本来の廃棄位置に近い出土とみてよかろう。

平面形が24cm×20cm深さは８cm程度の容器に，高さ５cm程度の脚台が付される。器種名としてはチュリーンと呼ばれ，スープやソースなどを容れる食器として，本来は蓋とレードル（玉杓子）がセットになっていたものであろう。コバルト釉とみられる藍色で，見込みに水辺での釣りの風景，内外の周縁部には農村風景とともに巻き貝や魚を飼う鉢の図柄

図72　西洋陶器(1)（Ⅰ1196黄色粘土混じり灰褐色土出土）

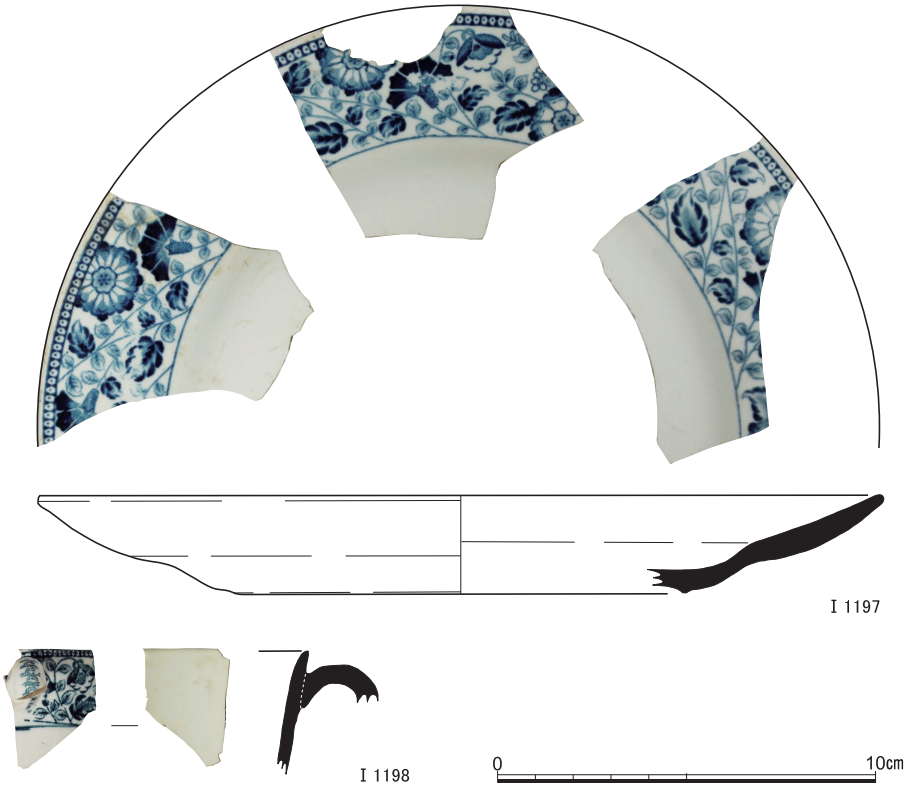


図73　西洋陶器(2)（Ⅰ1197・Ⅰ1198表土出土）　縮尺1/2

をめぐらしており，「フィッシング」と呼ばれるパターンとみられる。また脚台内面には，小さく「23」の数字が印字されている。特徴からみて本例は，イギリス，スタフォードシャー（現在のストック・オン・トレントStoke-on-Torent）のバーズレム（Burslem）に19世紀前半に所在していた，イノックウッド＆サンズ（Enoch Wood & Sons）窯のアメリカ向けの製品か，その他窯の海賊版と推測される。質的にもよく，上品で，プリントウェアとして優品と言え，19世紀初期，文化末から文政の1810～30年頃の輸入ではないかと推測される。同じフィッシング意匠の西洋陶器は，大阪市中央区平野町における調査（OS93-47次）において皿破片の出土が報告されている〔豆谷1995〕〔大文協2003　p.149〕。

Ⅰ1197は，同一個体とみられる皿の破片３片。うち２片は南区東辺部の表土から，１片が南区中央のＡM21a5・b5区の表土から出土している。復元口径は22.2㎝，器高2.4㎝。内面の周縁にやや若い感じを受ける花卉（かき）文がめぐるが，正式なパターン名としては不詳である。イギリスないしオランダ製かと思われるが，年代や製作地とも決め手を欠い

ている。Ｉ1198の把手付の椀も，Ｉ1197と同じ文様パターンであり，椀と皿とでセットとなる可能性が高い。こちらの破片も南区中央のＡM21a5・b5区の表土から出土している。

8　小　　結

今回の調査では，先史時代から近代にいたるまで，各時代の多様な内容の成果が得られた。最後に，簡潔に成果のまとめを記すとともに，時代毎に課題と思われる点を示したい。

縄文・弥生時代の遺跡　調査地一帯は，弥生前期末～中期初頭の洪水層である黄色砂の堆積する範囲に当たると予想されたが，東方は尾根状の微高地が張り出しており，堆積は確認されなかった。黄色砂のみられる範囲でも，その下面から人為による遺構は検出されず，南流する流路ＳＲ１のほか，自然の流れの痕跡や旧地形を知る情報を得たにとどまる。ただし，ＳＲ１は，既往の調査成果も合わせると，弥生前期に吉田南構内の西辺を200m以上にわたり流下していたことになり，一帯の基幹的流路として重要な役割を担っていたことが，あらためて確認できたと言える。今回は，調査区西辺域が後世の土取りにより広く滅失していたこともあり，確認には至らなかったが，近接して水田や集落が存在している可能性は充分に残されていると言え，今後も留意しておく必要があろう。

上記に関連して，出土遺物の内容でみると，弥生時代前期の土器は，ＳＲ１からを中心に若干の点数が出土しているものの，量的に最も多いのは縄文後期前葉～中葉の北白川上層式期の土器であり，次いで晩期後葉の土器，であった。南方の聖護院地区や病院東構内では，これまでも縄文後期遺跡の存在が知られているほか，北方の吉田南構内北辺の288地点などでも，当該期の資料はまとまって出土している。今回の資料は特定の時期にまとまるものではないけれども，吉田から聖護院地区にかけての広範囲に，縄文後期前半期の活動域が展開している可能性を示唆する成果といえるだろう。

なお，遺構こそ明確に確認されなかったが，弥生中期初頭～前葉の資料が出土している点も注意されよう。北側の261・378地点では中期後葉の方形周溝墓が確認されてきたところであるが，それに先行する時期の遺跡の存在を示すものであり，洪水による埋積後も，比較的早期にかつ継続的に，一帯で土地利用がなされていたものとみられる。今後さらに資料を得ることで，より具体的に弥生中期以降の遺跡群の展開が復元可能になろう。

古墳時代の遺跡　調査区の北方一帯，111・220・322・378の各地点でそれぞれ５世紀代の方形墳が総計９基確認され，「吉田二本松古墳群」と呼称されてきたところであるが，今回は，378地点発見の９号墳の南周溝が，北区北辺でかろうじで把握されたのみで，あ

らたに古墳と認定できる遺構は検出されなかった。攪乱範囲も広いことから，後世の破壊と滅失の可能性を完全に否定できるものではないが，５世紀代の遺物はごくわずかしか出土しておらず，古墳の存在を敢えて想定するのは難しい状況といえよう。

一方で，注意されるのは，古墳時代終末期（飛鳥時代）といえる６世紀末～７世紀前半代の遺物が一定量出土している点である。その時期に限定できる遺構を検出することはなかったけれども，黒色土や淡褐色土を埋土として弧状にはしる時期不詳の溝などが該当している可能性は考えられる。今後の調査にあたっては，この段階の遺跡存在にも注意していく必要があろう。

奈良時代の遺跡　８世紀代の井戸や溝がみつかっているほか，比較的まとまった量の遺物が出土している。とくに井戸については，この地における居住の存在を裏付けるものとして重要であろう。吉田地域では，本部構内南辺の75地点で竪穴建物が，また吉田南構内では238・288地点および111・220地点で掘立柱建物や井戸などが見つかっている。また今回よりも南側では，約200m西南の病院東構内191地点で，竪穴建物の可能性のある遺構が８世紀代末の遺物とともに報告されている。わずかに時期が下るものであるものの，この地点も含めて考えるならば，およそ700m程度の範囲にわたって，扇状地の縁部に小規模な単位が直線的に散住しているような様相ともいえる。これらすべての地点をひとつの集落とみなして，当該時期の交通ルートを反映したような居住形態であると考えられるのか，あるいは，別個の単位ととらえるべきか，など，遺跡の性格の解明も含めて，今後吟味をおこなっていく必要があろう。

平安時代の遺跡　９～10世紀代のまとまった遺物と，東西や南北の溝などがみつかっている。近隣では，北方の111・220地点でこの時期の梵鐘鋳造遺構や井戸などが知られているが，隣接する261・378地点では平安期の遺構はほとんど見つかっておらず，空白地帯となっていた。今回，南区において検出された東西溝ＳＤ43は，塀状の基礎かともみられるような土坑や根石を内部にともなうなど，非常にしっかりとした掘り込みが50m近くにわたって検出されたもので，東西の土地区画を示す重要な遺構の可能性が高い。上記の空白地帯を介在しながらも，鋳造遺構を含んだ平安中期の遺跡のまとまりの南限を示す可能性があり，今後，より南方への平安時代遺跡の展開を検証していく必要があろう。

中世の遺跡　今回の調査地において，遺構・遺物ともにもっとも密度濃い成果が得られているのが，おおむね鎌倉～室町時代に相当する13世紀～15世紀代の遺跡である。多様な遺構が検出されているが，それらは①東西および南北方向の溝，②土器溜・遺物溜，③

建物跡，④土の採取のための不定形土坑，のおおむね４群に大別できる。

①については，調査地が中世に東西および南北方向の区画の要地に位置していることを示すものであろう。とくに，南北溝を境にして西側には④の不定形土坑が広がっている。この不定形土坑についてみると，西方の医学部構内東半で14・15世紀代を中心とする遺構がひろく確認されていることから，今回はその範囲の東限を把握されたことになる。すなわち，面的な土の採取の有無という，中世における土地利用の大きな境界にあたっていたといえる。逆にいうと，土の採取が及ばなかった東方は，何らかの区画内部の空間として位置づけられよう。しかし，今回は井戸などが全く検出されず，中世を通じて②土器溜・遺物溜が存在していることから，生活空間などの核心部ではなく，何らかの敷地とすればその外縁部の廃棄空間にあたっていたと見なすのが自然といえる。中世後半にいたって，ＳＨ１など，③建物跡の存在が明瞭化するが，特殊な蔵のような建物であり，やはり外縁部として空間の位置づけは変化していなかったものとみられる。

調査地周辺については，おおむね12世紀半ば～13世紀代に，福勝院という寺院の存在が想定されてきた〔吉江2006〕。比定地の中心は調査地から東方約200ｍを隔てた旧字名の「壱丁ケ辻」であり，また遺構の内容からみても，今回検出の遺構群が直接福勝院の核心施設であるとは比定できないものの，関連施設も含めた寺域の外縁と位置づけられる可能性はあろう。今後，既往の成果を再検証しつつ，周辺の調査の際は充分留意する必要がある。

なお，遺物については，中世土師器のなかで「乙訓在地形土師器」などと呼称される異系統の皿類のまとまった出土が注目された。この件は第６節において詳述し，遺物の型式的検討が不十分で定義が曖昧であり，名称が実態に一致していないことを確認した。今後に多くの課題が残されているといえよう。

また，層位の検討において，北区の南北溝ＳＤ10および東西溝ＳＤ13の断面で，地震にともなうとみられる砂脈や堆積の乱れが確認されている。中世段階におけるこうした自然災害がいつ，どの程度の規模で影響を与えたのか，広域的な情報収集と比較により明らかにしていくことが，今後の課題となろう。

近世の遺跡　周辺での調査成果から，耕作地としての土地利用が想定され，おおむねそれに違わない結果であったけれども，北区北西域の一角がひろく土取りされていたことは全く予想外であった。近世段階の土取りの遺構は，これまでは医学部・病院構内では知られていたが，数多くの調査を経ている吉田南構内以北では明確な検出例がなかった。

土取りの様態は，近世におけるその商品化を背景に，採取料算定に適した方形の規格的

な採取へと変化することが指摘されてきた〔五十川1991〕。今回の不定形土坑群も，それに合致するもので，判明する範囲でおおよそ100㎡あまりの内部をきっちりと区切りながら網羅的に取り尽くしている様子がうかがえた。ただし，南区では，独立した深い不定形土坑も検出されている。組織的・規格的な採取と異なる様態もあったと理解するべきなのか，試し掘り的な土坑であったのか，今後情報を増やして検討していく必要があろう。また，その採取時期は，切り合い関係や内部に埋積している陶磁器類の様相からみて，近世後半期以降の可能性が高いと思われる。仮に吉田地域での需要に応じた採取であるとすれば，幕末の尾張藩邸設置を契機とした建造物や人口の増加を理由とする可能性もあろう。構内における近世遺跡の諸遺構について，今後は地域の歴史的変動との関連を視野に入れて検証を加えていく視点も求められよう。

近代の遺物　前節において報告したように，今回は，帝国大学寄宿舎関係とみられる磁器製食器類が遺棄されていた。考古学的な検討は今後の課題であるが，大学の歴史のみならず，明治期から第２次大戦中前後にかけての食器生産と流通を考えるうえでも，興味深い資料であろう。『京都大学建築八十年のあゆみ』（1977年）によれば，今回調査地の大学における土地利用の履歴は，明治30年（1897）の京都帝国大学創設に当たって，京都府より寄付を受けた敷地としてはじまる。医科大学の仮教室が一時的に設けられた後，明治43年（1910）以降学生用厚生施設が順次建設され，学生集会所が明治44年（1911），大正２年（1913）に寄宿舎や食堂が本部構内より移転新築されている。また樂友会館は，大正14年（1925）の竣工である。一方，陶磁器類については，美濃窯業社製の製品が主体を占めている。美濃窯業社の沿革や給食食器については，病院構内での出土品に関連して報告しているが〔伊藤2014〕，大正９年（1920）に給食用食器生産を開始しており，昭和６年（1931）のカタログに得意先として「京都帝国大学学生寄宿舎」を認めることができる（美濃窯業製陶株式会社『美濃窯業社史』2006）。このように，寄宿舎の竣工と，規格的な食器類の納入には時間差が認められ，現在のところ先行する段階の食器類は同定できていない。今後，当初の食器使用の状況やその変動の背景について，検討をおこなう必要があろう。また，ほぼ戦時中の生産とみてよい統制記号をもつ製品が一定量出土している。昭和18年（1943）に美濃窯業製陶は食器生産を中止しており，戦時期には各所から補充したことを推測させる状況であるが，これらの内容の詳細解明も，興味深い課題である。

なお，製品としては近世段階に属するとも言えるが，いわゆる西洋陶器の出土についても報告をおこなった。それらが遺跡地やその周辺において，どの段階で使用され遺棄され

たものなのか，現状では定かにできないけれども，今後検討を加えていきたい。

遺跡破壊の問題　冒頭において記述したように，今回の調査地は，とくに北区において，発掘調査に至近の時期におこなわれたとみられる深い掘削によって，広い範囲で大きな損傷を被るとともに（図２），攪乱内部には電化製品をはじめとした産業廃棄物などが埋置されていた。『京都大学新聞』2013年７月16日号（№2513）の記事によれば，「吉田寮埋文調査始まる」の見出しとともに今回の調査に関する記述がある。そのなかで，「･･･工事開始に先立って，吉田寮生らが焼け跡に置いていた単管パイプなどの物品を撤去。その後，焼け跡がなくなることを惜しむ寮生や元寮生らが，７月６日・７日に「焼け跡祭」を開催した。同祭では，焼け跡に寮生が掘った２メートル30センチ近くの穴を用いて24時間耐久キャンプファイヤーを行い，焼け跡の最期の姿を目に焼き付けた・・・」と記載されている。これが事実であるとすれば，発掘直前の段階に大規模な掘削をおこなっていることになり，きわめて遺憾な事態であろう。

調査地北側においては，2011年度に古墳を中心とする調査成果の現地説明会をおこなうなど，現地の遺跡としての重要性については，周知に努めてきたところであった。しかし，残念ながら理解の及ぶところではなかった可能性がある。今後は，学内の埋蔵文化財保護や調査の意義について，広報や周知の体制を再検討し，このような遺跡破壊の再発を防止する対策の必要性が痛感される。

今回の報告に際し以下の方々にご教示いただいた。末尾ながら，厚く御礼申し上げる。

動物骨について菊地大樹氏（人文科学研究所），井戸枠樹種について杉山淳司氏（生存圏研究所），中世建物について山本雅和氏・柏田有香氏（京都市埋蔵文化財研究所）・國下多美樹氏（龍谷大学），所謂「乙訓在地形土師器」について大立目一氏・上村和直氏（京都市埋蔵文化財研究所）･伊賀高弘氏（京都府埋蔵文化財調査研究センター）･岩崎誠氏（長岡京市埋蔵文化財センター），西洋陶器について岡泰正氏（神戸市立小磯記念美術館）。

〔注〕

（１）　イギリス，ストック・オン・トレント（Stoke-on-Torent）の地域紹介webサイトhttp://www.thepotteries.org/allpotters/607.htm，および http://www.thepotteries.org/mark/j/johnson_brothers.htmlを参照（2015年12月21日確認）。

（２）　TOTOミュージアムのwebサイトhttp://www.toto.co.jp/social/museum/trademark/を参照（2015年12月21日確認）。

第３章　京都大学北部構内ＢＦ32区の発掘調査

千葉　　豊

１　調査の概要

本調査区は京都大学北部構内のほぼ中央，北白川扇状地の末端付近に位置し，北白川追分町遺跡の範囲内にある（図版１－402，図74）。ここに自家発電設備の設置が計画されたため，周辺地区の調査成果を勘案して，工事区域全域の発掘調査を実施した。調査は2013年10月29日に開始し，11月15日に終了した。調査面積は約90㎡。調査の都合上，調査区南半（南区）の調査を最初に実施し，その後に北半（北区）の調査をおこなった。

本調査区周辺は，縄文時代の遺跡の中心地に位置しており，過去の調査で多くの調査成果が示されている。とりわけ，本調査区の北数ｍの123地点第１トレンチでは，縄文中期末の住居跡が発見されているほか，今回の調査区の中に含まれる123地点第２トレンチからは，縄文中期中葉～後葉を中心とする多量の遺物が発見されている〔清水1984〕。

こうした過去の調査成果から，今回の調査では縄文時代の遺構・遺物の検出や当時の地形環境のあり方を明らかにすることを目的として調査をおこなった。本調査区の一部はすでに過去に調査がすんでおり，またそれ以外にも大学建物の基礎などで，発掘可能な場所は全体の半分にも満たなかったが，縄文時代の地形環境を復元するための層位データや縄文時代の遺物を中心として，整理箱９箱を数える遺物を得ることができた。

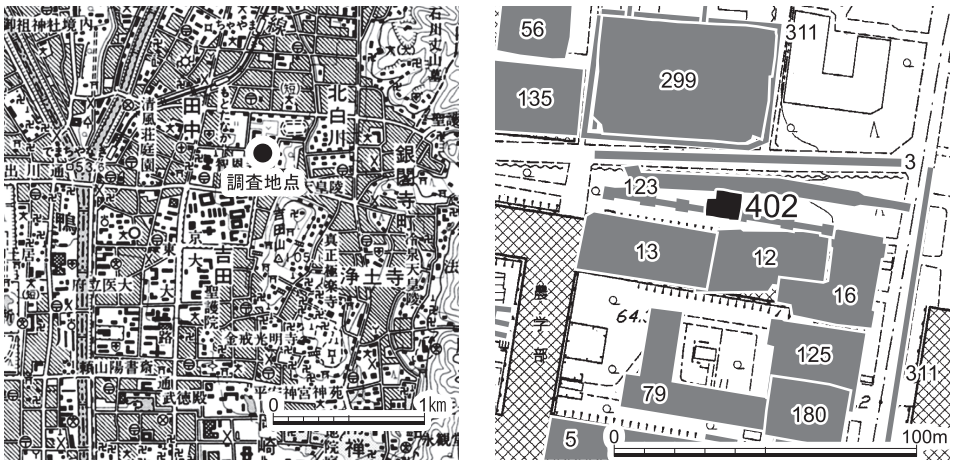


図74　調査地点の位置　縮尺：左1/5万，右1/2500

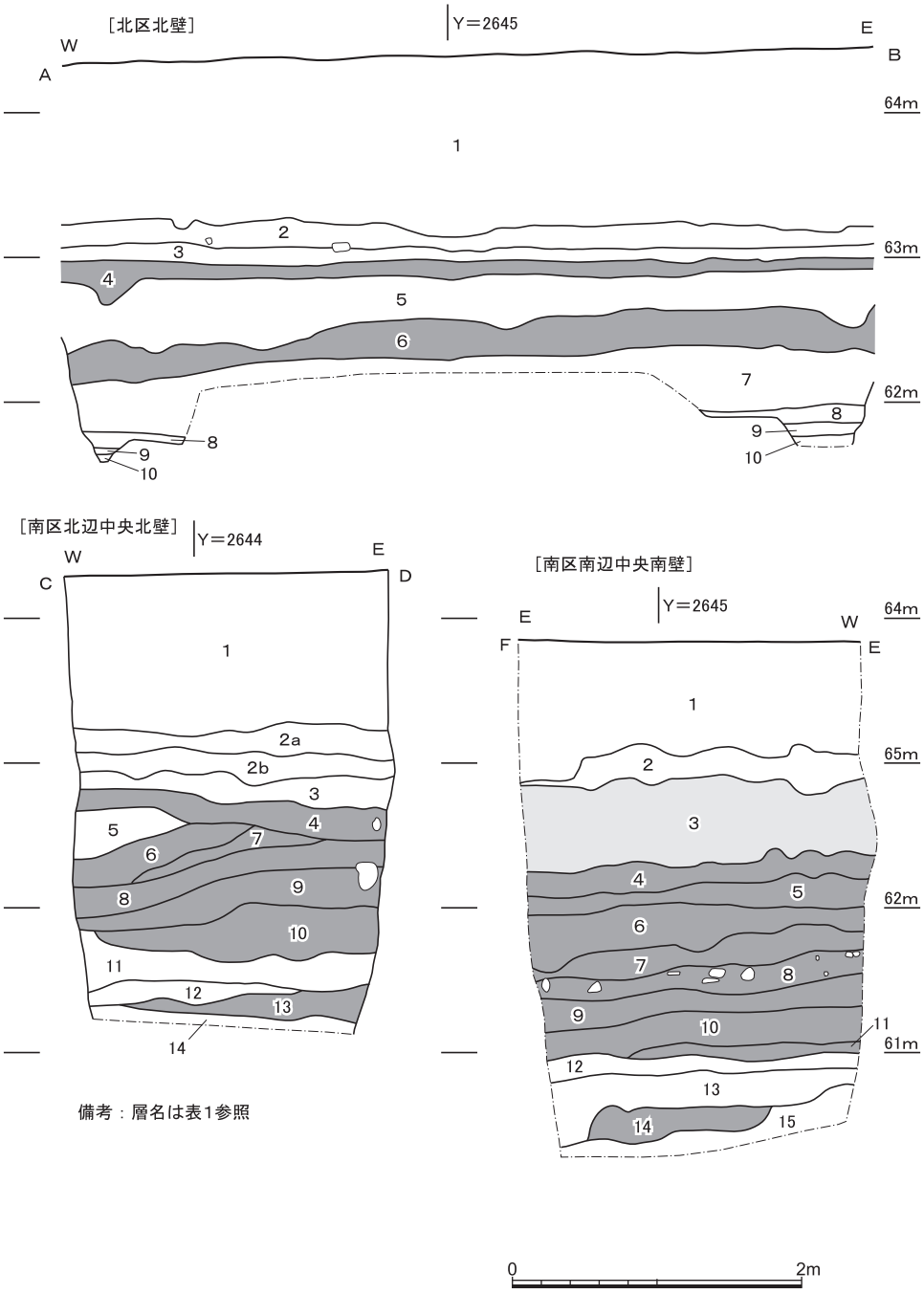
2　層　　位

調査区は攪乱により南北及び東西ともに連続して地層を観察できる箇所が存在せず，また微高地の端部に位置したことにより，複雑な堆積状況を示していた。よって，ここでは，それぞれの断面で観察できた堆積状況を個別に解説し，層位データを総合した上で得られる地形環境については，小結でまとめることにしたい。層位の記録位置は図77，層名の記載は表１に示した。

北区の層位（図75・76）　北壁の層位を図75に，東壁の層位を図76に示した。第１層は表土。第２層は黒褐色土で，古代の遺物を包含する。第３層は黄褐色土。この層は南に行くにしたがって，層が厚くなるとともに黄色砂の量が増えていき，南区北辺中央北壁の第３層（灰黄色砂）に連続する。北区では黄色砂はわずかに混じる程度である。第４層は黒色土。縄文時代の遺物を包含する。第５層は灰褐色砂質土。南に行くにしたがって土壌化していく。第６層は黒褐色土。第７層は黄白色砂。第８層は灰褐色砂質土。第９層は暗灰褐色砂質土。第10層は灰白色砂。第５層以下は遺物を含まない。

南区北西隅の層位（図76）　北壁の層位を図76に掲げた。第１層は表土。第２層は黒色土。層厚0.2～0.3m。縄文時代の遺物を包含しており，上半と下半に分けて遺物を取り上げたが，出土量は上半の方が多かった。第３層以下は無遺物層で，第３層は灰褐色砂質土，第４層は黒褐色砂質土，第５層は黄白色砂，第６層は灰褐色砂質土，第７層は暗灰褐色砂質土，第８層は灰白色の砂･礫である。このうち，第６層は非常に固くしまっており，第７層も固くしまっていた。古い時代の堆積物であることが予想されたため，第５層・第６層・第７層の土壌を採取し，堆積年代を知るために，（株）京都フィッション・トラックに依頼して火山灰分析をおこなった。３つの層いずれも，火山ガラスの含有はきわめて少なかったが，含まれる火山ガラスはＡＴガラスのみでK-Ahガラスは含まれないという結果を得た。したがって，少なくとも第５層以下はアカホヤ火山灰降下以前，すなわち縄文早期以前にさかのぼる堆積物であると判断することができる。

南区北辺中央の層位（図75･76）　北壁の層位を図75に，東壁の層位を図76に掲げた。第１層は表土。第２層は黒褐色土。長石粒を多く含む２ａ層とあまり含まない２ｂ層に細分できる。古代の遺物を包含する。第３層は灰黄色砂。北区の第３層，南区南辺中央の第３層に対比できる。第４層以下第13層までは，部分的に砂層（第５層・第11層・第12層）が介在するが，黒色から赤褐色の土色を呈する腐植土壌の堆積物である。縄文時代の遺物



備考：層名は表1参照

図75　層　　位(1)　縮尺1/50

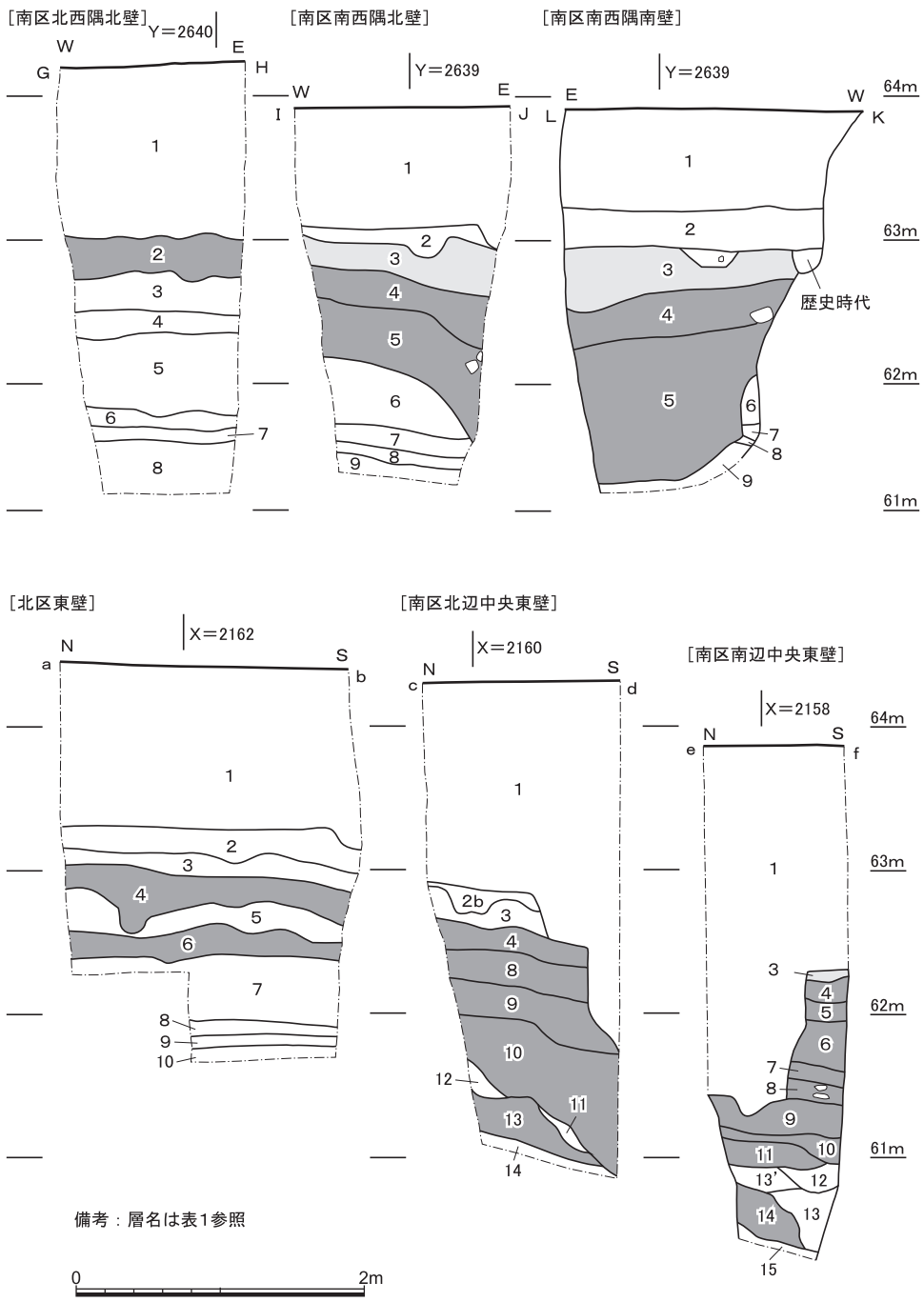


図76　層　　位(2)　縮尺1/50

表１　層位の記載

	［北　区］	［南区北西隅］	［南区北辺］	［南区南辺］	［南区南西隅］
第１層	表　　土	表　　土	表　　土	表　　土	表　　土
第２層	黒褐色土	黒 色 土	黒褐色土	黒褐色土	黒褐色土
第３層	黄褐色土	灰褐色砂質土	灰黄色砂	黄 色 砂	黄 色 砂
第４層	黒 色 土	黒褐色砂質土	黒色土①	黒色土①	黒 色 土
第５層	灰褐色砂質土	黄白色砂	黄灰色砂質土	暗褐色土	赤褐色土
第６層	黒褐色土	灰褐色砂質土	黒色土②	黒色土②	黄白色砂
第７層	黄白色砂	暗灰褐色砂質土	褐黒色土	褐灰色土①	灰褐色砂質土
第８層	灰褐色砂質土	灰白色砂～礫	黒色土③	褐灰色土②	暗灰褐色砂質土
第９層	暗灰褐色砂質土		赤褐色土①	灰赤色土	灰白色砂～礫
第10層	灰白色砂		赤褐色土②	赤褐色土	
第11層			黄灰色砂質土	灰褐色土	
第12層			灰黄色砂	暗灰黄色粘質土	
第13層			黒色土④	灰黄色粘質砂	
第14層			灰白色粗砂	黒色土③	
第15層				灰白色粗砂	

や拳大の礫を包含している。上から10㎝単位の人工層位で遺物を取り上げた。

南区南辺中央の層位（図75･76）　南壁の層位を図75に，東壁の層位を図76に掲げた。第１層は表土。第２層は黒褐色土で，上部に長石粒が目立つ。古代の遺物を包含する。第３層は黄色砂で，南壁では厚さ0.6ｍをはかる。弥生前期末の洪水層である。第４層～第11層はもっとも厚いところで厚さ1.4ｍをはかる腐植土。色調と遺物の出土状況などをもとにして細分している。上から10㎝単位の人工層位で遺物を取り上げた。どの層からも遺物が出土したが，第８層とした褐灰色土からは，５～10㎝大の礫とともに縄文土器が多数出土している。一方で，第10層の赤褐色土および第11層の灰褐色土は，包含する遺物はきわめて少なく，縄文土器の細片が少量出土したのみである。

第12層以下は無遺物層で，第12層は暗灰黄色粘質土，第13層は灰黄色粘質砂，第14層は黒色土，第15層は灰黄色粗砂。東壁に認められる第13'層は土壌化していて黒みがやや強い。第14層の黒色土は腐植土層であるが，遺物の出土は見られなかった。第14層の黒色土を試料とした炭素14年代測定を（株）加速器分析研究所に依頼したところ，未較正で，5830±30ＢＰ（IAAA-133680）という測定値を得た。

南区南西隅の層位（図76）　北壁と南壁の層位を図76に掲げた。第１層は表土。第２層は黒褐色土。古代の遺物を包含する。第３層は黄色砂。南辺中央の第３層と同一で，弥生前期末の洪水層。第４層は黒色，第５層は赤褐色を呈する腐植土層。上から10㎝単位の人工層位で遺物を取り上げた。第６層は黄白色砂，第７層は灰褐色砂質土，第８層は暗灰褐色砂質土，第９層は灰白色砂で，南区北西隅の第５層～第８層に対比できる。

3　縄文時代の遺構と遺物

⑴ 検出遺構（図版18・19，図77）

南区では調査できた面積が狭小であったことや当時の地表面が南へ下る斜面に位置していたこともあってか，遺構の確認にはいたらなかった。一方，北区では第４層黒色土を掘削し，下層の第５層灰褐色砂質土上面で，黒色土の落ち込みを捉えることができた。

ＳＸ２　　北区南西隅で検出した落ち込み。東側は調査区外，南側は攪乱部分となっており，全体の形状ははっきりしない。西端は直径1.2mをはかる円形状の落ち込みとなっており，この部分は東側の落ち込みを切っているようにも観察できた。検出面からの深さは，東側の最深部で0.5m，西側の円形状落ち込みで0.7mである。出土遺物の多くは中期後葉の縄文土器だが，晩期末の凸帯文土器を１点含んでいる。

ＳＸ１　　北区中央から西半で検出した東西に伸びる溝状の落ち込み。最大幅1.2m前後で，調査区外へと続いていたと思われる。検出面からの深さは東側で0.2m前後，西側で0.6m前後をはかる。出土土器は中期後葉が主体を占めるが，晩期末の凸帯文土器を含む。

ＳＸ１・ＳＸ２以外に，北区北壁中央付近で直径0.2mをはかるピット（ＳＰ５），ＳＸ２の北側で，長径1.1m，短径0.6mをはかる土坑状の落ち込みも確認した。

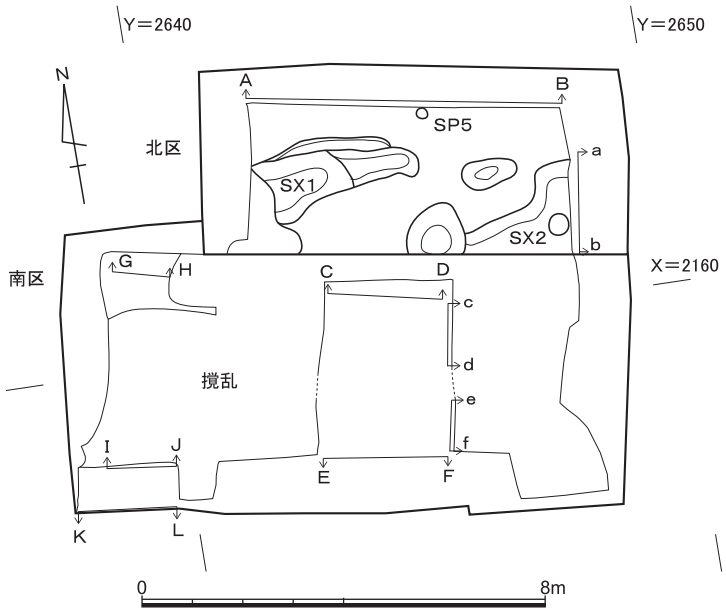


図77　縄文時代の遺構　縮尺1/150

⑵ 出土縄文土器の概要

今回の調査で出土した縄文土器は整理箱８箱を数える。調査地点の一部が重複している1982年度（123地点）の調査では，大型の破片が多数出土したことと比較すると，今回の調査では小片の出土が多数を占めた。中期・後期・晩期の土器が出土しているが，主体を占めるのは中期である。型式の比定できる資料は小片も含めて図示するように努めた。また，南区の北辺中央，南辺中央，南西隅に関しては厚い包含層が確認できたため，上から10㎝単位の人工層位で遺物の取り上げをおこなった。こうして取り上げた遺物は，整理の過程で，壁面の層位図と照合して帰属層位を確定させている。

出土遺物の主体を占める中期後半の土器に関しては，記述の便宜上，船元Ⅲ式を中期中葉，船元Ⅳ式・里木Ⅱ式を中期後葉，北白川Ｃ式を中期末として解説する。また中期末の器種分類は，『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲの呼称にしたがう。

⑶ 北区出土縄文土器（図版20・21，図78～82）

ＳＸ２出土土器（Ⅱ１～Ⅱ21）　Ⅱ１～Ⅱ15は中期後葉の土器。地文として，深い条と浅い条が１条おきにあらわれる縄巻縄文（深浅縄文：Ⅱ１～Ⅱ11）と棒巻縄文（撚糸文：Ⅱ12～Ⅱ15）の２種がある。Ⅱ１・Ⅱ２・Ⅱ４・Ⅱ５・Ⅱ12は半截竹管を用いて施文している。Ⅱ１はキャリパー形を呈する深鉢口縁部で，地文に縄文を施文後，口縁端部に半截竹管による２条沈線を横走させ，その下方に下に開く弧線文を描く。Ⅱ４は半截竹管による小波状文を横走させ，弧線文を施している。

Ⅱ16～Ⅱ18は中期末の土器。Ⅱ17は体部で渦巻き状の沈線間に刺突を加えている。Ⅱ18は屈曲する口縁部の部分で，上下を沈線で画している。

Ⅱ19は，波状口縁で，口縁部に２列，押引状の刺突をもつ。東海地方の北屋敷式に比定できる。Ⅱ20は晩期末の凸帯文深鉢。無刻みの凸帯が貼付されるが，上側のみが撫で整形されている。Ⅱ21は底部で平底を呈する。中期末とみられる。

ＳＸ１出土土器（Ⅱ22～Ⅱ42）　Ⅱ22・Ⅱ23は中期中葉の土器。Ⅱ22は，地文に２段右撚縄文を施文後，内湾する口縁部に隆帯を貼付し，その上から半截竹管で沈線文を加えている。口縁端部は面取りをして内削ぎとなる。Ⅱ23は口縁部に縦方向，頸部に横方向の隆帯を貼付する。

Ⅱ24～Ⅱ31は中期後葉の土器で，地文に縄巻縄文を施文する。Ⅱ32～Ⅱ41は中期末の土器。Ⅱ32は，口縁部がく字形に屈曲する浅鉢の破片とみられる。押引状の刺突の下には２段左撚縄文を施文している。Ⅱ33は，深鉢Ａ類で，口頸部の境を縄文（２段左撚）を施文

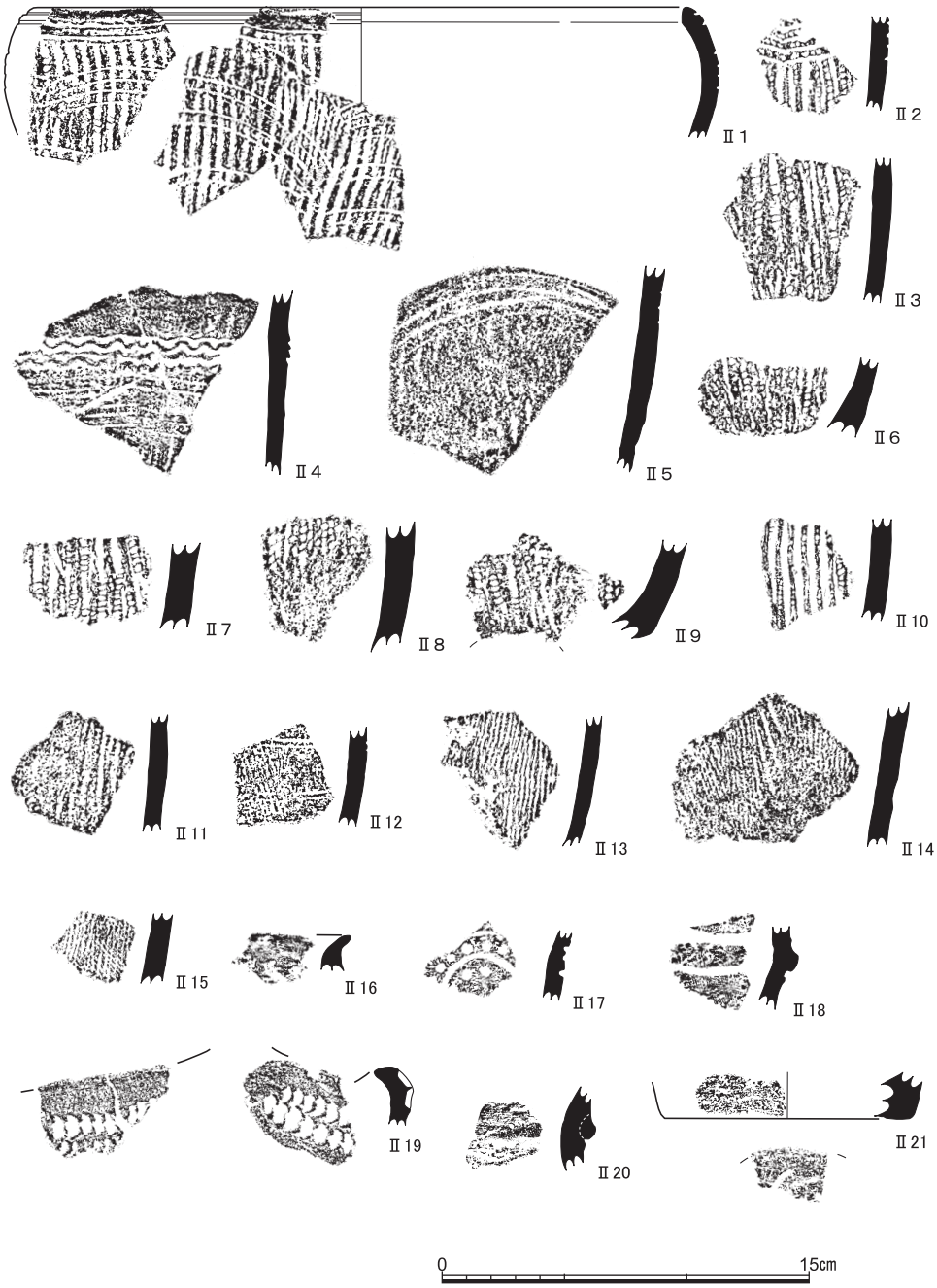


図78　北区出土土器(1)（Ⅱ１～Ⅱ21ＳＸ２出土）　縮尺1/3

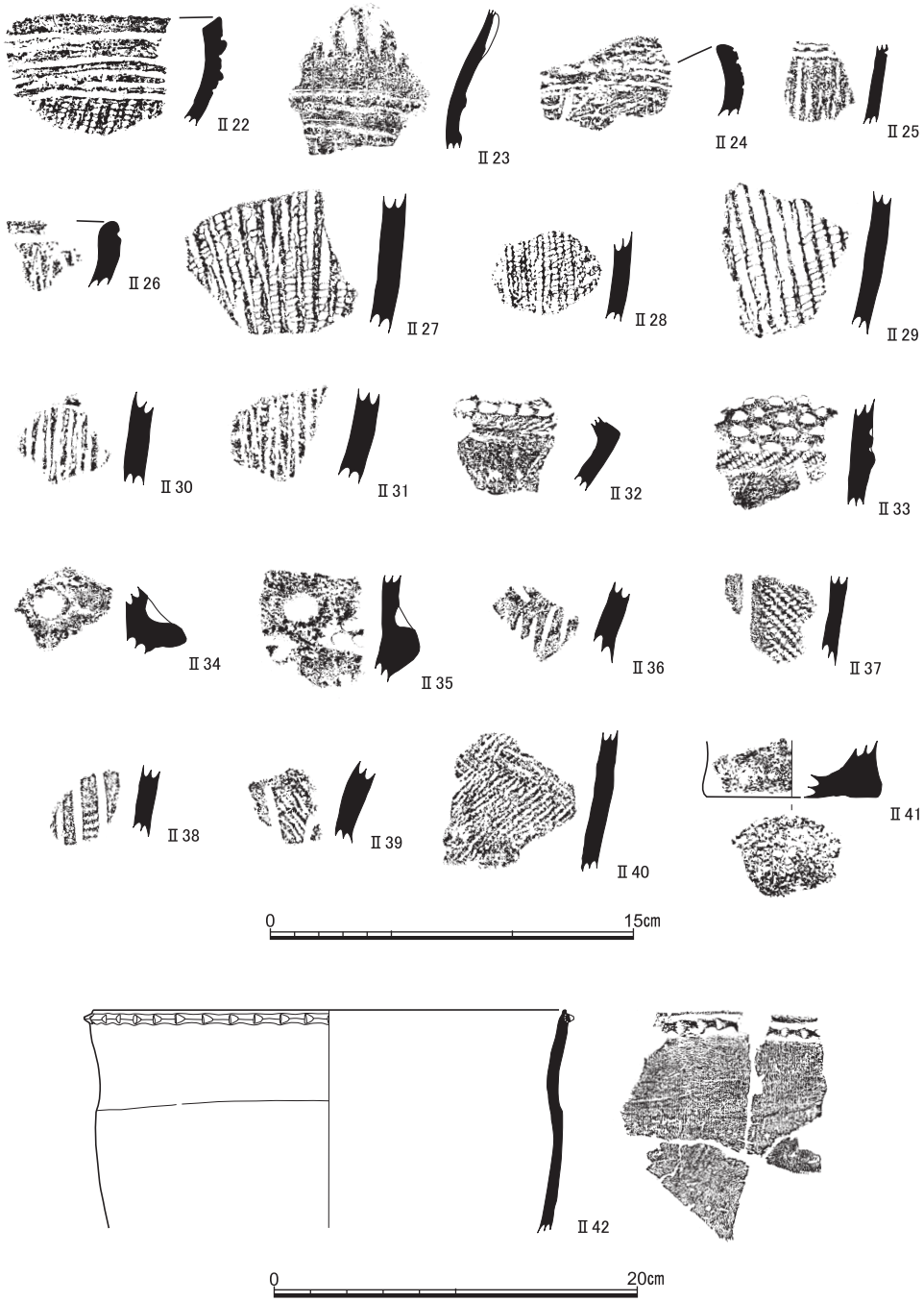


図79　北区出土土器(2)（Ⅱ22～Ⅱ42ＳＸ１出土）　縮尺1/3，1/4（Ⅱ42のみ）

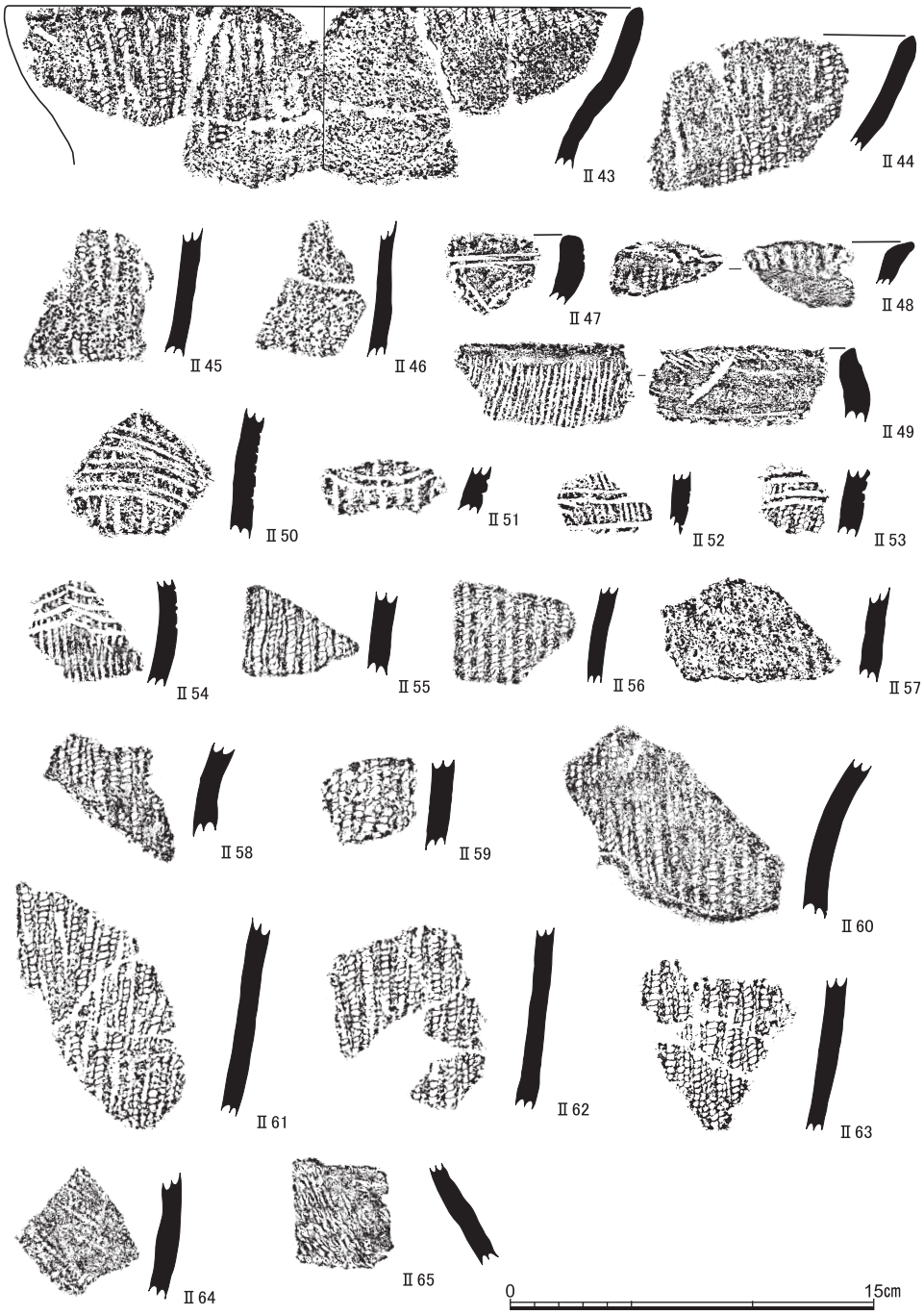


図80　北区出土土器(3)（Ⅱ43～Ⅱ65第４層出土）　縮尺1/3

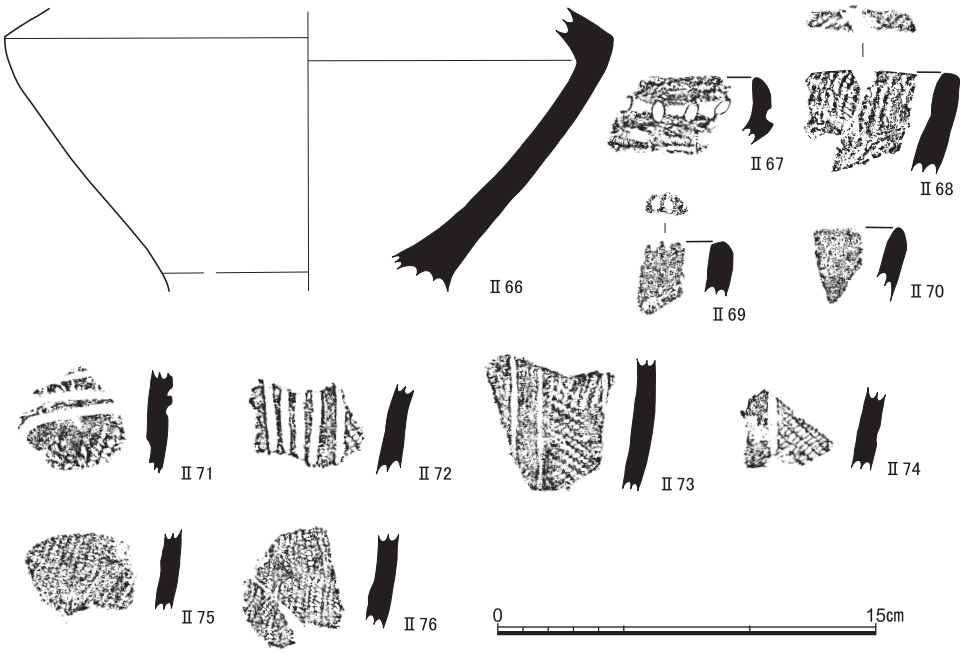


図81　北区出土土器(4)（Ⅱ66～Ⅱ76第４層出土）　縮尺1/3

した隆帯で画し，口縁部には４段以上の刺突列を加えている。体部に垂下させた沈線の一部が残存している。Ⅱ34・Ⅱ35は深鉢Ｂ類。Ⅱ35は楕円形区画内の沈線は押引き施文である。Ⅱ41は底部で，平底。

Ⅱ42は晩期末の凸帯文深鉢。口径26cm前後をはかり，頸部がややくびれる。頸部は横撫で，胴部も撫で仕上げだが，前段階の削りの痕跡を残している。Ｄ字刻みをもつ凸帯は口縁部からやや下がった位置に貼付される。口縁端部は丸く収めている。

第４層出土土器（Ⅱ43～Ⅱ76）　Ⅱ43～Ⅱ63は中期後葉の土器。Ⅱ47が地文不明，Ⅱ49・Ⅱ54が棒巻縄文を地文とするほかは，縄巻縄文である。Ⅱ43・Ⅱ44は内湾する口縁部に縄巻縄文を縦走させ，口縁部内面にも縄文を施文する。Ⅱ48も口縁部の内外面に縄文を施文する。Ⅱ49は口縁部に棒巻縄文を縦走させ，口縁端部にも同一原体による縄文を施している。

Ⅱ66は口頸部がく字形に屈曲する鉢形の土器。屈曲部での径24cm前後。底部は剝離している。内外面とも，粗い磨きで整形している。赤褐色を呈し，器厚は１cmをはかる。色調・器厚・胎土ともに異質であり，在地の土器ではない可能性が高いが，故地を特定できていない。

Ⅱ67～Ⅱ76は中期末の土器。Ⅱ67は深鉢Ａ類で，口縁部に１条の沈線を横走させ，沈線内に刺突を施している。Ⅱ68は口縁部から口縁端部にかけて２段左撚縄文を施文している。Ⅱ69は口縁端部を刻んでいる。

第３層出土土器（Ⅱ77～Ⅱ101）　Ⅱ77～Ⅱ87は中期後葉の土器。Ⅱ77は縄巻縄文を地文とし，口縁直下に１条沈線をめぐらし，その下方に半截竹管による弧線文を施している。口縁部内面にも縄文を施文している。Ⅱ79は棒巻縄文を地文とし，半截竹管による小波状文を口縁直下に施し，その下方に弧線文を描いている。

Ⅱ88～Ⅱ99は中期末の土器。Ⅱ88～Ⅱ92は深鉢Ａ類。Ⅱ88は窓枠状の区画沈線をもち，口縁端部に２段左撚縄文を施文している。Ⅱ89～Ⅱ92は口縁部下端に隆帯を貼付して，頸部との境を画している。Ⅱ91の口縁部をめぐる沈線は押し引き状となる。Ⅱ93・Ⅱ94は深鉢Ｂ類。Ⅱ93は橋状の把手が剝落した痕跡を残す。把手上部の位置には，円形の押捺を加えている。楕円形の区画には，周回すると想定できる１条の沈線がみえる。Ⅱ94は楕円形区画をつなぐ部分は突起となり，区画に沈線は認められない。突起上部には円形押捺を施文する。Ⅱ95は口縁部と口縁端部に２段右撚縄文を施文する。Ⅱ96は深鉢Ｃ類。

Ⅱ100・Ⅱ101は後期前葉の北白川上層式。Ⅱ100は胎土に角閃石を含み，口縁部に右下がりの条線文を施す。Ⅱ101は口縁部が外反し，端部に２段左撚縄文を施文する。

第２層出土土器（Ⅱ102～Ⅱ109）　Ⅱ102～Ⅱ105は中期後葉の土器。Ⅱ102・Ⅱ103は摩滅が著しい。Ⅱ102は縦走縄文を地文にもち，Ⅱ103は２条の隆帯を横走させ，口縁端部には縄文を施文している。Ⅱ104は縦走縄文地に半截竹管で文様を描く。Ⅱ105は地文を棒巻縄文とする。

Ⅱ106～Ⅱ109は中期末の土器。Ⅱ106・Ⅱ108は深鉢Ａ類，Ⅱ107は深鉢Ｂ類。Ⅱ107は口縁部の外面および内面に２段右撚縄文を施文している。

⑷ 南区北西隅出土縄文土器（図版22，図83）

第２層出土土器（Ⅱ110～Ⅱ118）　Ⅱ110は中期中葉の土器。隆帯を横走させ，その上下に半截竹管による小波状文を施文している，地文は縦走縄文である。Ⅱ111～Ⅱ118は中期末の土器。Ⅱ111は深鉢Ａ類で，弧状の沈線束がめぐる。口縁部は短く屈折し，端部内面には２段左撚縄文を施文している。Ⅱ114は深鉢Ｄ類。口縁部および口縁端部に横位，体部に間隔をあけて縦位に１段左撚縄文を施文している。

⑸ 南区北辺中央出土縄文土器（図版22～24，図84～87）

第10層出土土器（Ⅱ119～Ⅱ131）　Ⅱ119～Ⅱ120・Ⅱ122～Ⅱ129は中期後葉の土器。

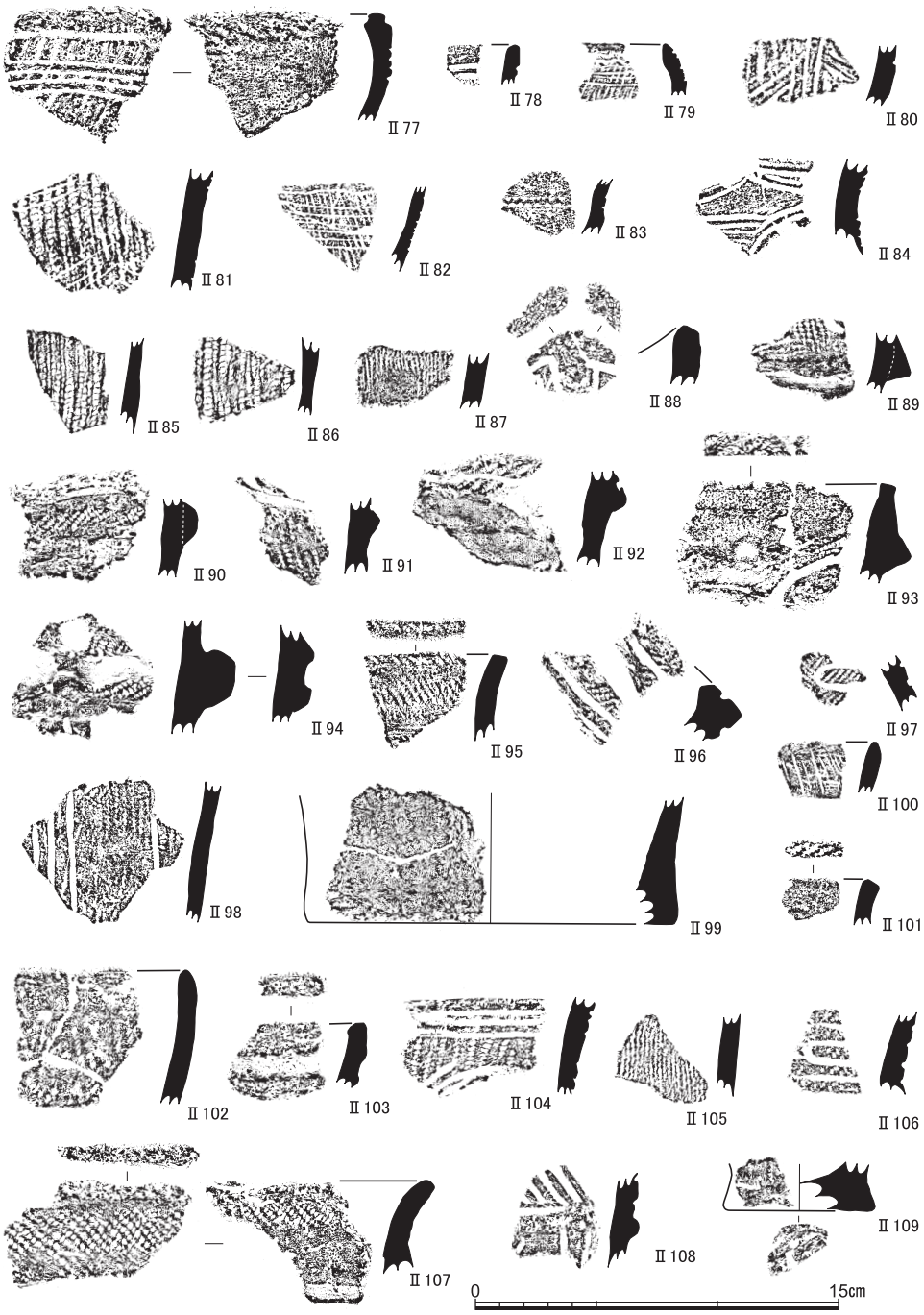


図82　北区出土土器(5)（Ⅱ77～Ⅱ101第３層出土，Ⅱ102～Ⅱ109第２層出土）　縮尺1/3

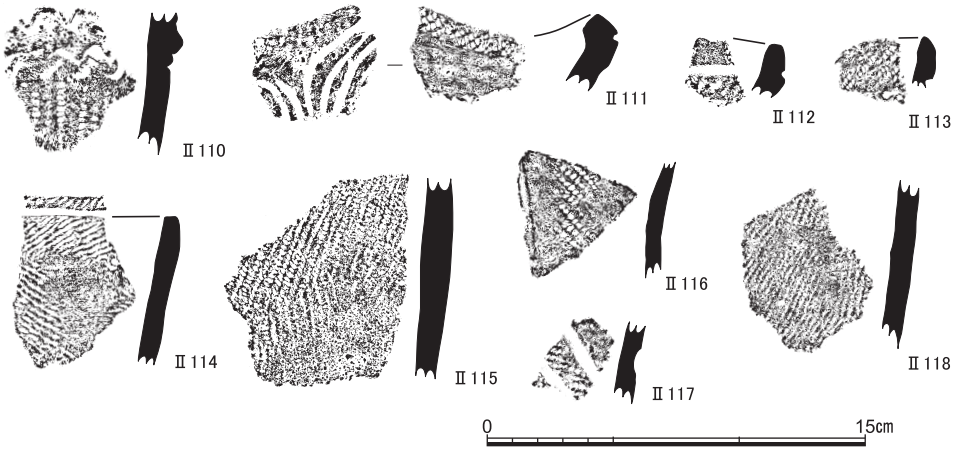


図83　南区北西隅出土土器（Ⅱ110～Ⅱ118第２層出土）

Ⅱ119は波状口縁でゆるやかに内湾する形態。縄巻縄文を地文にもち，幅広い口縁部に隆帯を用いて三角形状の文様を描いている。隆帯は貼付後，半截竹管を用いてその上をなぞっているが，口縁外側端部に貼付された隆帯には半截竹管によるなぞりは認められない。口縁端部には，半截竹管による連続刺突を加えている。

Ⅱ120・Ⅱ123・Ⅱ125・Ⅱ127は，縄巻縄文が縦走する胴部破片。Ⅱ122は外反する口縁部資料で，外面に２段右撚りによる縦走縄文をもち，口縁部内面にも同一原体による斜行縄文を施文している。Ⅱ124は頸胴部境を半截竹管による小波状文で画し，胴部には棒巻縄文を縦走させている。Ⅱ126・Ⅱ128は縦走縄文地に半截竹管による多条沈線を加えている。Ⅱ129は地文に棒巻縄文をもつ胴部破片。

Ⅱ121・Ⅱ130・Ⅱ131は中期末の土器。Ⅱ121は口縁部がやや外反気味に立ち上がる深鉢。口縁部外面と口縁端部に２段左撚縄文を施文している。Ⅱ130は胴部破片で，垂下する沈線と縄文が見える。Ⅱ131は鉢ないしは浅鉢。口縁端部に沈線を１条めぐらしている。同一個体と思われる破片（Ⅱ160）が第９層から出土している。

第９層出土土器（Ⅱ132～Ⅱ162）　Ⅱ132～Ⅱ154は中期後葉の土器。Ⅱ132は，地文に縦走縄文を施し，波状口縁の湾曲と並行して隆帯を貼付し，半截竹管をもちいてその上をなぞっている。口縁部内面にも斜行縄文を施文する。Ⅱ133は口縁部内外面に２段左撚縄文を施文する。Ⅱ134・Ⅱ135は口縁部破片で縦走縄文をもち，Ⅱ134はその上に半截竹管による弧状沈線を施文する。Ⅱ138は縦走縄文地に，半截竹管でなぞりを加えた隆帯と垂下する多条沈線を施文している。Ⅱ140は棒巻縄文地に半截竹管による弧線文を施文す

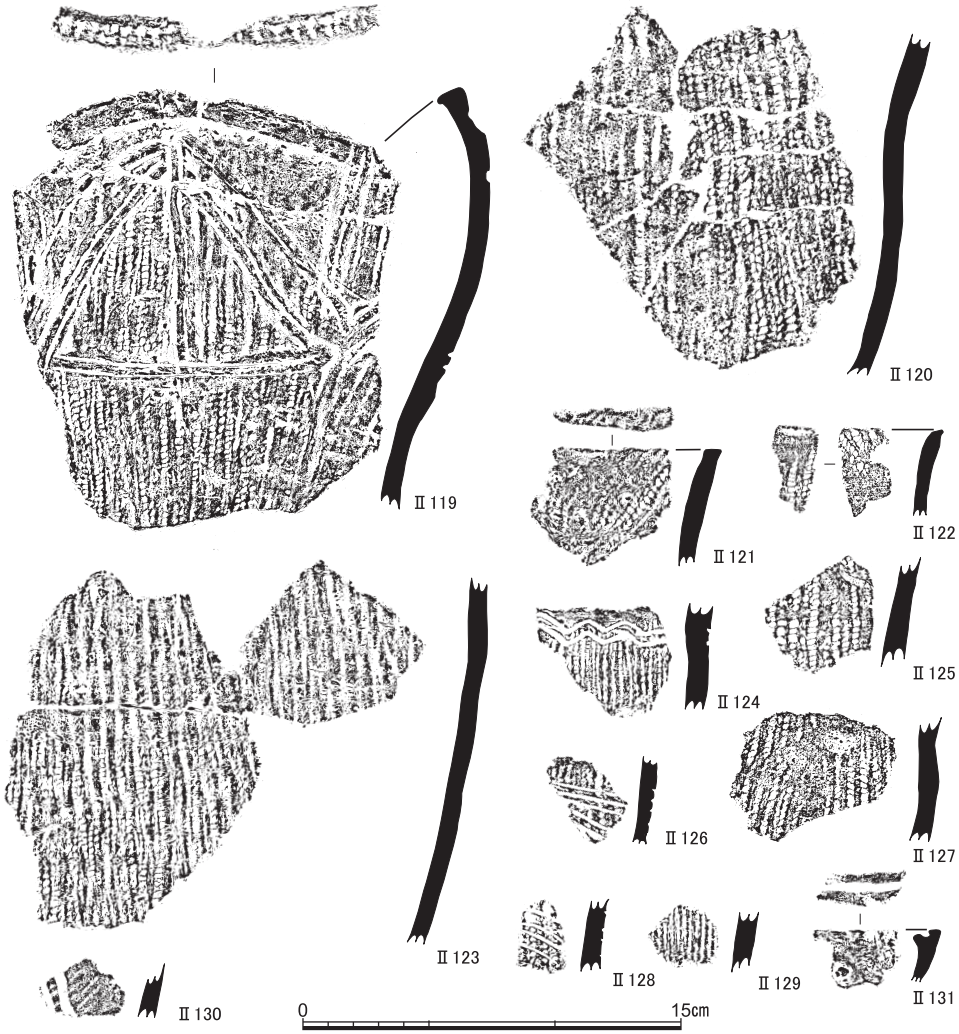


図84　南区北辺中央出土土器(1)（Ⅱ119～Ⅱ131第10層出土）　縮尺1/3

る。Ⅱ143・Ⅱ145～Ⅱ149・Ⅱ153は縄巻縄文を地文にもつ胴部破片。Ⅱ152は半截竹管による多条の沈線を垂下させる。沈線は浅く施されている。Ⅱ154はゆるやかな波状口縁で，口縁外側端部を肥厚させ，その下方に口縁部に沿って２条の沈線をめぐらしている。地文に２段右撚縄文をもつ。口縁内側端部は，内削ぎ状となる。

Ⅱ155～Ⅱ160は中期末の土器。Ⅱ155・Ⅱ156は深鉢Ａ類の口縁部。Ⅱ155は口縁端部に２段左撚縄文を施文している。Ⅱ158は深鉢Ｃ類。口縁端部にも２段左撚縄文を施文している。Ⅱ159は口頸部の境を底平な隆帯で画し，隆帯上には指頭状の押捺を施している。

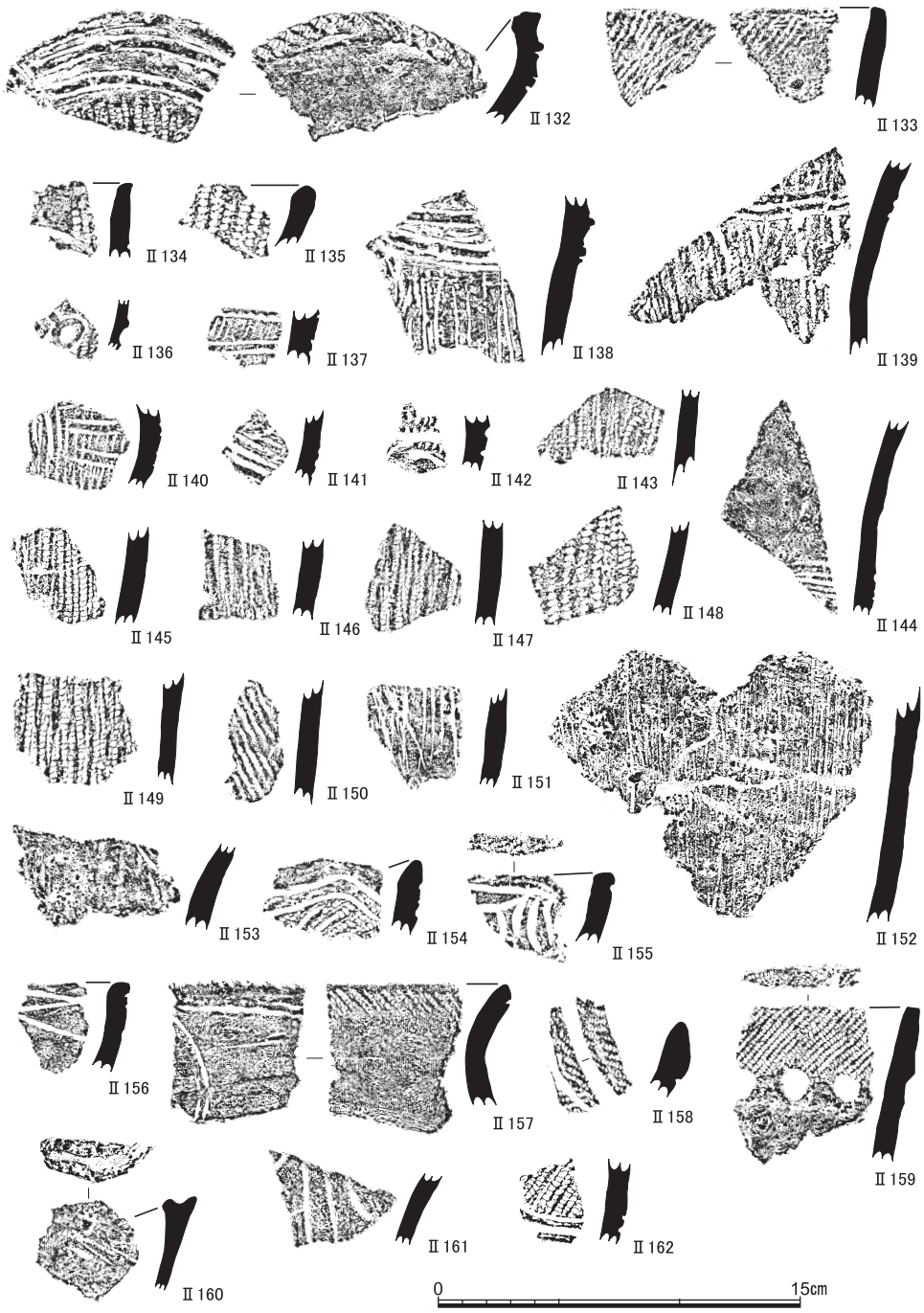


図85　南区北辺中央出土土器(2)（Ⅱ132～Ⅱ162第９層出土）　縮尺1/3

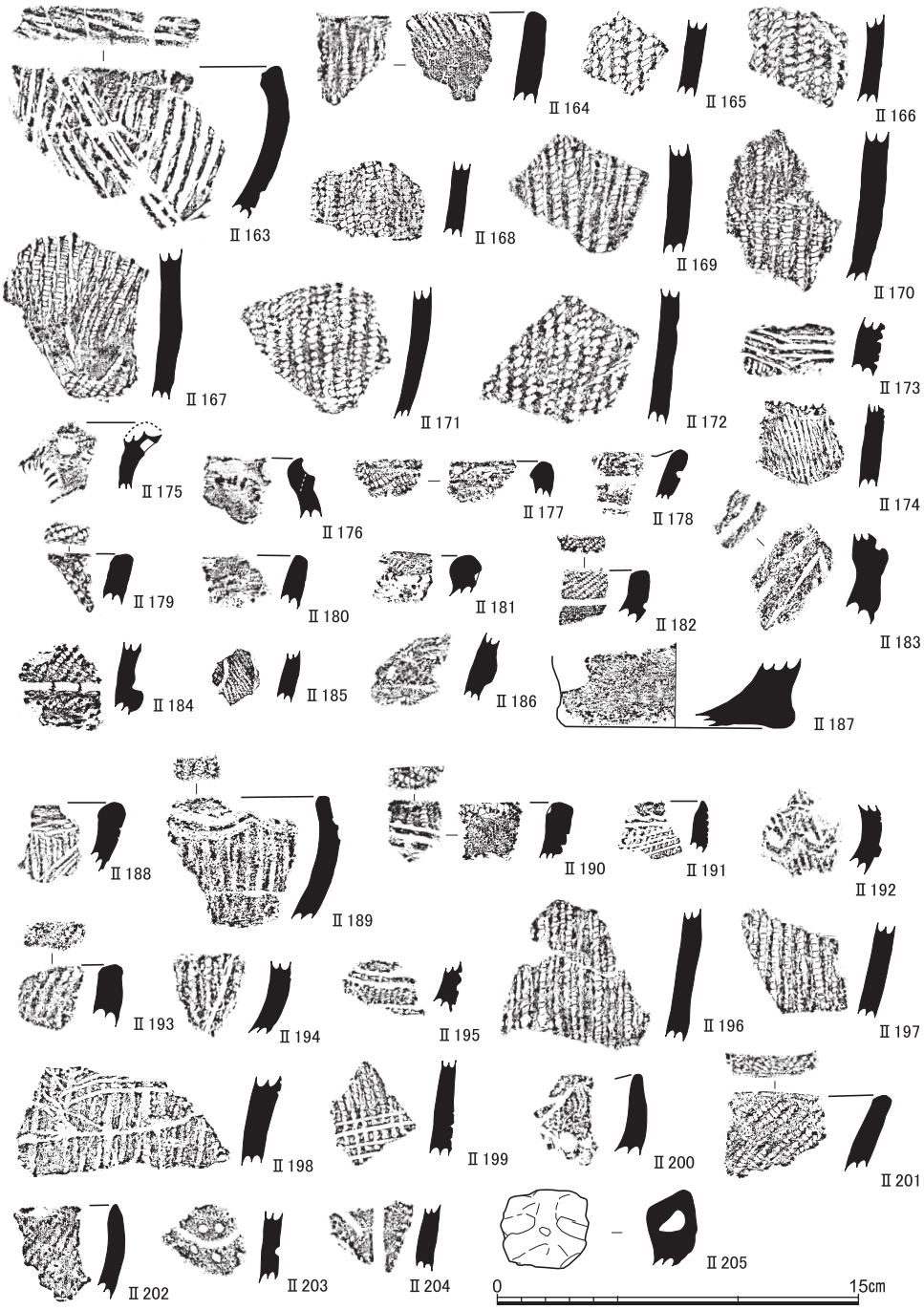


図86　南区北辺中央出土土器(3)（Ⅱ163～Ⅱ187第８～第６層出土，Ⅱ188～Ⅱ205第４層出土）　縮尺1/3

口縁部と口縁端部には２段左撚縄文を施文する。

第８層～第６層出土土器（Ⅱ163～Ⅱ187）　Ⅱ176は無文地に隆帯を貼付し，Σ字状となる刻みを加えている。前期末～中期初頭に比定される可能性が高い。

Ⅱ163～Ⅱ174は中期後葉の土器。Ⅱ163～Ⅱ172は地文に縄巻縄文による縦走縄文をもつ。Ⅱ163は縄巻縄文を地文とし，半截竹管によるなぞりを加えた隆帯を斜行させている。口縁端部にも縄文を施文している。Ⅱ164は口縁部内面にも縄文を施文している。Ⅱ173・Ⅱ174は地文に棒巻縄文をもち，Ⅱ173は半截竹管による弧線文，Ⅱ174は同一原体によるコンパス文を施文している。

Ⅱ175・Ⅱ177～Ⅱ186は中期末の土器。Ⅱ175は区画を作る沈線を押し引き状に施文している。Ⅱ183は深鉢Ｃ類。Ⅱ184は深鉢Ａ類で，口頸部の境を隆帯で区画する。口縁部には２段左撚縄文を施文し，下端に押し引き沈線を横走させる。Ⅱ185は曲線を描く沈線間に２段左撚縄文を充塡している。後期初頭に下る可能性もある。Ⅱ186は口頸部の境を隆帯で区画する。隆帯状には２段左撚縄文と円形の押捺が加えられる。

Ⅱ187は底部で，外縁が高台状となり，底面はわずかに凹んでいる。

第４層出土土器（Ⅱ188～Ⅱ205）　Ⅱ188～Ⅱ199は中期後葉の土器。Ⅱ188～Ⅱ190は縄巻縄文による縦走縄文地に，半截竹管による弧線文を描いている。Ⅱ191・Ⅱ192は地文に棒巻縄文をもち，Ⅱ192は半截竹管と隆帯表現による波状文を加えている。

Ⅱ200～205は中期末の土器。Ⅱ200は深鉢Ａ類で，区画文を構成する沈線の一部がみえ，円形押捺を施している。Ⅱ205は浅鉢で，口縁部に橋状の把手がつく。

第２層出土土器（Ⅱ206・Ⅱ207）　Ⅱ206は内湾する深鉢の口縁部。無文地で隆帯を貼付している。中期後葉。Ⅱ207は垂下沈線と円形刺突の組み合わせ。中期末か。

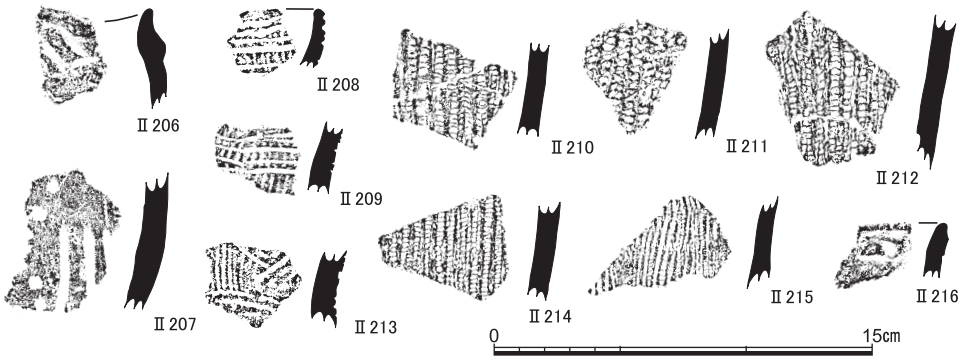


図87　南区北辺中央出土土器(4)（Ⅱ206・Ⅱ207第２層出土），攪乱出土（Ⅱ208～Ⅱ216）　縮尺1/3

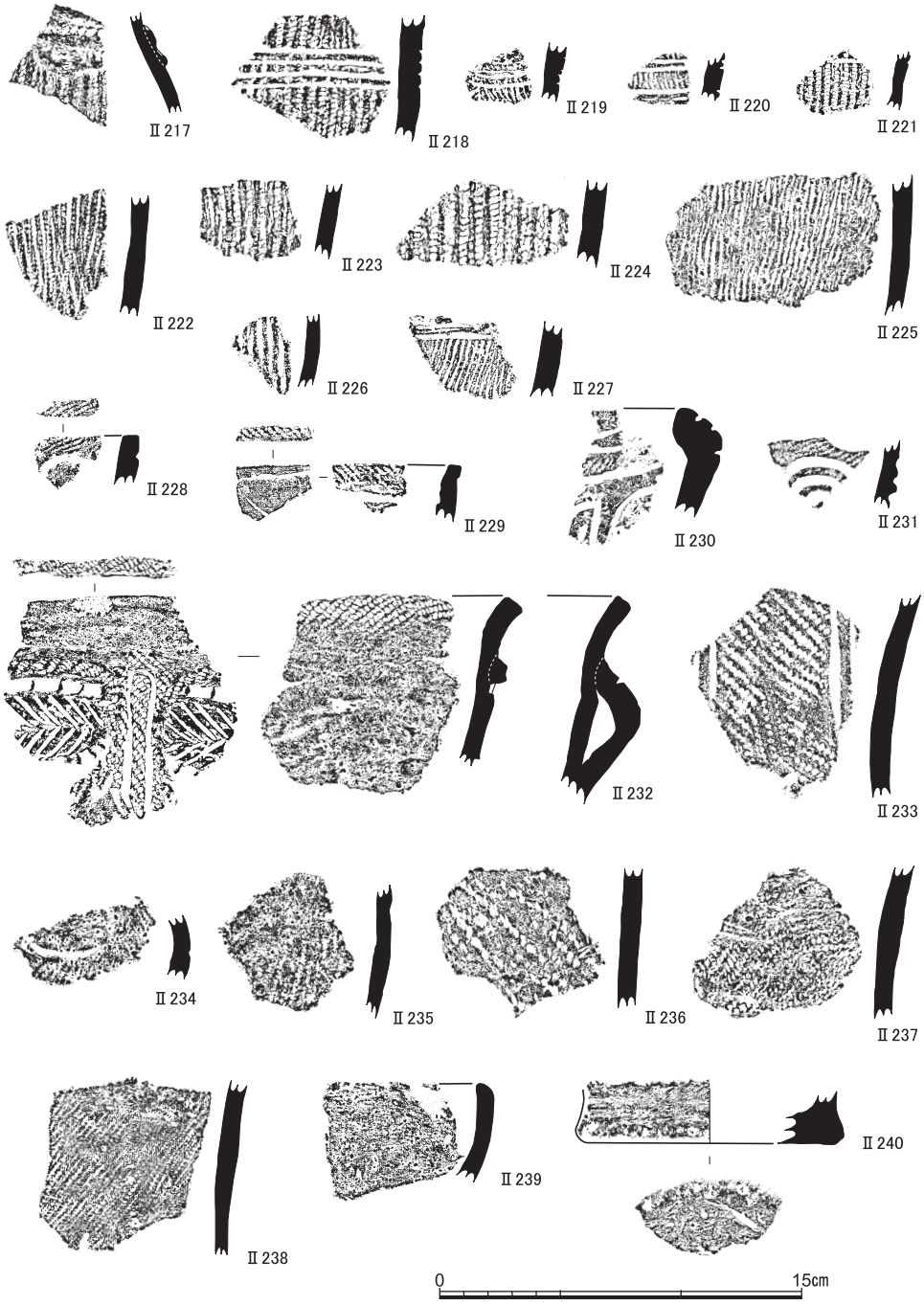


図88　南区南西隅出土土器(1)（Ⅱ217～Ⅱ240第５層出土）　縮尺1/3

⑹ 南区南西隅出土縄文土器（図版24，図88・89）

第５層出土土器（Ⅱ217～Ⅱ240）　Ⅱ217～Ⅱ227は中期後葉の土器。Ⅱ217は縄巻縄文かとみられる縄文を縦走させ，隆帯を貼付しその裾に刻みを加えている。Ⅱ218・Ⅱ221～Ⅱ224・Ⅱ226は縄巻縄文による縦走縄文，Ⅱ219・Ⅱ220・Ⅱ225・Ⅱ227は棒巻縄文による縦走縄文を地文にもつ。Ⅱ219・Ⅱ220・Ⅱ227の沈線はいずれも半截竹管によるものである。

Ⅱ228～Ⅱ240は中期末の土器。Ⅱ228・Ⅱ229は深鉢Ａ類。Ⅱ230は深鉢Ｃ類。Ⅱ232は深鉢Ｂ類。口縁部から下がった位置に隆帯と押引沈線による区画帯を作る。区画内部は綾杉文で充填している。上下の区画隆帯は，橋状把手でつないでいる。隆帯，把手，および口縁端部には２段左撚縄文を施文している。また把手には縄文施文後，沈線で上下方向に細長い区画文を加えている。Ⅱ240は底部で平底。

第４層出土土器（Ⅱ241～Ⅱ265）　Ⅱ241～Ⅱ251は中期後葉の土器。Ⅱ242・Ⅱ243を除き，地文に縄巻縄文を縦走させる。Ⅱ242は内湾する口縁部に棒巻縄文を施し，横走する隆帯を貼り付けている。Ⅱ243は棒巻縄文地に半截竹管による弧状となる平行沈線を施文する。

Ⅱ252～Ⅱ260は中期末の土器。Ⅱ252～Ⅱ254は深鉢Ａ類。Ⅱ252は押引沈線で，横長の楕円形区画文を描き，区画内を２段左撚縄文で埋めている。口縁端部にも縄文を施文する。Ⅱ253・Ⅱ254は隆帯を貼付して口頸部の境を区画している。Ⅱ253は体部を垂下する多条沈線がみえ，Ⅱ254は隆帯上に２段左撚縄文を加えている。Ⅱ261・Ⅱ262は底部。Ⅱ261は底径４㎝前後で，中央に向かって凹む。Ⅱ262は底径10㎝前後の平底。

Ⅱ263・Ⅱ264は後期の北白川上層式。Ⅱ263は口縁部内面，Ⅱ264は口縁端部に縄文を施文する。Ⅱ265は晩期末の凸帯文土器。刻みを施さない凸帯が口縁からやや下がった位置に貼付される。口縁端部は丸くおさめられている。

第４層上面出土土器（Ⅱ266～Ⅱ269）　Ⅱ266は内湾する口縁部に２段左撚縄文を施文し，円形刺突を加えている。中期末か。Ⅱ267は縄巻縄文が縦走する中期後葉の胴部破片。Ⅱ268は底部で，胴下部は細密条痕で整形している。Ⅱ269は晩期末・凸帯文土器の胴部破片。断面三角形状の凸帯を貼付し，凸帯上にＤ字形になる軽い刻みを加えている。

第２層・第１層出土土器（Ⅱ270～Ⅱ282）　Ⅱ270～Ⅱ274は中期後葉の土器。Ⅱ275・Ⅱ276は無文地に半截竹管による平行沈線を施文している。

Ⅱ275～Ⅱ281は中期末の土器。Ⅱ275は押引による区画沈線をもつ。Ⅱ282は底部。

図89　南区南西隅出土土器(2)（Ⅱ241～Ⅱ265第４層出土，Ⅱ266～Ⅱ269第４層上面出土，Ⅱ270～Ⅱ282第２層・第１層出土土器）　縮尺1/3

(7) 南区南辺中央出土土器（図版25・26，図90～93）

第９層出土土器（Ⅱ283～Ⅱ294）　Ⅱ283～Ⅱ289は中期後葉の土器。いずれも縄巻縄文による縦走縄文を地文にもつ。Ⅱ283は口縁外側端部を刻み，内面には縄文を施文している。Ⅱ285は半截竹管による弧状の平行沈線で口縁部を埋めている。Ⅱ286も半截竹管による弧状の平行沈線を加えている。

Ⅱ290～Ⅱ293は中期末の土器。Ⅱ290・Ⅱ291は深鉢Ａ類。Ⅱ290は隆帯で口頸部の境を区画したのち，口縁部には押引沈線で区画文を描き，２段左撚縄文を施文し，下段の横走沈線の途切れた箇所に，円形の押捺を加えている。体部は沈線が垂下する。Ⅱ291は幅1.1cmをはかる幅広の沈線が曲線を描き，口縁端部も含めて，２段左撚縄文を施文している。沈線施文部の内面は突出している。

Ⅱ294は胴下部から底部の破片。いったん立ち上がったのち，外へ大きく開く形態を呈している。

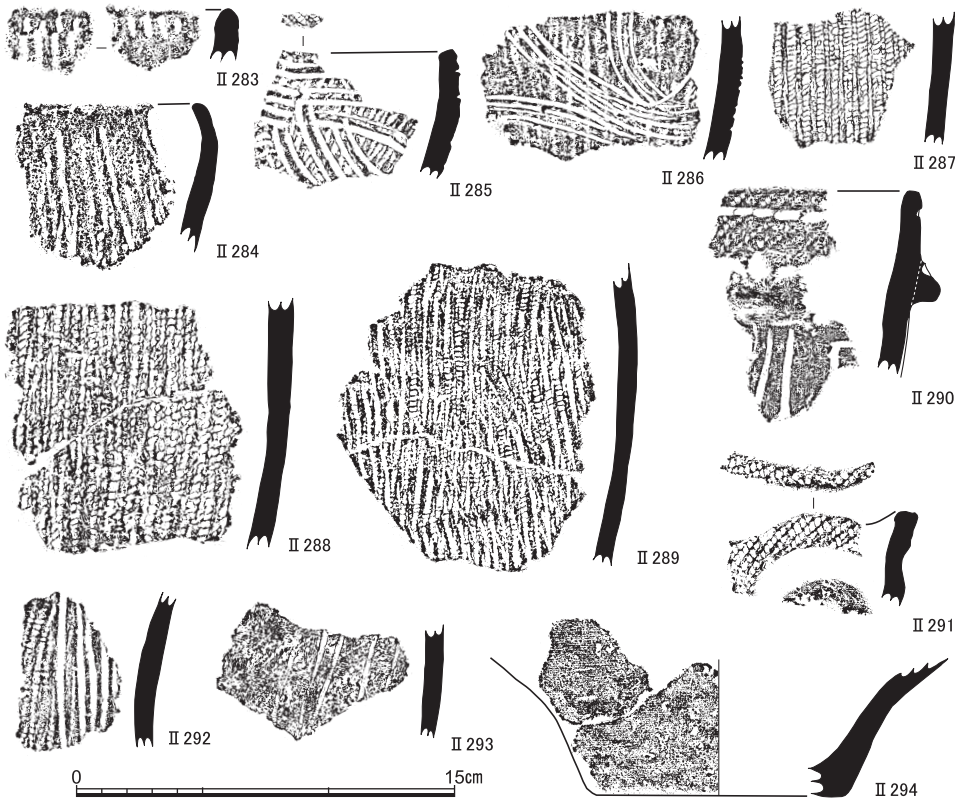


図90　南区南辺中央出土土器(1)（Ⅱ283～Ⅱ294第９層出土）　縮尺1/3

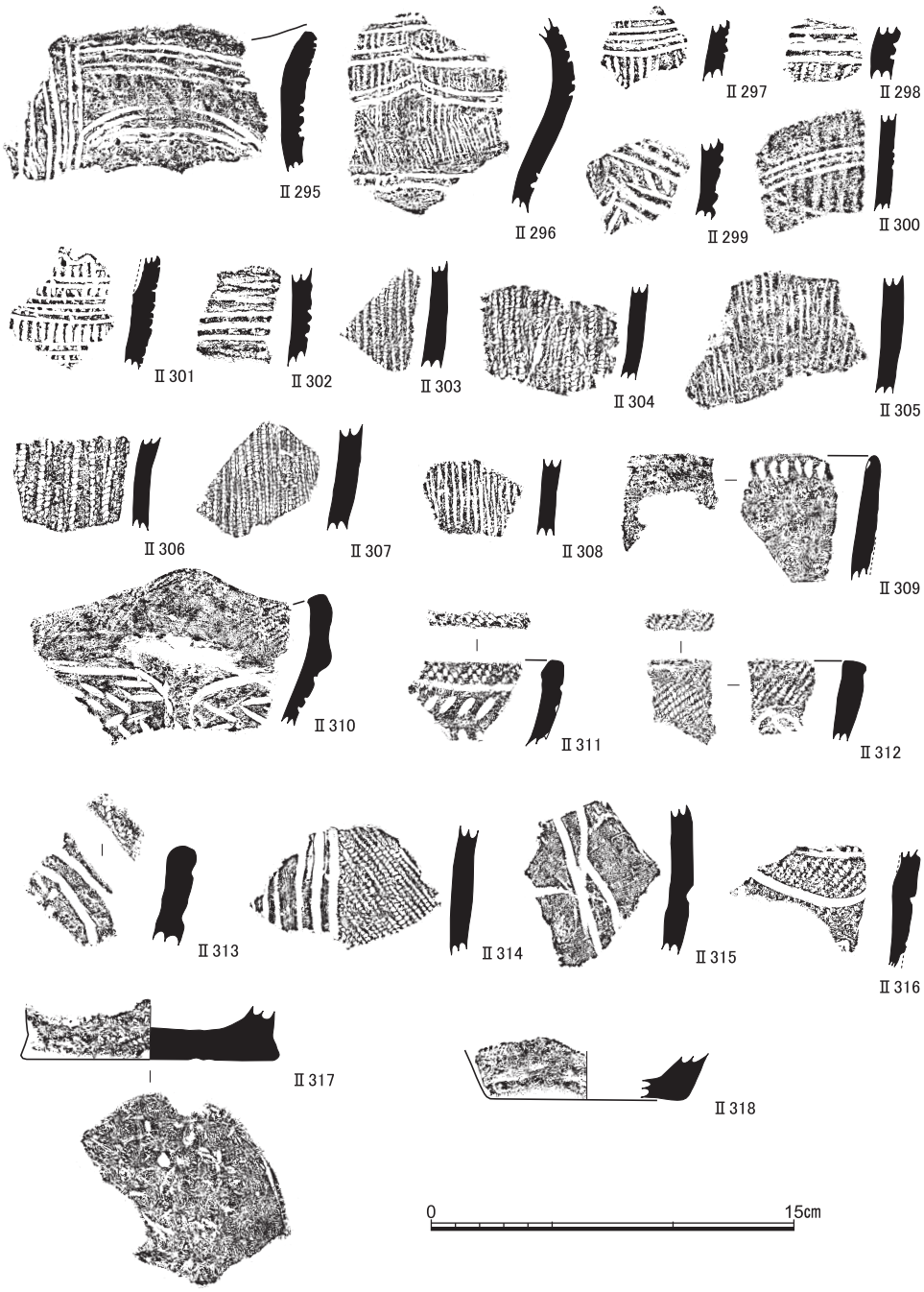


図91　南区南辺中央出土土器(2)（Ⅱ295～Ⅱ318第8層出土）　縮尺1/3

第８層出土土器（Ⅱ295～Ⅱ318）　Ⅱ295～Ⅱ309は中期後葉の土器。Ⅱ295は口縁部がやや外反する形態で，無文地に半截竹管による平行沈線を施文している。Ⅱ296は内湾する口縁部形態で，棒巻縄文を地文とし半截竹管による平行沈線で連弧文を描いている。Ⅱ301も棒巻縄文地に平行沈線を施文しており，拓本最上部は小波状文となる。Ⅱ309は直線的に立ち上がる形態で，外面は無文とし，口縁端部内側にＣ字形の刺突を施している。

Ⅱ310～Ⅱ316は中期末の土器。Ⅱ310は深鉢Ｂ類で，隆帯と沈線で区画した内部は綾杉文で埋めている。口縁部と隆帯の間には，２段左撚縄文を充填している。橋状把手が剝落した痕跡がある。Ⅱ311は深鉢Ａ類で，沈線で区画した内部に綾杉文を施文している。Ⅱ312は口縁部の外面・端部・内面に２段左撚縄文を施文している。

第７層出土土器（Ⅱ319～Ⅱ337）　Ⅱ319～Ⅱ321は中期後葉の土器。いずれも縄巻縄文を地文にもつ。Ⅱ319・Ⅱ320は半截竹管による平行沈線で文様を描く。

Ⅱ322～Ⅱ333は中期末の土器。Ⅱ322は深鉢Ｃ類で，屈曲した口縁部には沈線で長方形の区画文を描き，波頂部には円形の押捺を縦に２個配している。体部には渦巻状となる沈

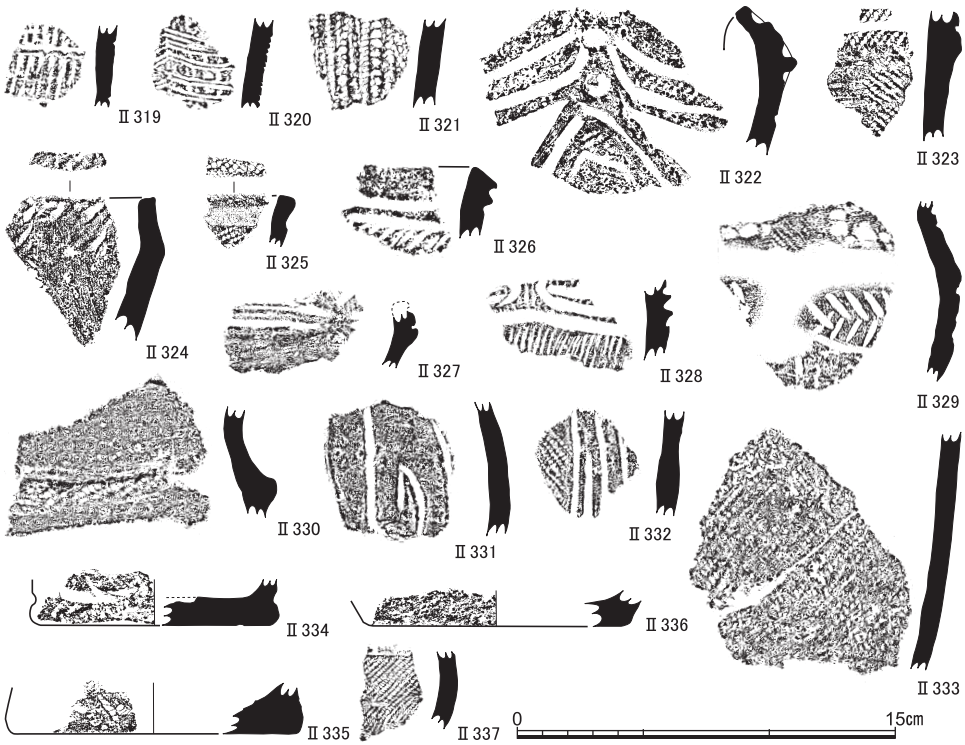


図92　南区南辺中央出土土器(3)（Ⅱ319～Ⅱ337第７層出土）　縮尺1/3

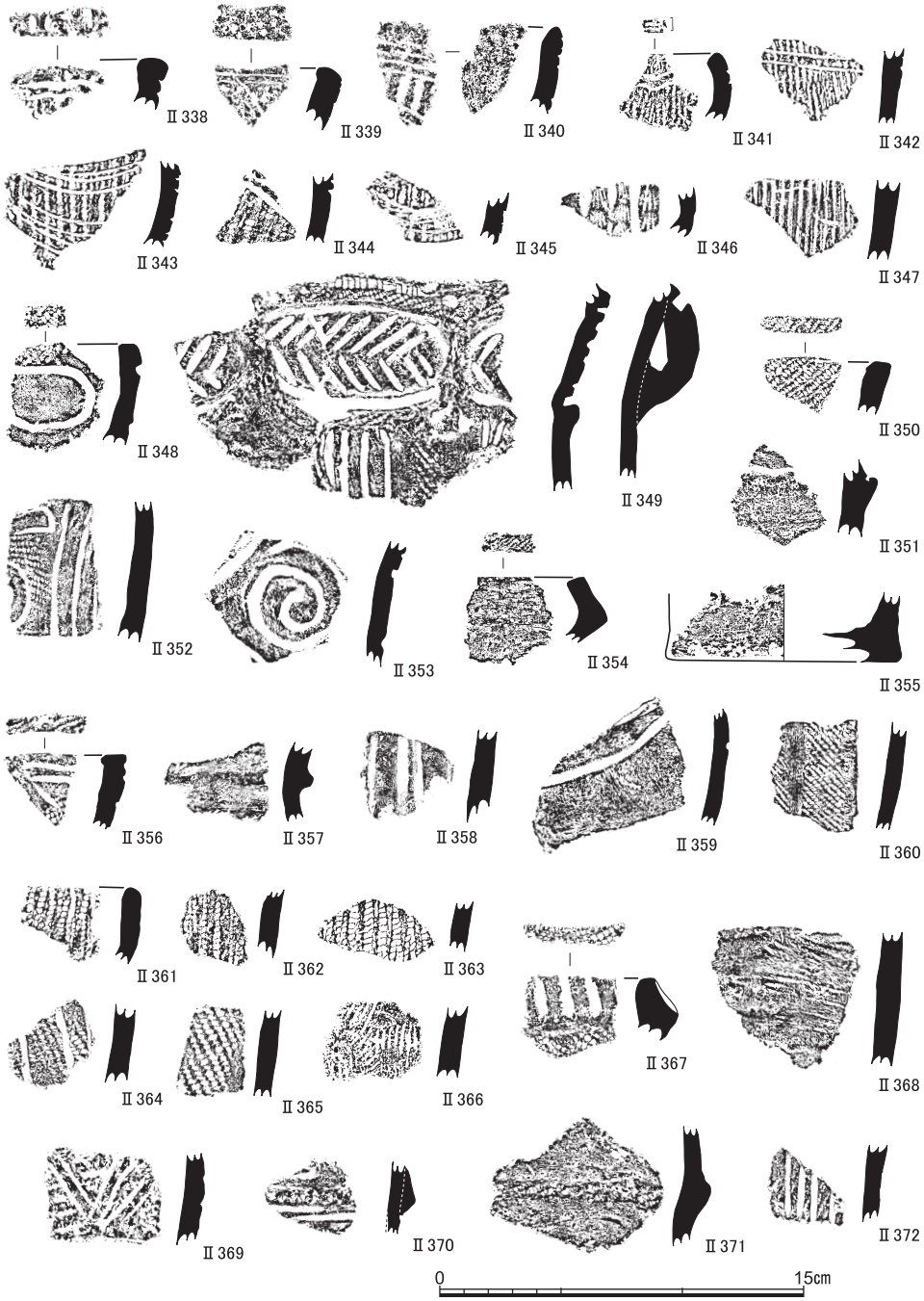


図93　南区南辺中央出土土器(4)（Ⅱ338～Ⅱ355第７～第６層出土，Ⅱ356～Ⅱ360第６層出土，Ⅱ361～Ⅱ368第５層出土，Ⅱ369～Ⅱ372第４層出土）　縮尺1/3

線がめぐっている。Ⅱ323は深鉢Ａ類で，口縁部は横走する沈線施文後，２段左撚縄文を施文し，体部にも間隔をあけて帯縄文を垂下させている。Ⅱ329は深鉢Ｂ類。区画内には綾杉文を施文し，体部にも沈線を垂下させる。Ⅱ334～Ⅱ336は底部。

Ⅱ337は後期の北白川上層式。頸胴部の境を沈線で画し胴部に２段左撚縄文を施す。

第７層～第６層出土土器（Ⅱ338～Ⅱ355）　第７層か，第６層か，出土層位を特定できない遺物である。Ⅱ338～Ⅱ347は中期後葉，Ⅱ348～Ⅱ354は中期末の土器。Ⅱ348は深鉢Ａ類，Ⅱ349は深鉢Ｂ類。Ⅱ349は1982年度調査時の破片と接合したため，合わせて図示している。Ⅱ354は短い口縁部が屈曲する浅鉢。Ⅱ355は底部で，平底。

第６層出土土器（Ⅱ356～Ⅱ360）　いずれも中期末の土器。Ⅱ356は深鉢Ａ類。

第５層出土土器（Ⅱ361～Ⅱ368）　Ⅱ361～Ⅱ363は中期後葉，残りは中期末の土器。

第４層出土土器（Ⅱ369～Ⅱ372）　Ⅱ369は中期後葉，Ⅱ370～Ⅱ372は中期末。

⑻ 攪乱出土縄文土器（図87）

Ⅱ208～Ⅱ216は攪乱除去時に採集された縄文土器。Ⅱ208～Ⅱ215は中期後葉の土器。Ⅱ216は晩期末の凸帯文土器。凸帯は口縁からやや下がった位置につく。

⑼ 石 器 類（図版26，図94）

礫石器と剝片石器が出土している。礫石器は，切目石錐２点，敲石１点，台石１点からなり，すべて図示した。剝片石器は図示した石鏃・石鏃未製品３点のほか，いわゆる楔形石器や剝片・砕片類が総計41点出土している。楔形石器・剝片の材質は，不明石材１点を除きサヌカイトで，肉眼観察では二上山産サヌカイトが主体を占めるが，金山産サヌカイトも３点認められる。

Ⅱ373は凹基式石鏃。脚部の一端を欠損する。肉眼観察では，材質は二上山産サヌカイト。南区南辺中央の第７層ないしは第８層出土。Ⅱ374は凹基式の細身の石鏃。脚部の一端と先端部を欠損する，肉眼観察では，材質は二上山産サヌカイト。南区北西隅の第２層上半出土。Ⅱ375は石鏃の未製品。チャート製。南区南西隅の第４層出土。

Ⅱ376・Ⅱ377は切目石錘。Ⅱ376は完形品で，重さ44.7ｇをはかる。南区南辺中央の第７層ないしは第８層出土。Ⅱ377は半分程度を欠損しており，現重量60.1ｇをはかる。南区南西隅の第４層出土。

Ⅱ378は敲石。縁辺部の３カ所に敲打した痕跡が観察できる。150.9ｇをはかる。南区南西隅の第４層出土。Ⅱ379は台石。平坦面の一部に敲打の痕跡が認められる。現重量1240ｇ。南区南西隅の第５層出土。

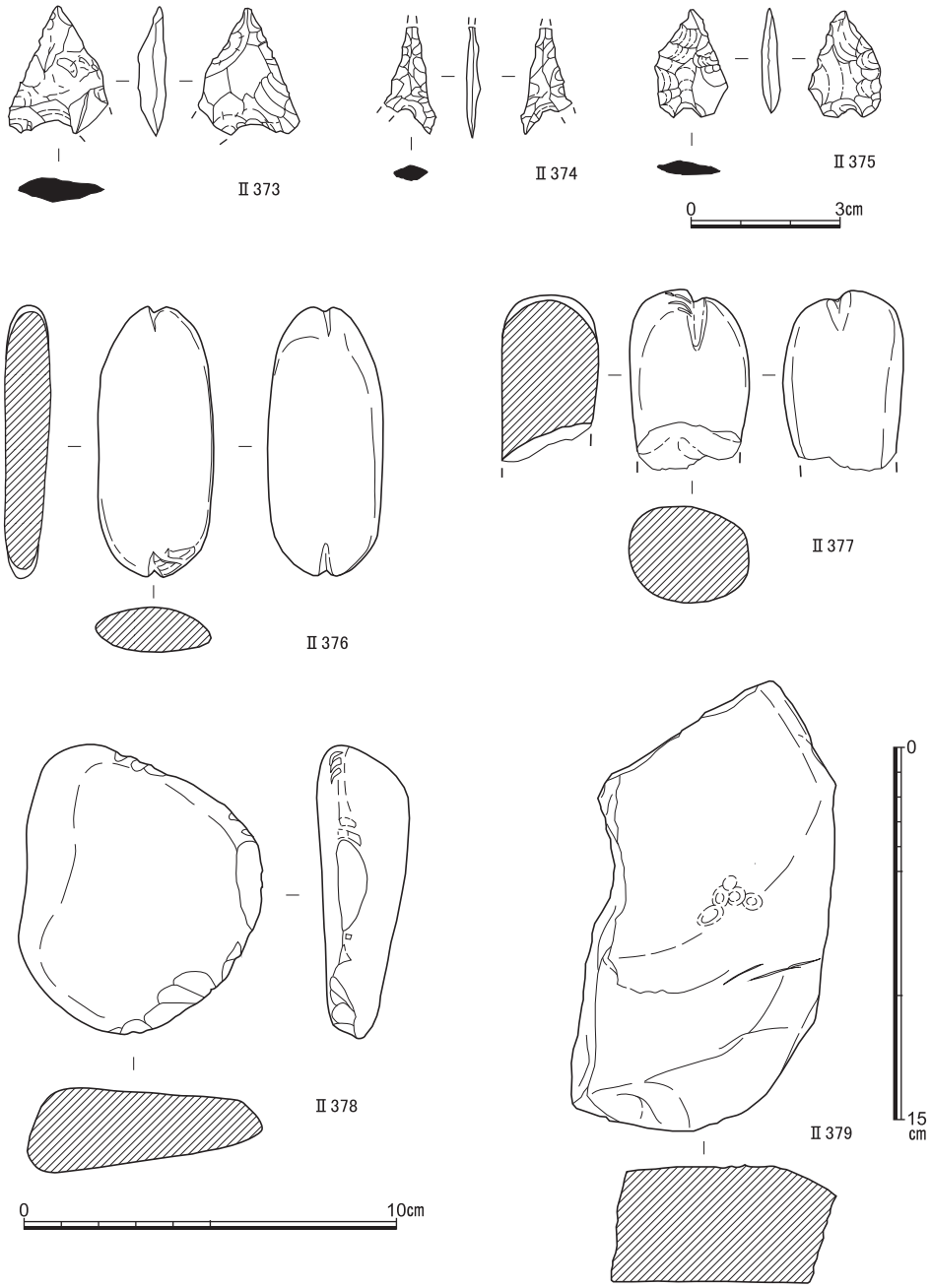


図94　石器（Ⅱ373・Ⅱ374石鏃，Ⅱ375石鏃未製品，Ⅱ376・Ⅱ377切目石錘，Ⅱ378敲石，Ⅱ379台石）
縮尺　Ⅱ373～Ⅱ375：2/3，Ⅱ376～Ⅱ378：1/2，Ⅱ379：1/3

4　古代の遺構と遺物

⑴ 検出遺構（図95）

北調査区では黄褐色土上面，南調査区では黄色砂上面で，黒褐色土を埋土とする土坑やピットを検出した。土坑ＳＫ１は南調査区南辺中央で検出。東西幅0.8mで，南北端はともに攪乱で失われている。検出面からの深さ0.25m。溝の可能性もあるが，南区北辺中央では認められなかったので，そこまでは伸びることはない。

ピットは北区で直径0.2m前後の小穴が見つかったほか，南区では直径0.3m～0.6m前後の小穴が検出されたが，並びなどを復原することはできていない。

⑵ 出土遺物（図96）

Ⅱ380は土師器椀。体部を粗く磨き，口縁部は横撫でで，仕上げている。北区の第２層出土。Ⅱ381は土師器皿。内外面とも，撫で仕上げ。北区の第２層出土。Ⅱ382は土師器盤の底部。底径21.5cmをはかる。南区の攪乱出土。Ⅱ383は土師器高杯の脚部。端部が内側にやや肥厚する。南区南辺中央の第２層出土。Ⅱ384・Ⅱ385は土師器甕。口頸部は内外とも撫でており，体部内面は横方向の刷毛目，体部外面は縦ないしは右下がりの刷毛目を施している。Ⅱ384は南区北辺中央の第２層出土。Ⅱ385は南区南辺中央の第２層より出土し

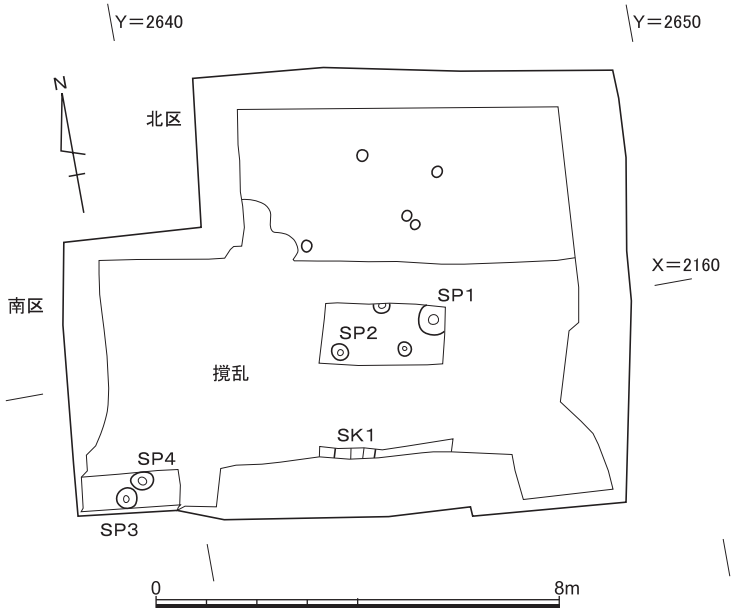


図95　古代の遺構　縮尺1/150

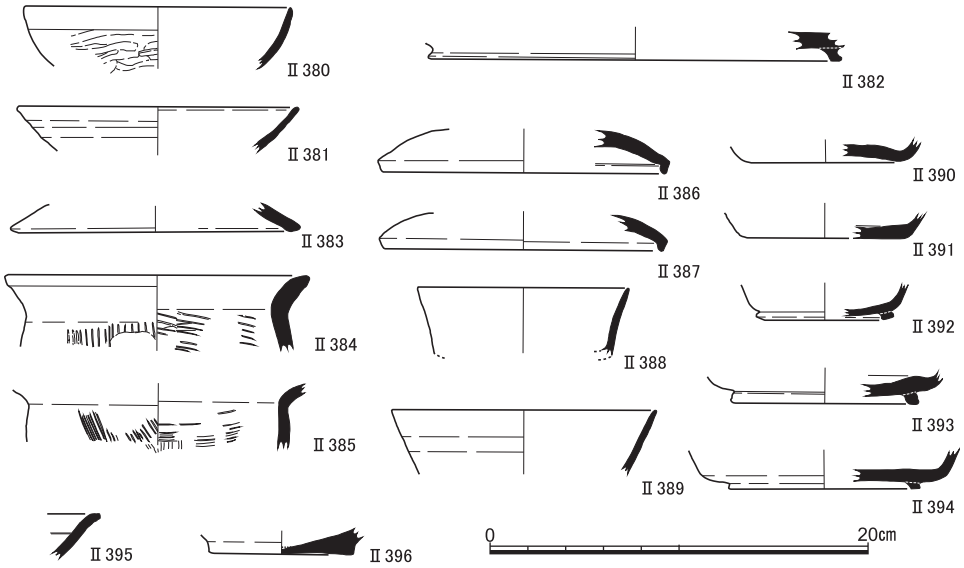


図96　古代の遺物（Ⅱ380～Ⅱ385土師器，Ⅱ386～Ⅱ394須恵器，Ⅱ395・Ⅱ396緑釉陶器）

た。

Ⅱ386・Ⅱ387は須恵器の蓋。口径は14.5～15㎝。口縁端部が下方に折れ曲がっている。Ⅱ386は北区の第３層出土。Ⅱ387は南区北辺中央の第２層出土。Ⅱ388～Ⅱ394は須恵器杯身。Ⅱ388・Ⅱ389は底部を欠損する。Ⅱ390・Ⅱ391は高台をもたない杯Ａ，Ⅱ392～Ⅱ394は貼り付け高台をもつ杯Ｂである。Ⅱ393は焼きがあまい。Ⅱ388・Ⅱ390・Ⅱ392は南区北辺中央の第２層出土。Ⅱ389・Ⅱ394は北区の第２層出土。Ⅱ391・Ⅱ393は北区の第３層出土。

Ⅱ395は緑釉陶器椀の口縁部。外反し口縁端部を上方へつまみ上げる。胎土は硬質。北区の第２層出土。Ⅱ396は緑釉陶器椀の底部。底部は削り成形で，上げ底状となる。胎土は軟質で全面に施釉している。南区北辺中央の第２層出土。

5　小　　結

発掘面積が100㎡に満たず，また攪乱や過去の調査範囲と重複している箇所があったため，実質的に発掘できた面積はその半分以下ではあったが，縄文時代の地形環境を復原する層位データを得られたことが今回の調査の最大の成果であったと言いうる。

調査地点は，北東から南西方向へ向かって張り出す微高地の南西側末端に位置している

ことが調査区壁面の層序から明らかとなった。それぞれの層序は第２節において詳述したのでここでは繰り返さないが，縄文時代の包含層および基盤を形成する砂層の堆積状況から，調査区のほぼ中央付近を境にして，北東から南西方向へ向けて微高地が張り出し，調査区の中央付近から南東方向へ向かって，微高地の末端が急激に落ちてゆく崖面が形成されていたことが確認された。本調査区の北側および西側で検出されている縄文中期末の住居跡〔清水1984〕は，この微高地の南辺，南東側に低地部をのぞむ地点に占地していたことが改めて確認されたことになる。

微高地南東側の崖面には厚く腐植土が堆積しており，その厚みは南区南辺中央で1.5mに達していた。同地区のもっとも下位で確認できた遺物を包含しない黒色土（南区南辺中央第14層）を試料としたＡＭＳによる炭素14年代は5830±30ＢＰ，較正年代は6731－6556calＢＰ（2σ：95.4%）であった。これは縄文前期初頭ごろの年代であり〔小林2008〕，この頃までにはこの崖面が形成されていたことが推測できる。一方，扇状地の基盤を形成する砂層の年代を知るために，南区北西隅の第５層～第７層の火山灰分析を実施した。その結果，いずれの地層からもＡＴ火山灰は認められるけれどもアカホヤ火山灰は未検出という結果を得た。したがって，これらの砂層の堆積はアカホヤ火山灰降灰（約7300年前）以前に遡ることを示している。この数値は，崖面最下位の黒色土の年代と整合的である。

今回の調査で得た遺物の多くは縄文時代の遺物であり，その中でも中期後葉（船元Ⅳ式・里木Ⅱ式）および中期末（北白川Ｃ式）の土器が主体を占めていた。南区では，厚い腐植土層に遺物が包含されていたため，厚さ10cm単位の人工層位で遺物を取り上げ，整理の過程で壁面で観察できた層序との対応をはかった。その結果，南区北辺中央第９層あるいは南区南辺中央第９層のように，包含層の下位層からも，中期後葉の土器とともに中期末の土器が出土していることを確認した。これらが上層からの落ち込みなどの混在ではないとすれば，遺物を包含する斜面に堆積した厚い腐植土は，中期後葉の多くの遺物を巻き込みながら中期末の時期に形成されたということになろう。

発掘調査と資料整理は千葉豊が担当し，発掘と整理を通じて，長尾玲・磯谷敦子・河野葵・上阪航・髙野紗奈江が測量・実測などの作業にあたった。また，縄文土器に関して矢野健一氏，石器に関して上峯篤史氏・髙木康裕氏に有益なるご教示をいただいた。末尾ながら，記してお礼申し上げます。

第４章　京都大学本部構内ＡＵ27区の発掘調査

千葉　豊　　笹川尚紀　　長尾　玲

１　調査の概要

本調査区は，京都大学本部構内の東南辺に位置し，吉田本町遺跡の範囲内にある（図版１－404，図97左）。ここに，国際科学イノベーション拠点施設の新営が計画されたため，周辺地点の調査成果を勘案して，発掘調査を実施した。計画区域には，地階をもつ既存の建物が存在しており，この部分についてはすでに遺跡は破壊されていると予想されたため，既存建物の存在していなかった部分に調査区域を限定した。これにより，調査地点は４箇所にわかれることになり，西からＡ区，Ｂ区，Ｃ区，Ｄ区と呼ぶことにした（図97右）。調査面積は，Ａ区が373㎡，Ｂ区が89㎡，Ｃ区が160㎡，Ｄ区が193㎡で，総計815㎡である。調査は，2013年11月18日に開始し，2014年２月21日に終了した。

本調査区周辺では，南に隣接する75・89地点〔五十川1981〕で，奈良時代の竪穴住居，中世の道路・溝・土坑墓・不定形土坑，近世の道路など，東に隣接する262地点〔伊藤・冨井2002〕で，中世の土坑，近世の溝や杭列などが見つかっており，古代以降における土地利用を明らかにすることを主たる目的として調査を進めた。調査の結果，どの調査区もかなりの部分が攪乱を受けていたが，中世の道路・溝・砂取穴，近世の小穴などの遺構を検出するとともに，先史時代から近世にいたる遺物が13箱出土した。

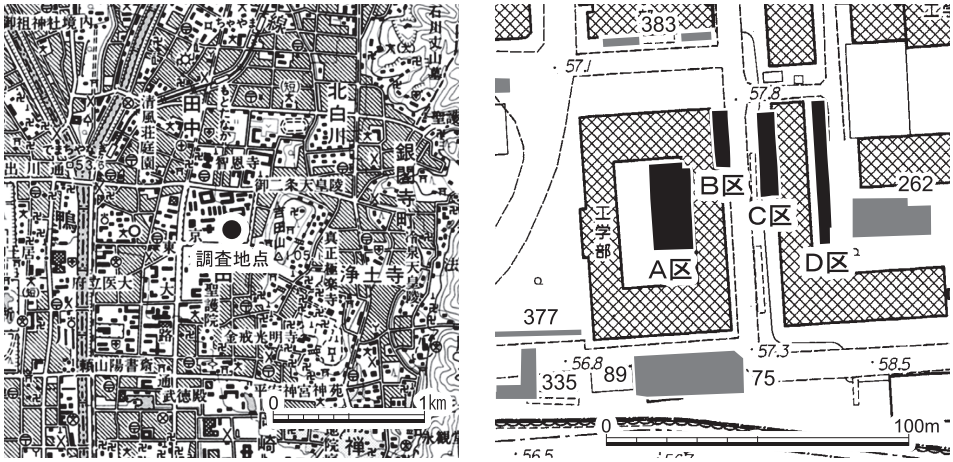


図97　調査地点の位置　縮尺　左：1/5万，右：1/2500

2　層　　位

調査地点は４箇所に分かれているが，基本的な層序は共通している。図98に，Ａ区の西壁と東壁，図99にＢ区東壁とＤ区東壁の層位を示した。

地表面の標高は，Ｄ区北東隅で58.3m，Ａ区南西隅で57.5mをはかり，北東から南西へ向けてゆるやかに傾斜している。第３層上面の標高もＤ区では57.8m前後，Ａ区では57m前後で，現地表の傾斜は，旧地形を反映したものとみることができる。

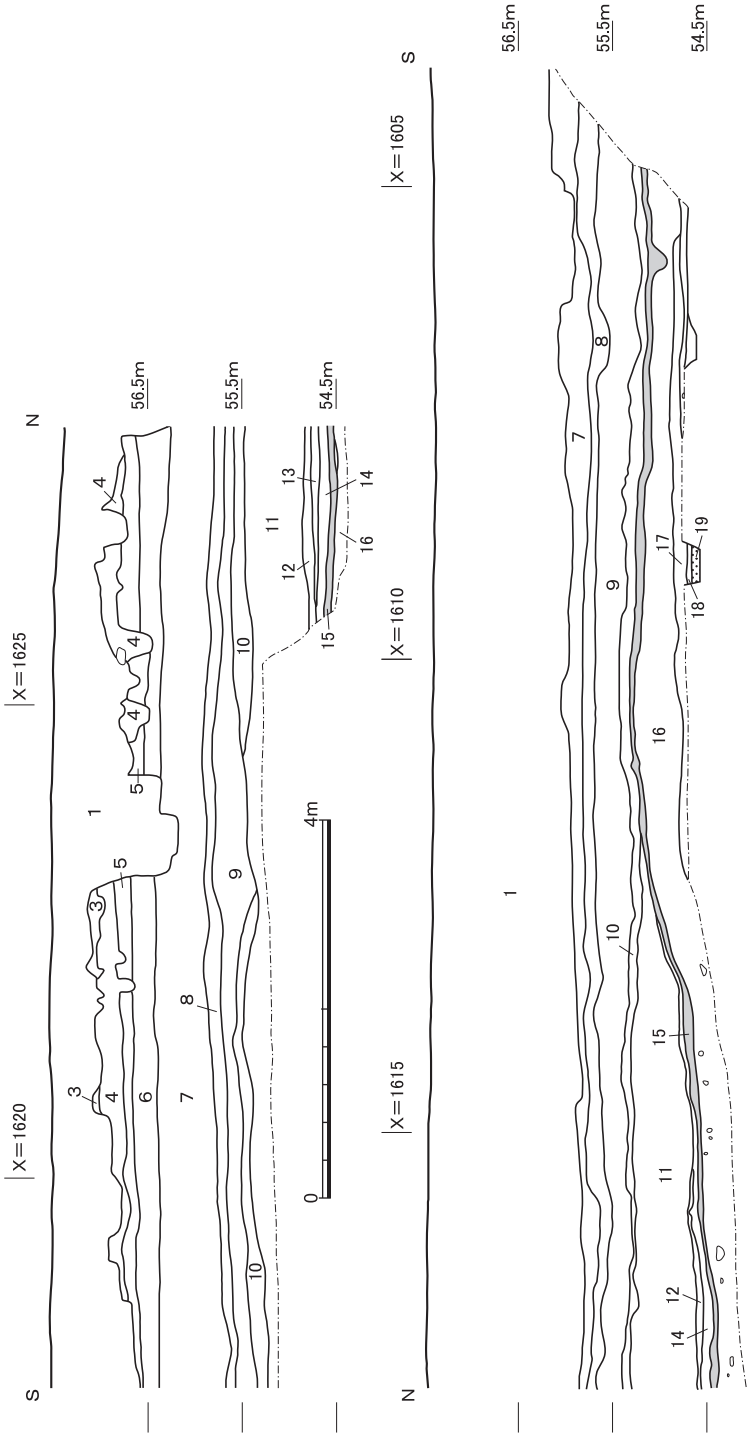
第１層は表土で，大学設置以後の盛土である。第２層の灰褐色土は，Ｄ区以外では大学造成時に削平されたものとみられ，残存していなかった。近世の遺物を包含する。第３層は茶褐色土で中世の遺物をわずかに包含する。第４層の黒色土は均質でやや粘質な土壌で，古代～中世の遺物を包含する。

第５層の褐色土は，遺物をほとんど含まないが，Ｃ区・Ｄ区の本層からは縄文時代の石鏃が出土しているので，第５層以下は先史時代の堆積物と判断した。第６層以下は，各調査区によって堆積物の性状をやや異にする部分があるけれども，シルト・砂・砂礫といった水域環境による堆積物からなる。こうした層序の中に，Ａ区第15層，Ｂ区第13層，Ｄ区第13層といった黒褐色～暗褐色の土壌化層が存在する。地表面から2.5～３ｍの深度である。こうした土壌化層は層位図を掲げていないＣ区でも，断ち割りによって確認しており，深度からみてこれらは連続する一連の堆積物であると推定できる。扇状地形成のある時期に，この地一帯が離水し土壌形成がなされた時期が存在したことを示している。面的に掘り下げて調査できたのはＡ区のみであり，人工遺物の出土は見られなかったが，土壌化層から出土した炭化材による炭素14年代測定値は，後述するように，この堆積が縄文時代草創期に遡ることを示した。

3　Ａ区の遺構と遺物

⑴ 先史時代の地形環境（図版28，図100）

前節で記したように，歴史時代の遺構構築の基盤となって厚く堆積する砂層中に黒褐色～暗褐色の土壌化した堆積物（第15層）を調査区壁際の断ち割りによって確認した。このため，歴史時代の調査を終了したのち，砂層を重機で除去し面的に広げて暗褐色土上面で地形測量をおこなうとともに遺物の有無を確認した（図100）。Ｘ＝1612以南は平坦面となるが，それ以北は北へ向かって下っており微高地のゆるやかな起伏を示していると推定で



1 表土・攪乱　5 褐色土　8 黄褐色粘質土　11 黄橙色砂Ⅱ　14 黄褐色粘土　17 明黄褐色シルト
3 茶褐色土　6 黄褐色土　9 黄橙色砂Ⅰ　12 黄橙色シルト　15 黒褐～暗褐色土　18 明黄褐色シルト
4 黒色土　7 黄褐色砂　10 黄橙色砂質土　13 黄橙色砂Ⅲ　16 黄褐色シルト　19 褐色砂礫

図98　A区西壁・A区東壁の層位　縮尺1/80

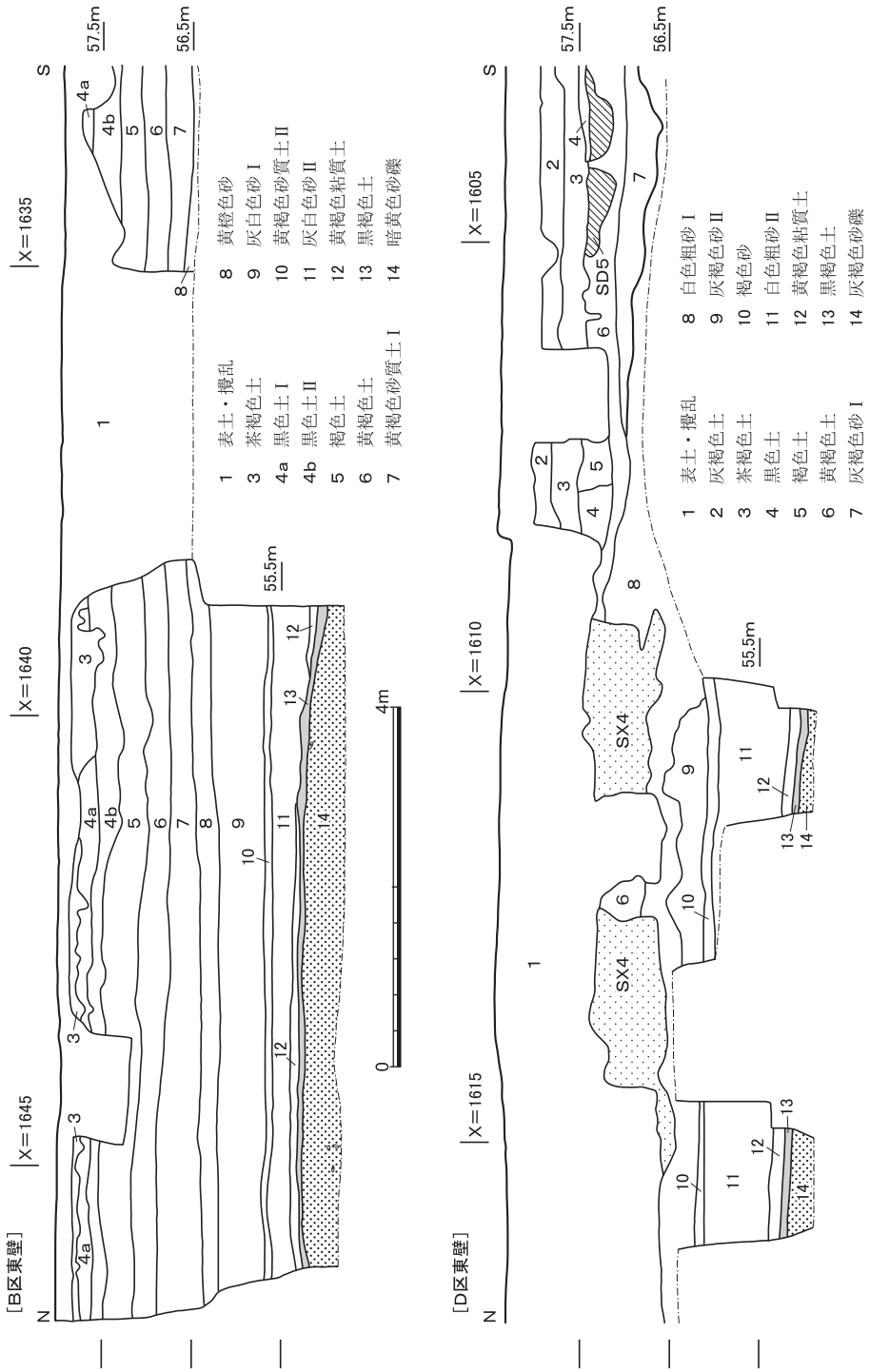


図99　Ｂ区東壁・Ｄ区東壁の層位　縮尺1/80

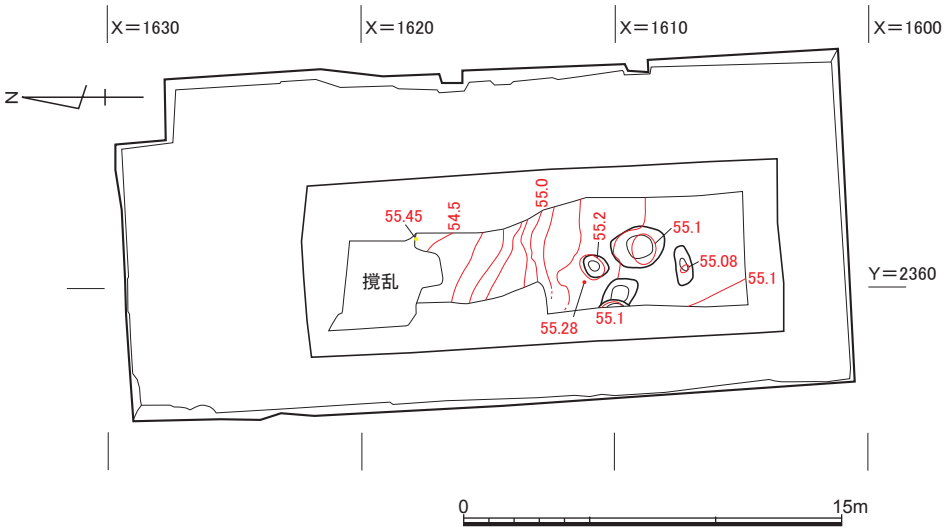


図100　Ａ区第15層上面の地形　縮尺1/300

きた。平坦面には楕円形の落ち込みが４基認められたが，いずれからも遺物の出土はなく人工のものとは認めがたい。

第15層から人工遺物は出土しなかったが，炭化した木片を採取できたので，株式会社加速器分析研究所に依頼してＡＭＳ年代測定をおこなった。測定の結果は，12510±40ＢＰ（IAAA－133681）で２σの暦年代範囲は15076－14378calＢＰ（95.4％）である。この年代は縄文時代草創期前半に相当する。

⑵ 黒色土を埋土とする遺構（図版27・28，図101左）

溝ＳＤ２　　ＳＤ２は，道路ＳＦ１を切りＳＤ１に切られる，褐色土上面で検出したしっかりした南北溝であり，ほぼ真南北を通る。撹乱によって数カ所で途切れるが，Ａ区北辺まで続くと思われる。南辺では２段落ちになっており，Ｕ字形の溝である。Ａ区中央では東肩と底の一部のみが，北辺では底と思われる部分のみが残っており，北辺の底には不定形の凹みがあった。埋土は黒色の細砂で，遺物は少ない。幅は南辺の上面で２ｍ前後，検出面の標高57.0ｍ，もっとも深いところの標高は56.2ｍである。

南辺では，10～20㎝ごとの厚さで上から４回に分け，その他の場所では１～３回に分けて掘削した。南辺の埋土上半では，一段撫で面取り手法の土師器皿が出土し，下半でも同様の小片が若干出土するが，生痕等による混入の可能性もあり，溝埋積の年代は確定できない。ただし３回目・４回目の掘削では，「て」の字状口縁の比較的大型の土師器皿が複

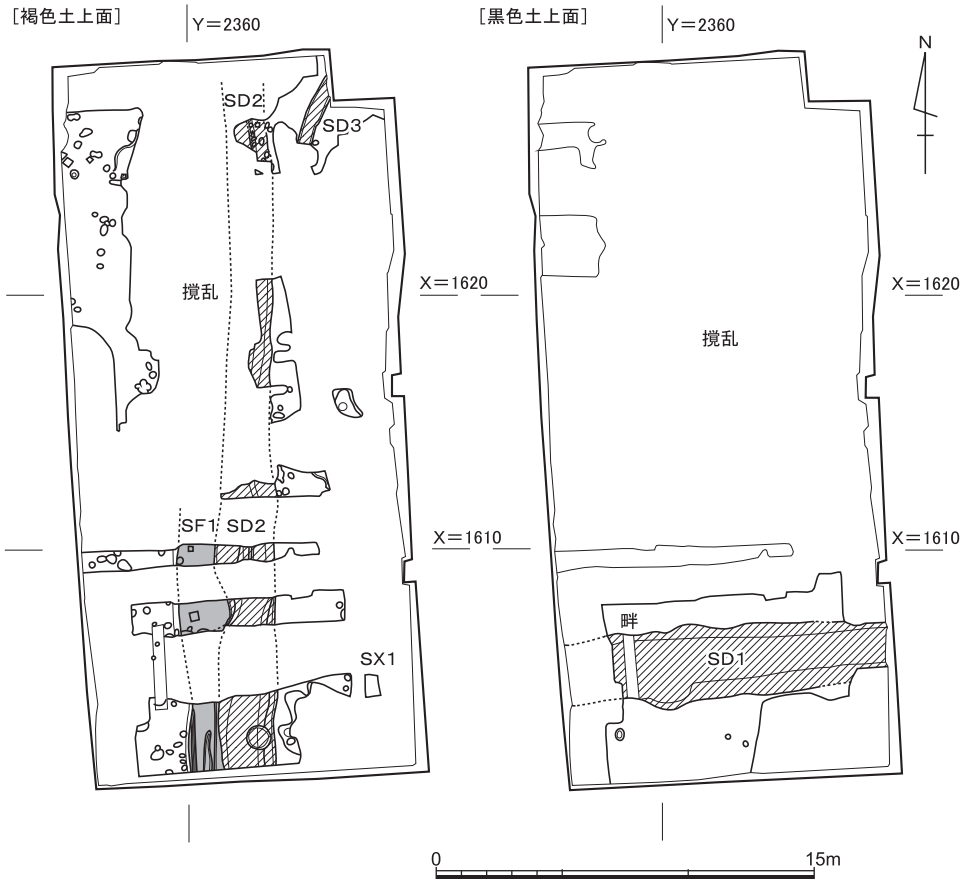


図101　Ａ区検出の遺構　縮尺1/300

数出土しており，これは混入とは考えにくいことから，埋積年代は10世紀～13世紀の間であると推定される。位置的にはＡＴ27区の調査におけるＳＤ５とつながる可能性もあるが，これは軸が真南北より東にずれていて，続くものか定かではない。

道路ＳＦ１　　ＳＦ１は，南北方向の道路である。Ａ区南辺で茶褐色土掘削後，ＳＤ１に切られる路面と思われる堅い面の上面を検出した。この堅い面の西端上部には黒色土が埋積し，東端は黒色土を埋土とするＳＤ２に切られているが，堅い面の下にも黒色土が埋積しており，黒色土埋積中に形成され廃絶した道路と推定される。東端はＳＤ２に切られるためその幅は不明であるが，残存部から1.5m以上はあったと推定される。埋土は鈍い褐色または暗褐色の砂質土で，堅くしまっている。路面中央部が端に比べて数cm程盛り上がっており，検出面の標高は57.0m，路面掘削後の黒色土上面の標高は56.8～56.9m位で

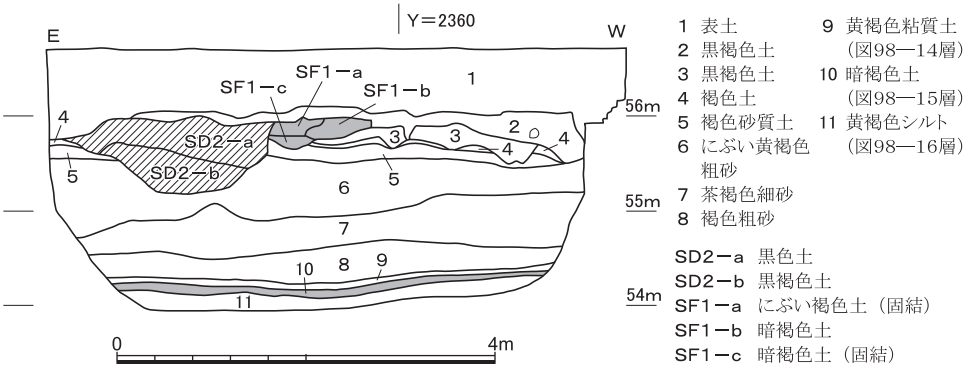


図102　ＳＤ２・ＳＦ１の層位　縮尺1/80

ある。埋土は一段撫で面取り口縁の土師器皿小片を含むが，生痕などによる混入の可能性もある。そのため明確な年代はわからないが，ＳＤ２より古いことは確実である。

調査区南辺では，路面掘削後，黒色土上面で幅10～20㎝以上，深さ10㎝前後の轍状の堅い筋が東西に２本見つかり，東側の筋はＳＤ２に切られていた。ただこれらはＳＤ１以北では見られず，中央部には灰色のシルト質の柔らかい砂や土が埋積し道路下の黒色土上面は中央部が凹む。道路直下の黒色土もやや堅くしまっているが，上の路面を固めたためであってこれは路面とは考えられない。ＳＦ１下の黒色土中からも中世の土師器小片が出土するが，混入の可能性を捨てきれない。ＳＦ１は，位置的にはＡＴ27区の調査におけるＳＦ３とつながる可能性が高いと判断するが，埋土が黒色土でないなど相違もある。

溝ＳＤ３　　ＳＤ３は，表土攪乱除去後に黄褐色土上面で検出した北東から南西にかけて延びるＡ区北東の溝である。埋土は黒色土で，遺物は非常に少ないが，中世の遺物が数点出土した。幅は50～60㎝位で，溝断面は台形状になる。検出面の標高は56.8m，底の標高は56.3mである。

落ち込みＳＸ１　　ＳＸ１は，ＳＤ１掘削後Ａ区南東に島状に残った黒色土の落ち込み部分で，中世の陶器，須恵器片などがやや集まって出土した。検出面の標高は56.9m，底の標高は56.5mである。

これらのほかに，Ａ区各所で黒色土を埋土とする円形のピットや凹みを検出したが，明確な並びなどは見いだされなかった。これらからの出土遺物は少なく，古代の遺物も含むが多くは中世前半の遺物であった。

⑶ 茶褐色土を埋土とする遺構（図101右）

溝ＳＤ１　　ＳＤ１はＡ区南辺の黒色土上面で検出した。しっかりしたＵ字形の東西溝

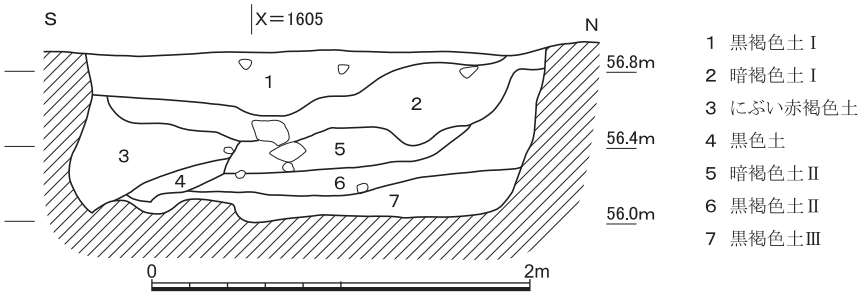


図103　ＳＤ１畔東壁の層位　縮尺1/40

であり，Ａ区全体を東西に貫く。軸は真東西よりも若干東北東に傾く。埋土は，包含層の埋土より若干暗い茶褐色土である。幅は上面で2.5～３ｍ位，底で1.5ｍ前後。検出面の標高は57.0ｍ，もっとも深いところで標高は55.9ｍ，全般的に溝の深さは１ｍ位であり，約10～20㎝ごとに上から６回に分けて掘削した。黒色土を埋土とする溝ＳＤ２及び道路ＳＦ１を切っており，ＳＦ１を切った部分のＳＤ１南壁はやや南に張り出していて，この部分の底近くの埋土には，ＳＦ１及びその直下の黒色土由来と思われる堅くて黒い土を含む。溝土層断面観察のために設けた西辺の畔の北東には，埋土下半に礫と土器がやや集中した部分があり，骨片も含まれていた。遺物は溝の東部よりも西部の方が多い。遺物量は溝全体で整理箱３箱であり，そう多くはない。埋土遺物の年代は大半が13世紀のものであり，中世後半の遺物も含む茶褐色土包含層よりも古い。

⑷ 出土遺物（図104～107）

ＳＤ２出土遺物（Ⅲ１～Ⅲ５）　Ⅲ１～Ⅲ４は土師器皿で，Ⅲ１・Ⅲ４は１段撫で手法のＤ$_3$類とＤ$_5$類。Ⅲ２・Ⅲ３は「て」字状口縁手法のＢ$_3$類。Ⅲ１・Ⅲ４はＳＤ２の上半，Ⅲ２・Ⅲ３はＳＤ２の下半から出土している。Ⅲ５は須恵器杯。

ＳＸ１出土遺物（Ⅲ６）　Ⅲ６は陶器甕。上半部を欠損する。

黒色土出土遺物（Ⅲ７～Ⅲ16）　Ⅲ７～Ⅲ12は土師器皿。Ⅲ７・Ⅲ９・Ⅲ12は，１段撫で面取りのＤ$_4$類，Ⅲ８・Ⅲ10・Ⅲ11は１段撫で素縁のＤ$_2$類。Ⅲ13は須恵器杯。Ⅲ14・Ⅲ15は緑釉陶器の底部。ともに貼り付け高台で，Ⅲ15は見込みが蛇の目状に凹んでいる。Ⅲ16は青磁の椀。

ＳＤ１出土遺物（Ⅲ17～Ⅲ96）　Ⅲ17～Ⅲ49は土師器皿。灰白色のⅢ23を除いて，橙褐色。口径が7.5㎝～10㎝（Ⅲ17～Ⅲ31），11㎝～12㎝（Ⅲ32～Ⅲ35），13㎝～16㎝（Ⅲ36～Ⅲ49）の３群が認められる。１段撫で手法のＤ$_4$・Ｄ$_5$類が主体を占め，２段撫で手法の

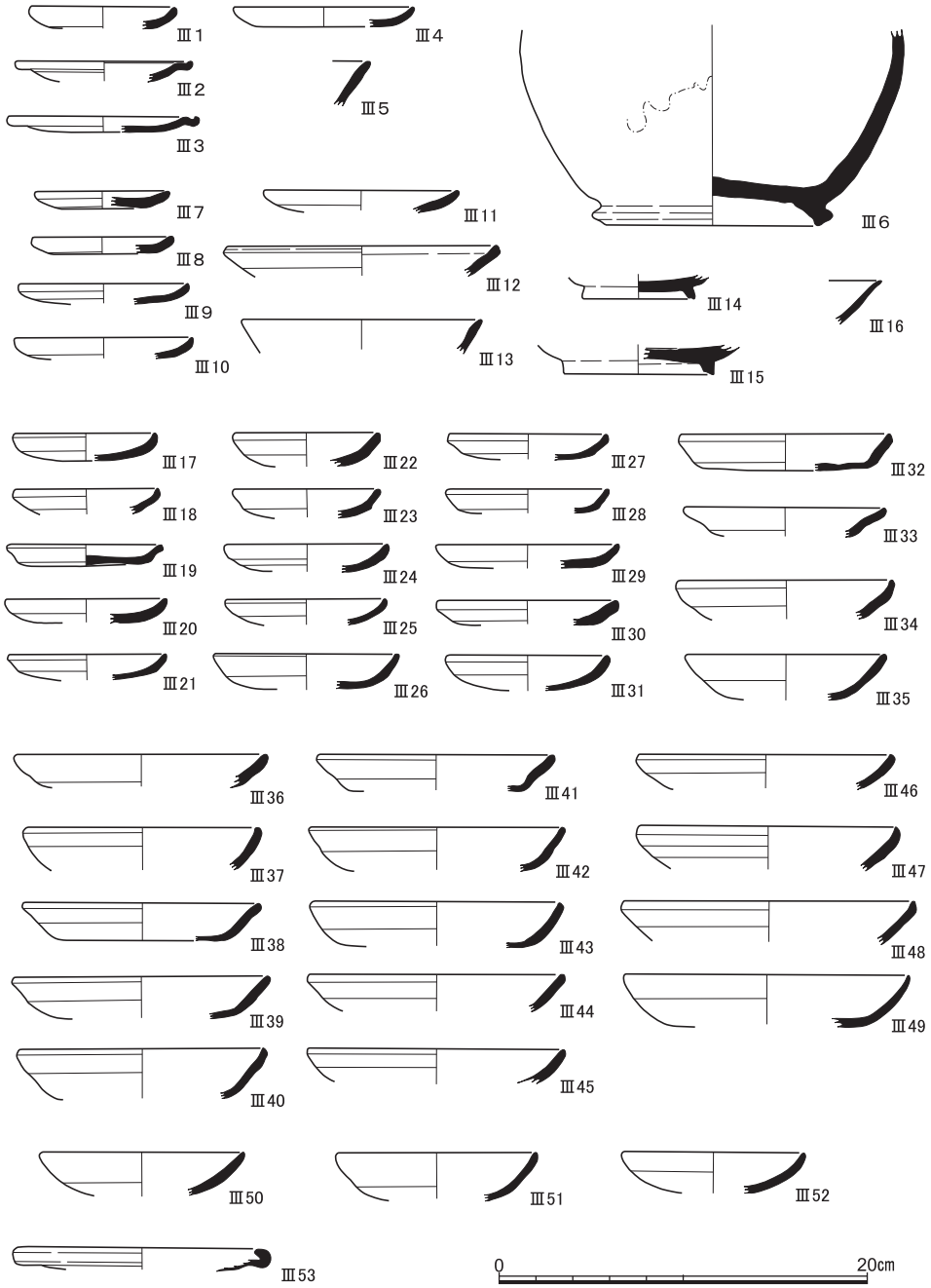


図104　ＳＤ２出土遺物（Ⅲ１～Ⅲ５土師器），ＳＸ１出土遺物（Ⅲ６陶器，黒色土出土遺物（Ⅲ７～Ⅲ12土師器，Ⅲ13須恵器，Ⅲ14・Ⅲ15緑釉陶器，Ⅲ16青磁），ＳＤ１出土遺物(1)（Ⅲ52～Ⅲ53土師器）

Ｃ類（Ⅲ24・Ⅲ47），１段撫で素縁手法のＥ類（Ⅲ33）をわずかに含む。Ⅲ50～Ⅲ52は灰白色を呈する土師器椀。Ⅲ53は土師器受皿。灰白色を呈し，口径13㎝をはかる。

Ⅲ54・Ⅲ55は土師器の甕で，Ⅲ54は内外面とも撫で仕上げ，Ⅲ55は外面撫で仕上げ，内面には右上がりの刷毛目を残す。Ⅲ56は土師器鉢。口縁外面直下に，輪積みの痕跡を残す。内面および口縁部外面は横撫でによって整形している。Ⅲ57は白色土器の椀の底部。Ⅲ58～Ⅲ60は土師器高杯の脚部。Ⅲ58・Ⅲ59は面取り整形している。

Ⅲ61は須恵器杯蓋。Ⅲ62～Ⅲ67は東播系の須恵器鉢。Ⅲ68は須恵器で壺の底部か。Ⅲ69･Ⅲ70は灰釉系陶器の底部。Ⅲ71は陶器甕。Ⅲ72は舶載の緑釉陶器盤。底部外面を除き，内外面に緑釉を施している。

Ⅲ73は瓦器椀。磨きは内面のみであり，外面には施されない。口縁部の特徴から，楠葉型とみられる。Ⅲ74～Ⅲ76は瓦器羽釜。いずれも口縁部は短く，体部はやや丸みを帯びる。Ⅲ76は体部外面に煤が厚く付着する。Ⅲ77は瓦器鍋。口縁部は２段に屈曲し，強く面取りされた口縁端部は凹んでいる。

Ⅲ78・Ⅲ79は青磁の椀で，Ⅲ78は見込みに劃花文，Ⅲ79は体部外面に蓮弁文をもつ。Ⅲ80～Ⅲ82は白磁の椀で，Ⅲ80は口縁部を玉縁とする。Ⅲ83は白磁合子の身。

Ⅲ84は砥石。Ⅲ85～Ⅲ96は瓦で，Ⅲ85・Ⅲ86は軒丸瓦，Ⅲ87～Ⅲ91は丸瓦，Ⅲ92～Ⅲ96は平瓦である。Ⅲ85は内区に三巴文，外区に珠文を置く。内区の文様は不明だが，Ⅲ86も外区に珠文を置いている。Ⅲ88は玉縁凸面に並行する２本の刻線による篦記号が認められる。Ⅲ96は端面に篦記号がみられる。

小穴出土遺物（Ⅲ97・Ⅲ98）　茶褐色土を埋土とする小穴（ピット）から出土した。Ⅲ97はD_4類，Ⅲ98はD_6類の土師器皿である。

茶褐色土出土遺物（Ⅲ99～Ⅲ119）　Ⅲ99は灰白色で土師質であるが，内外面に磨きを施し，口縁部内面に浅い沈線が１条めぐる。Ⅲ100～Ⅲ104・Ⅲ106・Ⅲ107は土師器皿。B_4類（Ⅲ104），Ｃ類（Ⅲ100・Ⅲ101），Ｄ類（Ⅲ102・Ⅲ103・Ⅲ106），F_2類（Ⅲ107）などが出土している。Ⅲ105は灰白色の土師器椀。

Ⅲ108は須恵器杯蓋。Ⅲ109は緑釉陶器椀の底部。Ⅲ110・Ⅲ111は灰釉系陶器の底部で，Ⅲ111の高台端部に籾殻痕がみられる。Ⅲ112は古瀬戸で，口縁端部を部分的に抉り輪花としている。Ⅲ113・Ⅲ114は青磁。Ⅲ115は青白磁合子の蓋。上面に花弁状の文様を施している。Ⅲ116は白磁の椀で，口縁部を無釉としている。Ⅲ117は瓦器の盤。

Ⅲ118・Ⅲ119は平瓦。凸面には縄叩き目を残し，Ⅲ119は内面に布目圧痕をもつ。

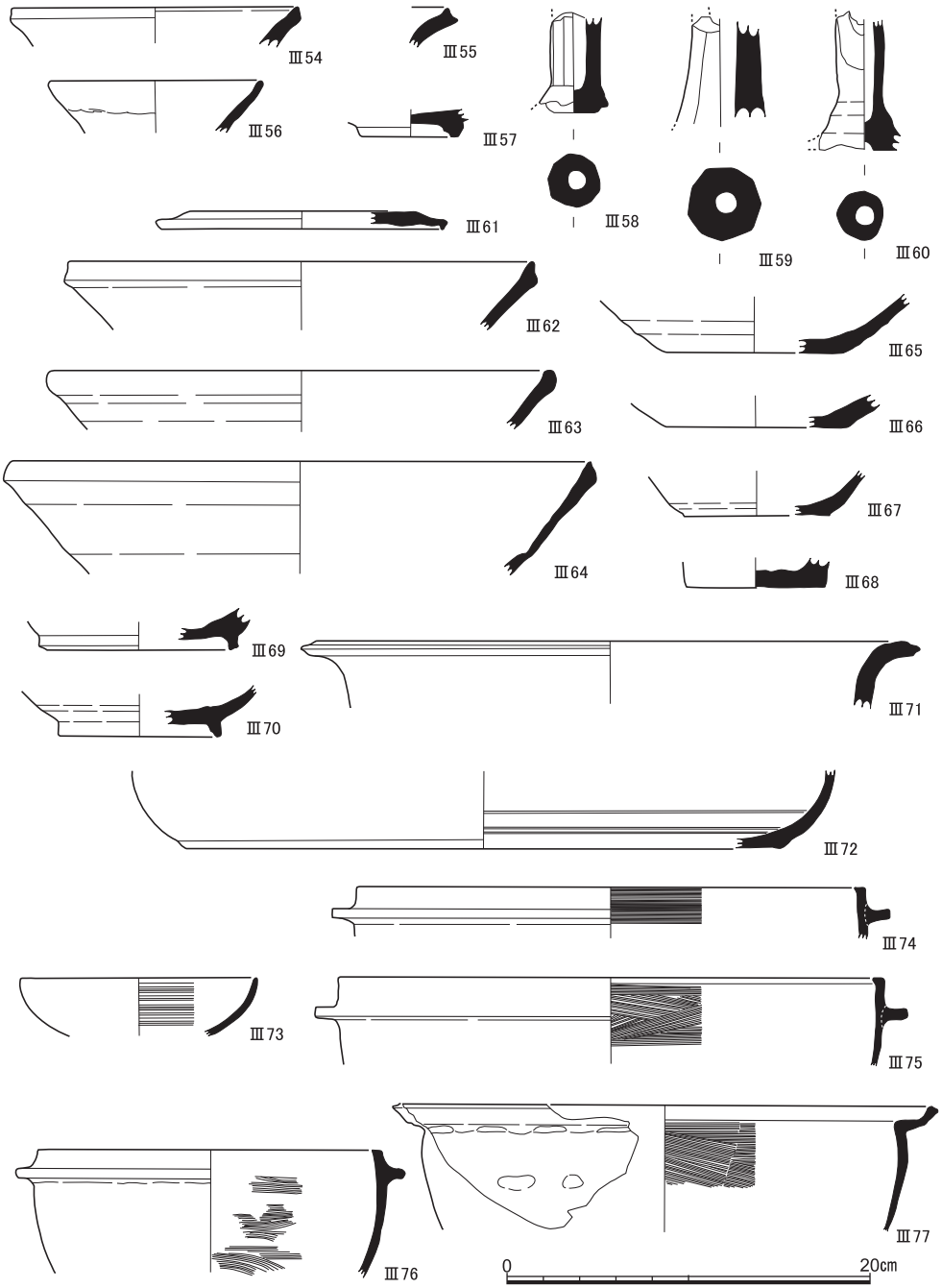


図105　ＳＤ１出土遺物(1)（Ⅲ54～Ⅲ56・Ⅲ58～Ⅲ60土師器，Ⅲ57白色土器，Ⅲ61～Ⅲ68須恵器，Ⅲ69・Ⅲ70灰釉系陶器，Ⅲ71・Ⅲ72陶器，Ⅲ73～Ⅲ77瓦器）

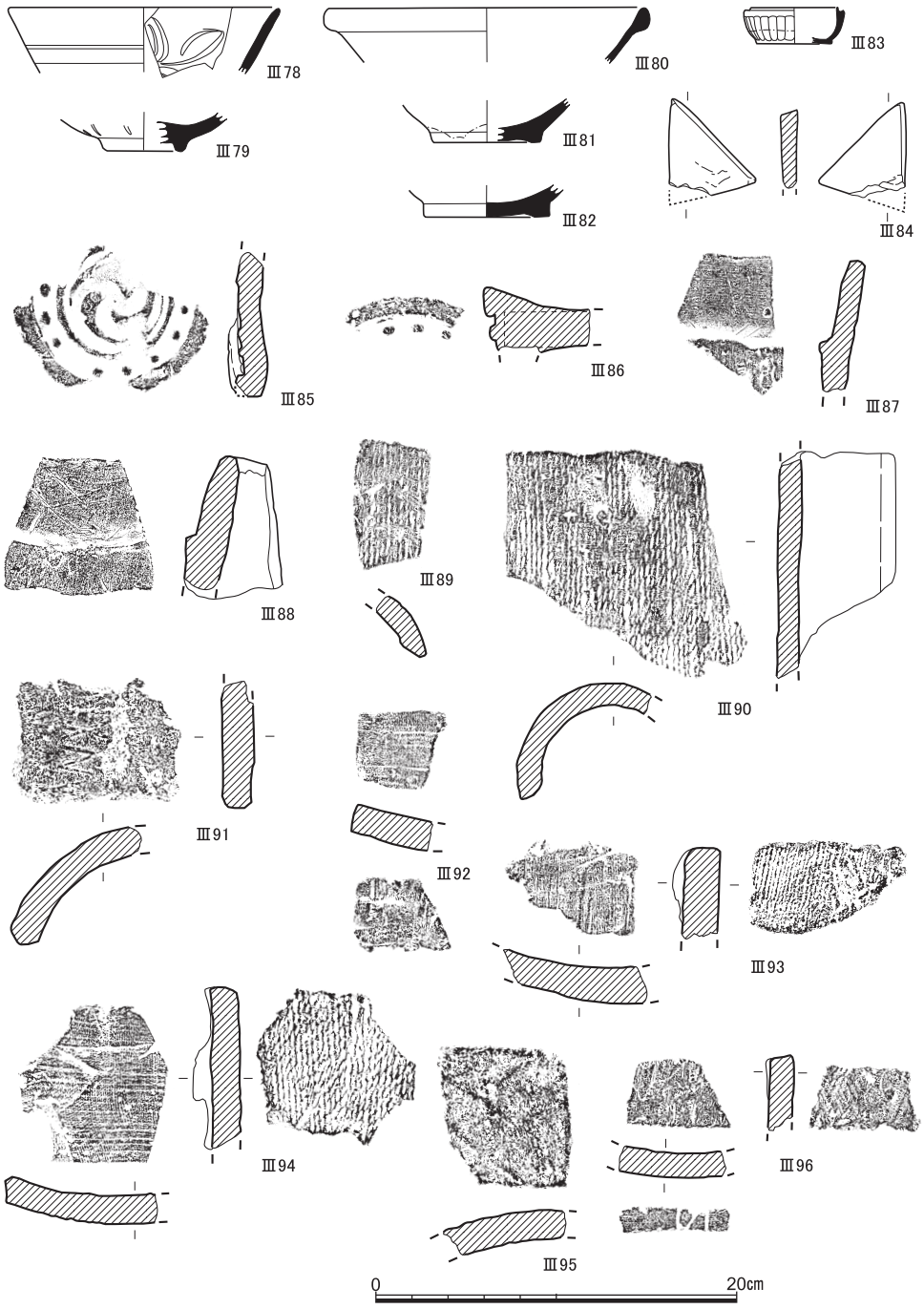


図106　ＳＤ１出土遺物(3)（Ⅲ78・Ⅲ79青磁，Ⅲ80～Ⅲ83白磁，Ⅲ84砥石，Ⅲ85～Ⅲ96瓦）

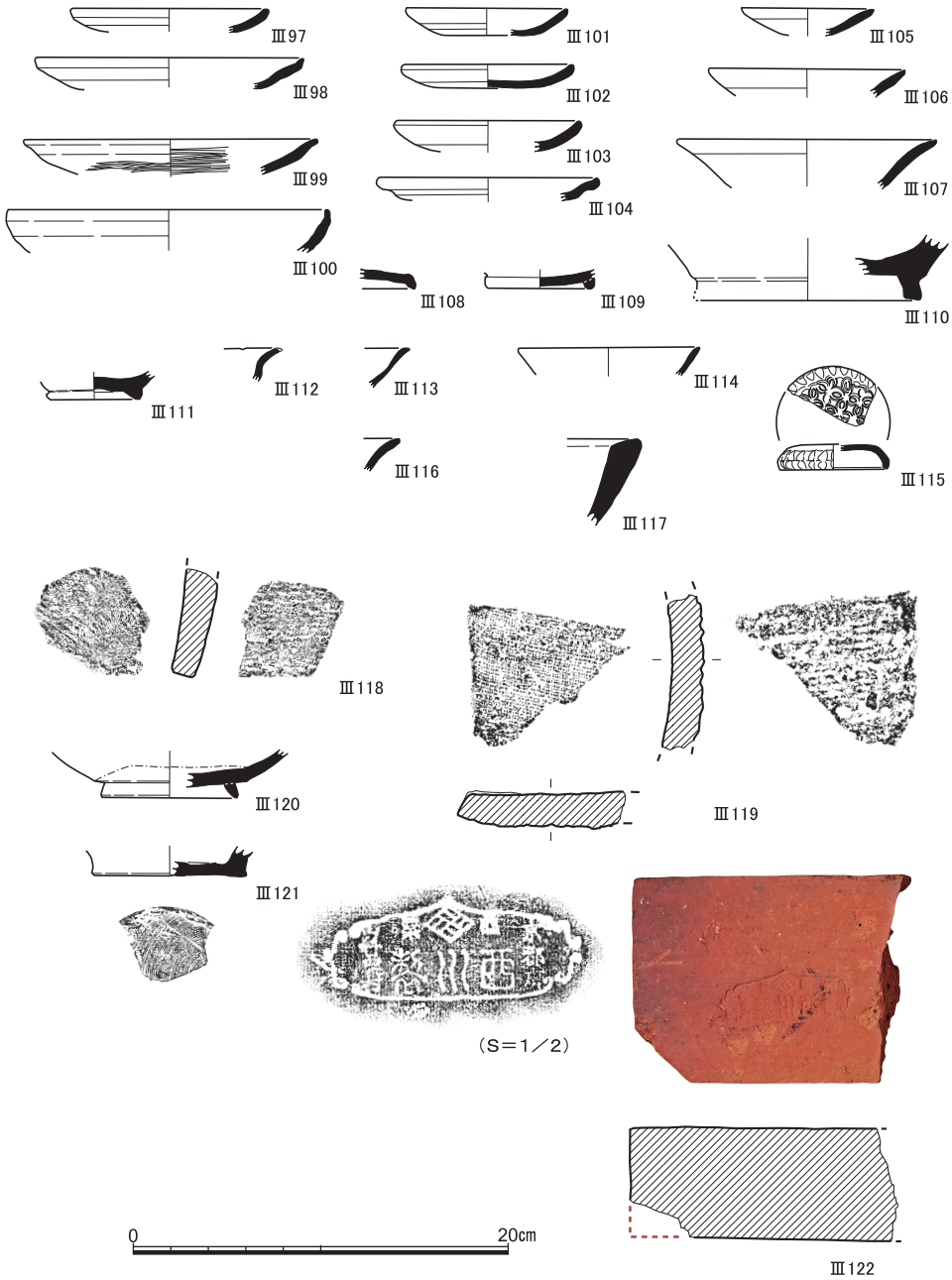


図107　小穴出土遺物（Ⅲ97・Ⅲ98土師器），茶褐色土出土遺物（Ⅲ99～Ⅲ107土師器，Ⅲ108須恵器，Ⅲ109緑釉陶器，Ⅲ110・Ⅲ111灰釉系陶器，Ⅲ112古瀬戸，Ⅲ113・Ⅲ114青磁，Ⅲ115青白磁，Ⅲ116白磁，Ⅲ117瓦器，Ⅲ118・Ⅲ119瓦），断割出土遺物（Ⅲ120灰釉陶器，Ⅲ121須恵器），表土出土遺物（Ⅲ122煉瓦）

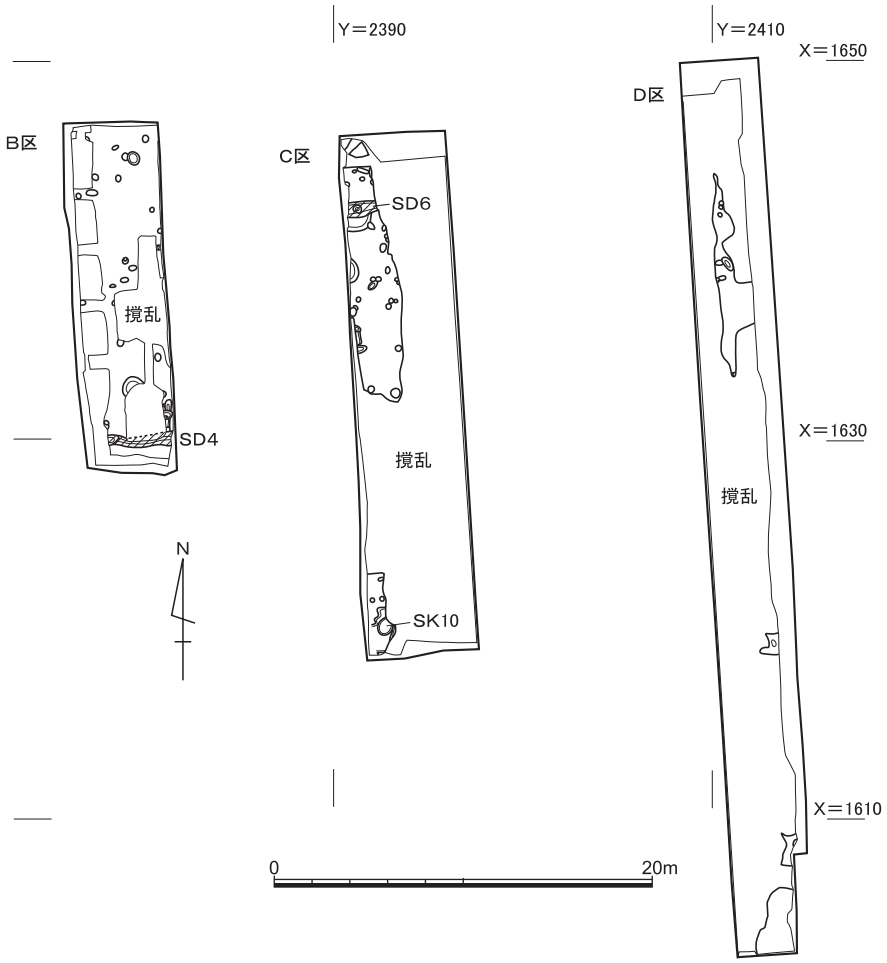


図108　Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区褐色土上面検出遺構　縮尺1/400

断ち割り時出土遺物（Ⅲ120・Ⅲ121）　調査区南壁際を断ち割りしたさいに出土した遺物。Ⅲ120は灰釉陶器椀。高台が外へ開く形状で，灰釉は漬け掛けしている。Ⅲ121は須恵器底部。底部は回転糸切り成形である。

表土出土遺物（Ⅲ122）　Ⅲ122は煉瓦で，幅10.9cm，厚さ5.6cmをはかる。長さは一端を欠損するため不明。残存する角２カ所のうち，１カ所は斜めに切り落とされている。「商票　京都府　西川製　山科西ノ村」と判読できる刻印が押されている。

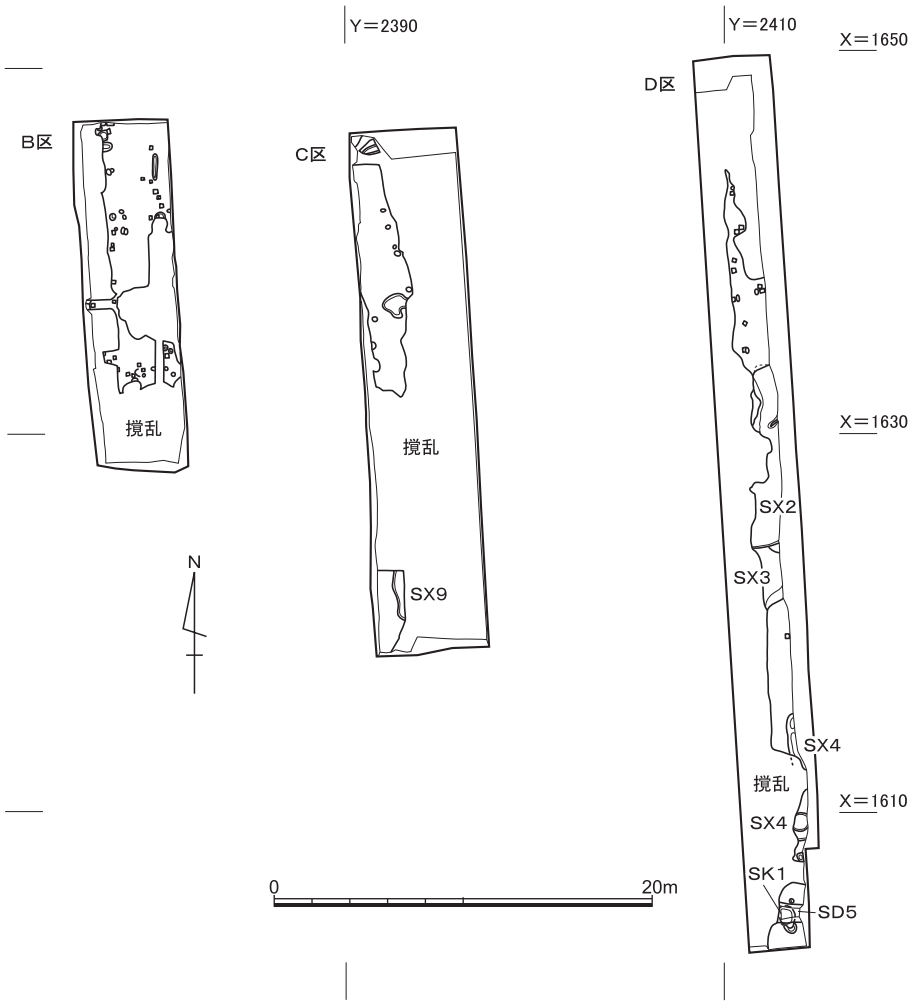


図109　Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区黒色土上面検出遺構　縮尺1/400

4　Ｂ区の遺構と遺物

⑴ 黒色土を埋土とする遺構（図108）

溝ＳＤ４　　ＳＤ４は，Ｂ区南辺の褐色土上面で検出した東西溝で，Ｂ区の東端と西端では深くなる。埋土は黒色の細砂で，遺物はほとんどなく時期不明である。幅は50～80cmくらいで，検出面の標高は57.2m，その部分での底の標高は56.9m，最深部の標高は56.5mである。Ｃ区のこの溝の延長部分にあたる場所にはＳＸ８があり，この溝がＣ区まで続いていたかは不明である。

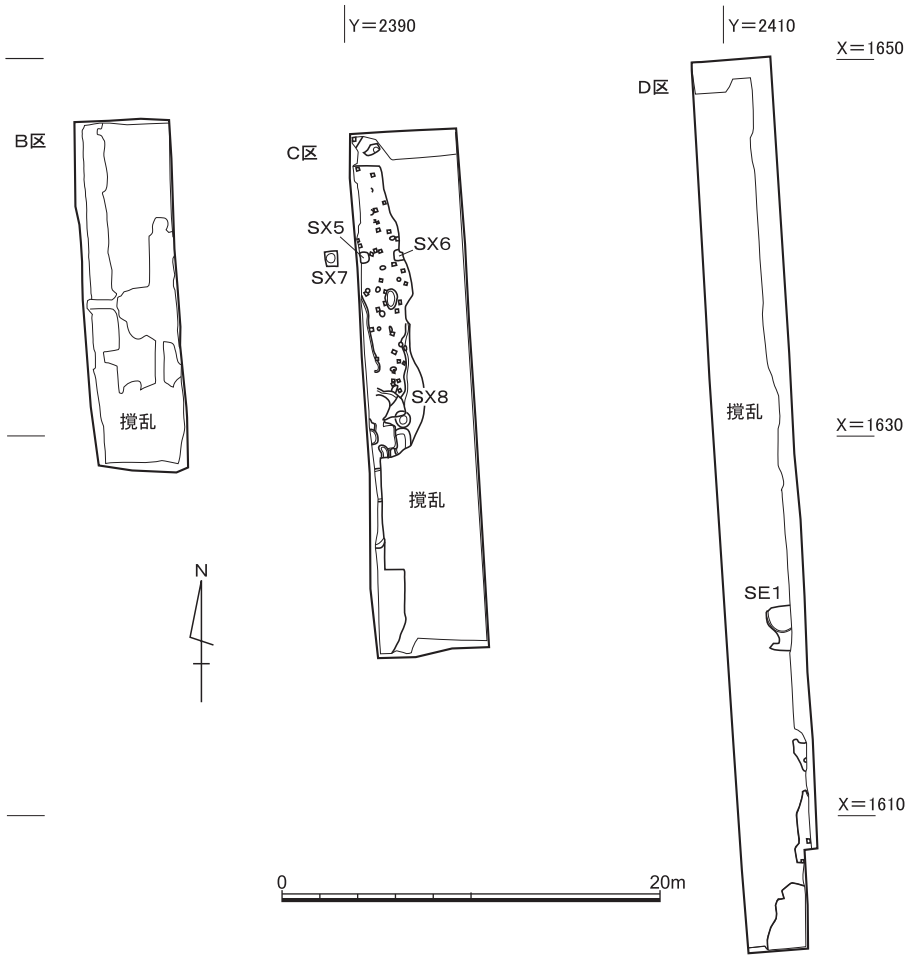


図110　Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区茶褐色土上面検出遺構　縮尺1/400

このほか，Ｂ区各所で黒色土を埋土とする楕円形ピットまたは凹みを検出した。出土遺物は少ないが，その年代がわかるものは古代～中世前半である。

⑵ 茶褐色土を埋土とする遺構（図109）

Ｂ区では，包含層としての灰褐色土は残っておらず，茶褐色土と灰褐色土との判別は困難であった。その結果，茶褐色土を埋土とするピットとして掘削した遺構，とりわけ一辺15cm前後の方形ピットの多くは近世の遺物を含み，近世ピットと考えられる。

近世の遺物が出土していないピットは，中世か近世か不明である。

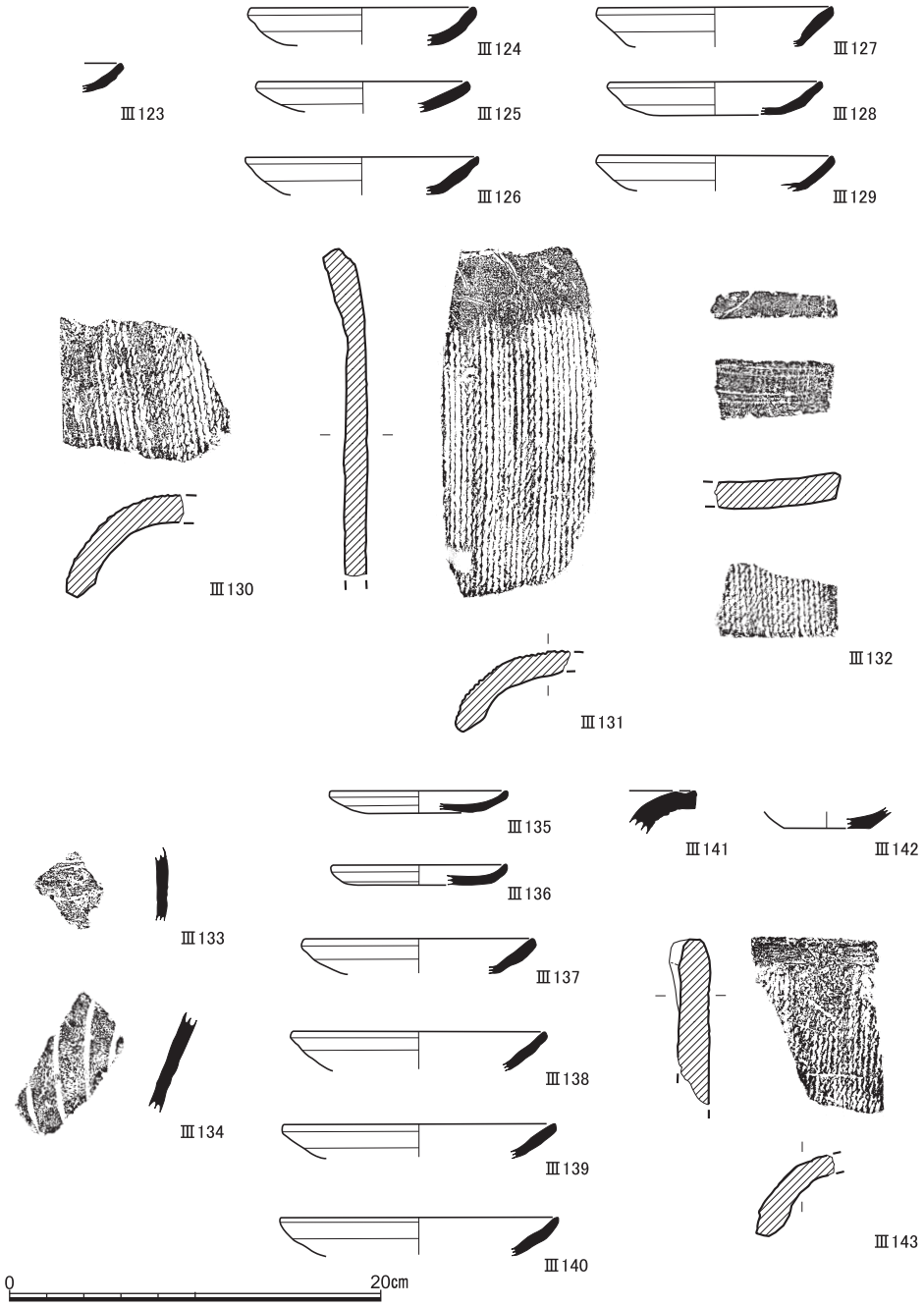


図111　小穴出土遺物（Ⅲ123～Ⅲ129土師器，Ⅲ130・Ⅲ131丸瓦，Ⅲ132平瓦），褐色土出土遺物（Ⅲ133縄文土器），黒色土出土遺物(1)（Ⅲ134縄文土器，Ⅲ135～Ⅲ140土師器，Ⅲ141須恵器，Ⅲ142白磁，Ⅲ143丸瓦）

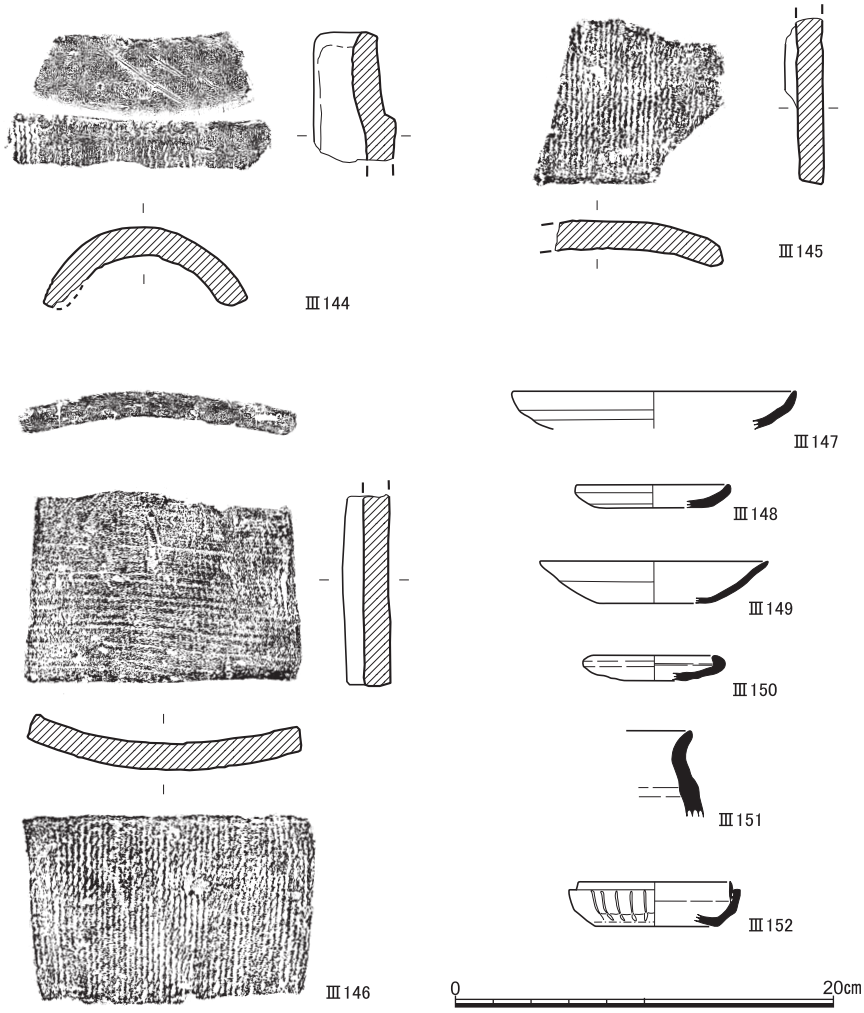


図112　黒色土出土遺物(2)（Ⅲ144丸瓦，Ⅲ145・Ⅲ146平瓦），茶褐色土出土遺物（Ⅲ147～Ⅲ151土師器，Ⅲ152青白磁）

(3) 出土遺物（図111・112）

小穴出土遺物（Ⅲ123）　Ⅲ123は黒色土を埋土とする小穴（ピット）より出土。２段撫で手法のＣ$_5$類の土師器Ⅲ。

ＳＰ38出土遺物（Ⅲ124～Ⅲ132）　Ⅲ124は１段撫で手法のＤ$_4$類，Ⅲ125～Ⅲ127はＤ$_5$類，Ⅲ128・Ⅲ129はＤ$_6$類の土師器Ⅲ。

Ⅲ130・Ⅲ131は丸瓦。いずれも凸面には縄叩きをほどこし，凹面には布目痕が残る。Ⅲ

132は平瓦。凸面には縄叩き痕，凹面には糸切り痕が認められる。端面に斜線の篦記号を有する。

褐色土出土遺物（Ⅲ133）　Ⅲ133は縄文土器の小片。内外面とも粗く撫でて仕上げている。後晩期のものと思われる。

黒色土出土遺物（Ⅲ134～Ⅲ146）　Ⅲ134は縄文土器。弧線を描いて垂下する４本の沈線が認められる。中期末の北白川Ｃ式か後期前葉の北白川上層式の胴部と思われるが，決めがたい。Ⅲ135はＤ$_4$類，Ⅲ136はＤ$_5$類の土師器小皿。Ⅲ137～Ⅲ140はＤ$_5$類の土師器皿。Ⅲ141は須恵器長頸壺の口縁部片。その端部はつまみあげられている。Ⅲ142は白磁。底部外面を露胎とする。

Ⅲ143・Ⅲ144は丸瓦。ともに凸面に縄叩き痕，凹面に布目痕がみられる。後者の玉縁の凸面には，篦によって２本の平行線が刻まれている。Ⅲ145・Ⅲ146は平瓦。前者は凸面に縄叩きをほどこし，両面ともに離れ砂が付着している。後者は凸面に縄叩き痕，凹面に糸切り痕が認められる。端面のへりのところに１本線の篦記号をもつ。

茶褐色土出土遺物（Ⅲ147～Ⅲ152）　Ⅲ147はＣ$_3$類の土師器皿。Ⅲ148はＤ$_5$類の土師器小皿。Ⅲ149は白色の土師器椀。Ⅲ150は土師器受皿。Ⅲ151は土師器小壺。

Ⅲ152は青白磁の合子身。体部下端から底部外面にかけてを露胎とする。

５　Ｃ区の遺構と遺物

⑴ 黒色土を埋土とする遺構（図108）

土坑ＳＫ10　調査区南西の褐色土上面で検出された，古代の土師器杯が出土した土坑で，北東隅をＳＸ９に切られ，南西・南東部を攪乱に切られる。検出面の標高は57.2m，底の標高は56.8mである。底は白砂まで到達していないので，砂取穴とは性質が異なる遺構と理解できる。

溝ＳＤ６　Ｃ区北辺の褐色土上面で検出された東西溝。幅は50～80㎝くらいで，検出面の標高は57.5m，最深部の標高は56.6mであるが，全体的には深さ50～60㎝くらいである。遺物は非常に少なく，年代は不明である。溝の続きはＢ区，Ｄ区でみつかっていない。

このほか，黒色土を埋土とする凹みまたは円形のピットがみつかっているが，出土遺物は少ない。

⑵ 茶褐色土を埋土とする遺構（図109）

土坑ＳＸ９　Ｃ区南西の黒色土上面で検出された中世の遺物を含む土坑である。埋土

は砂質で，互層状の埋積ではないが，白砂まで掘りくぼめられており，砂取穴の可能性がある。検出面の標高は57.1m，底の標高は56.1mである。

そのほか，おもに北辺において，茶褐色土を埋土とする凹み・円形ピットがいくつか検出された。

⑶ 灰褐色土を埋土とする遺構（図版28，図110）

集石ＳＸ５～７　中心がほぼ1.8m間隔で真東西の方向に並ぶＣ区北辺とＣ区西外の集石である。灰褐色土掘削中に検出し，いずれも東西，南北とも50㎝前後の範囲に隅丸方形状に花崗岩の割石を配置している。ＳＸ６は東側を攪乱に切られ，ＳＸ５は西側が調査区西壁内となる。ＳＸ７は，ＳＸ５・６の性格を考えるためにＣ区調査区の西外に設けた試掘坑内でみつかった。検出面の標高は57.9～58.0m，集石を除去した底の標高は57.7～57.8mである。

ＳＸ５の直下から方形のピットが検出され，その埋土の遺物に近世陶器小片が含まれることから，これらの集石の年代も近世以降の可能性が高いと思われる。

この集石列の延長は，Ｂ区，Ｄ区ではみつかっていない。

不定形土坑ＳＸ８　Ｃ区中央から南にかけて，茶褐色土上面で検出した不定形の土坑である。その西部は攪乱で切られて，ほかの部分とは直接つながらない。検出面での埋土は灰褐色土だが，南の深くなる部分では黒色土，黄褐色土，砂などが互層状に埋積する。

落ち込み　Ｃ区中央付近で南に大きく落ちる部分があり，落ち際の肩はオーバーハングする。底は白砂層がなくなる手前まで掘りくぼめられており，白砂を狙った砂取穴と推定される。検出面の標高は57.8m，最深部の標高は55.3mである。

埋土中の遺物は少なく，その大半は中世後半を含む中世の遺物である。近世の遺物も若干含むが，混入の可能性を捨てきれず，15世紀以降，近世までのあいだに埋積した遺構としかいえない。

そのほか，一辺15㎝前後のものを主体とする方形ピットや円形ピットが各所で検出され，そのいくつかは近世の遺物を含む。

⑷ 出土遺物（図113・114）

ＳＸ10出土遺物（Ⅲ153）　Ⅲ153は土師器杯。口縁部は外反し，その端を内側に折り曲げている。口縁部外面から体部外面上半にかけて横撫でをほどこし，その下半にはかすかに削りの痕跡が認められる。見込みに暗文を有する。

ＳＸ９出土遺物（Ⅲ154）　Ⅲ154はＤ$_3$類の土師器小皿。

ＳＸ８出土遺物（Ⅲ155～Ⅲ157）　Ⅲ155は１段撫で手法のＥ$_3$類，Ⅲ156は１段撫で手法のＦ$_4$類の土師器皿。Ⅲ157は灰釉陶器。

ＳＸ７出土遺物（Ⅲ158・Ⅲ159）　Ⅲ158は灰白色の土師器高杯の脚部。Ⅲ159は硯。底面にも擦痕が観察できるので，破損後，砥石として転用された可能性がある。

ＳＰ81出土遺物（Ⅲ160・Ⅲ161）　Ⅲ160はＤ$_2$類の土師器皿。Ⅲ161は白色の土師器小椀。

ＳＰ70出土遺物（Ⅲ162）　Ⅲ162は土師器灯明皿。見込みに圏線がめぐり，内面から口縁部外面の端にかけて煤がべったり付着している。

褐色土出土遺物（Ⅲ163）　Ⅲ163は縄文時代の石鏃。凹基式で先端部を欠損する。肉眼観察では，石材は二上山産サヌカイトとみられる。現重量0.7ｇ。

黒色土出土遺物（Ⅲ164～Ⅲ167）　Ⅲ164・Ⅲ165はＣ$_2$類，Ⅲ166はＣ$_3$類，Ⅲ167はＣ$_4$類の土師器皿。

茶褐色土出土遺物（Ⅲ168～Ⅲ186）　Ⅲ168～Ⅲ175は土師器杯・皿。Ⅲ168は「て」字状口縁手法のＢ$_3$類，Ⅲ169はＢ$_4$類，Ⅲ170はＣ$_3$類，Ⅲ171はＤ$_2$類，Ⅲ172はＤ$_3$類，Ⅲ173・Ⅲ174はＦ$_1$類，Ⅲ175はＦ$_2$類。Ⅲ176は灰白色の土師器小椀。

Ⅲ177～Ⅲ179は須恵器すり鉢。Ⅲ180～Ⅲ182は灰釉陶器。Ⅲ180・Ⅲ181は椀で，前者の口縁部内面には浅い沈線が認められる。Ⅲ182は高台が断面三角形を呈し，外側にやや開いている。底部内面に灰釉がみうけられる。Ⅲ183・Ⅲ184は青磁，Ⅲ185・Ⅲ186は白磁の口縁部片。

灰褐色土出土遺物（Ⅲ187～Ⅲ201）　Ⅲ187は灰白色の土師器小椀。口縁端部をつまみあげている。Ⅲ188は灰白色の土師器椀。Ⅲ189は近世の土師器灯明皿。口縁端部に煤がわずかに付着している。Ⅲ190～Ⅲ193は土師器焙烙。

Ⅲ194は灰釉陶器。高台は縦長で，断面二等辺三角形を呈する。Ⅲ195～Ⅲ199は陶器。Ⅲ195は灯明皿で，内面に６本の浅い平行沈線が認められる。Ⅲ197の底部外面には「八□」の墨書がみられる。Ⅲ200は磁器染付の椀。Ⅲ201は硯。

表土出土遺物（Ⅲ202～Ⅲ205）　Ⅲ202は縄文晩期末の凸帯文土器。口縁部からやや下がった位置に凸帯を貼り付け，Ｄ字状の刻みをほどこしている。Ⅲ203は菊丸瓦で，八弁の菊花文を配する。Ⅲ204は剣頭文，Ⅲ205は唐草文の軒平瓦。

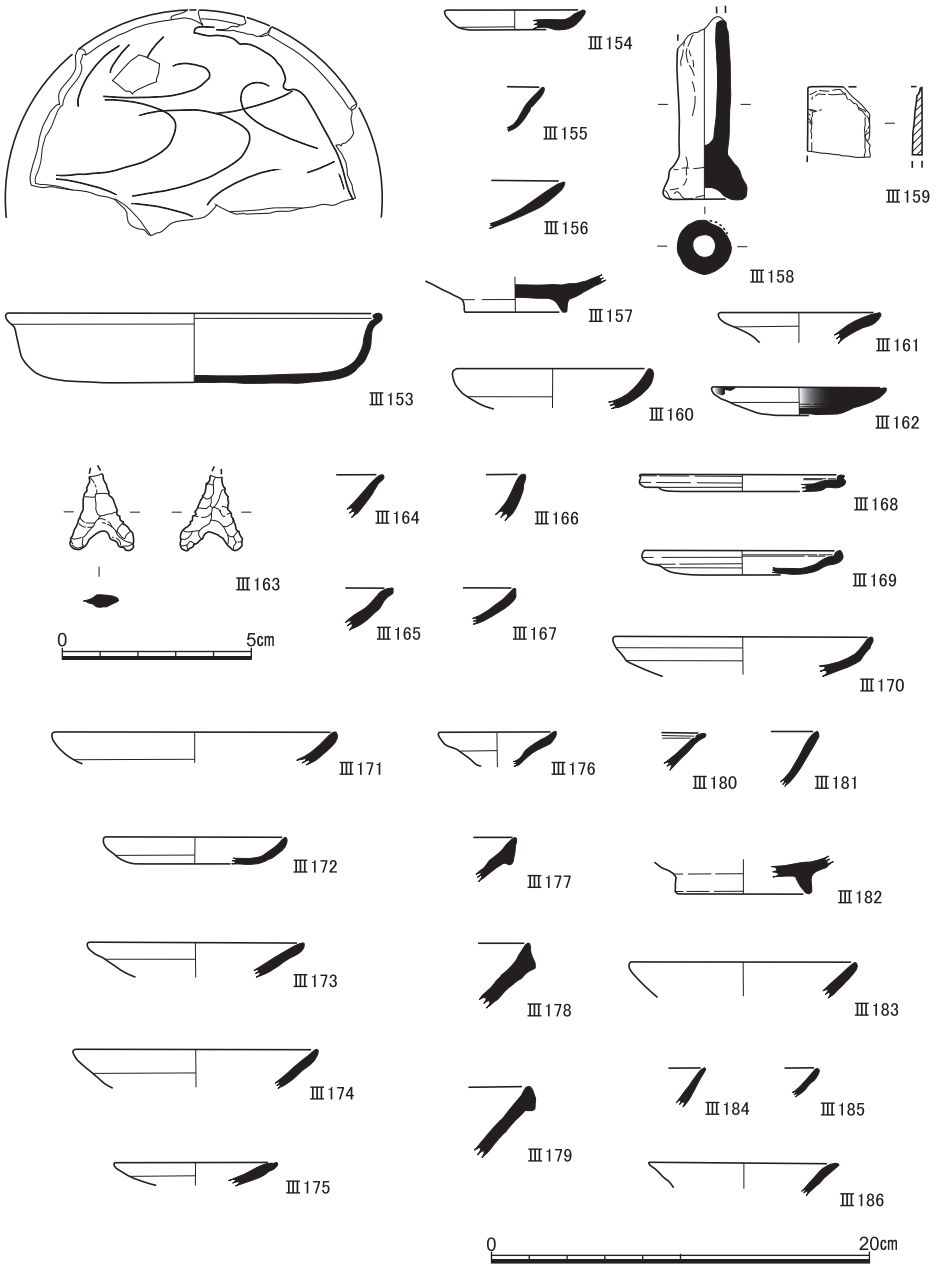


図113　ＳＸ10出土遺物（Ⅲ153土師器），ＳＸ９出土遺物（Ⅲ154土師器），ＳＸ８出土遺物（Ⅲ155・Ⅲ156土師器，Ⅲ157灰釉陶器），ＳＸ７出土遺物（Ⅲ158土師器，Ⅲ159硯），小穴出土遺物（Ⅲ160～Ⅲ162土師器），褐色土出土遺物（Ⅲ163石鏃），黒色土出土遺物（Ⅲ164～Ⅲ167土師器），茶褐色土出土遺物（Ⅲ168～Ⅲ176土師器，Ⅲ177～Ⅲ179須恵器，Ⅲ180～Ⅲ182灰釉陶器，Ⅲ183・Ⅲ184青磁，Ⅲ185・Ⅲ186白磁）　Ⅲ163：縮尺1/2

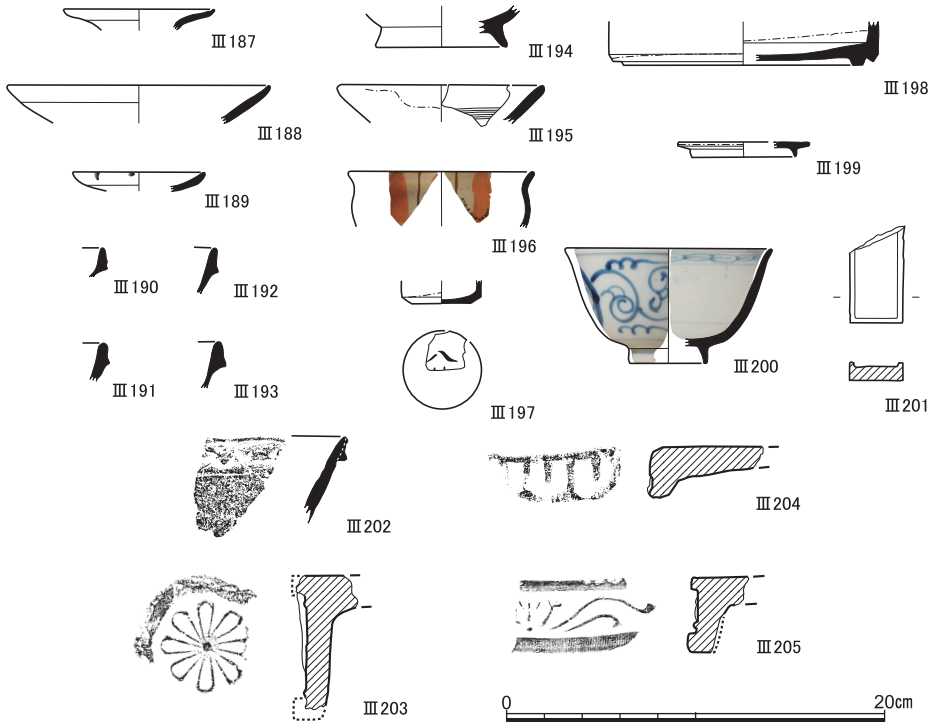


図114　灰褐色土出土遺物（Ⅲ187～Ⅲ193土師器，Ⅲ194灰釉陶器，Ⅲ195～Ⅲ199陶器，Ⅲ200磁器，Ⅲ201硯），表土出土遺物（Ⅲ202縄文土器，Ⅲ203丸瓦，Ⅲ204・Ⅲ205軒平瓦）

6　Ｄ区の遺構と遺物

⑴ 黒色土を埋土とする遺構（図108）

おもにＤ区北辺で，遺物をほとんど含まない黒色土を埋土とする凹みまたは円形ピットがいくつか検出されたのみであった。

⑵ 茶褐色土を埋土とする遺構（図109）

溝ＳＤ５　　ＳＤ５は，Ｄ区南辺の黄褐色土上面で検出された東西溝である。埋土には，茶褐色土の他，黒色土や黄褐色土も含む。幅１ｍ前後であり，検出面の標高は57.4ｍ，底の標高は57.1ｍである。遺物は少ないが中世の土師器・陶器片を含む。

土坑ＳＫ１　　ＳＫ１は根石を伴う土坑で，ＳＤ５に切られる。ＳＤ５掘削後に黄褐色土上面で検出し，南北1.5ｍ，東西80㎝以上の楕円形に近い堀方をもつ。中心部の深くなる部分は北側に寄り，南北１ｍ位である。その底から30×25㎝位の平らな根石が出土した。検出面の標高は57.3ｍ，根石上の標高は56.2ｍ，底の標高は56.1ｍである。埋土からは中

世の土師器小片が出土した。

不定形土坑ＳＸ２　ＳＸ２は，Ｄ区中央の広範囲を占める不定形の土坑で，茶褐色土包含層の下に埋積する。埋土は黒色土，黄褐色土，砂などを互層状に含み，その中央の最深部は白砂がなくなる暗褐色砂質土の上面近くまでで終わっているので，白砂の採取を目的とした砂取穴と推定される。北肩は黄褐色土上面検出で，オーバーハングしている。検出面の標高は57.4m，最深部の標高は55.5mである。出土遺物はあまり多くなく13世紀のものが主体である。

不定形土坑ＳＸ３　ＳＸ３は，ＳＸ２に切られるその南にある不定形の土坑であり，これと同様な砂取穴の可能性がある。ＳＸ３南肩の一部はＳＥ１漆喰除去後黄褐色土上面で検出した。検出面の標高は57.3m，底の標高は56.2mである。底近くしか残存していなかったこともあり出土遺物は少なく，13世紀のものが主体である。

不定形土坑ＳＸ４　ＳＸ４は，Ｄ区南辺の黒色土上面で検出された不定形の土坑で，中央を攪乱に切られ，南北に分かれる。底は白砂に達し，砂取穴の可能性がある。南半部分の南肩はＡ区のＳＤ１南肩の延長部とほぼ重なるが，かなり離れており残存部も少ない上，Ｄ区東側のＡＵ28区の調査ではこうした溝は検出されていないため，ＳＤ１の延長に関係するかは不明である。南半検出面の標高は57.5m，底の標高は56.3m，北半検出面の標高は56.9m，底の標高は56.5mである。出土遺物は13世紀のものが主体を占める。

このほか，おもにＤ区北辺では，１辺20㎝前後の方形などのピットが検出され，そのいくつかは近世の遺物を含む。Ｄ区北辺は，Ｂ区と同じく灰褐色土と茶褐色土との判別が困難であり，これらの多くは近世ピットであると思われる。

⑶ 灰褐色土を埋土とする遺構（図版28，図110）

野壺ＳＥ１　ＳＥ１は，表土・攪乱除去後に検出された漆喰製の野壺である。北側は攪乱に切られ，東壁際では底部がわずかに残る。直径は1.5m位と推定される。漆喰の厚さは数㎝で，漆喰上部は破壊されていて本来の深さは不明であるが，残存部の検出面標高は51.7m，底の漆喰上の標高は51.3mである。埋土からは幕末の遺物が出土した。

また，Ｄ区南辺の灰褐色土が包含層として残っている部分では，茶褐色土上面で１辺15㎝前後の方形ピットが若干，検出された。

⑵ 出土遺物（図115・116）

褐色土出土遺物（Ⅲ206）　Ⅲ206は縄文時代の凹基式石鏃。中央部から先端部にかけて欠損している。肉眼観察では，石材は金山産サヌカイトとみられる。現重量0.8ｇ。

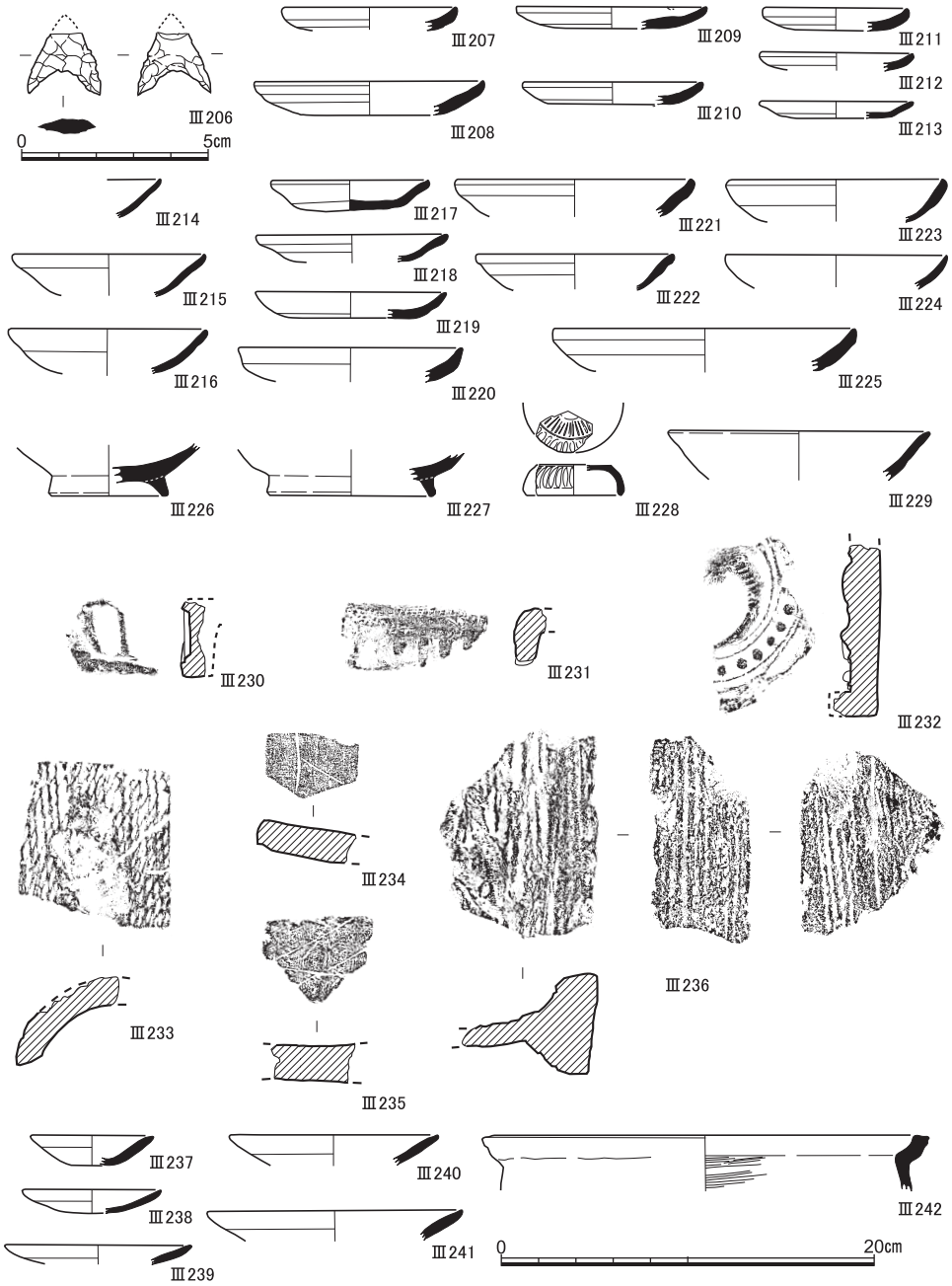


図115　褐色土出土遺物（Ⅲ206石鏃），ＳＫ１出土遺物（Ⅲ207・Ⅲ208土師器），ＳＸ３出土遺物（Ⅲ209～Ⅲ213土師器），ＳＸ４出土遺物（Ⅲ214～Ⅲ216土師器），ＳＸ２出土遺物（Ⅲ217～Ⅲ225土師器，Ⅲ226・Ⅲ227灰釉系陶器，Ⅲ228・Ⅲ229白磁，Ⅲ230～Ⅲ235瓦，Ⅲ236塼），茶褐色土出土遺物（Ⅲ237～Ⅲ241土師器，Ⅲ242瓦器）　Ⅲ206：縮尺1/2

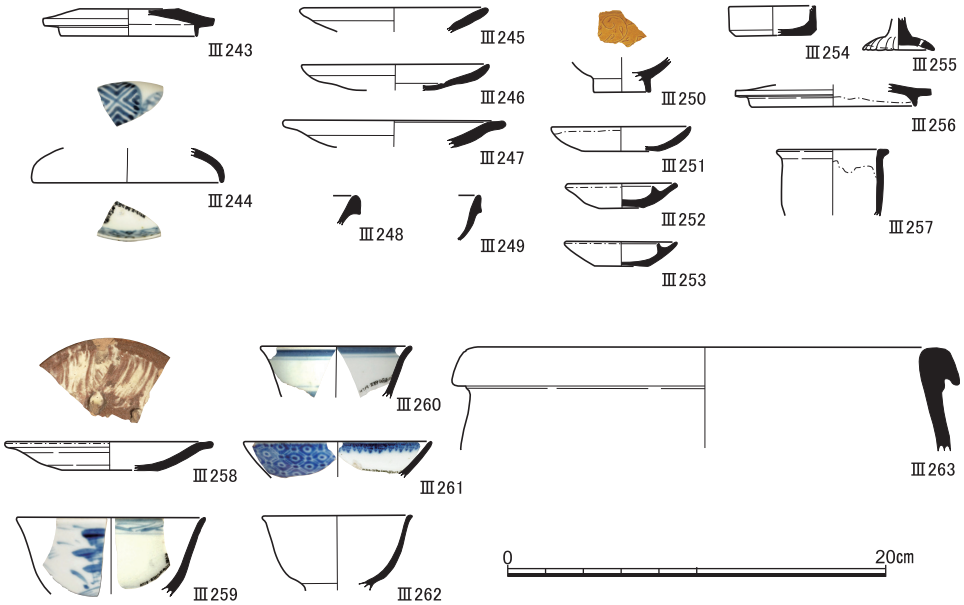


図116　ＳＥ１出土遺物（Ⅲ243・Ⅲ244陶器），灰褐色土出土遺物（Ⅲ245～Ⅲ249土師器，Ⅲ250・Ⅲ257軟質施釉陶器，Ⅲ251～Ⅲ256・Ⅲ258・Ⅲ263陶器，Ⅲ259～Ⅲ261染付，Ⅲ262白磁）

ＳＫ１出土遺物（Ⅲ207・Ⅲ208）　Ⅲ207・Ⅲ208は土師器皿で，Ⅲ207はＣ$_3$類，Ⅲ208はＣ$_5$類。

ＳＸ３出土遺物（Ⅲ209～Ⅲ213）　Ⅲ209・Ⅲ210は，口径9.5～10cmの土師器皿Ｄ$_5$類。Ⅲ211～Ⅲ213は口径８cm前後の土師器皿で，Ⅲ211・Ⅲ212はＤ$_5$類，Ⅲ213はＤ$_2$類。

ＳＸ４出土遺物（Ⅲ214～Ⅲ216）　Ⅲ214～Ⅲ216は灰白色を呈する土師器椀。口径は，Ⅲ215が10.2cm，Ⅲ216が10.5cm。

ＳＸ２出土遺物（Ⅲ217～Ⅲ236）　Ⅲ217～Ⅲ225は土師器皿で，いずれも１段撫で手法のＤ類。Ⅲ219が灰白色のほかは橙褐色である。Ⅲ226・Ⅲ227は灰釉陶器の椀。Ⅲ228・Ⅲ229は白磁で，Ⅲ228は合子の蓋，Ⅲ229は椀。

Ⅲ230・Ⅲ231は剣頭文軒平瓦。Ⅲ231は凹面から瓦当面にかけて布目痕が残る。Ⅲ232は巴文軒丸瓦。外区に珠文を施す。Ⅲ233は丸瓦。凸面に縄目叩きの痕跡をもつ。Ⅲ234・Ⅲ235は平瓦で，凹面に篦記号かとみられる刻線がある。Ⅲ236は塼。直方体で中央部が長方形に凹む。長辺と凹部の一部が残存するのみだが，いずれの面にも縄目叩きの痕跡をもつ。構内各所で出土している類例から，凹部に２カ所，円孔をもつ有孔塼である。

茶褐色土出土遺物（Ⅲ237～Ⅲ242）　Ⅲ237は土師器小椀，Ⅲ238～Ⅲ241は土師器皿。

Ⅲ242は瓦器の鍋。

ＳＥ１出土遺物（Ⅲ243・Ⅲ244）　Ⅲ243は陶器段重の蓋。Ⅲ244は磁器染付の蓋。

灰褐色土出土遺物（Ⅲ245～Ⅲ263）　Ⅲ245～Ⅲ247は土師器皿で，Ⅲ245・Ⅲ246は見込みに圏線がめぐっている。Ⅲ248・Ⅲ249は土師器焙烙。

Ⅲ250・Ⅲ257は軟質施釉陶器。Ⅲ250はミニチュアの椀で，見込みに刻線で文様を描いている。Ⅲ251～Ⅲ256・Ⅲ258・Ⅲ263は陶器。Ⅲ251は灯明皿，Ⅲ252・Ⅲ253は灯明受皿。Ⅲ254は蓋物。口縁端部を無釉とする。Ⅲ255は蓋。白化粧して施釉する。小孔をもつ。Ⅲ256は段重の蓋。Ⅲ258は土瓶の蓋。Ⅲ263は陶器甕。口径25㎝。

Ⅲ259～Ⅲ261は磁器染付。Ⅲ259・Ⅲ260は端反りの椀。Ⅲ261はコバルトを用いた型紙摺で明治時代に下る。Ⅲ262は白磁の椀。

7　小　　結

本調査で明らかになったおもな成果を以下の３点にまとめる。

①周辺地域の調査同様，調査地点には弥生前期の鍵層である黄色砂は分布せず，微高地部にあたることを追認するとともに，下層に厚く堆積する扇状地堆積物の中に黒褐色～暗褐色の土壌化した堆積物がすべての調査区で存在することを明らかにした。地表面からの深さ2.5～３ｍ前後であり，連続する一連の堆積物と考えられた。

Ａ区では，砂層を重機で除去した後，面的に広げて暗褐色土上面で地形測量をおこなうとともに遺物の有無を確認した。人工遺物は出土しなかったが，炭化材を採集できたので，年代測定を試みた。測定値は12510±40ＢＰで縄文時代草創期の年代を示した。

比叡山西南麓一帯で，縄文草創期に属する可能性がある遺物は，本調査区の位置する本部構内で出土した有茎尖頭器２点である〔千葉ほか1997　p.15，千葉2003　p.87〕。ただし両例ともに，歴史時代の層位から出土していて，本来包含された地層からの出土ではなかった。今回検出した土壌化層は，過去に出土していた当該期の遺物の本来の包含層を推定させる一つの手がかりになるとともに，この時代の人間活動を追究するデータともなるであろう。

また本調査区の北，約200ｍに位置する397地点の調査では，アカホヤ火山灰（7300年前）を含む土壌化層が検出されている〔笹川ほか2015〕。この土壌化層からは遺物は出土しなかったが，さらに下層に堆積する土壌化層から縄文土器の細片が１点出土している。縄文時代の前半期にさかのぼる遺構・遺物について，十分留意しつつ調査を進める必要を示し

ている。

②Ａ区でみつかった南北に伸びる中世の道路は，75・89地点で検出された道路状遺構ＳＦ３の北延長上にあたる。この道路を切るかたちで，南北方向に伸びる溝，東西方向に伸びる溝もみつかった。溝は，いずれも断面逆台形で，幅2.5m前後，深さ１m前後。東西溝が南北溝を切っているが，出土遺物からは明瞭な時期差をみることはできない。土地の区画を示す溝と思われ，土地利用の様相を知る重要な情報となった。

③白色の砂を採取した砂取穴がＣ区・Ｄ区ではみつかったものの，Ａ区・Ｂ区には認められなかった。掘削面や埋土に含まれている遺物から，中世後半のものと考える。本調査区周辺での砂取穴は，75・89地点の西辺，214地点の北端では確認されているものの，124地点，219地点，262地点にはみられない。大規模に展開していたというよりも，モザイク状に分布していた可能性が高い。

本章は，第１節・第２節・第３節⑴・⑷・第６節・第７節を千葉豊，第４節⑶・第５節⑷を笹川尚紀，第３節⑵・⑶，第４節⑴・⑵，第５節⑴〜⑶を長尾玲が分担執筆し，千葉が全体を調整した。現地調査と整理作業は，千葉豊と笹川尚紀が担当し，長尾玲・磯谷敦子・杢佐和子・上阪航・髙野紗奈江が測量や出土資料の実測・復元などをおこなった。

第５章　京都大学本部構内ＡＴ22区の発掘調査

笹川尚紀

１　調査の概要

本調査区は京都大学本部構内の南西隅に位置し，吉田本町遺跡に含まれる（図版１－403）。ここに自家発電設備の新営が計画されたため，予定地すべての発掘調査をおこなった。調査期間は2013年11月13日から12月12日，調査面積は62㎡である。出土遺物は近世のものが大半を占め，その総量は整理箱６箱強であった。

北に近接する277地点からは，中世および近世の白川道の遺構が確認されており，本調査区からもそれらがみつかることは十分に予想された。くわえて，本調査区は尾張藩の吉田屋敷の範囲内になると思われ，それにかかわる遺構が検出される可能性が存した。よって，それら事柄に注意をはらいつつ，とくに近世以前における土地利用の移りかわりについて明らかにすることを目的に，発掘調査を進めた。

２　層　　位

本調査区の一部を深掘りしたところ，硬化面が認められたので，その高さくらいまで機械掘削をおこなった。その結果，硬化面が本調査区の過半を占めているのが判然となった。硬化面は幕末の白川道の路面に相当する。そのような近世の白川道にたいしては，ＳＦ１の呼称をあたえた。くわえて，ＳＦ１と直交する方向に，土層観察用の畔をもうけた。その北東側の層位を示すと，図117のようになる。

本調査区北西隅の第１層の灰褐色土は近世，第２層の茶褐色土は中世の遺物包含層となる。それら以外の大部分は，東西溝ＳＤ１，近世白川道側溝ＳＤ２，中世白川道ＳＦ２というように，遺構にかかわる層となるので，第３・４節においてくわしくふれていくことにしたい。なお，それら遺構の下には，粘土層および砂層がひろがっており，弥生時代前期末の洪水性堆積物となる黄色砂はいっさいみうけられなかった。

ちなみに，現地表面の標高は約56.2m，硬化面のもっとも高いところのそれは約54.2mとなるので，２ｍくらい重機を使って掘り下げたことになる。そこで，ＳＦ１上面までの本調査区南壁の層位を述べておくと，約1.2mが表土・攪乱，約0.8mが灰白色砂および黄色砂がところどころにまじる灰黄褐色土となる。後者にかんしては，のちに説明するよう

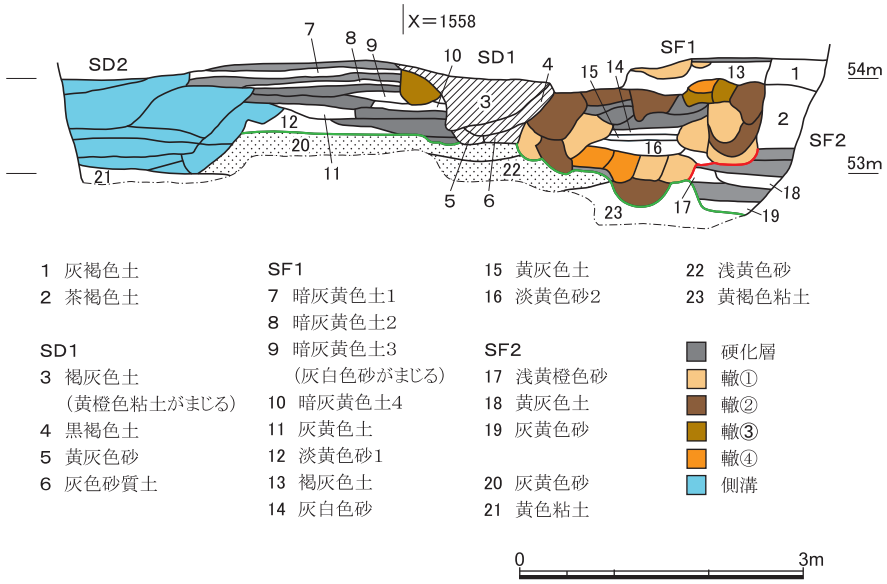


図117　ＳＤ１・ＳＦ１・ＳＤ２・ＳＦ２の層位（畔の北東壁）　縮尺1/80

に，ＳＤ１が幕末ごろに掘られたと考えられるので，近代における整地土であったと理解しておきたい。

3　中世の遺跡

(1) 遺　　構（図版29，図118）

中世の遺構については，井戸と道路，および複数のピットが検出されている。これらのうち，井戸と道路にかんして解説をおこなう。

ＳＥ１は本調査区南西部でみつかった円形の石組井戸。掘形埋土から，Ｄ$_3$類の土師器小皿の破片（Ⅳ１・Ⅳ２）がとりあげられているので，13世紀代に作られたと考えられる。

石組は東側の上部が残っておらず，西側のもっとも高い石の上面で標高が52.3mとなる。調査期間の関係上，完掘することはかなわず，石組内・掘形ともに標高49.9mのあたりで作業を終了した。

石組内には，人頭大ほどの石がいくつかみうけられ，それらはもともと東側の石組を構成していたと推測される。そうしたものにくわえて，石組のなかには長軸が50cm，短軸が30cmくらいの石が10個ほど認められた。それらの大きさからすると，石組に用いられてい

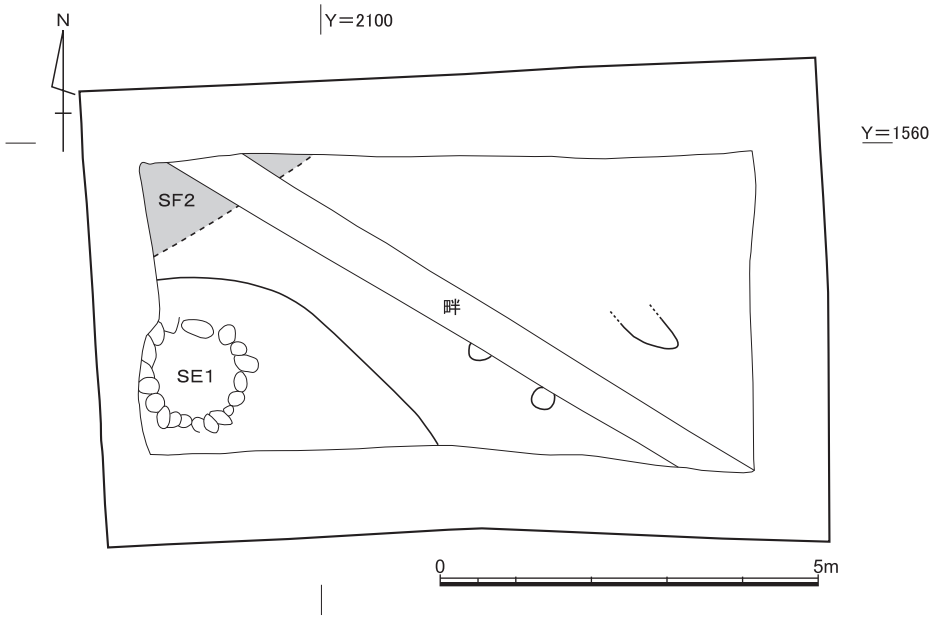


図118　中世の遺構　縮尺1/100

たものとはとうてい考えられず，井戸の廃棄に際して入れられるにいたったと解するのが自然となろう。

ＳＦ２は本調査区北西隅から検出された道路遺構で，白川道に相当する。中世の遺物包含層である第２層の下から，上から順に灰白色・黄橙色・褐灰色の硬化層が確認される。

ＳＦ２からの遺物の出土量は少なく，それゆえに，その造成年代を明らかにすることはなかなかむずかしい。けれども，下方からＤ$_4$類の土師器小皿の破片（Ⅳ７）がみつかっているので，褐灰色の硬化層の上面は，13世紀代の路面であった可能性が高いと思われる。

以上の事柄をふまえると，本調査区においては，13世紀代に白川道のほとりに井戸が位置していたことが想定される。

⑵ 遺　　物（図119　Ⅳ１～Ⅳ８）

Ⅳ１・Ⅳ２は１段撫で手法のＤ$_3$類の土師器小皿。Ⅳ２は口縁部内外面に煤が付着している。以上はＳＥ１掘形埋土より出土。

Ⅳ３・Ⅳ４はＤ$_3$類，Ⅳ５はＤ$_4$類の土師器小皿・皿。Ⅳ６は白磁底部片。外面は露胎で，見込みに浅い圏線を有している。以上はＳＥ１石組内埋土より出土。

Ⅳ７はＤ$_4$類の土師器小皿。Ⅳ８は白磁底部片。内面に蛇の目釉剝ぎが認められる。以

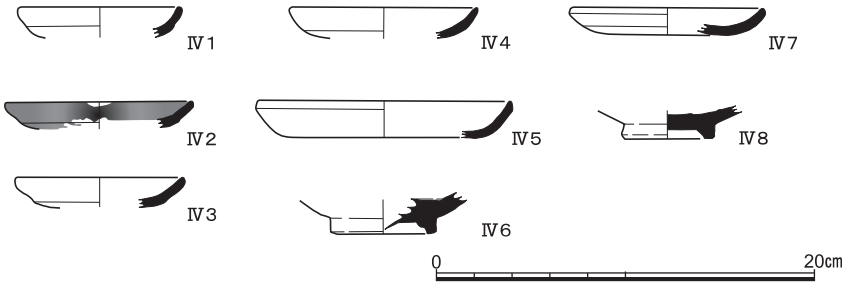


図119　ＳＥ１掘形出土遺物（Ⅳ１・Ⅳ２土師器），ＳＥ１石組内出土遺物（Ⅳ３～Ⅳ５土師器，Ⅳ６白磁），ＳＦ２出土遺物（Ⅳ７土師器，Ⅳ８白磁）

上はＳＦ２より出土。

４　近世の遺跡

⑴ 遺　　構（図版29，図120）

本調査区の北西隅をのぞき，道路およびその側溝の遺構が確認された。また，中央部分には，東西溝がみつかっている。

ＳＦ１は白川道に相当する。図117から，277地点の南東部分で検出されたＳＦ２，すなわち白川道と同様に，当初は北側を掘り込んで造成されたことがわかる。くわえて，時代が下るにつれて，北側の段差は狭まり，ついにはなくなってしまったことが知られる〔千葉・阪口2006〕。

硬化層は黒褐色・黄褐色・灰色などを呈し，小礫が多くまたはまばらにまじっているもの，砂の筋が何本か入っているものなどがみうけられた。轍や東西溝ＳＤ１などによって削られてしまっており，それぞれの時期の道路幅を把握することはできない。けれども，一番上の硬化層，側溝ＳＤ２とＳＤ１とのあいだのものと近世の遺物包含層となる第１層の左側のものとは，ひとつながりになるとみてよいであろうから，それらを前提にすると，江戸時代末ごろの道幅は5.8mほどとなる。

轍は道路の左側の部分に集中し，大きなものは幅60cmをはかる。その補修にかんしては，①灰黄色・灰色・褐灰色などの土をつめたもの，②拳大の礫と小礫のまじる黄灰色や灰色といった土を入れたもの，③小礫が多くまじる褐灰色・黄灰色の土をつめたもの，④砂がまじる黄褐色・灰黄色といった土を入れたものが認められた。切りあいながら形成された多くの轍から，牛車などがしきりに往来していた様がおさえられる。

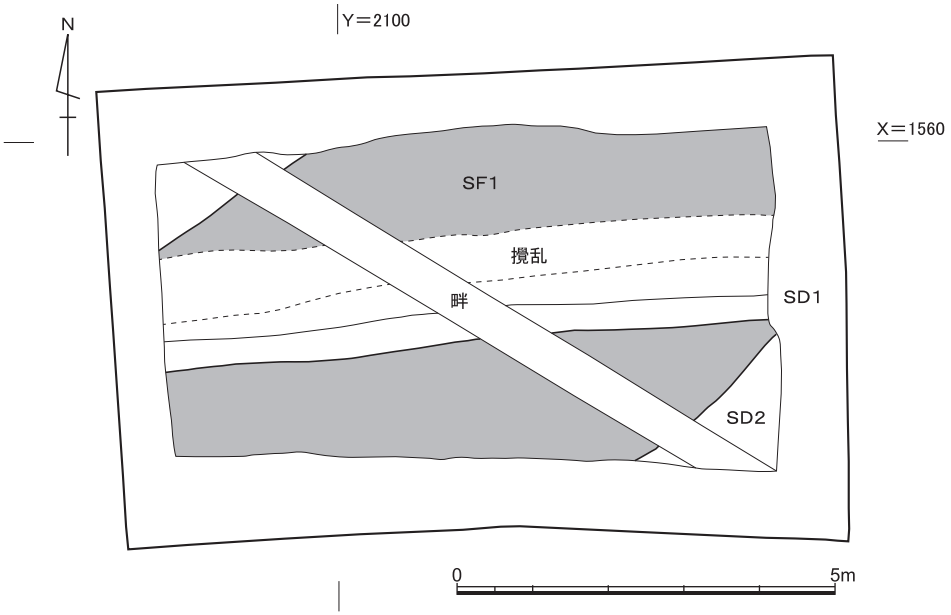


図120　近世の遺構　縮尺1/100

なお，ＳＦ１の掘削は，調査期間がかぎられていたがゆえに，ＳＤ１の底面までは３回にわけ，それよりも下は１度でおこなった。説明の都合上，上からＳＦ１Ａ層・Ｂ層・Ｃ層・Ｄ層と呼ぶことにしたい。ＳＦ１からは，あわせて整理箱２箱半くらいの遺物が出土している。そのうちＡ層は１箱半，Ｂ層からＤ層までは１箱ほどとなる。ただし，Ｄ層からの遺物は，ビニール袋１袋分くらいで，非常に少ない。それには染付の小片がいくつか含まれており，こうした点などにもとづくと，ＳＦ１は18世紀以降，幕末にかけて徐々に積みあげられていったことが推測される。

ちなみに，Ａ層からＣ層までの遺物は，陶磁器の破片が大半を占める。なかでも留意すべきは，Ａ層から多数の遺物がみつかっている点で，道路をつき固めるためにそれらが利用された可能性も残されているのではないかと思われる。

ＳＤ２は白川道の側溝であり，図117から，路面の上昇にともなって幾度か作りなおされていたことがみてとれる。下部の４つの層は，褐色や灰黄褐色などの砂となり，水が流れていた状況がうかがえる。

なお，上部の５つの層は，褐灰色や黄灰色などを呈する土となり，遺物の出土が比較的多かった。いっぽう，下部の層には，それはほとんど含まれてはいなかった。説明の便宜

上，前者を上層，後者を下層と呼ぶことにしたい。

ＳＤ１は底部の幅が60cmほどとなる東西溝で，ＳＦ１を掘り込んだものとなる。遺物の大半は，第５・６層よりとりあげられている。

このＳＤ１にかんしては，当初，尾張藩吉田屋敷の南堀の一部にあたるのではないかと推測していた。けれども，こうした解釈を下すのはむずかしいと考えるにいたった。

これまでの発掘・立合調査の結果，吉田屋敷の南堀とされるものは，東から89・335・337・188・293・395地点で確認されている。これらのうち，89地点の北西隅でみつかったＳＤ１は，南東のコーナー部分となり，最大幅が約4.5m，底部の幅が約２mをはかる〔五十川1981〕。また，377地点では，上部の幅が約4.6m，底部の幅が約1.4m〔伊藤2013ｂ〕，293地点では，前者が約3.8m，後者が約２m〔清水・千葉2006〕となる。くわえて，おのおのの地点を線で結び，それを西の方へと伸ばしていくと，本調査区の南側に位置することになる。それら事柄に徴するに，本調査区のＳＤ１を吉田屋敷の南堀と断定するのは躊躇を覚える。

しかしながら，本調査区は吉田屋敷のうちに含まれている点をみすごしてはなるまい。また，ＳＦ１が道路として機能している段階で，ＳＤ１が造作されたとはとても考えづらい。さらに，ＳＤ１から出土している遺物は，幕末ごろのものとなり，新しい時期のものはいっさい認められない。これら諸点を勘案すると，東西溝ＳＤ１は，尾張藩の吉田屋敷にかかわる遺構であるとみなしてよいのではなかろうか。

⑵ 遺　　物（図121～124）

ＳＦ１出土遺物（Ⅳ９～Ⅳ36）　Ⅳ９は玉縁をもつ丸瓦。凸面は縄叩きののち撫でて形が整えられており，凹面には細かな布目圧痕が残る。Ｄ層より出土。

Ⅳ10は古瀬戸の小皿。灰釉がかかり，体部外面下半から底部外面を露胎とする。Ⅳ11・Ⅳ12は灯明受皿。いずれも内面に灰釉をほどこす。Ⅳ13・Ⅳ14は磁器染付。前者は椀，後者は瓶であろう。Ⅳ15は泥面子。Ⅳ16は直方体を呈する塼。５面いずれも縄叩きをほどこしている。むかいあう面積のひろい２面は，周縁部分をのぞいてくぼんでおり，そこに楕円形の孔があけられている。その長辺はどれだけあったのか，つまびらかにしえないものの，短辺は10cmをはかる。また，面積のせまい３面の幅は，約4.5cmとなる。以上はＣ層より出土。

Ⅳ17は陶器蓋。白泥を用いていっちん描きしたのち，透明釉をかけている。Ⅳ18・Ⅳ19は磁器染付の皿・仏飯。以上はＢ層より出土。

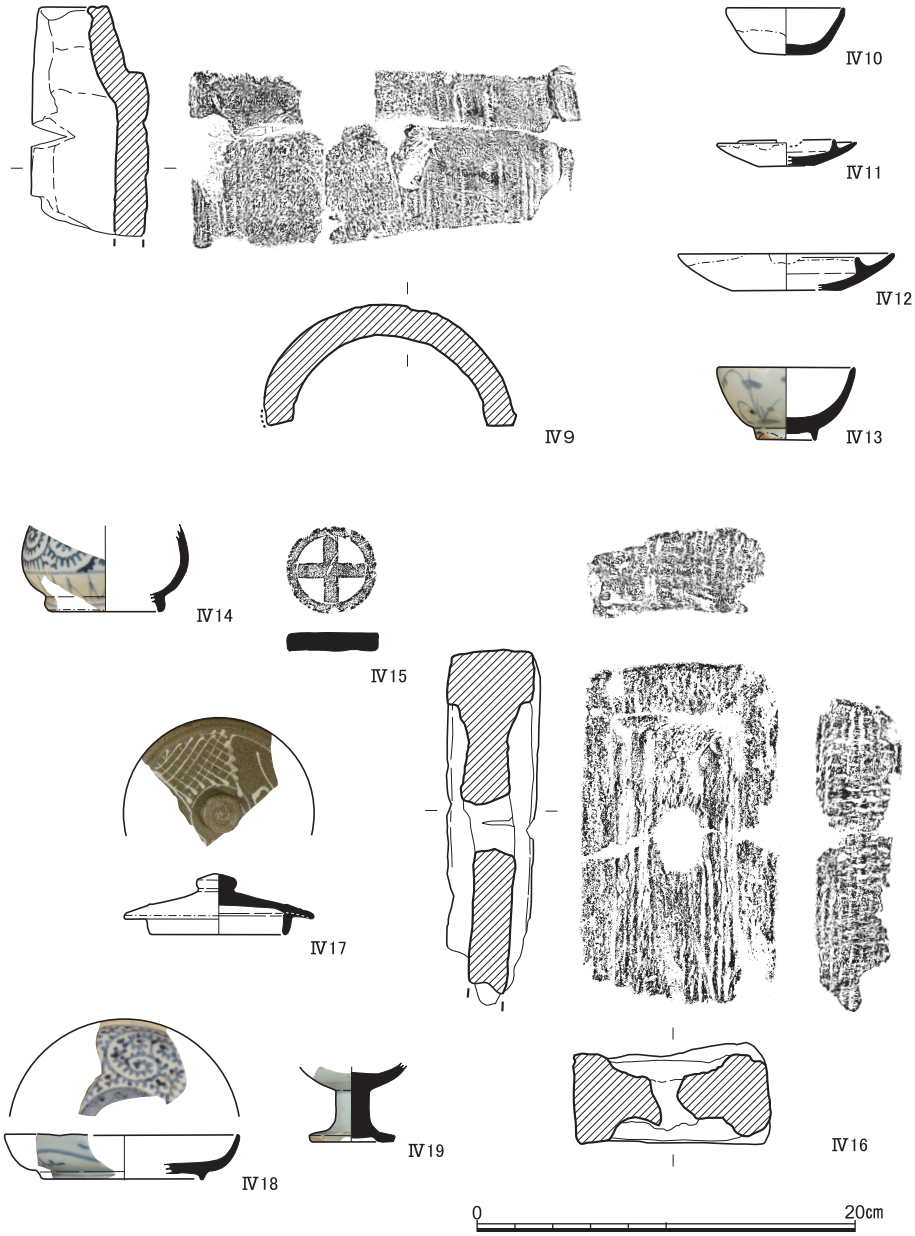


図121　ＳＦ１Ｄ層出土遺物（Ⅳ９丸瓦），ＳＦ１Ｃ層出土遺物（Ⅳ10古瀬戸，Ⅳ11・Ⅳ12陶器，Ⅳ13・Ⅳ14磁器，Ⅳ15泥面子，Ⅳ16塼），ＳＦ１Ｂ層出土遺物（Ⅳ17陶器，Ⅳ18・Ⅳ19磁器）

図122　ＳＦ１Ａ層出土遺物（Ⅳ20～Ⅳ24陶器，Ⅳ25～Ⅳ35磁器，Ⅳ36泥面子），ＳＤ２下層出土遺物（Ⅳ37陶器，Ⅳ38～Ⅳ40磁器）　Ⅳ22の拓本およびⅣ36は縮尺1/2

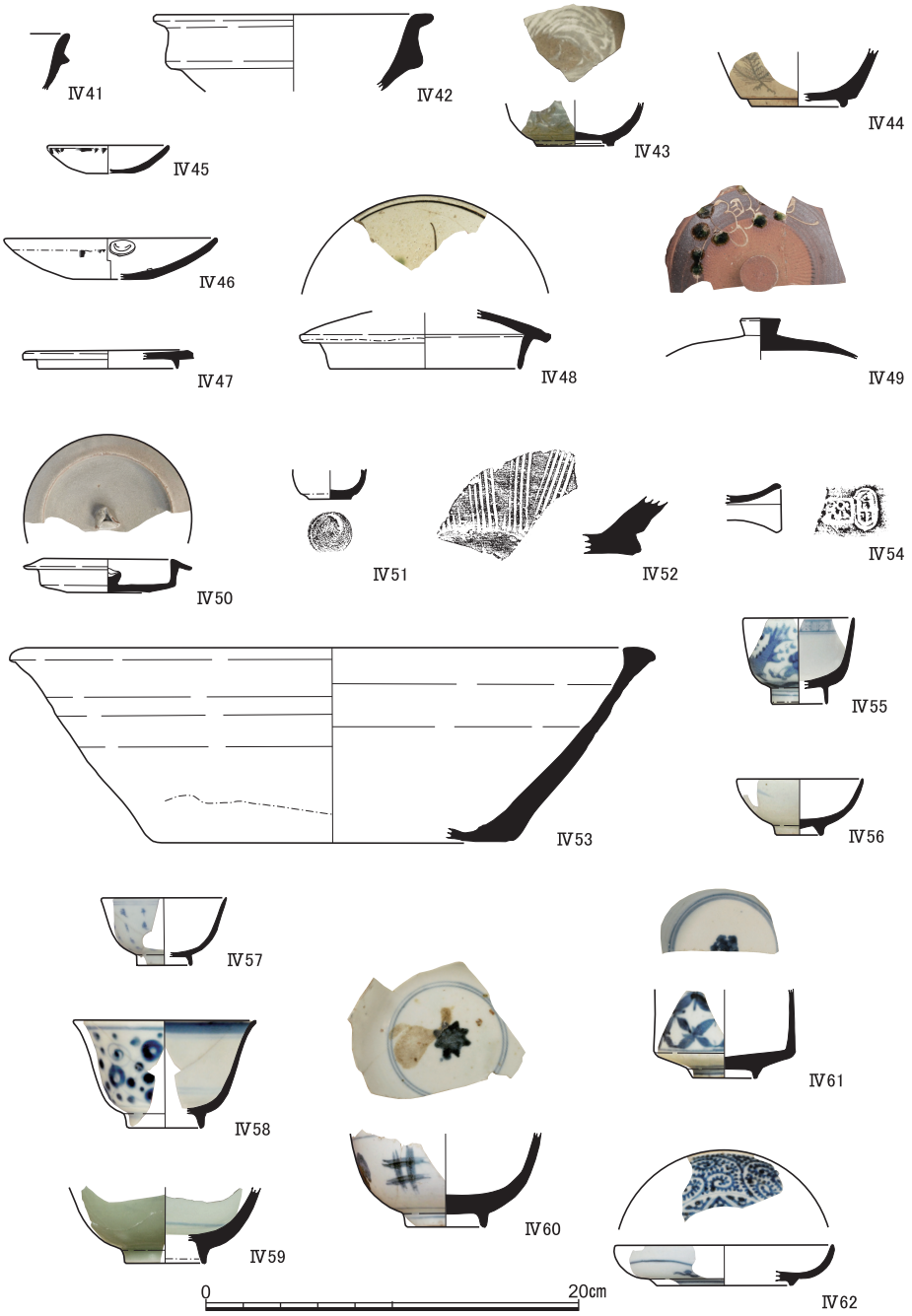


図123　ＳＤ２上層出土遺物(1)（Ⅳ41・Ⅳ42土師器，Ⅳ43～Ⅳ54陶器，Ⅳ55～Ⅳ62磁器）　Ⅳ54の拓本は縮尺1/2

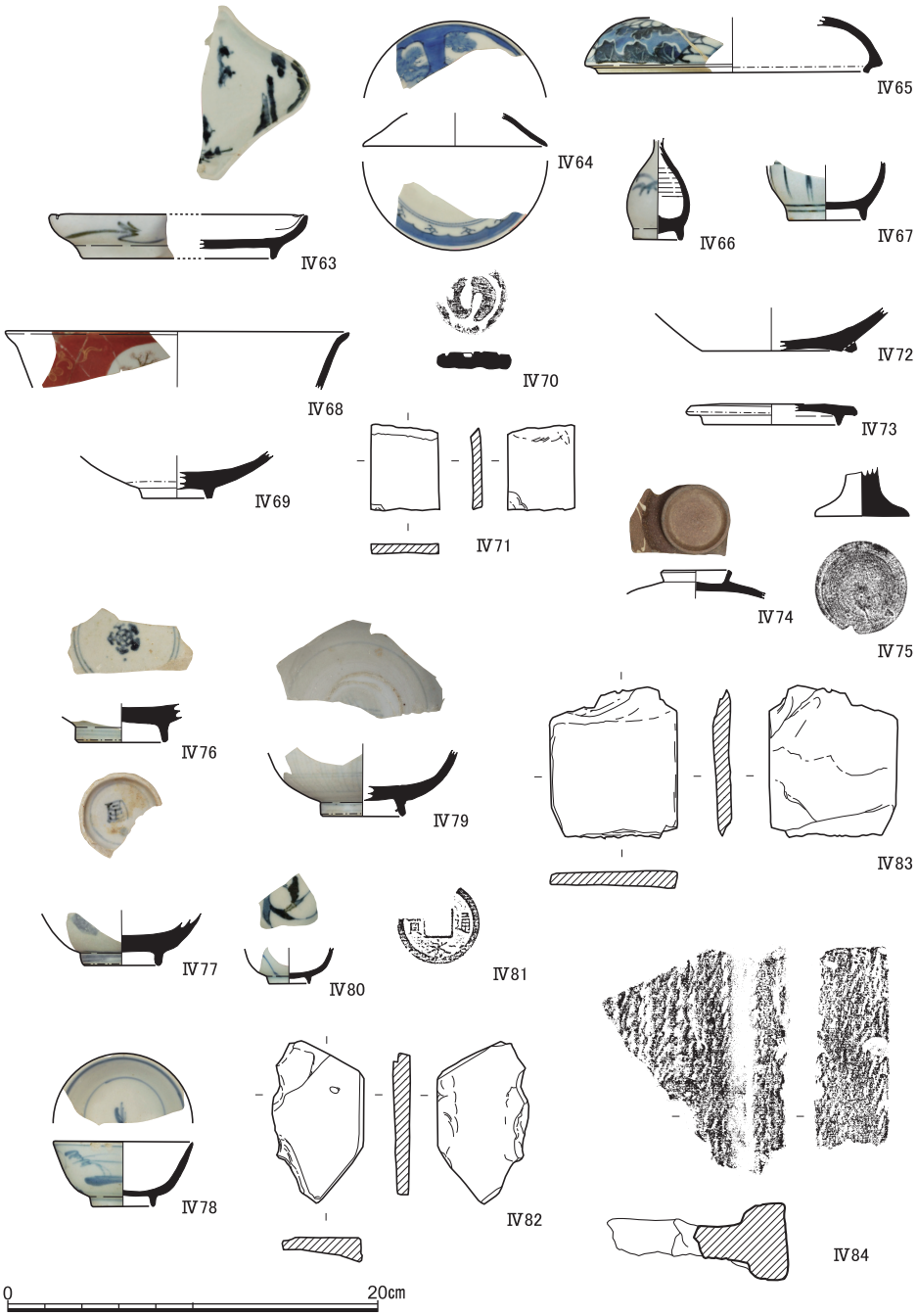


図124　ＳＤ２上層出土遺物(2)（Ⅳ63～Ⅳ68磁器，Ⅳ69白磁，Ⅳ70泥面子，Ⅳ71砥石），ＳＤ１出土遺物（Ⅳ72～Ⅳ75陶器，Ⅳ76～Ⅳ80磁器，Ⅳ81銭貨，Ⅳ82・Ⅳ83砥石，Ⅳ84塼）　Ⅳ81は縮尺1/2

Ⅳ20～Ⅳ24は陶器。Ⅳ20・Ⅳ21は京・信楽系。前者は見込みに鉄絵が認められ，蛇の目高台の内側に「仙」と墨書する。後者にも輪高台の内側に墨書がみうけられる。Ⅳ22は鍋。底部外面端に「晶」と思われる刻印が存する。Ⅳ23は蓋。Ⅳ24は鉢。Ⅳ25～Ⅳ35は磁器。Ⅳ25～Ⅳ28は染付の椀。Ⅳ25の見込みには「大明年製」の銘款があったことが察せられる。Ⅳ29は染付の皿。Ⅳ30は染付の墨入れの注口部分。２つの目を有し，口から墨を出す作りとなっている。Ⅳ31は染付の仏飯。Ⅳ32・Ⅳ33は赤絵の盃。Ⅳ34も盃で，見込みに赤を用いて文字を記しているものと思われる。Ⅳ35は「ゐづこや／登匚」と読める。Ⅳ36は泥面子。以上はＡ層より出土。

ＳＤ２出土遺物（Ⅳ37～Ⅳ71）　Ⅳ37は陶器すり鉢。７条１単位のすり目が存する。Ⅳ38・Ⅳ39は磁器染付の椀。Ⅳ40は磁器染付の仏飯。以上は下層より出土。

Ⅳ41は焙烙。Ⅳ42は土製品。口縁端部を外側に折り曲げ，体部外面中ほどを突起させている。Ⅳ43～Ⅳ53は陶器。Ⅳ44は京・信楽系の小杉椀。Ⅳ45・Ⅳ46は灰釉をほどこす灯明皿。いずれも口縁部外面に煤が付着し，見込みに目跡が認められる。Ⅳ47～Ⅳ50は蓋。Ⅳ49は白泥でいっちん描きしたのち，緑色の釉を粒状にちらしかけている。Ⅳ51は天目の小壺。底部外面に回転糸切り痕がみうけられる。Ⅳ52はすり鉢。５条１単位のすり目が存する。Ⅳ53は鉢。灰白色の釉がかかり，体部外面下端から底部外面を露胎とする。Ⅳ54は焼き締めで，おそらくは把手であろう。「音羽」などの刻印が認められる。Ⅳ55～Ⅳ67は磁器染付。Ⅳ55～Ⅳ61は椀。Ⅳ57は体部外面に漢詩がしたためられている。Ⅳ62･Ⅳ63は皿。後者は変形皿で，体部の形にあった高台を貼り付けている。Ⅳ64・Ⅳ65は蓋。後者には焼き接ぎがみうけられる。Ⅳ66・Ⅳ67は徳利・瓶の類。Ⅳ68は焼き接ぎがおこなわれている色絵の椀。Ⅳ69は白磁の底部片で，見込みを蛇の目釉剝ぎとする。Ⅳ70は泥面子。Ⅳ71は明褐灰色を呈する砥石。以上は上層より出土。

ＳＤ１出土遺物（Ⅳ72～Ⅳ84）　Ⅳ72～Ⅳ75は陶器。Ⅳ72は鍋。Ⅳ73・Ⅳ74は蓋。Ⅳ75は仏飯。底部外面は露胎で，回転糸切り痕が認められる。Ⅳ76～Ⅳ79は磁器染付の椀。Ⅳ80は磁器染付の盃。Ⅳ81は寛永通宝。Ⅳ82はにぶい黄橙色，Ⅳ83は浅黄色を呈する砥石。Ⅳ84は塼。穿孔および３面に縄叩き痕がみうけられる。

5　文献史料などからみた白川道・尾張藩吉田屋敷

⑴ 白川道と白川馳道

江戸時代の白川道などをめぐって，管見に入った史料をもとに概観していく。

黒川道祐による『遠碧軒随筆』には，「荒神口　近江路　白川より山中越，坂本へ出る」と記されている[1]。また，東大路通と東一条通の交差点の北東角には，沢村道範が宝永６年（1709）11月に建てた道標が存しており，それには「右　さかもと／からさき　白川の道」「左　百まんへんの道」（／は改行を示す）と刻まれている[2]。さらに，享保２年（1717）にそのおおよそがあらわされた『京都御役所向大概覚書』２・京七口のところには，「一，荒神口　　近江路／一，山中越荒神口ヲ出白川村へ懸リ江州山中村江出ル弐里程，／一，江州坂元江右之道ヲ行三里餘」としたためられている[3]。

これら記述によると，白川道は荒神口から北東方向に白川村へといたる路であり，そこから山中越をへて近江の坂本などに通じていたことが知られる。しかしながら，洛中から白川村に達する道路にかんしては，そのほかに白川馳道を逸することができない。

貞享元年（1684）に黒川道祐がまとめあげた『雍州府志』巻第８・古蹟門上では，白川馳道[4]について，今出川口から白川村にいたる路であり，織田信長が安土城を居城としていたときには，多くの人びとが都からこの道，山中越，東坂本を通過して，そこへとおよんでいたことが語られている[5]。今出川口にかんしては，宝暦４年（1754）に成立した『山城名跡巡行志』第１・洛陽寺社名所古跡に，今出川通の１町北に位置し，出町口ともいうとみえている[6]。したがって，白川馳道は，今出川口から東の方向に白川村へと達していたことがおさえられよう[7]。現在の叡山電鉄・出町柳駅の前から百万遍の交差点へといたる道路が，その一部にあたるともくされる。

それでは，この白川馳道はいったいいつごろ造成されたのであろうか。『山城名跡巡行志』第２・愛宕郡２・寺社名所古跡・白河のところでは，白川馳道について「此所今出川口ノ東ニ当テ大路也」と記したのち，「本道ハ荒神口ヨリ吉田ノ西ヲ経テ此村ニ至ル。北国街道也」というように，白川道のことが述べられている。そこにみえる本道とは，「中心になる主な道」のことを意味する[8]。かかる両道の位置づけに徴するに，白川道の設置の方が白川馳道のそれよりも古くにさかのぼるのではないかと推察される。

以上の事柄をふまえたうえで，注目すべきは，『兼見卿記』天正３年（1575）２月15日条である[9]。それによると，みずからの領国内における道路にかんし，その幅を３間（5.5m弱）に造るようにという織田信長の命令をうけて，吉田などの10郷は山中路の600間分を普請するよう課せられたとする。そして，そうしたことにくわえて，「但今道者，至北白川西口自上京造之也」と書きつづられている。

このような記載にかんしては，白川道の拡幅のことを指すのではなく，上京から吉田山

の北のあたりに位置する北白川西口にいたる道が新たにこしらえられたと理解すべきであろう。『兼見卿記』天正３年２月27日条には，「当所領内ニ植松。今度自上京造之路次也」とみえており，これは吉田兼和（兼見）が吉田郷内にもうけられた上京からの新道に沿って松を植えたことを意味する。したがって，それは上京から吉田郷をへて北白川の西口へと達していたのが知られる。結論を先に述べれば，この路が白川馳道に相当すると考える。そこで，以下に，その根拠を列記していきたい。

まず，１つ目は，『兼見卿記』天正３年３月３日条によると，織田信長は近江から山中路および新道を通って上洛し，相国寺の塔頭である慈照院（上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町に所在）を宿所とした点だ。もとより，相国寺慈照院へと入るには，北白川西口から西方にむかうのが最短経路となろう。

ひるがえって，相国寺にかんし，みすごすことができないのは，天正２年４月２日の日付を有する聚光院（じゅこういん）文書のうちの１点，そのなかの「又信長去月廿日比上洛，相国寺ヲ城被構，諸塔頭悉居取候由候。（中略）又多聞之城も松永右衛（久通）門助降参，城ヲ被明候。主殿なとハ相国可被引之沙汰有之」という記載である[10]。これによると，３月20日ごろに上洛した信長は，相国寺を城にしようとし，もろもろの塔頭をことごとく占有したという。くわえて，松永氏の居城であった多聞城（現在の奈良市法蓮町に所在）から，その主要な建物を相国寺に移築しようとくわだてていたことが知られる。察するに，新道の造成は，信長が相国寺を京都における拠点にしようと計画していた点と密接に関連しよう。つまり，岐阜城・相国寺間の往来の便をよくするために，捷径として敷設されるにおよんだことが推量される[11]。

つづいて，２つ目は，『雍州府志』の記述となる。前にふれたように，それには白川馳道が織田信長との関係で説明されている。さらに，注目すべきは，おなじく黒川道祐が執筆した『遠碧軒随筆』の文章であり，「今の白川へ行道の左右の松は，信長公安土に城を建て，京より見物に来るものを，此道を通して山中越にゆかしむる道の並木なり」と書きつづられている。これによると，「白川へ行道」，すなわち白川馳道は信長によってもうけられたのが読みとれることになる。

等閑に付すべきでないのは，白川馳道の馳道である。それは「天子や貴人の通る道筋」という意味を有している[12]。こうした点と『雍州府志』の記載などを勘案するに，白川馳道とは織田信長が通行した路，ひいてはかれが作るよう指示した道路であったとみなしてよいのではあるまいか。ちなみに，先にふれた吉田兼和が植えた松と，『遠碧軒随筆』

にみえる「左右の松」「並木」の一部とは合致すると解して支障なかろう[13]。

かくして，白川馳道が天正３年２月に織田信長の命によってこしらえられたことを論じた。この白川馳道は北白川の西口で白川道とまじわっていた。要するに，近世の吉田村には，山中越へと通じる大きな道路が２本存していたのを把握することができよう。

⑵ 尾張藩吉田屋敷の設置の時期およびその背景

つづいて，尾張藩の吉田屋敷について，収集しえた史料などにもとづき，説明をくわえていく。

『京都坊目誌』上巻之27（吉田篇）・上京第27学区（吉田町）之部・字冠石のところには，「文久二年尾張徳川氏藩邸を設く」としたためられている。これまで，こうした記載に依拠して，文久２年（1862）にそれが建置されたと語られる場合が少なくなかったといえる。しかしながら，その年紀はあやまっていると断言することができる。

とりあげるべきは，蓬左文庫に架蔵されている尾州茶屋家文書のうちの１点，「文久三癸亥年　手元記録　下」における11月２日条の記述となる。以下に，のちの考察に必要となる箇所を抜萃する[14]。

一，京都元〆方より左之趣申来ル。

当地吉田領之内，高畑与申田所，初凡弐万坪程
御買上ニ相成，当地　御館御取建之筈，付而ハ
右御地所買主名前，
旦那様へ被　仰付候而も差支之筋無之哉之
段，当春　旦那様御在京之砌，御内意御座候
ニ付，御差支之筋無之趣御申上置ニ御座候処，
其後追々御取調ニ相成，既（抹消）ニ弥御買上御治定ニ
相成，既ニ代金も御渡相済申候ニ付，去ル十八日在京
役衆尾崎八右衛門殿・永田益衛殿・茜部小五郎殿
列座ニ而，別紙写之通，書付被相渡申候。尤
旦那様御名代上田小右衛門相勤申候。（後略）

傍線をほどこした旦那様とは，尾張徳川家の御用達となる尾州茶屋家の当主・良輿（のち長輿）のことを指す。この良輿が名目上の買主となって，その手代である上田小右衛門のはたらきにより，吉田領内の土地が文久３年10月18日よりも少し前に，藩の屋敷を建設することを目的に購入されるにいたった点が読みとれる。このような事柄を前提にすると，

館舎などがそろい，かつ藩邸として十全に機能するようになるのは，元治元年（1864）以降であるとみなすのがすこぶる自然となろう。つまるところ，『京都坊目誌』の記載がまちがっているのは明白であるといえる[15]。

上掲の史料のうち，注目すべきは，茶屋良輿が在京のおりに，名義上の買手となっても不都合は生じないかといった公命が下っている点だ。良輿はそのころ，前藩主である徳川慶勝（よしかつ）にしたがい，京都に滞在していた。

14代の藩主で，尊皇攘夷・朝幕協調の考えを強くもっていた慶勝は，朝廷の意向をくんだ幕府の命により，将軍家茂の上洛に先んじて文久３年正月８日に入京している[16]。このころの尾張藩は，慶勝とその弟で佐幕の立場をとっていた15代藩主・茂徳（もちなが）という二頭体制のもとにあった[17]。ただし，同年９月に茂徳は，家督を慶勝の子である幼少の元千代（のちの義宜（よしのり））にゆずり，かれの後見役に慶勝がつくことで，そのような様態は終焉を迎えることになった。

さて，上京した慶勝は，縁戚にあたる近衛家の河原御殿に止宿した[18]。その際，随行していた藩士などは，妙顕寺（上京区妙顕寺前町に所在）や東福寺を宿所としたのが知られる[19]。尾張藩はこれよりも前にすでに京都において屋敷を構えていた。それは蛸薬師・錦小路の東西の通り，室町･新町の南北の通りにかこまれた区画のなかに位置していた[20]。もとより，そこにも藩士らが入ったに相違あるまい。けれども，その屋敷はせまかったがゆえに，多数の者は他所に宿泊せざるをえなかったと考えられる。

そこで，上記の事柄をおさえたうえで，話題を吉田屋敷のことにもどそう。いま一度確認するに，それを建てるために土地購入の件がもちあがったのは，文久３年春のことであった。つまりは，慶勝の滞京時における出来事となって，そうした話が進められたのは，多くの人びとを収容しえない既設の藩邸の小ささに基因しよう。ただし，かような点にくわえて，向後，京都が政局の中心となるのをみこしたうえで，新たな確固とした拠点をきずくよう意図されていた面もまた否定することができまい。

なお，先にあげた史料の最初のところには，吉田領内の高畑[21]という田地を，当初は２万坪ほど買いあげようとしていたと書きつづられている。しかしながら，そのような記述からすると，最終的にはそれよりもひろい土地が購入されるにいたったことがくみとれよう。事実，愛知県公文書館に所蔵されている「吉田御屋敷之図」[22]では，「三万三千三百三十三坪」と書き込まれている。おそらく，この坪数とおなじ，もしくはそれに近い土地が，文久３年10月18日よりもやや前に買い入れられたとみてよかろう。

「吉田御屋敷之図」によれば，その北半のところに，北・東・西を「竹かき」でかこまれた「弓鉄炮兵法稽古場」が描かれている。幕末の京都における動乱に対処するため，ひろい吉田屋敷内において軍事訓練がおこなわれていた点は，たいへん興味深い。

よく知られているように，尾張藩の吉田屋敷の地には白川道の一部が含まれており，その設置の結果，それは分断されることになった。しかるに，こうしたことにともなって，交通がいちじるしく阻害されるにおよんだとは考えづらい。たとえば，慶応４年（1868）の「改正京町御絵図細見大成」には，「尾張屋敷」のすぐ西に南北の道が記されている[23]。これは，沢村道範が建てた道標の「左　百まんへんの道」におおむね一致するのではないかと思われる[24]。すなわち，白川道から分岐するこの道を進めば白川馳道につながり，いささか遠まわりになるけれども，山中路を通って近江へといたることが可能であったといえる。

さらに，吉田屋敷の立地について付言するに，「改正京町御絵図細見大成」では，「尾張屋敷」が白川馳道に接して，その南側に描かれている点をおろそかにはしえまい。要するに，白川馳道および白川道をたどれば，容易に洛中へとおもむくことができるのであって，かかる点が吉田の地を選ばせた大きな要因の１つであったと想定される。

なお，尾張藩の京都における拠点として重要な役割をはたしていた吉田屋敷は，明治４年（1871）に処分されるにいたったと指摘されている[25]。それが機能していたのは，わずか数年にすぎず，始末されて以降，その地はふたたび田畑[26]としてしばらくのあいだ利用されることになった。

６　小　　結

最後に，前節における検討結果をふまえたうえで，ＳＦ１とＳＤ１にかんし，若干の補足をおこなっておきたい。

近世の白川道となるＳＦ１は，数多の轍の存在から，18世紀以降，幕末にいたるまで交通量が落ちていなかったことが推定される。白川馳道とともに，京・近江間の往還として重視されていたことがうかがえよう。さりとて，本調査区では，江戸時代前期の路面を確認しえておらず，それは北隣の277地点においても同様となる。これについては，その調査担当者により，18世紀前後における道の普請にともなって，それがなくなってしまった可能性が指摘されている〔千葉・阪口2006〕。さような理解が妥当なのかどうか，今回の調査で明らかにすることはかなわず，畢竟，今後の課題として残しておかざるをえまい。

つぎに，ＳＤ１にかんしては，尾張藩の吉田屋敷にまつわる遺構であると推量した。ただし，先にとりあげた「吉田御屋敷之図」では，それに相当するものが描かれていない。また，蓬左文庫に架蔵されている２枚の「吉田御屋敷惣図」[27] にも，それに一致するものが認められない。もちろん，それらはある時点における吉田屋敷の様子を記したものとなるので，みえないことがただちにＳＤ１と同屋敷との関連を否定する根拠にはならない。それらが描かれたのとちがう時分に，東西溝ＳＤ１が掘削されるにいたった可能性が残されているといえる。したがって，その性格をはっきりとさせるためには，周辺における発掘調査の成果をまたなければなるまい。

現地調査と整理作業は笹川尚紀が担当し，磯谷敦子・長尾玲・上阪航・西田陽子・佐々木夏妃・坂川幸祐・畠中優志が補佐した。なお，史料の閲覧に便宜をはかっていただいた関係諸機関にあつく御礼申しあげる。とりわけ，その際にたいへんお世話になった京都府立総合資料館の松田万智子氏・辻真澄氏にたいしては，記して謝意を表したいと思う。

〔注〕

（１）　『史料　京都見聞記』第４巻　見聞雑記Ｉ。

（２）　出雲路敬直『京都の道標』，ミネルヴァ書房，1968年。この道標は現在，その下の部分がコンクリートのなかにうもれており，文字をすべて確認することができない。なお，沢村道範にかんしては，『東海道名所図会』巻の１・小関越のところによると，延宝（1673～81）のころ，山科の四宮村にその邸宅があったとされる（新訂　日本名所図会集１『東海道名所図会［上］』）。

（３）　清文堂史料叢書　第５刊『京都御役所向大概覚書』上巻。

（４）　元禄２年（1689）成立の『京羽二重織留』巻之１（『新修　京都叢書』第２巻），同３年完成の『名所都鳥』巻第３（『新修　京都叢書』第５巻）では，白川馳道の馳道にたいして「はせみち」と傍書する。

（５）　『新修　京都叢書』第10巻。

（６）　『新修　京都叢書』第22巻。

（７）　黒川道祐が『雍州府志』の執筆にあたって，白川馳道をとり白河・山中越を通って坂本へとおもむいていたことは，かれによる『近畿歴覧記』のうちの「三井行程」冒頭部分からわかる（『新修　京都叢書』第12巻）。また，窪木清渕が寛政５年（1793）４月23日に，坂本から白河嶺（山中路）・白河村・白川馳道をへて下加茂祠にもうでたことは，かれがしたためた『西遊日記』より知られる（『史料　京都見聞記』第２巻　紀行Ⅱ）。

（８）　『日本国語大辞典　第２版』第12巻・「ほんどう【本道】」の項。

（９）　史料纂集　古記録編『新訂増補　兼見卿記』第１。

（10）　『大日本史料』第10編之21・192頁。

（11）　『松雲公採集遺編類纂』に収められている「東大寺金堂日記」には，天正３年３月のところに，「スリハリ垰（峠）ヲヨコ三間，深サ三尺ニホラル。人夫二万餘，岩ニ火ヲタキカケ上下

作之。濃州ヨリハ，三里ホトチカクナルト也。田ヲモウメラルヽ由也」と記されている（奥野高廣『増訂織田信長文書の研究』上巻〔吉川弘文館，1988年〕796・797頁）。すなわち，信長の命によって，滋賀県彦根市に所在する摺針（すりはり）峠（中山道の一部）の大がかりな改修がおこなわれ，その結果，美濃・京都間が12kmほど縮まったとされる。

なお，結局のところ，信長が京都においてみずからの城をきずくにいたらなかった点にかんしては，河内将芳「京の城と信長―なぜ信長は京都に城を構えなかったのか」（千田嘉博ほか・奈良大ブックレット05『城から見た信長』，ナカニシヤ出版，2015年）を参照。

(12)　諸橋轍次『大漢和辞典』巻12・「馳」の項。

(13)　ちなみに，「洛中洛外図（歴博甲本）」には，「かくらをか」のところに松並木，ならびに路上において松葉をかきあつめる作業をおこなっている２名の人物（瀬田勝哉「北野に通う松の下道―一条通と北野・内野の風景」〔同氏編『変貌する北野天満宮　中世後期の神仏の世界』，平凡社，2015年〕）が描かれている（『洛中洛外図　都の形象―洛中洛外の世界』）。歴博甲本は現存最古の洛中洛外図屏風と考えられており，そこに書きあらわされている京都の景観は大永５年（1525）から天文４年（1535）のものとされる。ただし，それには異説もあって（東京国立博物館・日本テレビ放送網編『特別展　京都―洛中洛外図と障壁画の美』第１部，日本テレビ放送網，2013年），まだまだ検討を深めていかなければならない。

(14)　請求番号：茶－79。なお，この史料は，林董一『近世名古屋商人の研究』第２部・第３章・３の注（名古屋大学出版会，1994年）において引かれている。しかるに，蓬左文庫で実見したところ，それには誤字・脱字がいくつか含まれているのが確認された。よって，訂正をくわえたものをここに掲げることとする。

ちなみに，本文における茶屋良與にかんする事柄は，先の林氏の著書（第２部・第３章）を参照して書きつづったものとなる。

(15)　京都府立総合資料館には，「文久三年癸亥冬三刻」「皇都書林　竹原好兵衛版元」「諸御大名御屋敷委敷相改候えとも，若相違等在之候ハヽ御知らせ可被下候」という刊記を有する「文久改正新選京絵図」が２枚所蔵されている（『京都府資料目録―昭和58年８月末日現在―』4862，京都府立総合資料館，1984年）。それらには吉田の地に「尾張殿」とみえている。しかしながら，佛教大学附属図書館に架蔵されている「文久改正新選京絵図」（同館ホームページ・デジタルコレクション）には，それが記されてはいない。

こうした相違にかんしては，「諸御大名御屋敷」以下の記述を逸してはならない。これをふまえれば，吉田屋敷が設置されるという情報をえた，ないしはそれが建てられたのちなどに，版木の一部があらためられた，換言すると，埋木によって変更がおこなわれたことがおさえられよう（木版図の埋木については，上杉和央「版のちがい・摺りのちがい」〔杉本史子ほか編『絵図学入門』５章・コラム④，東京大学出版会，2011年〕を参照）。したがって，佛教大学附属図書館のものの方が京都府立総合資料館のものよりも前にすられたことが判然となる。

ちなみに，そのような埋木がなされた時期をめぐっては，後者には岡崎の地に「加州ヤシキ」がみえ，前者にはそれが存しない点に注意をはらっておきたい。加賀藩は慶応３年（1867）８月６日よりも前に，岡崎村の４万3038坪餘の土地を借りうけ，そこに建物をかりにもうけて藩士をおいていた。しかるに，同年８月６日にその地を賜り藩邸となすよう幕府に求めている（『加賀藩史料』藩末篇下巻）。加賀藩が岡崎村の土地を借用したのは，その日よりもかなり以前にさかのぼることはまずあるまい。よって，こうした事柄に徴するに，「尾張殿」の追記は慶応に入ってなされた可能性も残されているといえる。その是非はさておき，「文久改正新選京絵図」の記載をもって，文久３年の冬には尾張藩の吉田屋敷がきずかれていたと指摘するのは，

断じて差し控えなければならない。

(16)　このたびの慶勝の上京をめぐっては，白根孝胤「将軍上洛と徳川慶勝」（財団法人徳川黎明会　徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読む―幕末の動乱』，東京堂出版，2010年）を参照。

(17)　慶勝・茂徳による双頭統治にかんしては，藤田英昭「文久二・三年の尾張藩と中央政局―徳川慶勝・茂徳二頭体制下の尾張藩の政治動向―」（家近良樹編・大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書第16冊『もうひとつの明治維新　幕末史の再検討』，有志舎，2006年）を参照。

(18)　『尾藩世記』10・文久３年正月８日条（『名古屋叢書』３編　第２巻　尾藩世記　上）など。

(19)　『東西紀聞』３に収められている「御旅館　御屋敷　方角略図」（日本史籍協会叢書142『東西紀聞』１）など。

(20)　さしずめ，天保２年（1831）の「改正京町絵図細見大成」（『慶長　昭和　京都地図集成　1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』）を参照。

(21)　19世紀初頭ごろに作りあげられたと推測される「山城国吉田村古図」（京都大学総合博物館所蔵。［分類］標本乙４－37）には，高畠と記され，それは知恩寺の南に位置している。

(22)　名古屋市大塚三右衛門家文書のうち。長辺約82㎝，短辺約67㎝。請求番号：W21－148。なお，愛知県公文書館企画展解説書「尾張藩と明治維新―所蔵文書にみる藩士たち―」（愛知県公文書館，2013年）では，この図に付随する「吉田御屋敷詰役人書上」に京都御用人の尾崎八右衛門の名がみえ，明治２年（1869）８月の改名後の八衛と記されていないことから，両者はそれよりも前に作成されたと指摘されている。くわえて，京都御用人として重要な立場にあったかれの名が，「吉田御屋敷詰役人書上」において最初に掲げられている点から，吉田屋敷が京都における拠点として大きな役割をになっていたことが強調されている。

(23)　『慶長　昭和　京都地図集成　1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』。

(24)　なお，「山城国吉田村古図」には，白川道からわかれて百万遍へといたる路が描かれている。ただし，吉田屋敷の設置にともなって，その一部が作りかえられた可能性はすてきれまい。

(25)　後藤真一「尾張藩京都屋敷とその役職者たち」（岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第５篇，清文堂出版，2012年）。

(26)　『京都坊目誌』では，吉田屋敷について「明治三年二月廃せられ再ひ田畑となる」としたためられている。なお，第三高等中学校の学生であった喜田貞吉（きたさだきち）は，「百万遍知恩寺の門前，吉田神社前の社家町附近には，或ひは民家が並んでゐたが，その間は桐畠や麦畑であつた。それから南には聖護院御殿の附近熊野神社の附近に一寸町がかつた家並があるまで，今の帝大敷地はもとより，三高，一中，医学部，病院のあたり，すべてが茶畑，麦畑で今精神病舎のある鴨川端には牧場があり，そこまで殆ど目を遮る様な建物は一つもなかつた」と書き残している（「学校街　学校街の「草分け」は三高」〔岩井武俊編『京ところどころ』，今尾文淵堂，1928年〕）。明治時代前期における吉田・聖護院のあたりの風景がうかがい知られ，たいそう興味深い。

(27)　請求番号：図－945・946。それらの作成時期の前後関係をめぐっては，伊藤淳史・梶原義実「京都大学本部構内ＡＵ25区の発掘調査」（『京都大学構内遺跡調査研究年報　2002年度』，2007年）を参照。なお，後者には，屋敷の北東のところに，「練武場屯所」という小さな建物が記されている。そのまわり，いいかえると，屋敷の北・約1/3の部分は広場となっており，それが練武場に相当することになろう。ちなみに，後者は，『京都大学百年史』総説編　第１編・総説・第８章第１節（財団法人　京都大学後援会，1998年）において掲げられている。

参 考 文 献

石田志朗・中村徹也・中村友博　1972年　『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』

泉　拓良　　1977年　「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号

泉拓良・浜崎一志　1981年　「京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

五十川伸矢　1981年　「京都大学本部構内ＡＴ27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

五十川伸矢　1991年　「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ―京都大学病院構内の調査―』

伊藤淳史　　2013年ａ「京都大学医学部構内ＡＱ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2010年度』

2013年ｂ「京都大学本部構内ＡＴ25区の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2010年度』

伊藤淳史　　2014年　「京都大学病院構内ＡＨ15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2011・2012年度』

伊藤淳史・冨井眞　2002年　「京都大学本部構内ＡＵ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1997・1998年度』

伊野近富　　1987年　「「かわらけ」考」『京都府埋蔵文化財論集　第１集』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富　　1995年　「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会編）

宇治田和生　1991年　「河内国・楠葉牧における土器生産の展開」『ヒストリア』135

梅原末治　　1923年　「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告　第５冊』

1935年　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第16冊』

加納敬二　　2004年　「３乙訓在地形の土師器皿について」『平安京左京北辺四坊―第一分冊（公家町形成前）―』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）

加納敬二・丸川義広　2002年　「平安京左京北辺四坊出土の乙訓在地形土師器について」『第10回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集―住まいと移動の歴史―』

京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）

1977年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）

1978年ａ『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

1978年ｂ『京都大学埋蔵文化財調査報告第１冊―京大農学部遺跡ＢＧ36区―』

1979年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

1980年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

1981年ａ『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ―白河北殿北辺の調査―』

1981年ｂ『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

参 考 文 献

1984年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』
1985年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ―北白川追分町縄文遺跡の調査―』
1986年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』
1987年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』
1988年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』
1989年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』
1990年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』
1991年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ―京都大学病院構内遺跡の調査―』
1992年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』
1993年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』
1995年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』
1997年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』
1998年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1994年度』
1999年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1995年度』
2000年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1996年度』
2002年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1997・1998年度』
2003年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1999年度』
2005年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度』
2006年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2001年度』
2007年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2002年度』
2008年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2003年度』

京大文総研（京都大学文化財総合研究センター）
2009年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2004～2006年度』
2010年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2007年度』
2011年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2008年度』
2012年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2009年度』
2013年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2010年度』
2014年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2011～2012年度』
2015年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』

京都市編　1985年　『史料京都の歴史』 8

京都市埋文研（（財）京都市埋蔵文化財研究所）　2004年 a 『平安京左京北辺四坊―第 1 分冊（公家町形成前）―』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）

京都市埋文研（（財）京都市埋蔵文化財研究所）　2004年 b『平安京左京北辺四坊―第 2 分冊（公家町）―本文』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）

京都市埋文研（（財）京都市埋蔵文化財研究所）　2012年　『白川街区跡・吉田上大路町遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3）

京都大学広報委員会　1977年　『京都大学建築八十年のあゆみ』

京都府埋文研（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2012年　『京都府遺跡調査報告集』第153冊

京都府教育委員会　1980年　『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-3）』

古賀秀策　1999年　「京都大学本部構内ＡＸ25・26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1995年度』

参 考 文 献

小林謙一　2008年　「縄文土器の年代（東日本）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

小森俊寛･上村憲章　1996年　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』（財）京都市埋蔵文化財研究所

笹川尚紀・伊藤淳史・千葉豊　2015年　「自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』

島田貞彦　1924年　「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第５号

清水芳裕　1984年　「京都大学北部構内ＢＦ33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

清水芳裕・千葉豊　2006年　「京都大学病院構内・本部構内の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2001年度』

菅原正明　1983年　「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』（奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集）

大文協（（財）大阪市文化財協会）　2003年　『大阪城跡』Ⅶ

高槻市教育委員会　1980年　『上牧遺跡発掘調査報告書』

田辺昭三　1981年　『須恵器大成』角川書店

千葉　豊　2003年　「京都大学本部構内ＡＷ26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1999年度』

千葉豊・伊藤淳史・古賀秀策　1997年　「京都大学本部構内ＡＵ30区・ＡＶ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度』

千葉豊・阪口英毅　2005年　「京都大学吉田南構内ＡＮ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度』

千葉豊・阪口英毅　2006年　「京都大学本部構内ＡＴ21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2001年度』

冨井　眞　1998年　「北白川追分町遺跡出土の縄文土器―北白川Ｃ式の成立を考える―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1994年度』

冨井眞・笹川尚紀・伊藤淳史　2015年　「京都大学吉田南構内ＡＮ21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』

中村徹也　1973年　『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』

1974年ａ『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』

1974年ｂ『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』

1975年　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』

萩谷　茂　2013年　「経済統制下における陶磁器製品製造・流通の一考察―いわゆる「統制番号」に関する検証」『瑞浪市歴史資料集』第２集

濱崎一志　1991年　「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告　Ⅳ』

豆谷浩之　1995年　「大阪城跡出土のイギリス陶器」『葦火』54号

山本一博・伊庭功・國部政子　2000年　「能登川町中沢遺跡（第４次）ＳＸ１出土の弥生土器について」『滋賀考古』22

八幡市教育委員会　2003年　『上津屋遺跡発掘調査（第５・７・８次）概報』

横山浩一・佐原眞　1960年　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第１部日本先史時代

吉江　崇　2006年　「中世吉田地域の景観復元」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2001年度』

脇田晴子　「中世土器の生産と流通」（中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』所収）

京都大学構内遺跡調査要項　2014年度

京都大学文化財総合研究センター規程

第１条　この規程は，京都大学文化財総合研究センター（以下「文化財総合研究センター」という）の組織等に関し必要な事項を定めるものとする。

第２条　文化財総合研究センターは，文化財の調査･保存･活用に関する総合的教育研究を行うとともに，京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。

第３条　文化財総合研究センターに，センター長を置く。

２　センター長は，京都大学の専任の教授をもって充てる。

３　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

４　センター長は，文化財総合研究センターの所務を掌理する。

５　センター長に事故があるときは，あらかじめセンター長が指名する者がその職務を代理する。

６　センター長が欠けたときは，あらかじめセンター長が指名する者がその職務を行う。

第４条　文化財総合研究センターに，その重要事項を審議するため，協議員会を置く。

２　協議員会の組織及び運営に関し必要な事項は，協議員会が定める。

第５条　文化財総合研究センターに，学際的教育研究拠点の構築に係る関係機関等との連携に関する重要事項についてセンター長の諮問に応ずるため，連携協議会を置く。

２　連携協議会の組織及び運営に関し必要な事項は，連携協議会が定める。

第６条　文化財総合研究センターは，次に掲げる研究科の教育に協力するものとする。

文学研究科

工学研究科

第７条　文化財総合研究センターに置く事務組織については，京都大学事務組織規程（平成16年達示第60号）の定めるところによる。

第８条　この規程に定めるもののほか，文化財総合研究センターの内部組織については，センター長が定める。

センター長

吉川　真司（文学研究科教授）（2014.4.1～）

協議員会委員

吉川　真司（文学研究科教授）

千葉　　豊（センター准教授）

吉井　秀夫（文学研究科教授）（2014.4.1～）

竹村　惠二（理学研究科教授）

山岸　常人（工学研究科教授）

西山　良平（人間・環境学研究科教授）

大野　照文（総合博物館教授）

センター教員

千葉　　豊

伊藤　淳史

冨井　　眞

笹川　尚紀

内記　　理

センター教務補佐員

磯谷　敦子

柴垣理恵子

長尾　　玲

センター事務室

片山　峰夫（文学研究科・事務室長）

藤森　良祐（事務補佐員）（2014.4.1～）

表 2　京都大学構内遺跡のおもな調査

（地点は図版 1 を参照，文献中「埋」は京大埋文研，「調」は京大調査会，「文」は京大文総研をさす。）

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積（㎡）	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1･2	濱田　耕作	表採・試掘			縄文土器，石器	梅原23，島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山･佐原60	
1929	大阪府安満		島田　貞彦 水野　清一 ほか	発掘			弥生土器	島田･水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原　末治	発掘			乾漆棺，玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原　末治				縄文土器，石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館　易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田　志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
1972	大阪府安満		小野山　節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山･都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田　志朗 中村　徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72，伊藤99 b	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集･実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村　徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器，瓦（平安）	埋78 b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村　徹也	事前発掘	600		縄文土器，土師器	中村73	
1973	植物園	11	中村　徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺･配石遺構	縄文土器	中村74 b，泉77	甕棺･配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74 a	
1974	農学部	13	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山　節 中村　徹也	事前発掘	750		土師器，瓦，陶磁器	小野山･中村76	
1976	農学部ＢＥ33区	16	泉　拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器，土師器，瓦	調77	
1976	病院ＡＥ15区	19	岡田　保良	事前発掘	2200	古代･中世溝，池，土器溜	土師器，瓦，陶磁器	調77，埋81 a	
1976	植物園ＢＤ35区	29	吉野　治雄	保存				調77	甕棺･配石の移築復元
1976	病院ＡＨ17区	34	泉　拓良	事前発掘	200	近世溝，井戸，集石	土師器，瓦	埋78 a	
1976	教養部ＡＳ23区	35	吉野　治雄	試掘	10	溝	縄文土器，須恵器	埋77	
1976	北部ＢＪ33区	36	宇野　隆夫	試掘	10		縄文土器	埋77	
1976	和歌山県瀬戸		丹羽　佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器，人骨	埋78 a	
1977	病院ＡＦ14区	39	岡田　保良 宇野　隆夫	事前発掘	800	古代護岸，溝，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋78 a，埋81 a	
1977	医学部ＡＯ18区	41	泉　拓良 吉野　治雄	事前発掘	1200	中世溝，土器溜，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋79，梶原03	
1977	北部電気管	43	吉野　治雄 宇野　隆夫	立合		溝，土坑	須恵器，土師器	埋78a	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1977	教養部 ＡＱ23区 ＡＮ23区	48	宇野　隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿比定地 ＡＡ18区	49	岡田　保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部 ＢＥ29区	54	岡田　保良 宇野　隆夫 吉野　治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 ＢＧ32区	55	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北部 ＢＧ31区	56	泉　拓良 宇野　隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本部 ＡＷ28区	57	岡田　保良 吉野　治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本部 ＡＹ22区	60	泉　拓良	立合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 ＡＮ19区	64	吉野　治雄	立合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北部 ＢＨ37区	66	吉野　治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 ＡＭ24区	69	岡田　保良 清水　芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本部 ＡＺ30区	71	西川　幸治 浜崎　一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 ＡＰ19区	74	清水　芳裕 五十川伸矢 吉野　治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81ｂ	
1979	本部 ＡＴ27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居, 中世土壙墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81ｂ	竪穴住居跡を現地保存
1979	北部 ＢＤ32区	79	泉　拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本部 ＡＴ27区	89	泉　拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81ｂ	
1980	本部 ＡＸ28区	90	泉　拓良 五十川伸矢 浜崎　一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京都府 美月		泉　拓良 清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志 吉野　治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 ＡＯ21区	91	吉野　治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壙墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 ＡＭ22区	93	吉野　治雄	立合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81ｂ	
1980	本部 実験排水	98	清水　芳裕	立合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 ＢＤ30区	109	泉　拓良 浜崎　一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1981	和歌山県 瀬戸		泉　拓良 清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器	埋84	
1981	本部 ＡＸ28区	110	浜崎　一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	埋83	
1981	教養部 ＡＰ22区	111	五十川伸也 飛野　博文	事前発掘	1716	古墳, 古代梵鐘鋳造遺構, 中世門・溝・墓	縄文土器, 弥生土器, 須恵器, 土師器, 鋳型, 溶解炉	埋84	梵鐘鋳造遺構を現地保存
1981	京都市 本山			分布調査			縄文土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器	埋83	
1982	京都府 中海道		泉　拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器, 土師器	埋84	
1982	病院 ＡＦ15区	122	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝, 白磁	埋84		
1982	農学部 ＢＦ33区	123	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	787	縄文住居跡, 中世土坑	縄文土器, 土師器	埋84	
1982	和歌山県 瀬戸		泉　拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器, 弥生土器, 製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
1982	本部 ＡＴ29区	124	泉　拓良 飛野　博文	事前発掘	890	中世濠, 建物	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋86	
1982	農学部 ＢＥ33区	125	泉　拓良 飛野　博文	事前発掘	803	中世・近世水田, 溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋86	
1983	医学部 ＡＮ20区	134	泉　拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器, 瓦器, 土師器	埋86	
1983	北部 ＢＦ31区	135	清水　芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林, 古代・中世溝	縄文土器, 土師器, 緑釉陶器	埋87, 冨井98	
1983	医学部 ＡＭ19区	139	泉　拓良 浜崎　一志	立合		中世土取り穴	土師器, 瓦器, 石鍋	埋86	
1984	病院 ＡＦ19区	141	浜崎　一志 宮本　一夫	事前発掘	863	近世池, 井戸, 野壷	縄文土器, 蓮月器	埋87	
1984	病院 ＡＪ19区	142	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器	埋87	
1984	医学部 ＡＮ18区	143	五十川伸也 宮本　一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘鋳造遺構	土師器, 瓦器, 鋳型	埋88	
1985	北部 ＢＪ31区	153	清水　芳裕 宮本　一夫	事前発掘	624	古代溝, 建物跡, 土坑, 近世溝	弥生土器, 土師器, 須恵器	埋88	
1985	病院 ＡＪ18区	154	清水　芳裕 浜崎　一志 菱田　哲郎	事前発掘	4295	中世井戸, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器	埋89	
1985	病院 ＡＪ19区	155	五十川伸矢 宮本　一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器, 鋳型	埋89	
1986	教養部 ＡＰ25区	167	清水　芳裕 宮本　一夫 難波　洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器, 近世陶磁器	埋89	
1986	本部 ＡＸ30区	168	清水　芳裕 難波　洋三	事前発掘	330	古代土坑, 中世道	土師器, 陶磁器	埋89	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1986	医学部 ＡＬ20区	169	浜崎　一志 難波　洋三	事前発掘	331	近世土取り穴	土師器, 陶磁器	埋90	
1986	教養部 ＡＬ23区	170	清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦器, 陶器	埋89	
1987	北部 ＢＤ33区	180	浜崎　一志 千葉　豊	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土師器, 須恵器	埋90	
1987	本部 ＡＷ27区	181	五十川伸矢 千葉　豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋92	
1987	北部 ＢＨ35区	182	清水　芳裕	試掘	16	包含層	土師器, 須恵器	埋90	
1987	北部 ＢＤ28区	183	清水　芳裕	試掘	12	包含層	土師器, 須恵器	埋92	
1987	本部 ＡＴ25区	188	清水　芳裕	立合		近世尾張藩邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 ＡＲ19区	190	清水　芳裕 森下　章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶磁器	埋92	
1988	病院 ＡＨ19区	191	浜崎　一志 千葉　豊 森下　章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
1988	病院 ＡＥ12区	192	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	599	近世道路・溝・野壷・井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
1989	病院 ＡＥ13区	198	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸・野壷・柵列	土師器, 陶磁器, 瓦	埋93	
1991	病院 ＡＧ14区	200	千葉　豊 森下　章司	事前発掘	394	近世井戸, 道路	土師器, 陶磁器	埋95	
1991	教養部 ＡＲ21区	202	五十川伸矢 浜崎　一志 森下　章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 ＡＭ17区	207	五十川伸矢 森下　章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶磁器	埋95	
1992	北部 ＢＡ28区	208	浜崎　一志 千葉　豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 桟瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎　一志 伊藤　淳史	立合		縄文包含層	縄文土器, 石器	埋95	
1992	本部 ＡＶ30区	214	千葉　豊 伊藤　淳史	事前発掘	1480	中世砂取り穴, 近世野壷	土師器, 陶磁器	埋97	
1993	北部 ＢＢ28区	217	清水　芳裕 古賀　秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中世土坑	土師器, 陶磁器	埋97	
1993	本部 ＡＷ25区	218	千葉　豊 吉井　秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土坑	縄文土器, 石器, 土師器, 陶磁器	埋97	
1993	本部 ＡＵ30区	219	伊藤　淳史 古賀　秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中世土器溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋97	
1993	総合人間学部 ＡＯ22区	220	五十川伸矢 伊藤　淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鋳造遺構, 中世井戸・溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋99, 伊藤10	梵鐘鋳造遺構を現地保存
1993	北部 ＢＦ34区	221	千葉　豊 吉田　広	事前発掘	1228	古代土器溜・土坑, 中世・近世道路	土師器, 陶磁器	埋98	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1993	病院 ＡＦ12区	222	伊藤　淳史	試掘	113	近世道路	土師器, 陶磁器	埋97	
1994	北部 ＢＦ30区	229	千葉　豊 古賀　秀策 吉田　広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周溝墓, 平安土壙墓	縄文土器, 弥生土器, 土師器	埋98	
1994	本部 ＡＸ25区	230	古賀　秀策 吉田　広	事前発掘	1314	古代溝, 土器溜	土師器, 陶磁器	埋99	
1995	総合人間学部 ＡＲ25区	238	伊藤　淳史 古賀　秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋00	
1995	病院 ＡＧ20区	239	千葉　豊 吉田　広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥生流路, 中世井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 蓮月焼	埋00	
1995	病院 ＡＦ20区	240	千葉　豊 吉田　広	事前発掘	280	近世池, 土坑	土師器, 陶磁器	埋00	
1995	本部 ＡＸ26区	241	古賀　秀策 吉田　広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶磁器	埋99	
1996	医学部 ＡＮ20区	248	五十川伸矢 古賀　秀策	事前発掘	510	縄文流路, 中世土取り穴, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋00	
1996	総合人間学部 ＡＲ24区	249	伊藤　淳史 冨井　眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物, 土坑, 溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 銭貨	埋02	
1997	総合人間学部 ＡＲ23区	254	伊藤　淳史	立合		中世瓦溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	弥生～中世包含層
1998	総合人間学部 ＡＮ22区	261	千葉　豊 古賀　秀策 阪口　英毅	事前発掘	1800	縄文流路, 弥生方形周溝墓, 中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋05	
1998	本部 ＡＵ28区	262	伊藤　淳史 冨井　眞	事前発掘	543	中世土坑, 近世柱穴	土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	
1998	総合人間学部 ＡＬ24区	264	古賀　秀策 千葉　豊	立合			弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋02	弥生～近世包含層
1999	病院 ＡＦ20区	269	千葉　豊 阪口　英毅	事前発掘	49	中世井戸, 土坑	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋03	
1999	医学部 ＡＯ17区	270	伊藤　淳史 冨井　眞	事前発掘	2028	中世井戸, 集石, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本部 ＡＷ26区	271	千葉　豊 阪口　英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝, 中世井戸・瓦溜・溝, 近世溝	縄文土器, 須恵器,土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本部 ＡＸ22区	272	冨井　眞	立合		時期不明溝, 高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北部 ＢＣ28区	276	伊藤　淳史 冨井　眞	事前発掘	2158	弥生水田, 中世溝, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋05	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2000	本部 ＡＴ21区	277	千葉　豊 阪口　英毅	事前発掘	2654	終末期古墳周濠, 中近世白川道, 尾張藩邸水路・堀	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭貨	埋06	
2000	病院 ＡＥ19区	278	千葉　豊 冨井　眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・土坑・池	縄文土器, 土師器, 近世陶磁器, 瓦	埋07	
2000	病院 ＡＥ18区	279	阪口　英毅	試掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁器	埋05	近世包含層
2001	吉田南 ＡＲ24区	288	伊藤　淳史 梶原　義実	事前発掘	2375	奈良時代掘立柱建物, 平安時代経塚, 古代・中世溝, 柵	縄文土器, 弥生土器, 石器, 土師器, 陶磁器, 青銅製経筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病院 ＡＦ12区	290	清水　芳裕 千葉　豊	立合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病院 ＡＦ13区	291	清水　芳裕 千葉　豊	立合		近世柱穴	土師器, 陶磁器	埋06	
2001	本部 ＡＴ25区	293	清水　芳裕 千葉　豊	立合		近世尾張藩邸堀		埋06	
2002	本部 ＡＵ25区	296	伊藤　淳史 梶原　義実	事前発掘	1070	古代埋甕, 中世白川道・井戸, 近世集石	縄文土器, 土師器, 近世陶磁器・瓦	埋07	
2002	北部 ＢＤ28区	297	冨井　眞 吉江　崇	事前発掘	1925	縄文堅果集積・埋没林, 古代道路, 近世野壷	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医学部 ＡＲ19区	298	千葉　豊 梶原　義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中世道路・井戸, 近世土取り穴・野壷	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北部 ＢＦ32区	299	冨井　眞 吉江　崇	事前発掘	1900	縄文建物跡・焼土・土坑, 中世砂取り穴、近世溝	縄文土器, 石器, 土師器, 陶磁器, 近世墓石	埋08	
2002	吉田南 ＡＲ25区	302	千葉　豊	立合		古代・中世・近世溝	土師器, 陶磁器, 中世瓦, 磁器, 将棋駒	埋07	
2003	医学部 ＡＰ18区	308	伊藤　淳史 吉江　崇	事前発掘	2125	中世道路・井戸・溝・集石・土器溜・野壷群, 近世井戸・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石鍋, 近世陶磁器	埋08	
2003	北部 ＢＤ33区	311	冨井　眞	立合		砂取り穴, 野壷		文09	中・近世包含層
2004	北部 ＢＣ30区	320	千葉　豊	事前発掘	85.5	古代土坑・溝, 中世土坑	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器	文09	
2005	本部 ＢＡ22区	321	冨井　眞 吉江　崇	事前発掘	98	近世溝・瓦溜	縄文土器, 石器, 磁器, 近世陶磁器・瓦	文09	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2005	吉田南 ＡＰ21区	322	伊藤　淳史	事前発掘	48	古墳周溝,古代土坑・溝,中世土坑・集石	縄文土器,土師器,陶磁器,須恵器,瓦器,鞴羽口	文09	
2004	美山	323	清水　芳裕 伊藤　淳史	立合				文09	
2004	北部 ＢＣ35区	325	吉江　崇	立合		古代道路？		文09	297地点の古代道路とつながるか
2005	本部 ＡＷ24区	329	伊藤　淳史	立合		近世白川道,近世遺物溜,煉瓦積水路	近世陶磁器	文09	縄文包含層
2005	北部 ＢＤ30区	330	冨井　眞	立合			縄文土器	文09	中・近世包含層
2005	本部 ＡＴ22区	331	千葉　豊	立合		近世白川道	近世陶器	文09	中世包含層
2006	本部 ＡＴ26区	335	伊藤　淳史	立合		近世尾張藩邸堀	近世陶器	文09	
2006	本部 ＡＶ24区	336	伊藤　淳史	立合		中世白川道,近世遺物溜	土師器,近世陶磁器・瓦	文09	
2001 ～ 2004	桂	337	千葉　豊	分布 立合		石垣	塼,瓦	文09	
2007	病院 ＡＧ16区	338	冨井　眞 笹川　尚紀	事前発掘	3700	中世井戸,近世井戸・集石・石垣	縄文土器,土師器,陶磁器,瓦	文10	
2007	病院 ＡＦ14区	339	千葉　豊	事前発掘	713	中世道路・井戸・集石	縄文土器,土師器,陶磁器	文10	
2007	和歌山県 瀬戸	346	佐藤　純一	立合		古代土坑	土師器	文10	古代包含層
2008	西部 ＡＷ20区	348	伊藤　淳史 笹川　尚紀	事前発掘	2081	中世建物,玉石集積,井戸,瓦溜,土器溜,流路	土師器,陶磁器,瓦,玉石	文12	
2008	病院 ＡＧ13区	349	千葉　豊 冨井　眞	事前発掘	2164	近世井戸・野壷・土坑・溝	近世陶磁器・土製品	文11	
2009	北部 ＢＨ31区	355	冨井　眞 笹川　尚紀	事前発掘	800	縄文加工樹幹,弥生土器片敷,中世砂取穴・溝,近世溝	縄文土器,弥生土器,石器,土師器,陶磁器	文12	
2009	本部 ＡＺ23区	356	千葉　豊	事前発掘	710	縄文住居,古墳周溝,中世土坑	縄文土器,石器,須恵器,土師器	文12	
2009	北部 ＢＧ34区	357	千葉　豊 笹川　尚紀	事前発掘	1152	古代土坑,中世砂取り穴・道路・溝・野壺,近世野壺	縄文土器,石器,土師器,黒色土器,須恵器,緑釉陶器,灰釉陶器,陶磁器,瓦,銭貨	文13	
2009	医学部 ＡＱ18区	358	伊藤　淳史	事前発掘	824	中世井戸・道路・集石・土坑・溝・柱穴,近世集石・野壺・溝	土師器,瓦器,陶磁器	文13	

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2010	病院 ＡＪ16区	366	網伸也 東洋一	事前発掘	1085	中世土坑・溝, 近世畔・野壺・柵・土坑・溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 瓦, 陶磁器	文13	
2010	吉田南 ＡＬ22区	367	笹川尚紀	立合		中世溝		文13	中世包含層
2010	本部 ＡＴ25区	377	伊藤淳史	立合		尾張藩邸堀	須恵器, 陶器	文13	先史～近世包含層
2011	吉田南 ＡＮ21区	378	冨井眞 笹川尚紀	事前発掘	1650	縄文土器破片集中部, 弥生方形周溝墓, 方形墳, 中世溝・井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・集石	縄文土器, 弥生土器, 古墳時代埴輪・須恵器・土師器・鉄器, 中世土師器, 瓦器, 須恵器, 陶磁器, 銭貨, 瓦, 近世陶磁器	文15	
2011	病院 ＡＨ12区	379	千葉豊	事前発掘	1700	近世道路・水路・井戸・溝	近世陶磁器・土師器・土製品	文14	
2011	本部 ＡＶ27区	383	伊藤淳史	立合		白川道・尾張藩邸堀		文14	
2012	病院 ＡＨ15区	384	伊藤淳史	事前発掘	583	近世道路・水路・井戸	近世陶磁器・土師器, 近代病院食器	文14	
2012	病院 ＡＦ17区	385	冨井眞	事前発掘	4100	近世段差・溝・井戸・小穴	近世陶磁器・瓦	文15	
2012	北部 ＢＨ38区	391	笹川尚紀	立合		溝ないしは土坑		文14	先史～中世包含層
2012	本部 ＡＴ23区	395	千葉豊	立合		尾張藩邸堀	近世陶磁器	文14	
2013	本部 ＡＺ30区	397	笹川尚紀	事前発掘	43	中世集石・溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 瓦器, 須恵器, 陶磁器	文15	
2013	病院 ＡＨ13区	398	千葉豊	事前発掘	960	近世水路・道路・溝・小穴	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	吉田南 ＡＭ21区	399	伊藤淳史 冨井眞 内記理	事前発掘	923	弥生流路, 平安溝, 中世大溝・土取り穴・土器溜・瓦溜, 近世野壺・溝・土取り穴・瓦溜	縄文土器, 弥生土器, 埴輪・古墳須恵器, 古代土師器・須恵器, 中世土師器・陶磁器・瓦・銭貨, 近世土師器・陶磁器・瓦・西洋陶器	第2章	
2013	医学部 ＡＯ20区	400	伊藤淳史	事前発掘	173	縄文流路, 中世溝・井戸・集石・土器溜	縄文土器, 中世土師器・陶器	文15	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2013	吉田南 AM21区	401	伊藤　淳史 冨井　眞 内記　理	事前発掘	945	縄文流路,弥生流路,古代溝・井戸,中世建物・溝・土取り穴・土器溜・集石,近世野壺・溝・土坑・土取り穴・集石	縄文土器,弥生土器,古墳須恵器,古代土師器・須恵器,中世土師器・陶磁器・瓦・銭貨,近世土師器・陶磁器・西洋陶器	第2章	
2013	北部 BF32区	402	千葉　豊	事前発掘	90	縄文土坑,古代土坑	縄文土器・石器,古代土師器・須恵器・緑釉陶器	第3章	
2013	本部 AT22区	403	笹川　尚紀	事前発掘	62	中世道路・井戸,近世道路・溝	中世土師器・陶磁器・瓦・塼,近世陶磁器・土師器	第5章	
2013	本部 AU28区	404	千葉　豊 笹川　尚紀	事前発掘	815	中世溝・道路・土坑・砂取り穴,近世野壺・溝・集石	古代土師器・須恵器・緑釉陶器,中世土師器・陶器・瓦・塼,近世土師器・陶磁器・瓦	第4章	
2013	北部 BA28区	405	千葉　豊	事前発掘	51	自然流路,集石	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	医学部 AL17区	412	伊藤　淳史	立合				文15	中近世包含層
2013	病院 AI12区	415	千葉　豊	立合				文15	398地点の近世道路・溝
2013	吉田南 AP21区	416	伊藤　淳史	立合		中世溝	中世土師器・陶器	文15	先史～中世包含層
2013	病院 AG11区	419	伊藤　淳史	立合				文15	近世包含層
2014	病院 AI15区	427	冨井　眞 内記　理	事前発掘				整理中	
2014	吉田南 AP23区	428	伊藤　淳史 笹川　尚紀	事前発掘				整理中	
2014	病院 AG10区	429	千葉　豊 長尾　玲	立合			近世陶磁器	第1章	近世包含層
2014	医学部 AQ18区	430	笹川　尚紀	立合				第1章	
2014	北部 BC29区	431	千葉　豊	立合				第1章	
2014	北部 BA29区	432	千葉　豊	立合				第1章	
2014	吉田南 AP25区	433	千葉　豊	立合				第1章	
2014	病院 AJ13区	434	千葉　豊	立合				第1章	

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	きょうとだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぽう2014ねんど
書　　名	京都大学構内遺跡調査研究年報2014年度
編　著　者　名	吉川真司，千葉豊，伊藤淳史，冨井眞，笹川尚紀，内記理，長尾玲
編　集　機　関	京都大学文化財総合研究センター
所　　在　　地	〒606－8501 京都府京都市左京区吉田本町　TEL 075-753-7691
発 行 年 月 日	2016年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
よしだみなみこうない 吉田南構内 ＡＭ21区	きょうとふきょうとしさきょうく 京都府京都市左京区 よしだにほんまつちょう 吉田二本松町	26100	－	35° 01′ 09″	135° 46′ 56″	20130708 ～ 20140214	1868	学生寄宿舎吉田寮新棟・学生集会所新営
ほくぶこうない 北部構内 ＢＦ32区	きょうとふきょうとしさきょうく 京都府京都市左京区 きたしらかわおいわけちょう 北白川追分町	26100	－	35° 01′ 51″	135° 47′ 06″	20131029 ～ 20131115	90	自家発電設備新営
ほんぶこうない 本部構内 ＡＵ27区	きょうとふきょうとしさきょうく 京都府京都市左京区 よしだほんまち 吉田本町	26100	－	35° 01′ 22″	135° 47′ 05″	20131118 ～ 20140221	815	国際イノベーション拠点施設新営
ほんぶこうない 本部構内 ＡＴ22区	きょうとふきょうとしさきょうく 京都府京都市左京区 よしだほんまち 吉田本町	26100	－	35° 01′ 20″	135° 46′ 55″	20131113 ～ 20131212	62	自家発電設備新営

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
吉田南構内 ＡＭ21区	散布地	縄文～ 弥生前期	流路	縄文土器・弥生土器・石器	
	散布地	弥生中期 ～古墳		弥生土器，須恵器，埴輪	
	集落跡	奈良～ 平安時代	井戸１・溝	円筒埴輪，形象埴輪，須恵器，土師器，鉄器	
	邸宅跡	鎌倉～ 室町時代	建物跡１・溝・土取り穴・土坑・土器溜・瓦溜	土師器・陶磁器・瓦・銭貨	所謂「乙訓在地形土師器」の一括出土，布掘り基礎の倉庫状建物，断面に地震によるとみられる地層変形
	田畑	江戸時代	野壺６・溝・土坑・集石・土取り穴	土師器・陶磁器・瓦・西洋陶器	近代の帝大寄宿舎関係の磁器類も採集
北部構内 ＢＦ32区	散布地	縄文時代	土坑２	縄文土器・石器	縄文時代の旧地形の復元，北屋敷式縄文土器の出土
	散布地	平安時代	土坑１	土師器，須恵器，緑釉陶器	

本部構内 ＡＵ27区	散布地	縄文時代		石器	縄文時代の旧地形の復元
	散布地	中世	溝・道路・土坑・砂取り穴	土師器・陶器・瓦・塼	中世の道を検出
	散布地	江戸時代	近世野壺・溝・集石	土師器・陶磁器・瓦	
本部構内 ＡＴ22区	散布地	中世	道路１，井戸１，小穴複数	土師器，白磁	中世の白川道を検出
	道路	江戸時代	道路１，側溝１，東西溝１	陶磁器，土師器，瓦，塼，砥石，銭貨，泥面子	近世の白川道を検出

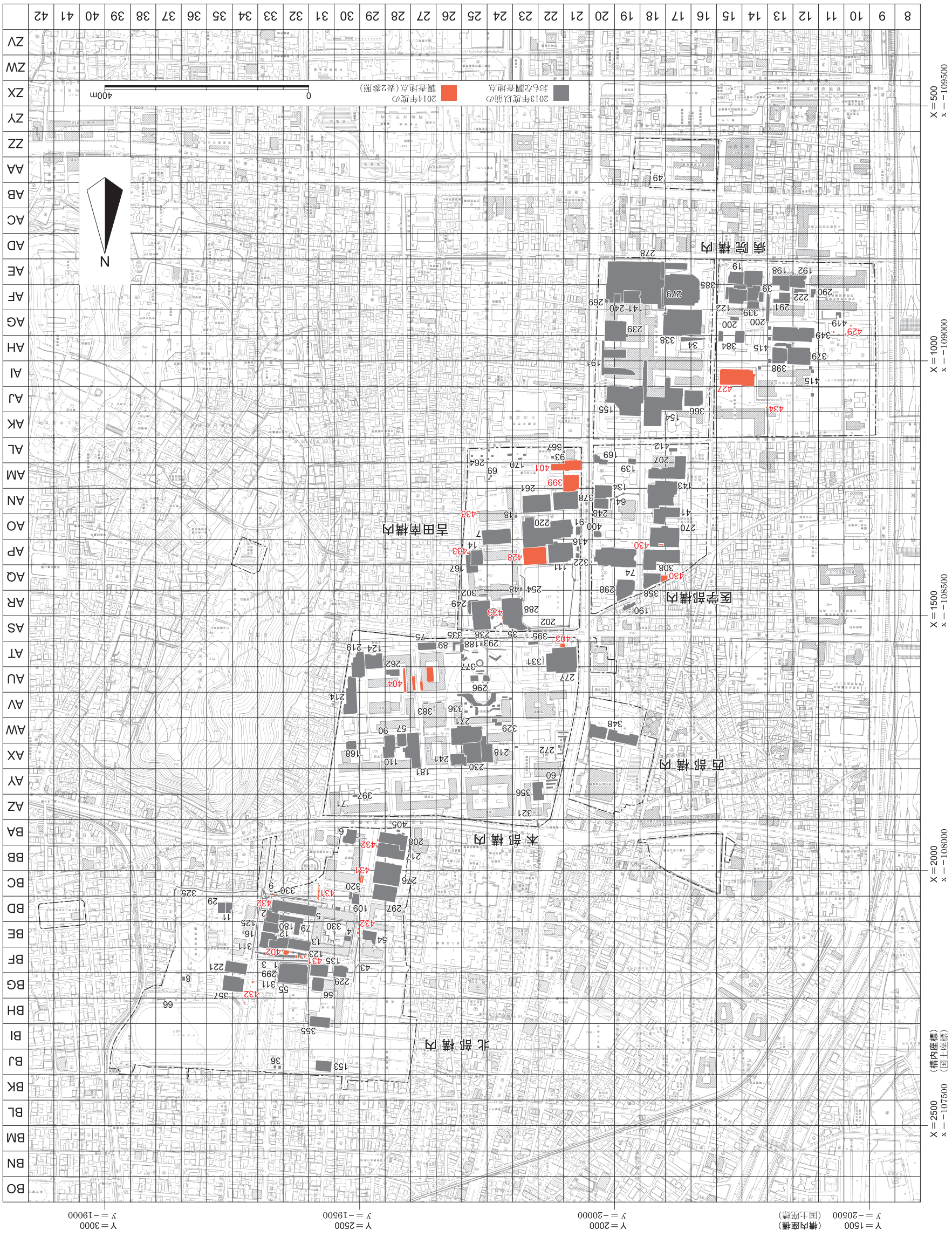
緯度・経度は日本測地系（第Ⅵ座標系）にもとづく

京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度

図　　版

1　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
2～17　京都大学吉田南構内ＡＭ21区の発掘調査
18～26　京都大学北部構内ＢＦ32区の発掘調査
27・28　京都大学本部構内ＡＵ27区の発掘調査
29　京都大学本部構内ＡＴ22区の発掘調査

図1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点



図版二　京都大学吉田南構内ＡＭ21区

1　北区表土除去後全景
（北から）

2　北区中・近世遺構掘り
あげ後全景（北から）

3　北区黄色砂除去後全景
（北から）

図版三　京都大学吉田南構内ＡＭ21区

1　南区表土除去後全景　（東から）

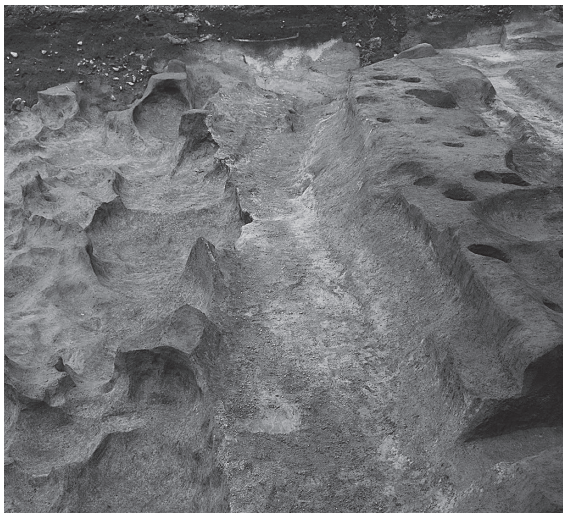
2　南区近世遺構掘りあげ後全景（東から）

3　南区中世遺構掘りあげ後全景（東から）

4　南区完掘後全景（東から）

1　北区流路ＳＲ１黄色砂除去後（北から）

2　北区流路ＳＲ１調査区北壁断面（南から）



3　南区流路ＳＲ１黄色砂除去後（南から）

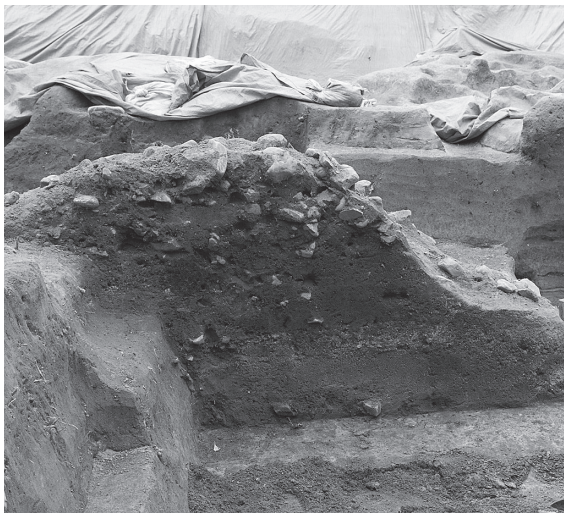
4　南区褐色粘質土内遺物集中出土地点調査状況（東から）

5　南区流路ＳＲ１・ＳＲ５調査区北壁断面（南から）

図版五　京都大学吉田南構内ＡＭ21区

1　北区ＳＤ10埋土上部集石（南西から）

2　北区ＳＤ10埋土内遺物出土状況
（調査区北壁際・北から）



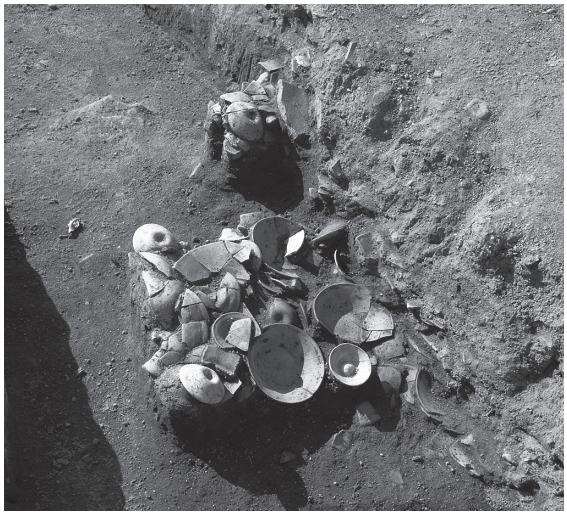
3　北区ＳＤ10断面（東西方向部畔・東から）

4　北区ＳＤ10断面（調査区北壁・南から）

5　北区ＳＤ13北肩部分断面
（調査区東壁・東から）

6　北区不定形土坑断面（調査区西壁・東から）

1　北区ＳＫ15遺物出土状況（北西から）



2　北区ＳＤ15下部遺物出土状況（南東から）

3　北区ＳＫ５遺物出土状況（南から）

4　北区ＳＫ12遺物出土状況（南から）

5　北区ＳＫ19遺物出土状況（南から）

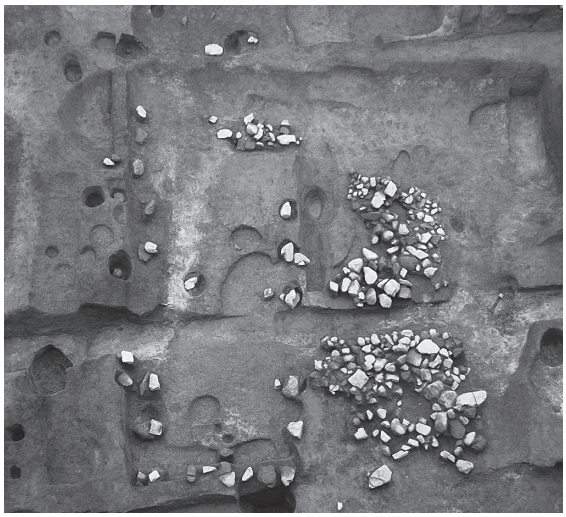
6　北区ＳＸ10遺物出土状況（南から）

図版七　京都大学吉田南構内ＡＭ21区

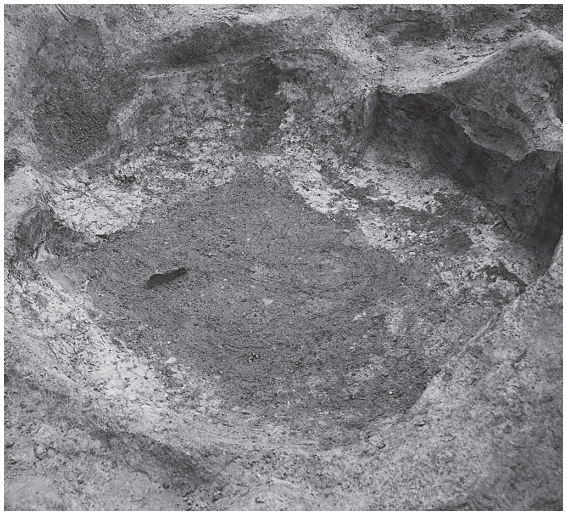
1　南区西半近世遺構
全景（南から）

2　南区西半古代・中世
遺構全景（南から）

3　南区不定型土抗群（北から）



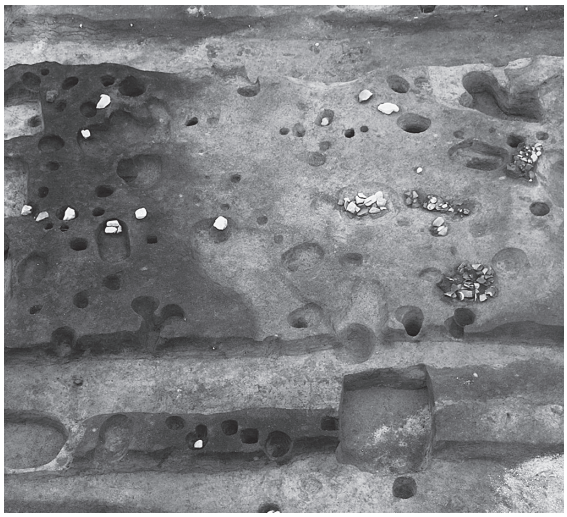
4　南区建物ＳＨ１・集石ＳＸ62（南から）



1　南区井戸ＳＥ12井筒検出状況（東から）

2　南区井戸ＳＥ12井筒底面遺物出土状況
（その１・北東から）

3　南区井戸ＳＥ12井筒底面遺物出土状況
（その２・北西から）



4　南区中央北半中世遺構全景（南から）

5　南区牛歯一括出土ＳＸ68（北から）

6　南区土器溜ＳＸ48（南から）

図版九　京都大学吉田南構内ＡＭ21区

1　南区集石ＳＸ55下部土器溜（西から）

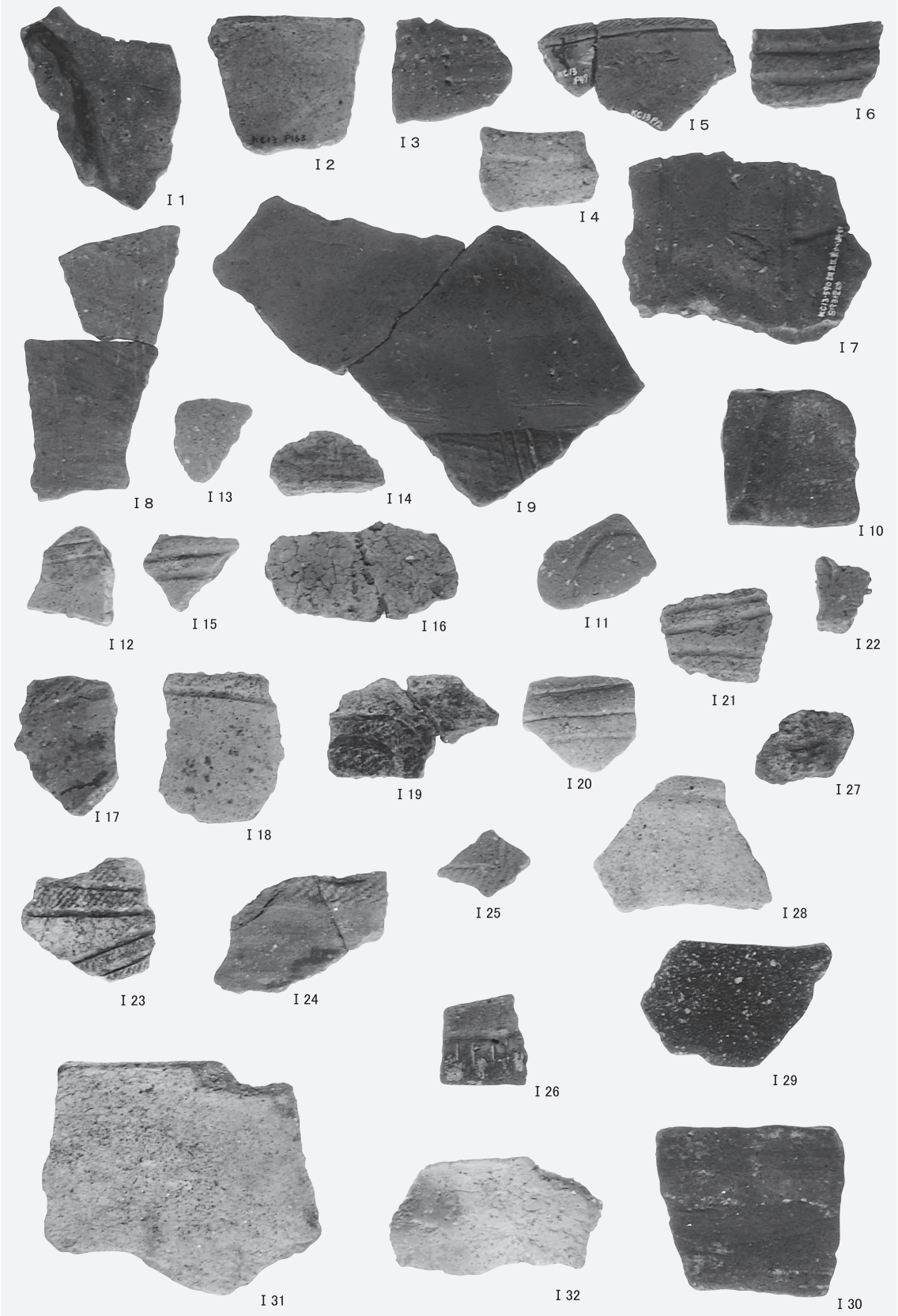
2　南区瓦溜ＳＫ23（南から）

3　南区土器溜ＳＫ25（西から）

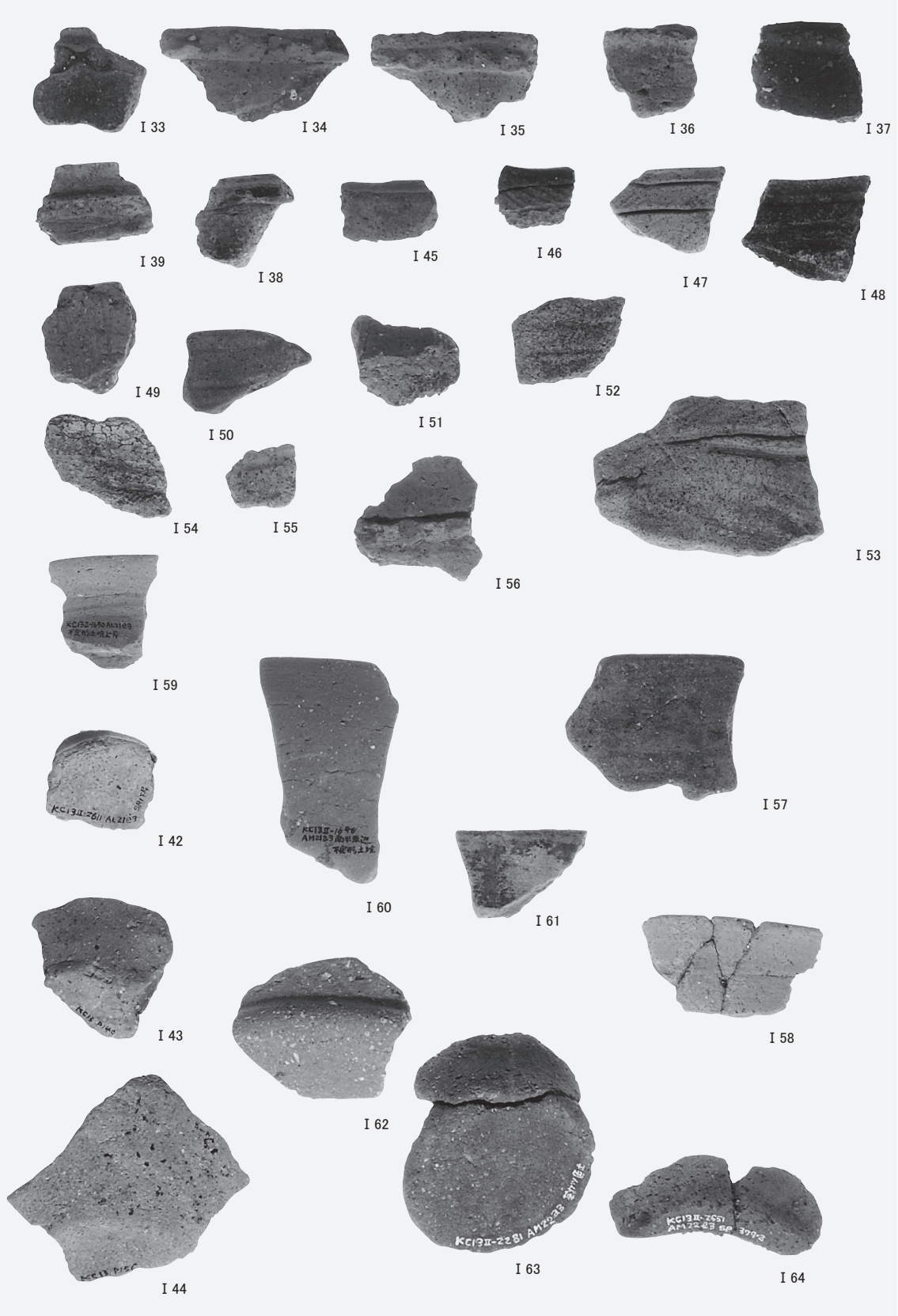
4　南区遺物溜ＳＫ26（西から）

5　南区ＳＰ369内遺物出土状況（北から）

6　南区近世段差際集石ＳＸ37（手前）・溝ＳＤ25西肩配石（奥）（ともに南西から）

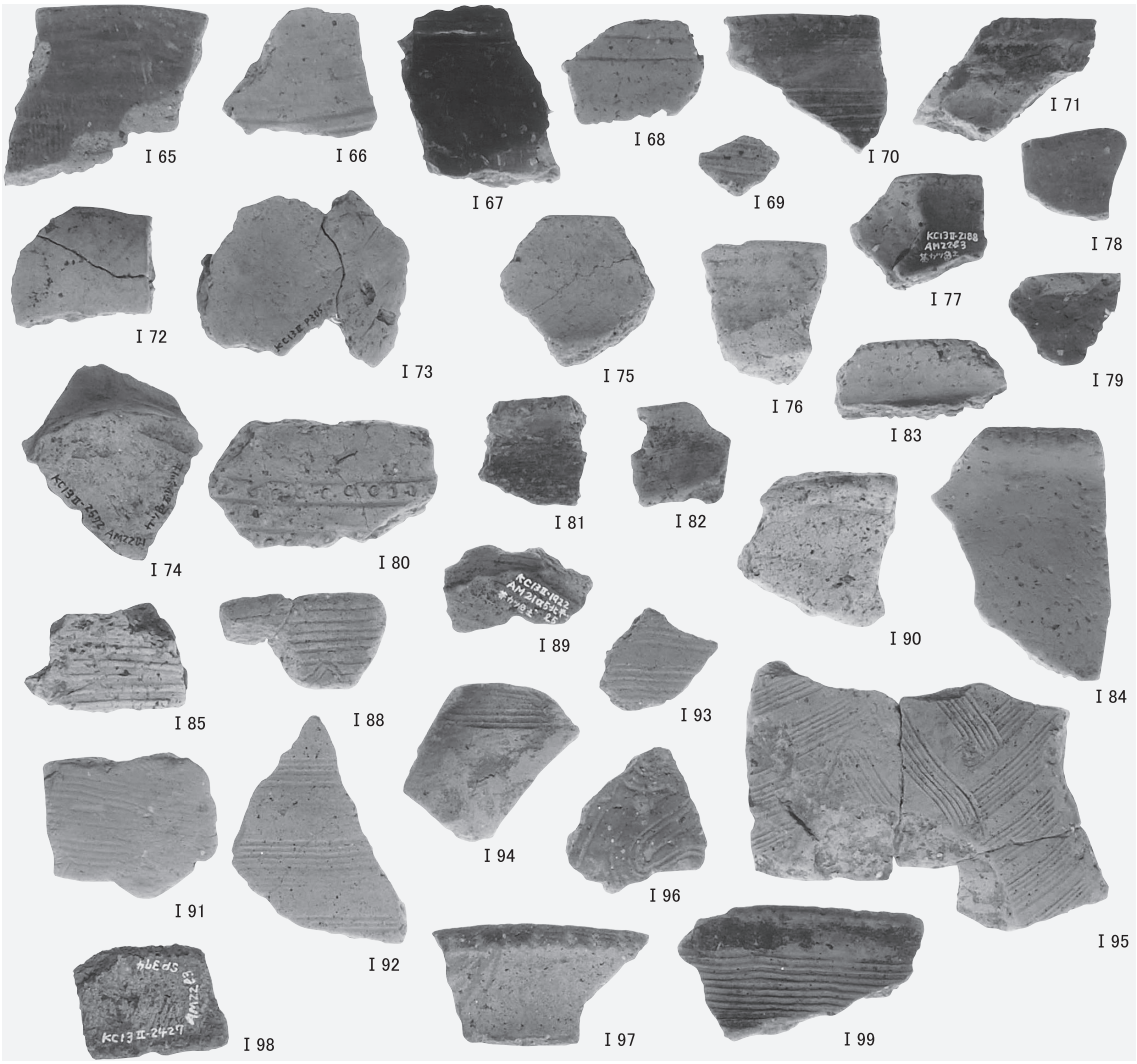


縄文時代の土器(1)（Ⅰ１～Ⅰ32）

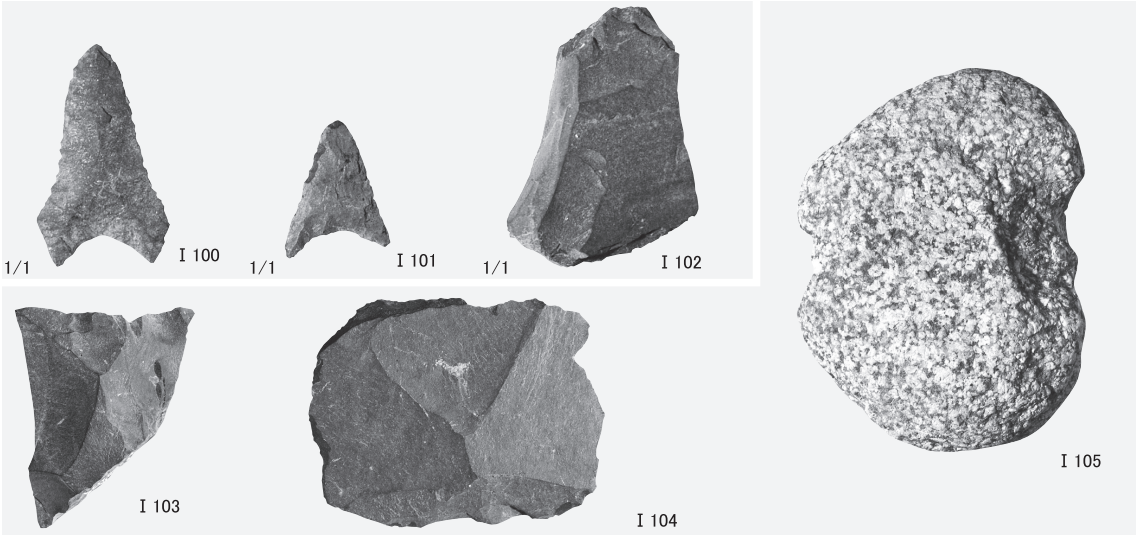


縄文時代の土器(2)（Ⅰ33～Ⅰ39・Ⅰ42～Ⅰ64）

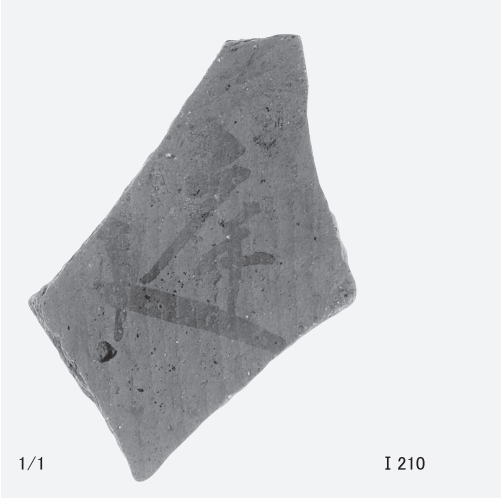
縄文時代の土器(3)（Ⅰ40・Ⅰ41），弥生時代の土器(1)（Ⅰ86・Ⅰ87）

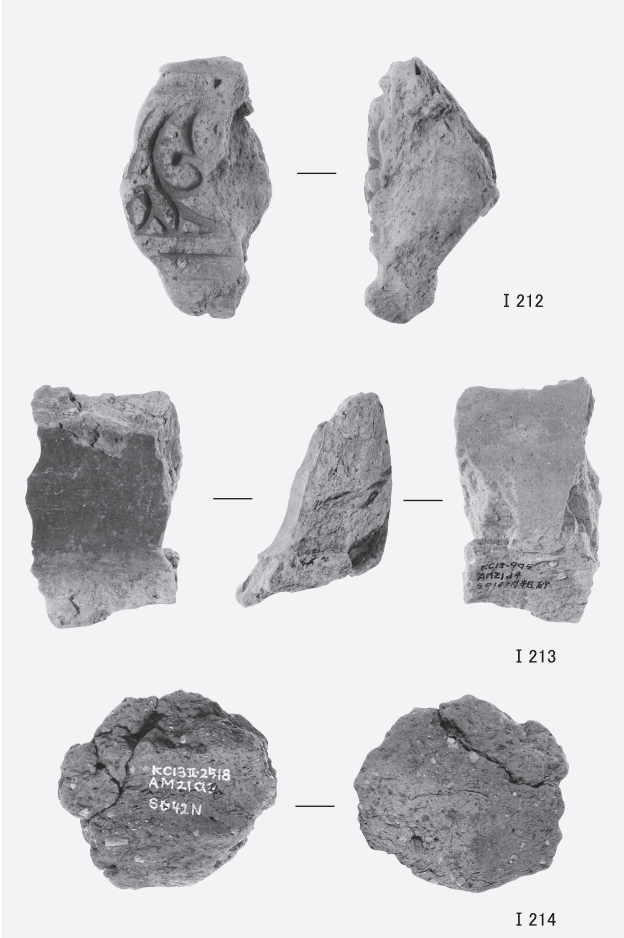


1　弥生時代の土器(2)（Ⅰ65～Ⅰ85・Ⅰ88～Ⅰ99）

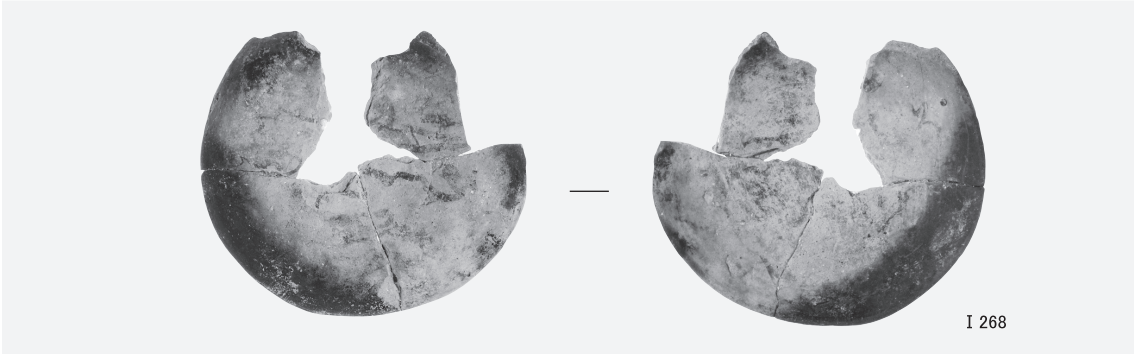


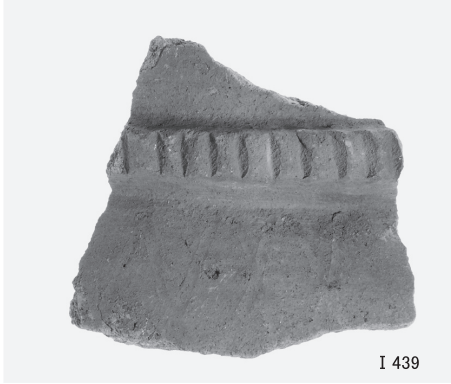
2　石器・石製品（Ⅰ100～Ⅰ105）





古墳時代・古代の遺物（Ⅰ108・Ⅰ127・Ⅰ119須恵器，Ⅰ156土師器，Ⅰ210墨書土師器，Ⅰ212～Ⅰ214鋳造関連遺物）





ＳＫ12出土遺物（Ｉ230・Ｉ262・Ｉ268・Ｉ334土師器，Ｉ342瓦器），ＳＸ25出土遺物（Ｉ439瓦質土器），ＳＸ48出土遺物（Ｉ469・Ｉ484・Ｉ491・Ｉ498・Ｉ512土師器）

図版一六　京都大学吉田南構内ＡＭ21区

Ｉ580

Ｉ683

Ｉ710

Ｉ716

Ｉ718

Ｉ719

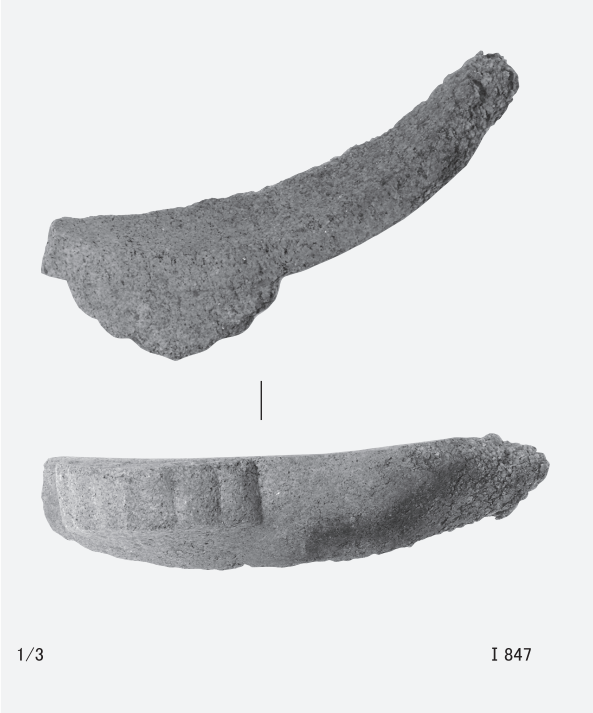
1/3

Ｉ729

1/3

Ｉ730

ＳＫ25出土遺物（Ｉ580陶器），ＳＸ58出土遺物（Ｉ683土師器），ＳＸ55出土遺物（Ｉ710土師器），ＳＫ23出土遺物（Ｉ716・Ｉ718・Ｉ719軒丸瓦），ＳＸ50出土遺物（Ｉ729石硯），ＳＸ51出土遺物（Ｉ730石硯）



ＳＤ34出土遺物（Ｉ818灰釉系陶器），ＳＸ62出土遺物（Ｉ847石製品），ＳＸ63出土遺物（Ｉ850褐釉陶器）

1　黒色土掘削後，北区全景（東から）

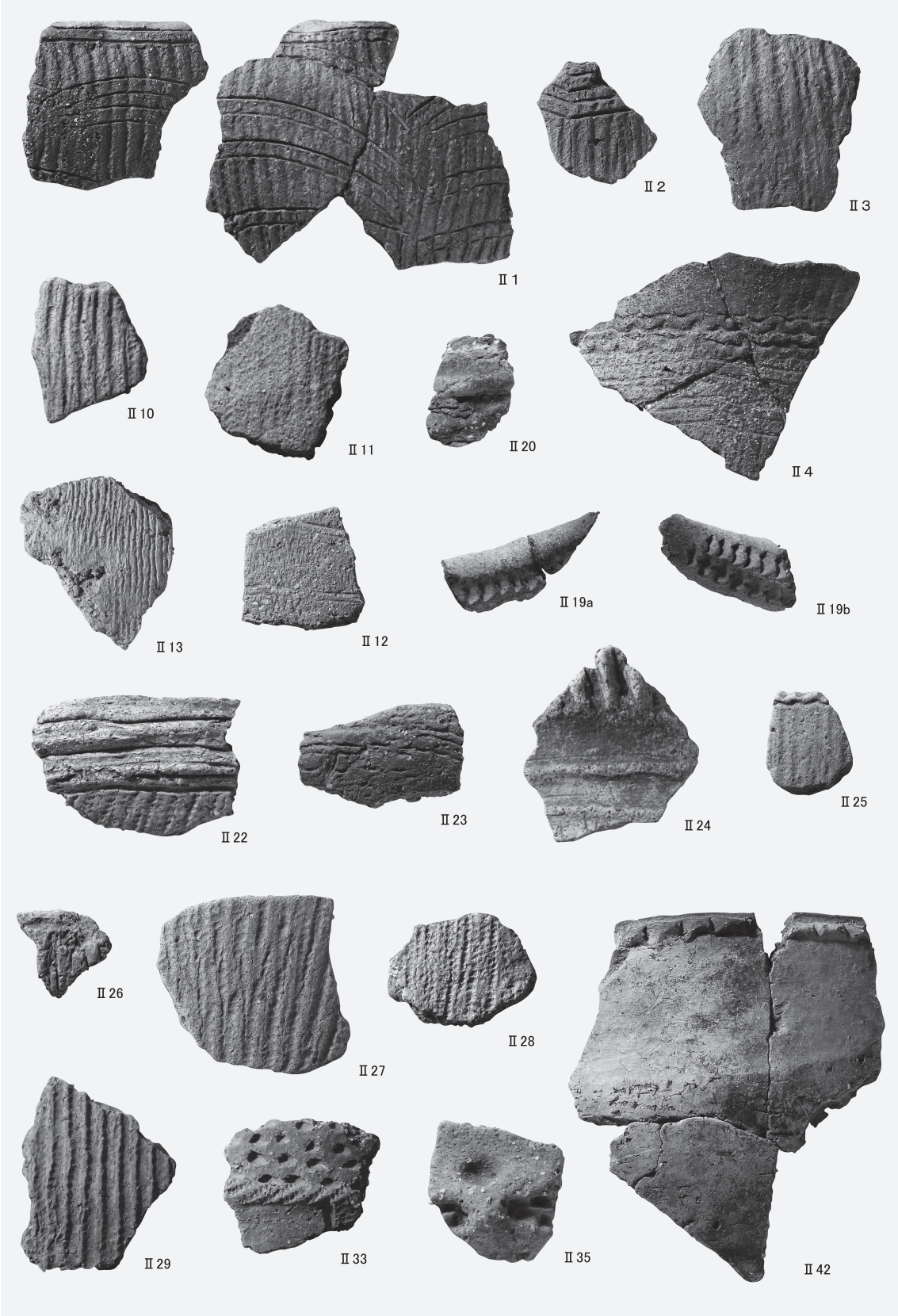
2　表土掘削後，南区全景（北東から）

図版一九　京都大学北部構内ＢＦ32区

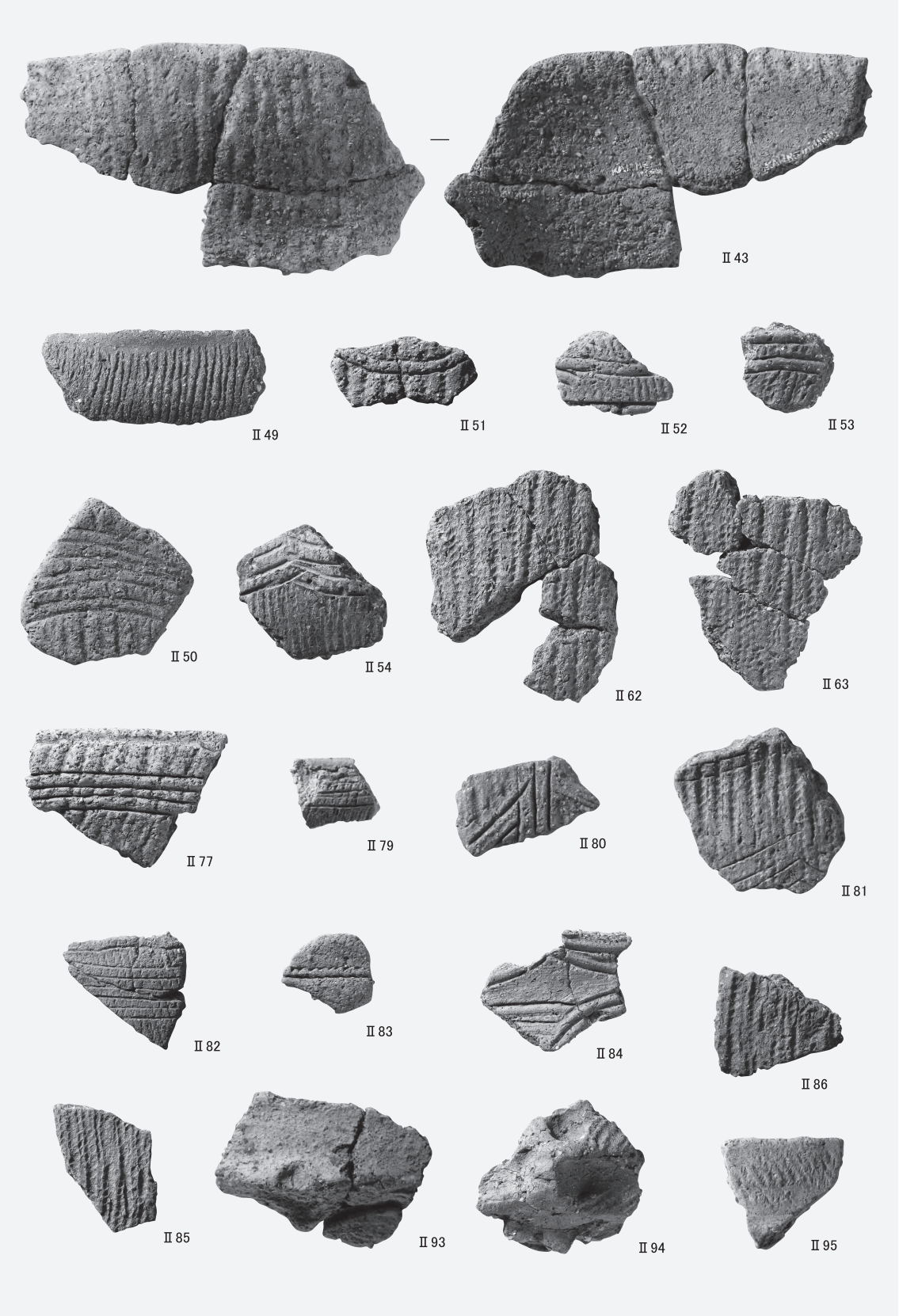
1　北区ＳＸ１（西から）

2　北区ＳＸ２（北から）

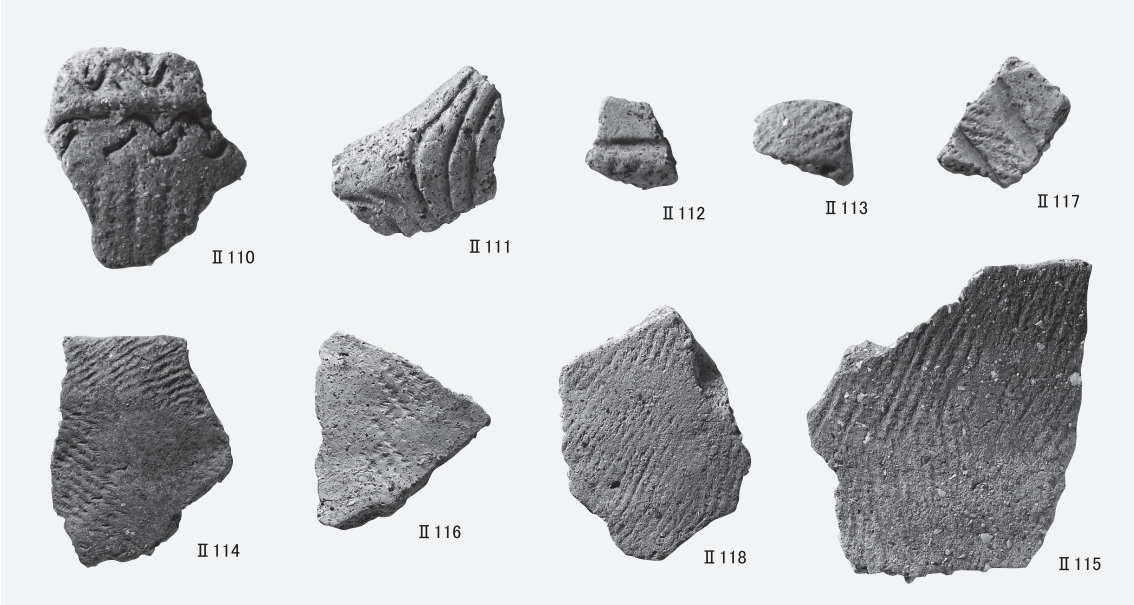
3　南区南辺中央，遺物出土状況（北西から）



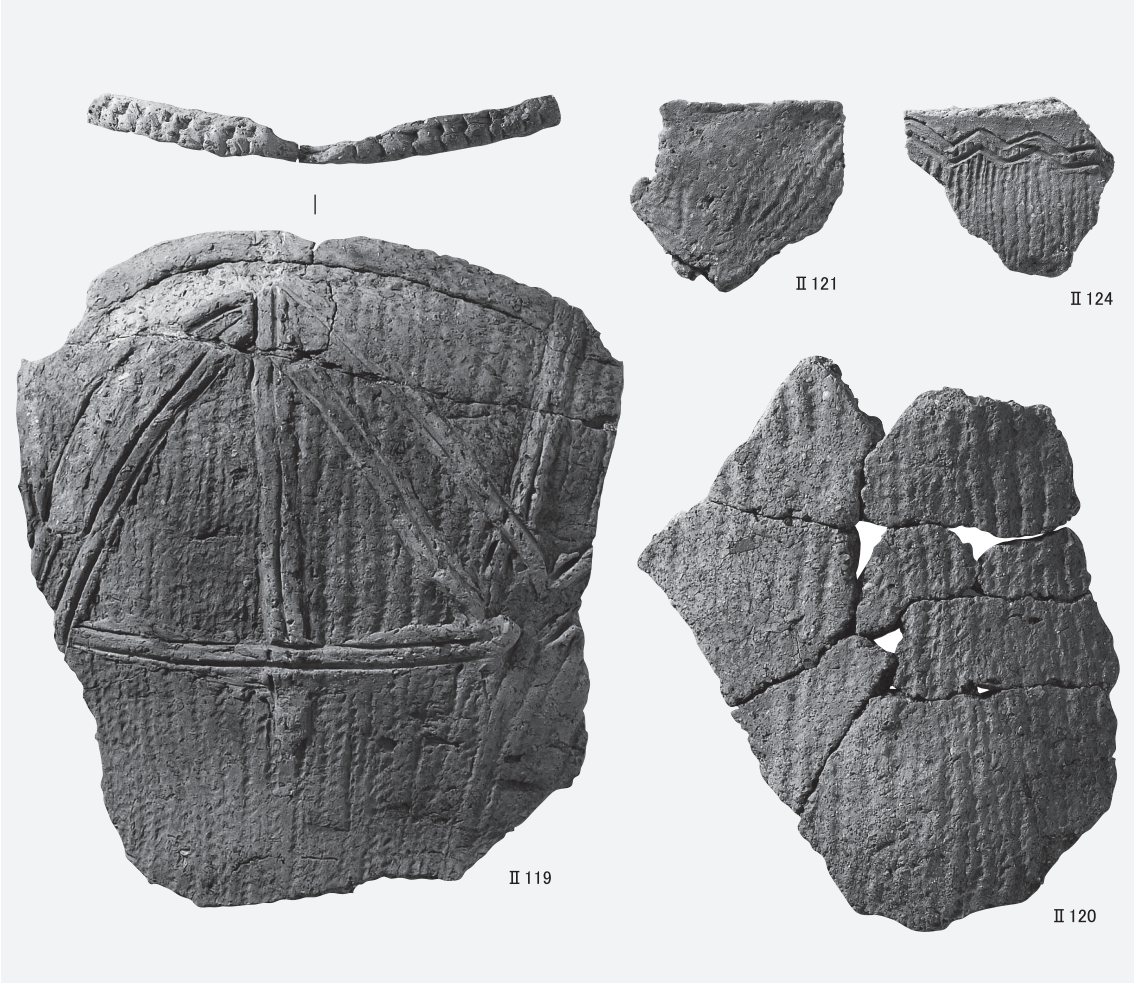
北区出土縄文土器(1)（Ⅱ１～Ⅱ４・Ⅱ10～Ⅱ13・Ⅱ19・Ⅱ20ＳＸ２出土，Ⅱ22～Ⅱ29・Ⅱ33・Ⅱ35・Ⅱ42ＳＸ１出土）



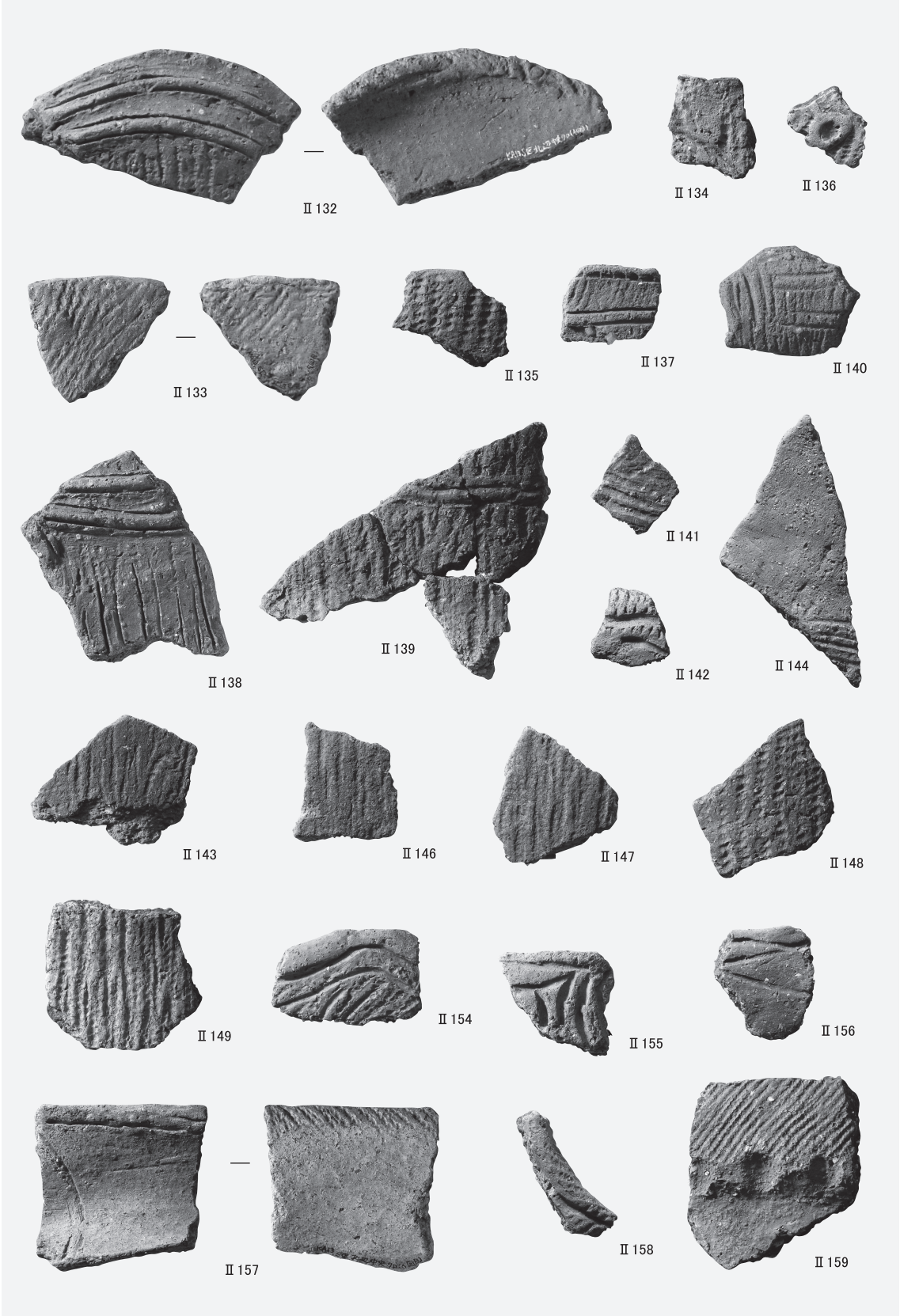
北区出土縄文土器(2)（Ⅱ43・Ⅱ49～Ⅱ54・Ⅱ62・Ⅱ63第４層出土，Ⅱ77・Ⅱ79～Ⅱ86・Ⅱ93～Ⅱ95第３層出土）



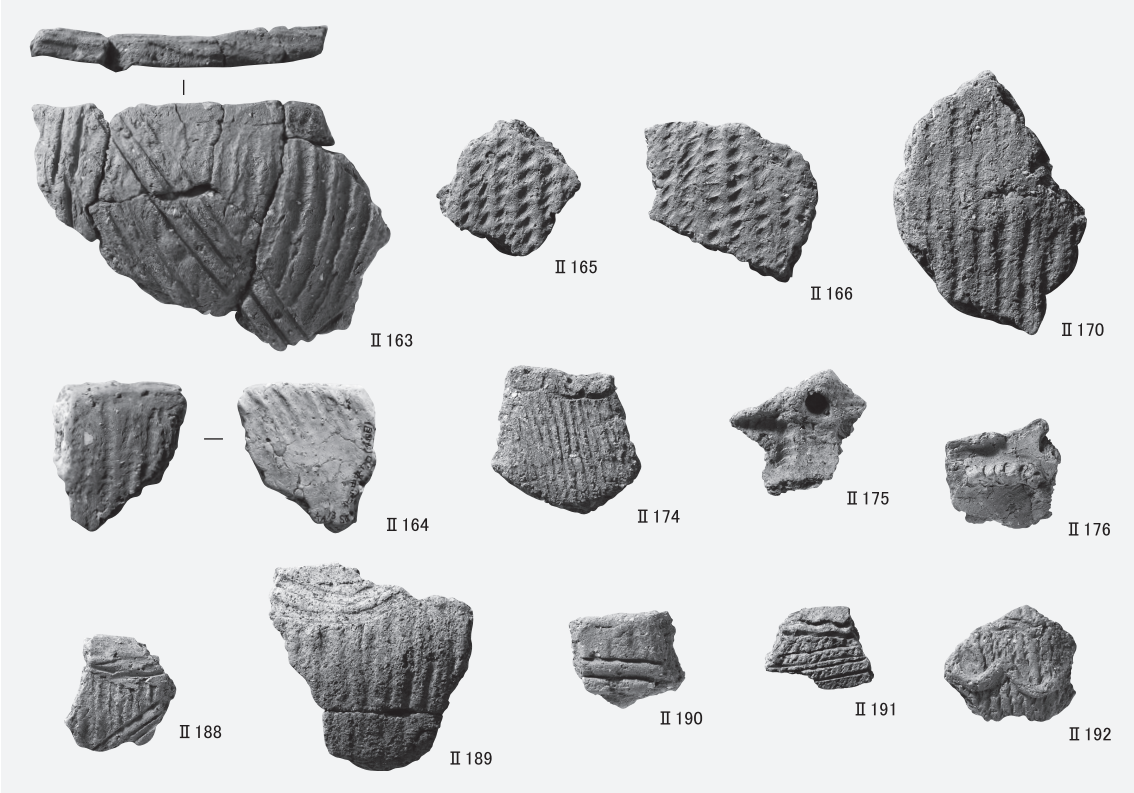
1　南区北西隅出土縄文土器（Ⅱ110～Ⅱ118第２層出土）



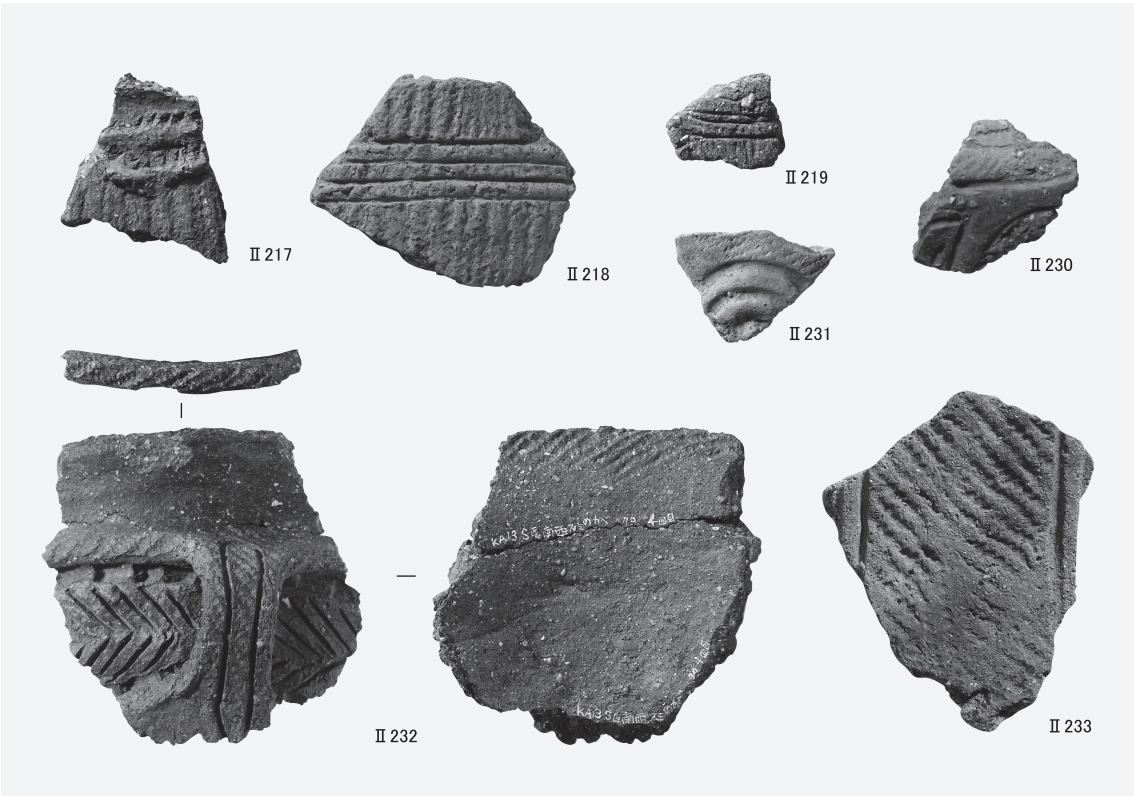
2　南区北辺中央出土縄文土器(1)（Ⅱ119～Ⅱ121・Ⅱ124第10層出土）



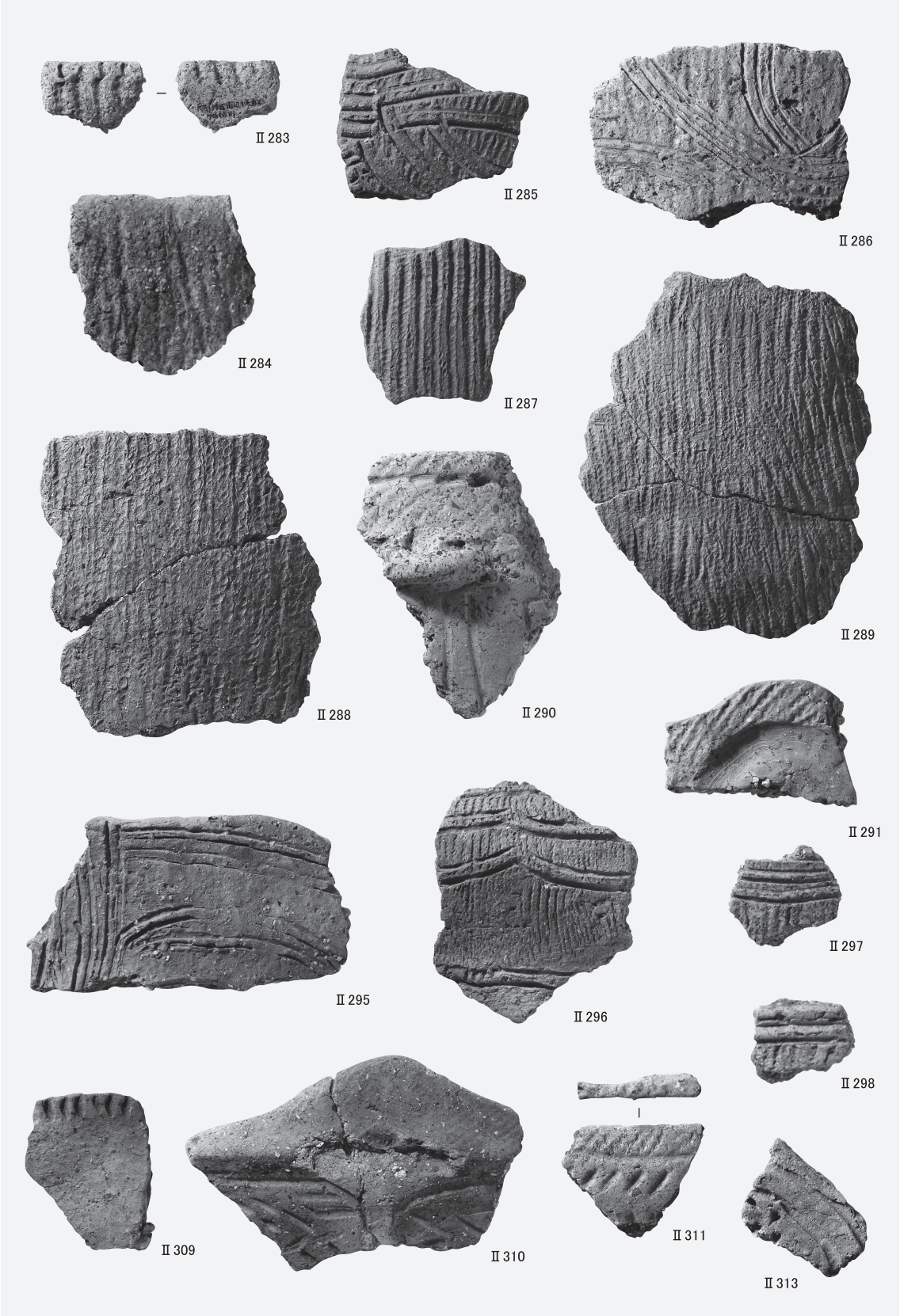
南区北辺中央出土縄文土器(2)（Ⅱ132～Ⅱ144・Ⅱ146～Ⅱ149・Ⅱ154～Ⅱ159第９層出土）



1　南区北辺中央出土縄文土器(3)（Ⅱ163～Ⅱ167・Ⅱ174～Ⅱ176第８層～第６層出土，Ⅱ188～Ⅱ192第４層出土）



2　南区南西隅出土縄文土器（Ⅱ217～Ⅱ219・Ⅱ231～Ⅱ233第５層出土）

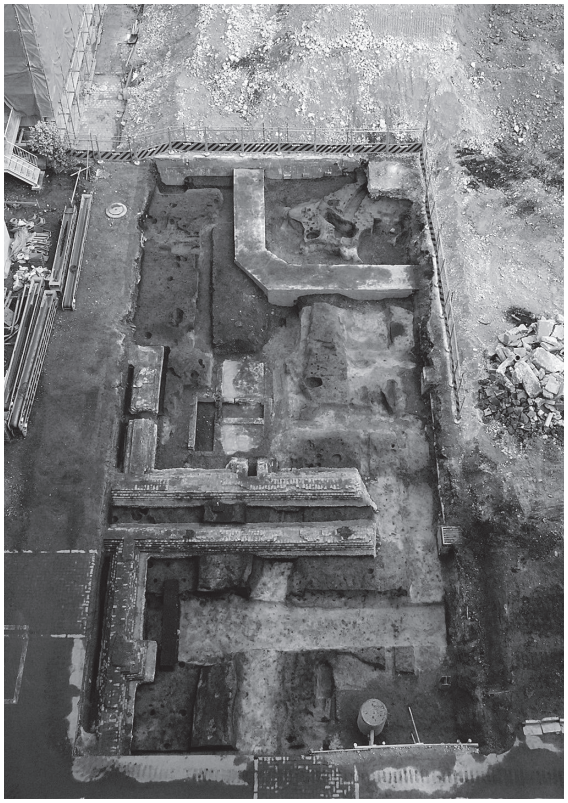


南区南辺中央出土縄文土器(1)（Ⅱ283～Ⅱ291第９層出土，Ⅱ295～Ⅱ298・Ⅱ309～Ⅱ311・Ⅱ313第８層出土）

1　南区南辺中央出土縄文土器(2)（Ⅱ322～Ⅱ324・Ⅱ328～Ⅱ331第７層出土，Ⅱ346～Ⅱ350・Ⅱ353第６層出土）

2　石器類（Ⅱ373・Ⅱ374石鏃，Ⅱ375石鏃未製品，Ⅱ376・Ⅱ377切目石錘）

図版二七　京都大学本部構内ＡＵ27区



1　黒色土掘削後のＡ区全景（南から）

2　褐色土掘削後のＢ区全景（南から）

3　表土掘削後のＣ区全景（北から）

4　黒色土掘削後のＤ区全景（北から）

1　Ａ区第15層上面の地形（南西から）

2　溝ＳＤ２・道路ＳＦ１（南から）

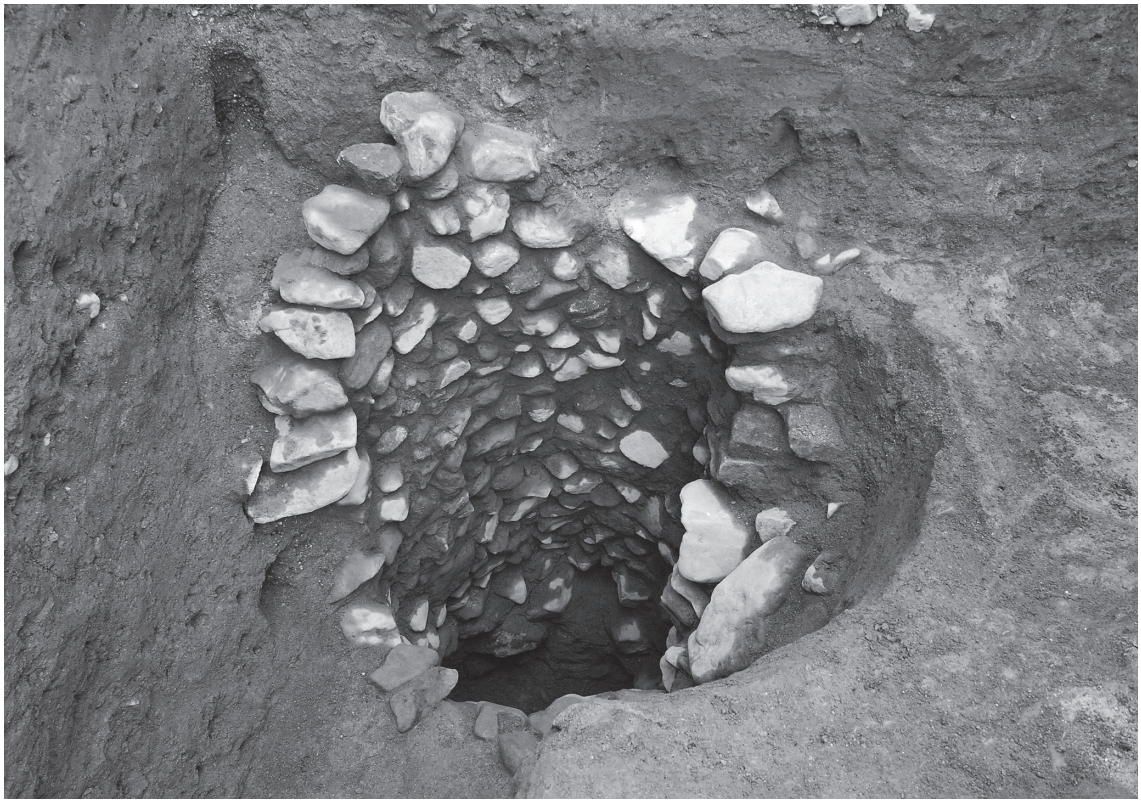
3　溝ＳＤ１断面（東から）

4　溝ＳＤ１（西から）

5　集石ＳＸ５・ＳＸ６（南西から）

6　野壺ＳＥ１（西から）

図版二九　京都大学本部構内ＡＴ22区



1　井戸ＳＥ１（東から）

2　溝ＳＤ１掘削後，道路ＳＦ１上面（東から）

2016年３月31日　発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2014年度

編　集
発　行　京都大学文化財総合研究センター
京　都　市　左　京　区　吉　田　本　町

印　刷
製　本　三　星　商　事　印　刷　株　式　会　社
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300